慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	東日本先史時代土器編年における標式資料・基準資料の基礎的研究 : 平成18～20年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 研究成果報告書
Sub Title	
Author	安藤, 広道(Andō, Hiromichi)
Publisher	安藤広道
Publication year	2009
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	課題番号: 18520589
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO10007002-00000001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東日本先史時代土器編年における標式資料・基準資料の基礎的研究

（課題番号：18520589）

平成 18 ～ 20 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））

研 究 成 果 報 告 書

2009 年 3 月

研究代表者　安 藤 広 道（慶應義塾大学文学部）

例　言

◎本書の概要

本書は、2006 年度～ 2008 年度科学研究費補助金　基盤研究（C）「東日本先史時代土器編年における標式資料・基準資料の基礎的研究」による研究成果報告書である。

Ⅰ．研究の概要、Ⅱ．研究成果 (1) 資料報告については、各章の末に執筆者の名を記し、文責を明らかにした。一方、Ⅲ．研究成果 (2) 研究報告については、タイトル下に執筆者名を記すことにした。なお、文中の用語、表現等については、特に調整はしていない。

最花貝塚遺跡 A 地点出土土器の実測･拓本は、主に安達香織が行い、大場悠、甲斐明子、香村匠子がサポートした。トレースは、安達香織が行った。八幡堂遺跡出土土器の実測・拓本・トレースは大坂拓が行った。剣吉荒町遺跡出土土器については、安藤広道が一部の資料の補足をしたほかは、櫻井はるえが実測・拓本・トレースを行った。

本書の編集は、安藤広道が行った。

◎研究組織

研究代表者：安藤　広道（慶應義塾大学文学部・准教授）

研究協力者：安達　香織（2006・2007 年度、慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程、2008 年度、同後期博士課程）

大坂　　拓（2006・2007 年度、明治大学大学院文学研究科博士前期課程、2008 年度、同博士後期課程・日本学術振興会特別研究員 DC）

櫻井はるえ（2006・2007 年度、明治大学大学院文学研究科博士前期課程）

◎交付決定額

2006 年度　　直接経費：1,500,000 円

2007 年度　　直接経費：　900,000 円

2008 年度　　直接経費：1,000,000 円　　間接経費：300,000 円　　2006 ～ 2008 年度合計：3,700,000 円

◎お世話になった方々及び機関（五十音順・敬称略）

江坂輝彌先生には、ここで報告した遺跡、遺物について、さまざまなご指導・ご教示を賜りました。

岡本孝之氏には、八幡堂遺跡、剣吉荒町遺跡に関する記録類を多数ご提供いただきました。

小林謙一氏（中央大学文学部）、遠部慎氏（北海道大学埋蔵文化財調査室）、坂本稔氏（国立歴史民俗博物館研究部）には、八幡堂遺跡、剣吉荒町遺跡出土土器の年代測定を実施していただき、玉稿（付編として掲載）を賜りました。

皆様に厚く御礼申し上げます。

また、本研究を進めるにあたっては、ほかにも多くの方々、機関にお世話になりました。記して謝意を表します。

阿部祥人　阿部芳郎　石神裕之　石川日出志　稲野裕介　岩田貴之　上野　司　大内千年　小笠原雅行
小田嶋知世　金子昭彦　工藤竹久　國木田大　児玉大成　小鳥孝之　小林　克　小林正史　齋藤　正
斎野裕彦　佐伯史子　佐藤孝雄　佐藤智雄　佐藤祐輔　佐藤由紀男　佐野忠史　品川欣也　嶋影壮憲
白鳥文雄　杉野森淳子　杉本智俊　鈴木克彦　鈴木正博　高瀬克範　高橋総司　高山　博　田中　亮
永井　治　奈良貴史　成田滋彦　根岸　洋　浜田晋介　福田友之　福田正宏　藤井安正　藤山龍造
古里　淳　三浦圭介　村木　淳　山口　徹　山崎和夫　山田　央

青森県教育委員会　青森県埋蔵文化財調査研究センター　青森県立郷土館　田舎館村教育委員会　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　大館市教育委員会　鹿角市教育委員会大湯ストーンサークル館　北上市立埋蔵文化財センター　佐井村教育委員会　つがる市教育委員会　南部町教育委員会　能代市教育委員会　むつ市教育委員会　八戸市教育委員会　八戸市南郷歴史民俗資料館　弘前市教育委員会　三沢市教育委員会　　山形県埋蔵文化財センター　六ヶ所村立郷土館

目　次

第Ⅰ部　研究の概要

1．研究の目的 …… 1
2．研究体制 …… 3
3．研究の経過 …… 3

第Ⅱ部　研究成果（1）　資料報告

1．青森県最花貝塚遺跡A地点出土土器の分析

（1）最花貝塚遺跡 1964 年発掘調査の概要
a．遺跡の概要 …… 5
b．1964 年の発掘調査の概要 …… 7
（2）最花貝塚遺跡 A 地点出土土器の分析
a．遺物の保管状態と整理作業の方法 …… 10
b．出土土器の分析 …… 10
土器図面 …… 12
土器観察表 …… 21

2．青森県八幡堂遺跡出土土器の分析

（1）八幡堂遺跡 1968 年発掘調査の概要
a．遺跡の概要 …… 31
b．1968 年の発掘調査の概要 …… 32
（2）八幡堂遺跡出土土器の分析
a．遺物の保管状態と整理作業の方法 …… 37
b．出土土器の分析 …… 37
土器図面 …… 41
土器観察表 …… 67

3．青森県剣吉荒町遺跡出土土器の分析

（1）剣吉荒町遺跡 1966 年発掘調査の概要
a．遺跡の概要 …… 75
b．1966 年の発掘調査の概要 …… 76
（2）剣吉荒町遺跡出土土器の分析
a．遺物の保管状態と整理作業の方法 …… 80
b．出土土器の分析 …… 80
土器図面 …… 84
土器観察表 …… 95

第Ⅲ部　研究成果（2）　研究報告

1．最花貝塚遺跡の調査と最花式土器（安達香織・安藤広道） …… 101
2．下北地域における初期弥生土器編年（大坂　拓） …… 113
3．剣吉荒町遺跡出土の類遠賀川系土器について（櫻井はるえ） …… 127
4．剣吉荒町遺跡出土土器における遠賀川系要素のあり方（安藤広道） …… 139

付編　剣吉荒町遺跡・八幡堂遺跡出土土器付着物の ^{14}C 年代測定（小林謙一・遠部　慎・坂本　稔） …… 153
本研究の成果と課題（安藤広道） …… 157

図版・写真目次

挿　図

第１図　各遺跡の位置（杉本智彦『カシミール３D』を使用）
第２図　最花貝塚遺跡の位置（国土地理院　1/50000『むつ』『近川』より）
第３図　最花貝塚遺跡（むつ市教育委員会 1986 より加工・転載）
第４図　Ａ～Ｃ貝塚（地点）の位置（金子 1967 より加工・転載）
第５図　Ａ地点トレンチ配置・セクション（トレンチの位置関係は日誌より推定）
第６～ 14 図　最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器①～⑨
第 15 図　八幡堂遺跡の位置（国土地理院　1/50000『佐井』より）
第 16 図　八幡堂遺跡（佐井村教育委員会 1986 より加工・転載）
第 17 図　八幡堂遺跡調査グリッド・セクション図
第 18 図　『佐井村誌 上巻』（佐井村 1971）による八幡堂遺跡
第 19 図　八幡堂遺跡 1968 年調査の速報（『考古学ジャーナル』No.24 より転載）
第 20 ～ 45 図　八幡堂遺跡出土土器①～㉖
第 46 図　剣吉荒町遺跡の位置（国土地理院　1/50000『三戸』より）
第 47 図　剣吉荒町遺跡（南部町教育委員会より提供）
第 48 図　グリッド配置想定図、セクション図
第 49 ～ 59 図　剣吉荒町遺跡出土土器①～⑪
第 60 図　「最花」式初出の編年表
第 61 図　下北地域における縄文晩期末～弥生前期土器型式変遷図
第 62 図　剣吉荒町遺跡出土土器
第 63 図　是川遺跡出土土器
第 64 図　松石橋遺跡出土土器・荒谷遺跡出土資料
第 65 図　畑内遺跡・楢館遺跡出土土器
第 66 図　確率度数分布

表

表１　最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器観察表
表２　八幡堂遺跡出土土器観察表
表３　剣吉荒町遺跡出土土器観察表
表４　最花貝塚遺跡の発掘調査

写　真

写真１　最花貝塚遺跡遠景
写真２　最花貝塚遺跡調査風景
写真３　Ａ－２トレンチ？調査風景
写真４　Ａトレンチ？土器出土状態
写真５　八幡堂遺跡遠景
写真６　八幡堂遺跡近景（古佐井川より）
写真７　八幡堂遺跡調査風景
写真８　弥生時代中期土器出土状態
写真９　落ち込み内の土器出土状態①
写真 10　落ち込み内の土器出土状態②
写真 11　落ち込み内の土器出土状態③
写真 12　トレンチ完掘状況
写真 13　Ｂトレンチ調査風景
写真 14　A10 区遺物出土状態①
写真 15　A10 区遺物出土状態②
写真 16　No.40 口縁部外面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 17　No.40 口縁部内面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 18　No.41 口縁部外面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 19　No.41 口縁部内面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 20　No.71 口縁部外面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 21　No.71 口縁部内面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 22　No.81 口縁部外面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 23　No.81 口縁部内面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 24　No. 1 口縁部外面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 25　No. 1 口縁部内面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 26　No.11 口縁部外面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 27　No.11 口縁部内面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 28　No.12 口縁部外面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 29　No.12 口縁部内面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 30　No.24 口縁部外面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 31　No.24 口縁部内面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 32　No.36 口縁部外面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 33　No.36 口縁部内面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 34　No.47 口縁部外面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 35　No.47 口縁部内面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 36　No.66 口縁部外面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 37　No.66 口縁部内面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 38　No.67 口縁部外面（八幡堂遺跡出土土器）

写真 39　No.67 口縁部内面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 40　No.70 口縁部外面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 41　No.70 口縁部内面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 42　No.72 口縁部外面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 43　No.72 口縁部内面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 44　No.74 口縁部外面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 45　No.74 口縁部内面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 46　No.83 口縁部外面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 47　No.83 口縁部内面（八幡堂遺跡出土土器）
写真 48　No. 3 外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 49　No. 3 内面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 50　No. 4 外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 51　No. 4 内面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 52　No. 6 （剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 53　No. 8 内面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 54　No.13（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 55　No.14（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 56　No.15（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 57　No.17（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 58　No.25 外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 59　No.25 内面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 60　No.27 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 61　No.27 口縁部内面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 62　No.28 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 63　No.28 口縁部内面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 64　No.29 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 65　No.29 口縁部内面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 66　No.33 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 67　No.33 口縁部内面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 68　No.34 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 69　No.34 胴部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 70　No.35 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 71　No.35 口縁部内面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 72　No.36 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 73　No.37 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 74　No.38 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 75　No.39 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 76　No.41 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 77　No.41 口縁部内面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 78　No.42 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 79　No.43 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 80　No.44 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 81　No.45 外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 82　No.47 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 83　No.47 口縁部内面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 84　No.48 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 85　No.49 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 86　No.50 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 87　No.51 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 88　No.52 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 89　No.54 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 90　No.53 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 91　No.53 口縁部内面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 92　No.56 外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 93　No.58 内面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 94　No.95 内面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 95　No.108 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 96　No.105 口縁部外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 97　No.105 口縁部内面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 98　No.77 外面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 99　No.77 内面（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 100 No.77 籾痕（剣吉荒町遺跡出土土器）
写真 101 AOKO11 測定資料
写真 102 AOKO11 炭化物付着状況（内面）
写真 103 AOKO13 測定資料
写真 104 AOKO13 炭化物付着状況（外面）
写真 105 AOKO14 測定資料（上下逆）
写真 106 AOKO14 炭化物付着状況（内面・上下逆）

Ⅰ．研究の概要

1．研究の目的
2．研究の体制
3．研究の経過

１．研究の目的

本研究の目的は、東日本先史時代土器の編年研究を進める上で重要な意味をもつ、既発掘の標式資料・基準資料の整理・分析を行い、編年研究の基盤整備を進めることにある。

先史時代土器の編年研究は、日本考古学の基盤的研究として、これまで最も多くのエネルギーが投入されてきた分野である。その研究の蓄積によって、日本列島の先史時代土器の編年体系は、世界のどの地域・時期の相対編年研究の追随も許さないほどの精緻なレベルで整理されてきており、世界に向けて積極的に発信すべき、日本考古学の方法論・研究成果上の財産になっている。近年、ＡＭＳによる年代測定と暦年較正による、先史時代の絶対年代の議論が盛んに行われているが、そこにおいて細かな議論が可能になったのも、この編年研究の蓄積があったからである。理化学的年代測定と、考古学による精緻な相対編年との対比によって、世界に誇れる先史時代の年代学的研究が可能になることは明らかであり、その意味でも我々は、考古学的方法による編年体系の精緻化を、今後も変わらず進めていかなければならないのである。

先史時代土器の編年研究を進めるために、新たな遺跡の発掘調査が必要になってくることは言うまでもないが、一方で日本では、既に発掘された資料にもその成果が充分に公開されていないものが数多く存在しており、こうした資料の研究資源としての価値を再評価すべき時期にきていることもまた確かである。その中には、これまでの編年研究において標式資料とされてきたものや、未だ基準となる良好な資料に恵まれていない地域・時期の資料が少なからず含まれており、そうした地域・時期では、結果的に編年研究に遅れがみられることが多い。つまり、土器編年上の標式資料・基準資料を含んだ既発掘資料の整理・分析によって、新たな遺跡の発掘調査を行わずとも、さまざまな地域・時期の編年研究を、大きく前進させることが可能になるのである。

こうした既発掘資料の研究資源としての活用は、日本考古学における今後の重要な課題になっていくはずである。研究代表者の所属する慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室にも、東日本を中心とする、そうした標式資料・基準資料を含む既発掘資料が多数保管されている。本研究では、そのうち、縄文時代中期後葉～後期初頭、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の二つの時期に焦点を当て、標式資料や基準資料となり得る資料を含む既発掘資料の整理・分析を行うことにした。具体的には、前者の時期の資料として、青森県むつ市最花貝塚遺跡出土資料を、後者の時期の資料として、青森県南部町剣吉荒町遺跡と青森県佐井村八幡堂遺跡出土資料を取り上げることにした。これらは、いずれも東北地方北部、下北半島一帯の遺跡である。

最花貝塚遺跡出土資料は、縄文時代中期後葉、最花式の標式資料を含む、中期後葉～後期初頭の多量の土器群からなる。この遺跡の出土土器によって設定された最花式は、本来、分類の標準となるべきであった標式資料の整理・分析が未了であったが故に、これまで多くの研究者を悩ませ続けてきた土器型式である（柳澤 1991、鈴木 1996、小笠原 2002、小保内 2008 など）。本資料の整理・分析は、充分な型式学的分析が行われてきたとは言い難い、最花式土器をはじめとする東北地方北部の縄文時代中期後葉～末葉の土器編年研究にとって、今後、大きな意味をもつことは間違いない。

八幡堂遺跡出土資料は、縄文時代晩期後葉～弥生時代中期、大洞 A_2 式～宇鉄Ⅱ式土器を含む資料である。特に、大洞 A' 式土器に関しては、完形土器群が一ヶ所からまとまって出土したことが報告されているほか（江坂 1968）、その前後の大洞 A_2 式、砂沢式土器についても、その細分を進めるうえで非常に興味深い資料がまとまっている。

大洞 A_2 式～砂沢式の編年は、東北地方北部における縄文時代・弥生時代の時代区分と関わるきわめて重要な研究課題になっており、それ故に現在も活発な議論が展開されている（石川編 2005 など）。しかしながら、大洞 A_2 式と A' 式、大洞 A' 式と砂沢式の型式学的区分については、未だ研究者間の意見の相違が大きく（高瀬 2000、品川 2005 など）、その評価が固まっていくには、今しばらく時間がかかりそうな状況である。該期の豊富な資料を内包する八幡堂遺跡出土土器は、資料の蓄積が進んでいない下北半島のみならず、東北地方北部の大洞 A_2 式～砂沢式土器を再検討するうえでも、第一級の資料となることは疑いない。

一方、剣吉荒町遺跡出土資料は、弥生時代前期、砂沢式土器を主体とする資料群である。本資料には、「東北地方の遠賀川系土器」「類遠賀川系土器」と呼ばれてきたものが少なからず含まれており、砂沢式土器前後の編年研究はもちろんのこと、遠賀川系土器の要素の定着のあり方を詳細に分析することができる、きわめて重要な資料である。

遠賀川系土器の要素を持った土器群の分析は、東北地方北部の縄文時代・弥生時代の時代区分、さらに弥生時代開始期前後の文化動態を研究するうえで欠かせないものであるが、遠賀川系土器の要素の波及・定着の過程については、現在、必ずしも明らかになっているわけではない。本資料

の整理・分析により、遠賀川系土器の要素の定着時期をはじめ、砂沢式土器の細分、東海地方以西の遠賀川系土器との並行関係など、さまざまな問題提起が可能になると考えている。

なお、今回、整理・分析の対象とする資料群には、僅かではあるが、土器器面に炭化物が付着したものが存在するため、こうした資料については、ＡＭＳによる年代測定を行うことにした。その狙いは、ＡＭＳ年代測定を、単純に編年体系構築の時間的尺度として用いることではなく、同一の資料を、型式学的方法と理化学的年代測定法という、異なる方法で分析し、その結果を突き合わせることにより、両者の方法論上の問題点及び分析過程の問題点を考察することにある。もとより、分析資料数が限られているため、今回の分析によって直ちに大きな成果が上がるというものではなかろうが、こうした分析・研究の積み重ねが、今後の日本先史時代における年代学的研究を、より厚みのあるものにしていくことは間違いない。

引用・参考文献

石川日出志編　2005『科学研究費補助金基盤研究 B2　関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年』
江坂輝弥　1968「本州最北端の弥生遺跡　八幡堂遺跡」『月刊考古学ジャーナル』No.24　ニューサイエンス社　巻頭
小笠原雅行　2002「『最花式土器』雑感」『研究紀要』7　青森県埋蔵文化財センター　55-60 頁
小保内裕之　2008「陸奥大木系土器（榎林式・最花式・大木 10 式併行土器）」『総覧　縄文土器』アム・プロモーション　368-375 頁
品川欣也　2005「砂沢式土器の細分と五所式土器の位置づけ」石川日出志編 2005『科学研究費補助金基盤研究　B2　関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年』31-42 頁
鈴木克彦　1996「円筒上層式土器　青森県」「榎林式土器」「泉山式土器」「中の平 3 式土器」「大曲 1 式土器」『日本土器辞典』雄山閣　332-339 頁
高瀬克範　2000「東北地方における弥生土器の形成過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』83　61-95 頁
成田滋彦　2003「最花式土器―在地式土器群の様相―」『研究紀要』8　青森県埋蔵文化財センター　1-20 頁
柳澤清一　1991「『榎林式』から『最花式』(中の平Ⅲ式へ)―陸奥中期後半編年の再検討―」『古代』第 91 号　早稲田大学考古学会　1-46 頁

（安藤広道）

第１図　各遺跡の位置（杉本智彦『カシミール３D』を使用）

２．研究体制

本研究の体制と分担は以下の通りである。

◎研究代表者

安藤　広道（慶應義塾大学文学部准教授）
研究総括。剣吉荒町遺跡出土土器の整理・分析。

◎研究協力者

安達　香織（2006・2007 年度：慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程、2008 年度：同後期博士課程）
最花貝塚遺跡 A 地点出土土器の整理・分析。

大坂　　拓（2006・2007 年度：明治大学大学院文学研究科博士前期課程、2008 年度：同博士後期課程・日本学術振興会特別研究員 DC）
八幡堂遺跡出土土器の整理・分析

櫻井はるえ（2006・2007 年度：明治大学大学院文学研究科前期博士課程）
剣吉荒町遺跡出土土器の整理・分析。

◎研究参加者（五十音順）

伊勢野まどか・大場　悠・納美保子・落合真澄・甲斐明子・香村匠子・五月女陽子・下島綾美・高柳理瀬・武内博志・千葉　毅・廣瀬友哉・牧野　令

なお、小林謙一氏（中央大学文学部）、遠部慎氏（北海道大学埋蔵文化財調査室）、坂本稔氏（国立歴史民俗博物館研究部）には、八幡堂遺跡、剣吉荒町遺跡出土土器の年代測定を実施していただき、玉稿（付編として掲載）を賜った。

３．研究の経過

◎ 2006 年度

本研究では、当初、上記の３遺跡のほか、千葉県八日市場市鴻ノ巣遺跡貝塚出土の縄文時代中期末～後期初頭の土器の整理･分析も行う予定であった。しかし､研究のスタート直後に、八幡堂遺跡出土土器が新たに数十箱収蔵されていることが確認されたため、すでに一部報告がなされている鴻ノ巣貝塚遺跡出土土器については、今回の研究対象からはずすことにした。

2006 年度は、主に水洗・注記等の基礎整理を中心に作業を進めた。最花貝塚遺跡 A 地点、剣吉荒町遺跡出土土器については､年度内でこれらの基礎作業が終了したため、分類、接合、実測・拓本作業へと移行した。

整理の過程において、最花貝塚遺跡 A 地点出土土器に、縄文時代中期後葉の「最花式」がまとまっていることが明らかになり、土器編年研究上きわめて重要な資料であることが再確認された。

剣吉荒町遺跡出土土器に関しては、遠賀川系の要素をもつ土器が、当初想定していたよりも多数存在することが確認されたため、その抽出と資料化を優先することにした。従来知られていなかった削出突帯・段をもつ土器など、やはり研究上問題となる資料を確認することができた。

八幡堂遺跡出土土器は、資料数が多くなったため、2009 年度にも基礎整理を継続することになった。土器の整理・分析は、大洞 A' 式を中心に実施することとし、宇鉄Ⅱ式については、別の機会に改めて行うことになった。なお、完形土器がまとまって出土した地点の土器群については、2006 年度から実測・拓本等の資料化に着手した。

2007 年２月 13・14 日に、八幡堂遺跡、剣吉荒町遺跡出土土器の比較資料として、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター所蔵の金附遺跡出土土器の調査を実施した。

◎ 2007 年度

八幡堂遺跡出土土器の水洗･注記等の基礎作業が終了し、各遺跡出土土器の資料化を本格的に進めた。最花貝塚遺跡 A 地点出土土器については、「最花式」、八幡堂遺跡出土土器は、大洞 A_2 式～砂沢式、剣吉荒町遺跡については、遠賀川系要素をもつ土器を抽出し、実測、拓本等の作業を進めた。資料数の多い最花貝塚遺跡 A 地点出土土器と八幡堂遺跡出土土器については、2008 年度も引き続き実測・拓本作業を進めることになったが、剣吉荒町遺跡出土土器については、これらの作業がほぼ終了した。

2007 年６月 23 日には､三田史学会にて､安達香織が｢最花式土器の研究｣と題する発表を行い、本研究の研究成果の一部を報告した。

また、2008 年２月４日・５日に、八幡堂遺跡、剣吉荒町遺跡出土土器の比較資料として、北上市立埋蔵文化財センター所蔵の九年橋遺跡出土土器の調査を行った。

◎ 2008 年度

最終年度であるため、まずはできるだけ早い時期に、各

遺跡出土土器の実測・拓本等を完了させることを目指した。当初は９月を目標としていたが、結局今回報告する資料の実測・拓本等が終了したのは 12 月になった。

その間、５月 14 日には、小林謙一氏と遠部慎氏に、ＡＭＳ年代測定用の炭化物の採取を行っていただいた。

報告書の作成作業は９月から始め、実測等の終了したものからトレース、版組等を進めることにした。12 月からは、原稿の執筆を開始し、並行して報告書の編集作業を行った。

なお、2008 年７月５・６日には、第６回海峡土器研究会「弥生時代における砂沢式土器の諸問題」において、大坂拓が「下北地域における集成と諸問題」と題した発表を行い、そのなかで本研究の成果の一部を報告した。

（安藤広道）

Ⅱ．研究成果（1）　資料報告

１．青森県最花貝塚遺跡 A 地点出土土器の分析
（1）最花貝塚遺跡 1964 年発掘調査の概要
（2）最花貝塚遺跡 A 地点出土土器の分析
２．青森県八幡堂遺跡出土土器の分析
（1）八幡堂遺跡 1968 年発掘調査の概要
（2）八幡堂遺跡出土土器の分析
３．青森県剣吉荒町遺跡出土土器の分析
（1）剣吉荒町遺跡 1966 年発掘調査の概要
（2）剣吉荒町遺跡出土土器の分析

１．青森県最花貝塚遺跡 A 地点出土土器の分析

（1）最花貝塚遺跡 1964 年発掘調査の概要

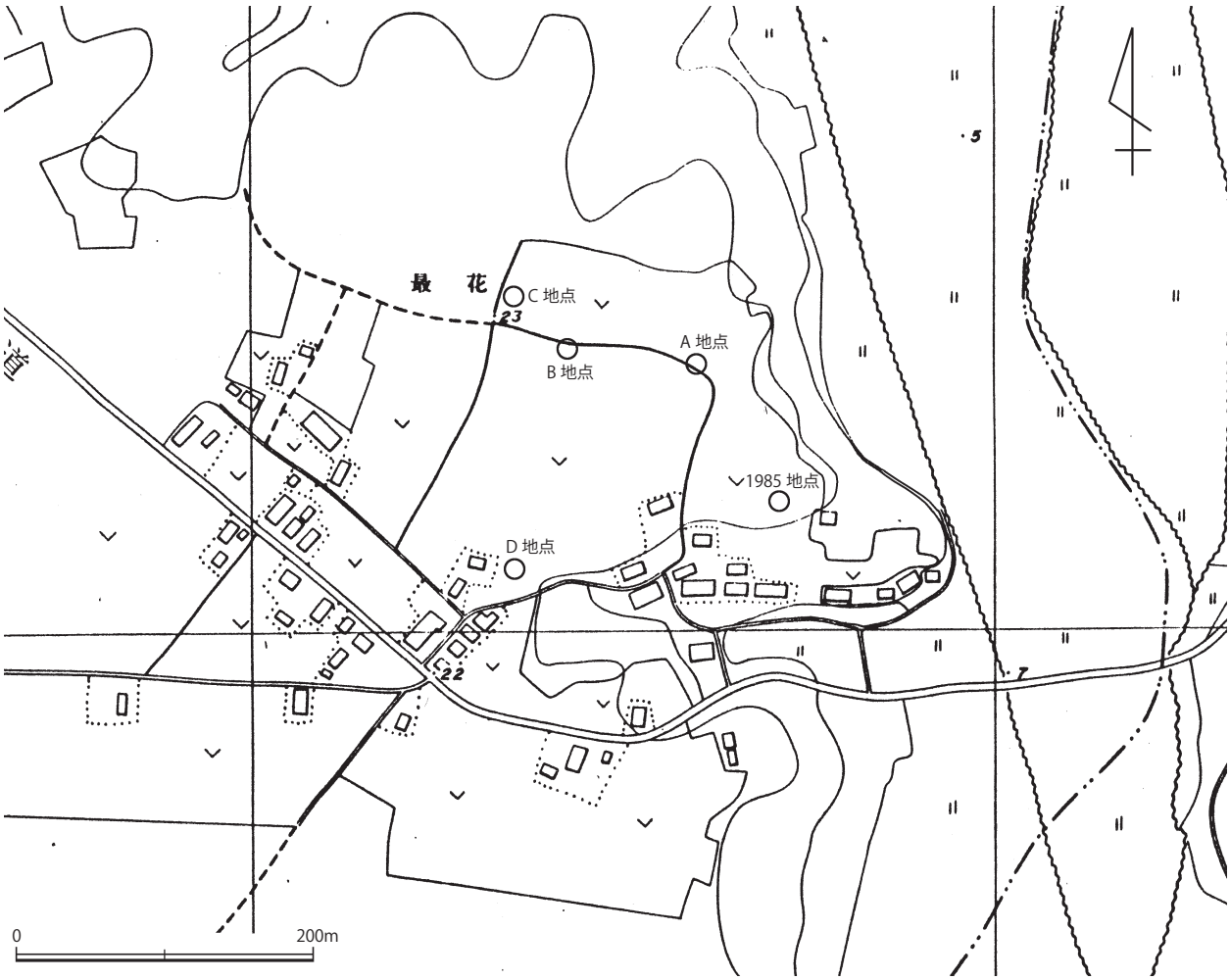
a．遺跡の概要

最花貝塚遺跡は、青森県むつ市大字田名部字最花に所在する。斗南ヶ丘と呼ばれる、むつ市東部に南北に広がる標高 25 m前後の広大な台地の北東部、眼下に田名部川支流の青平川を臨む台地の縁辺に位置する遺跡である。下北丘陵と恐山山地の間には、下北丘陵の西縁から津軽海峡まで、下末吉海進期に形成された海成段丘が広がっており、斗南ヶ丘は、下北丘陵より大湊湾に流下する田名部川によって北部の段丘と切り離され、さらに東側の下北丘陵との境界に青平川の谷が入ることで形成された台地である。

この斗南ヶ丘の西には、田名部平野と呼ばれる低平な三角州状の低地が広がる。河口より７km ほど遡った、最花貝塚遺跡に近い青平川との合流点付近でも標高３m程度に過ぎず、縄文海進最上昇期には、最花貝塚遺跡付近まで海が入り込んでいたものと考えられる。一方、田名部平野の海岸部には、３列の砂丘列が形成されており、最も古い第Ⅰ砂丘列は、約 4500 年前に形成されたと推測されている（松本 1984）。砂丘列の形成によって田名部平野は潟湖化し、海退とともに汽水域化が進んだようである（松島・奈良 1988）。

最花貝塚遺跡は、明治期にはすでにその存在が知られて

第２図　最花貝塚遺跡の位置（国土地理院　1/50000『むつ』『近川』より）



第３図　最花貝塚遺跡（むつ市教育委員会 1986 より加工・転載）

おり、遺物の採集なども行われていた。東京国立博物館には、最花貝塚遺跡で採集された青竜刀石器が寄託・展示されている。

遺跡の最初の発掘調査は八幡一郎氏によって 1947 年 12 月に行われた。後に江坂氏によってＡ貝塚と命名された場所である。翌 1948 年 10 月１～４日にも、八幡氏はＡ貝塚の発掘を行っている。この時に慶應義塾大学学部生であった江坂輝彌氏が参加しており、江坂氏は、ここで報告する 1964 年のＡ地点の発掘を、1948 年調査地点の東部より行ったと日誌に記している。これら八幡氏の発掘調査では、シジミが 90％を占める貝層と、その下から石囲炉を伴う竪穴が検出され、竪穴の床面からは２体の伸展葬の人骨も出土したと報告されている（中島 1950、江坂 1958）。

1951 年８月には、鈴木尚氏を中心とする下北総合学術調査団の先史人類学班が発掘調査を行った。1948 年のＡ地点のトレンチに隣接して、Ａ・Ｂ二ヶ所のトレンチを掘削したようである（佐々木 1951）。この発掘調査の場所については、後に江坂氏が、1964 年に調査したＢ貝塚に当たるとの説明をしているが（江坂 1969）、佐々木の報文には 1948 年の調査地点も記録されているため、江坂氏側に何らかの誤認があると考えられる。なお、この調査では、八幡氏の調査地点に近いＡトレンチから、同様に２体の人骨が出土した（佐々木 1951）。

その後、1964 年 10 月に、ここで報告する江坂輝彌氏による発掘調査が行われた。詳細は次節で記すが、この調査においてＡ～Ｃ貝塚という名称が与えられることになった。

1977 年、1978 年、1982 年には、むつ市教育委員会による緊急調査として、Ａ～Ｃ貝塚の南方約 150 ｍの場所で、複数の貝層が発掘された（むつ市教育委員会 1978・1980・1983）。報告者は、この地点をＤ貝塚と呼んでいる。Ｄ貝塚の貝層は、土層断面等を見る限り、いずれも不自然な落ち込みの中に堆積しており、住居址内貝層と考えてよさそうである。また、1985 年には遺跡東端の照徳神社の北西でも緊急調査が行われ、縄文時代中期（円筒上層式期）～後期初頭の遺物が出土している（むつ市教育委員会 1986）。報告書の図を見る限り、この地点でも不自然

な包含層の落ち込みが認められ、やはり住居址の存在が推測できる。なお、これらの調査を担当した橘善光氏は、最花式以後に編年されるはずの全面縄文の深鉢形土器を「最花Ⅰ類」と呼び、主に層位的関係を重視して最花式以前に位置付けている。こうした新旧の土器の出土レベルの逆転も、住居址等の遺構の存在を示唆するものである。

以上の調査成果からみて、最花貝塚遺跡は、少なくともＡ～Ｄの４つの地点に貝層が分布し、広い範囲に竪穴住居址等の遺構が展開する、縄文時代中期を中心とした集落遺跡と評価することができる。遺跡の北半部、Ａ～Ｃ貝塚一帯に前期後葉の円筒下層ｃ・ｄ式が比較的多くみられ、中期前葉の円筒上層ａ式は、Ｄ地点まで分布が拡がる。円筒上層ｂ式から榎林式は、再び分布が限られるようになるが、中期後葉の最花式から後期初頭の土器群は、調査地点全体に分布するようになる。これまでの調査の成果から、各時期の集落の具体的な様相を推測することは不可能だが、貝層や遺物の分布範囲からみて、中期～後期初頭の集落は、径約 200 mの範囲に及ぶとみていいだろう。

なお、最花貝塚遺跡の貝層検出地点については、江坂氏の調査以来、Ａ～Ｄ、４ヶ所の地点貝塚として記述されてきた。しかし、これまでの調査地点の貝層には、住居址内貝層と理解すべきものも多く、地点貝塚としての呼称はそぐわないように思われる。そこで、この報告においては、それぞれをＡ～Ｄ地点と呼び換え、1985 年の調査地点については、1985 地点と仮称しておくことにする。

ｂ．1964 年の発掘調査の概要

現在までに確認した、1964 年の発掘調査に関する記録類は、セクション図３枚、日誌１セット、調査時の 35mm モノクロフィルム２本、カラーフィルム１本である。日誌に記載されながら発見できなかった図面などもあり、全ての記録類が確認できているわけではないが、以下、Ａ地点を中心に、これらの記録類からうかがい知ることができる調査の内容をまとめておく。なお、この調査については、江坂氏が『日本考古学年報』17 に短報を掲載しているほか（江坂 1969）、金子浩昌氏が『下北』に自然遺物の報告をしている（金子 1967）。

調査は、1964 年 10 月７日～ 11 日の５日間で行われた。Ａ～Ｃ地点の３ヶ所にトレンチを設定し、Ａ地点約６㎡、Ｂ地点約 15㎡、Ｃ地点約２㎡の計約 23㎡を調査している。日誌には調査の参加者として、江坂輝彌氏のほか、五十音順に阿井眞咲、井上久、金子浩昌、笹津備洋、相馬努、瀧沢幸長、橘善光、龍原武嗣、村越潔、村田明男、吉田義昭の各氏の名前が記録されている。

Ａ地区では、まず東西に走る農道の北側に、長さ４ｍ、幅 50㎝のトレンチ（Ａ－１区）を東西方向に設定、掘削することから始めている。先述のとおり、このトレンチは、1948 年の調査区の東側に当たるということである。地表下 20cm ほどで 1948 年に掘り残した貝層が検出され、その範囲を捉えるために、南に１ｍ×１ｍの拡張区を、北側にも幅 50cm 程度のセクションベルトを残して、１ｍ×１ｍ程のトレンチを２ヶ所（Ａ－２－１区、Ａ－２－２区）設定、地表より１ｍ弱の深さまで掘削した。さらにＡ－２－１については、東に１ｍ、北に 50cm 拡張している。

セクション図と日誌によれば、Ａ－１区では、表土と黒褐色土の下に、ヤマトシジミを中心にハマグリ等を含む、薄い混貝土層が検出され、その下部には焼土・灰が５cm 程度堆積していた。その下は淡褐色土層、淡黄色土層と続く。淡褐色土層の下部にも薄い焼土層が認められ、淡黄色土層は多量の炭化物を含み、その下部にやはり焼土を含む層が存在したようである。

一方、Ａ－２－１区では、２枚のセクション図が必ずしも整合するわけではないが、表土と黒褐色土層の下に混土貝層があり、その下にＡ－１区の焼土層に相当する可能性の高い炭化物を含む黒褐色土層が認められたようである。その下は、焼土・灰等を含む層を挟む淡褐色土層となり、混貝土層、炭化物層と焼土・灰層を挟み、淡黄色土層へと続いている。

日誌には、上層の混貝土層（混土貝層）より淡黄褐色土層までは、出土土器に変化が認められなかったと記述されている。次節で報告する土器の多くは、これらの層から出土したものと考えている。Ａ地点からは、ほかに円筒上層式も出土しているが、これらは下層の混貝土層から淡黄色土層に包含されていた可能性が高い。

Ｂ地点では、長３ｍ、幅２ｍの調査区を南北に縦に２ヶ所並べ（Ｂ－１－１区、Ｂ－１－２区）、さらに両調査区の西側にそれぞれ拡張区を設定、掘削している。表土層と薄い黒色土層の下に貝層が検出され、やはりその下部に焼土層が存在していたようである。貝層の下には粘質の褐色土層があり、地表下１ｍ強の深さのローム層へと続く。褐色土層の層中や下層には木炭層が認められた。

現在確認できるＢ地点の出土土器は、僅かに最花式土器が認められる以外、円筒上層式と中期末～後期初頭のものが主体となっている。それぞれの出土層位は明確ではないが、貝層調査時に、中期末～後期初頭の復元可能土器が出土していることからすると、貝層より上層に中期末～後期初頭の土器が、貝層下の褐色土層に円筒上層式が包含されていたものと推測できる。

最後にＣ地点であるが、Ｃ地点は、Ａ・Ｂ地点から続く農道の北側に、長さ２ｍ、幅１ｍのトレンチを掘削したの

みで終了した。そのため日誌でも、C地点は「試掘」と表現されている。このトレンチを地表下1.5 m近くまで掘削した結果、表土直下と地表下1 m程度の位置に、薄く小規模な貝層が確認された。下の貝層を挟む上下の土層からは円筒下層式土器が出土し、そこから表土下の貝層までの間からは、円筒上層式が出土したと記録されている。ただし、表土下の貝層の時期は不明である。

以上の調査結果からは、各地点の土層の構成や、遺物包含層、貝層の時期に大きな違いがあることがわかる。特に円筒下層式～上層式の厚い包含層が確認されたC地点は、A、B地点との土層の対比が不可能である。現在と異なり、包含層形成時の地形が複雑であったか、あるいは各地点のトレンチが、住居址等の遺構内に入っている可能性も考えられよう。

引用・参考文献

江坂輝彌　1958「余白録 古いノートから－青森県下北半島最花貝塚の調査日誌より－」『石器時代』5　石器時代文化研究会　68頁
江坂輝彌　1969「青森県むつ市最花貝塚」『日本考古学年報』17　誠文堂新光社　76頁
金子浩昌　1967「下北半島における縄文時代の漁業活動」『下北－自然・文化・社会－』平凡社　117-128頁
佐々木守　1951「下北半島先史文化綜合出掘調査」『みちのく』3　県立大湊高等学校考古学部
中島全二　1950「下北半島新石器時代の編年的研究」『考古学雑誌』第36巻第4巻　日本考古学会　30-38頁
松島義章・奈良正義　1988「下北半島田名部平野沖積層から産出した貝殻のC^{14}年代とそれに関する問題」『神奈川県立博物館研究報告』17　神奈川県立博物館　57-72頁
松本秀明　1984「海岸地形にみられる浜堤列と完新世後期の海水準微変動」『地理学評論．Ser.A』第57巻第10号　日本地理学会　720-738頁
むつ市教育委員会　1978「最花貝塚第1次調査報告」『むつ市文化財調査報告書第4集』
むつ市教育委員会　1980「最花貝塚第2次調査報告」『むつ市文化財調査報告書第6集』
むつ市教育委員会　1983「最花貝塚第3次調査報告」『むつ市文化財調査報告書第9集』
むつ市教育委員会　1986『最花貝塚第4次調査報告』

（安藤広道）

写真1　最花貝塚遺跡遠景

写真2　最花貝塚遺跡調査風景

写真3　A－2トレンチ？調査風景

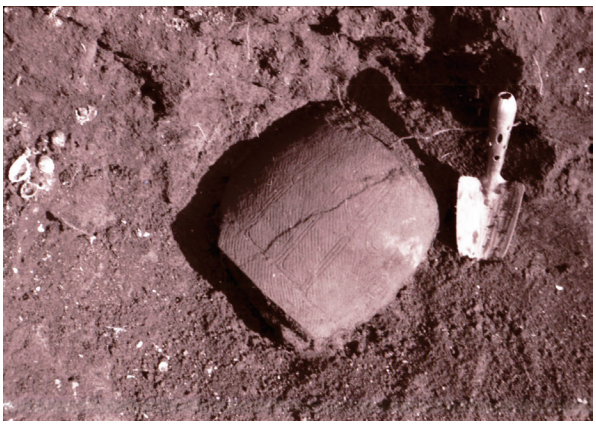
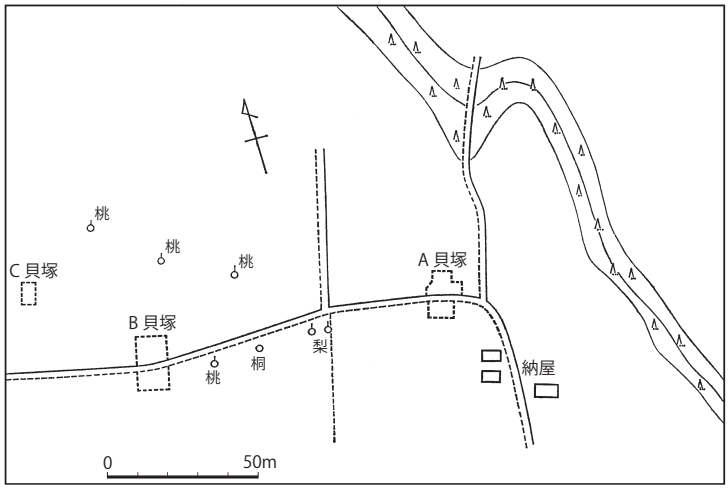
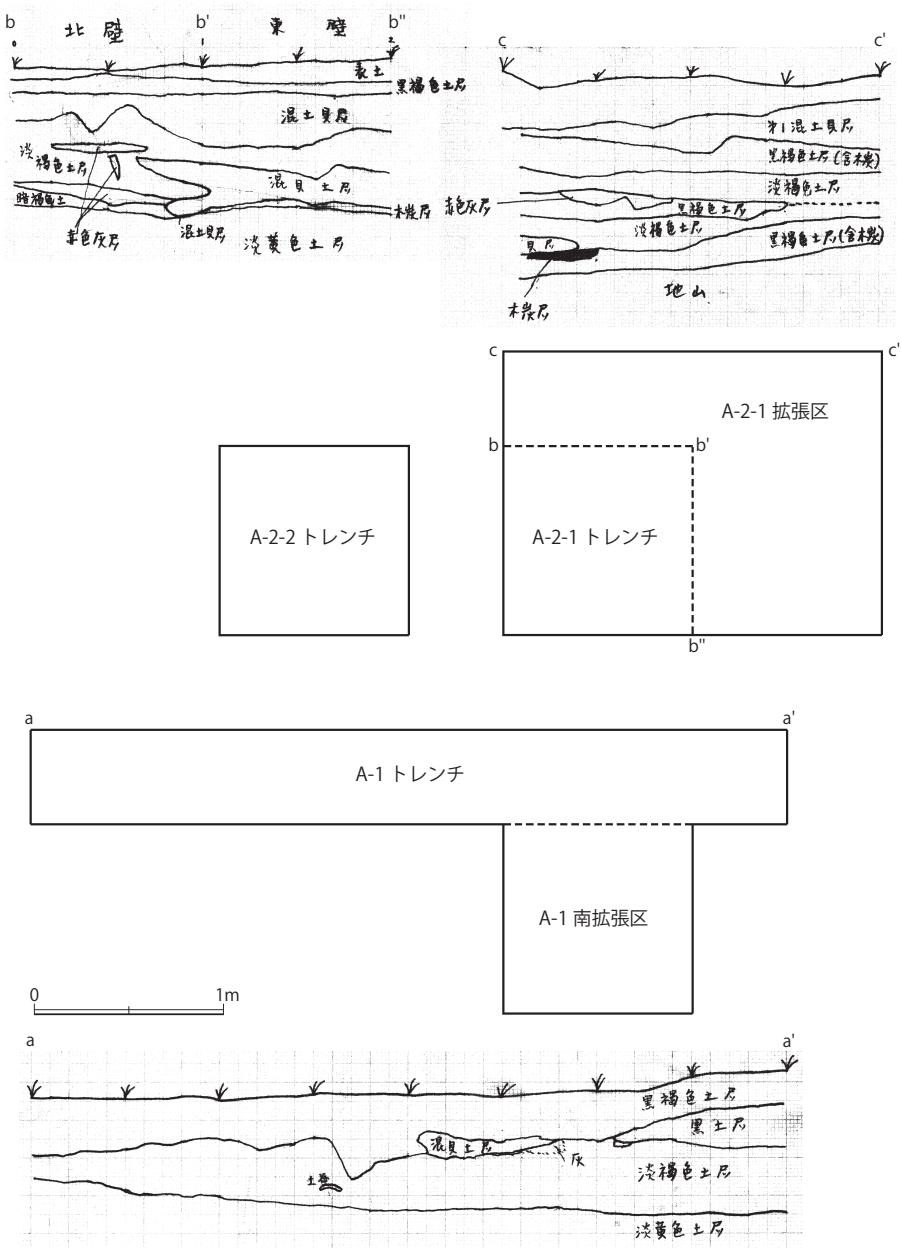


写真4　Aトレンチ？土器出土状態



第４図　A～C 貝塚（地点）の位置（金子 1967 より加工・転載）



第５図　A 地点トレンチ配置・セクション（トレンチの位置関係は日誌より推定）

（2）最花貝塚遺跡 A 地点出土土器の分析

a．遺物の保管状態と整理作業の方法

1964 年発掘の最花貝塚遺跡出土資料は、慶應義塾三田キャンパス西校舎 4 階の民族学考古学資料室に保管されていた。土偶と一部の石製品を除く、ほぼ全てが木製箱に収められており、総数は 61 箱であった。遺物の大半は、洗浄が終了していたものの、収蔵期間中に埃が積もり、再度水洗が必要な資料も少なくなかった。

遺物は、土器が圧倒的多数を占め、ほかに石器、骨角器、土製品が含まれていた。遺物に対する注記は一切なされていなかったが、幸い大半の箱には、発掘調査当時のものと思われる、地点、グリッド、層位、日付等の記載されたラベルが入っていた。このラベルをもとに整理をおこなったところ、A 地点出土資料は 25 箱、B 地点は 18 箱、C 地点は 6 箱、地点不明は 12 箱であった。なお、地点不明の箱には、地点の異なるラベルが 2 枚混入しているもの、ラベルの含まれない箱、ラベルの地点表記が不明確なものの 3 通りがあった。

今回の整理では、まず全ての地点の資料を、箱ごとにプラスチックコンテナに移し替え、1 点 1 点注記を行った。この作業と並行して土器の観察を進めたところ、地点ごとに主体となる土器の時期が異なることが判明してきた（A 地点は所謂「最花式」、B 地点は大木 10 式土器併行期～後期初頭と思われる土器群、C 地点は円筒下層 d1 式、d2 式、円筒上層 a 式土器）。また、学史の整理によって、A 地点出土土器を「最花式」の標式資料とすべきであることが明らかになってきたため、A 地点出土土器について整理・分析を進めることにした。

b．出土土器の分析

最花貝塚遺跡 A 地点出土土器のうち、明確に円筒下層・上層式と考えられるものを除き、それ以外の資料に対して、分類、接合、図化を進めた。第 6 図～第 14 図には、口縁部を含む破片及び底部を含む破片全てと、文様等のバラエティが把握できるように選定した胴部破片を掲載した。

なお、地点表記が不明確な箱に入っていた資料のうち、第 7 図 2、12 については、その特徴から A 地点出土である可能性が高いと判断し、分析に加えることにした。

最花貝塚遺跡 A 地点出土土器は、全て深鉢形土器である。以下、分類ごとに概要を説明する。

【深鉢形 I 類】（第 6 ～ 12 図 1 ～ 111）

胴部に明瞭な屈曲をもたない単純な深鉢形を I 類とし、口縁部が外反するものをア類、内湾するものをイ類とする。

器面の装飾については、口縁部に輪積による段を作出し、段より下に縄紋を施したうえで、沈線文を描くものを a 類、沈線文のないものを b 類とする。また、口縁部の段の上まで縄紋を施すものを a' 類、b' 類として区別した。

一方、口縁部に段をもたず、器面全体に縄紋を施すものを c 類とし、口縁部に縄紋が施されていないものを c' 類とする。口縁部に段をもたず、縄紋と沈線文が施されるものを d 類とする。

◎装飾 a 類（第 6 ～ 8 図 1 ～ 17）

・器形 I 類ア（1 ～ 11）

1 は、胴部上半に、2 条の沈線による細い U 字状文をほぼ等間隔に配し、それぞれの上端部分を口縁部の段に沿って連結する。下端部からは、間に 1 本の沈線を付加した細長い逆 U 字状文を垂下させている。胴部上半の U 字状文内に 4 ヶ所、下端部の両脇に 2 ヶ所、刺突文が配される。2 は、胴部上半に 2 条の沈線によって、下端のすぼまる U 字状文を、波状文風に連続させる。U 字状文内部に T 字状に刺突が施される。

3 は、口縁直下に、中央に刺突のある円形貼付文を配し、その下に 2 条の沈線による孤状文と Y 字状文を縦に配する。孤状文と Y 字状文との中心を縦に貫くように刺突文を付加し、沈線文の端部にも刺突が施される。これらの両側に 2 条の沈線を垂下させ、その隣は Y 字状文となる。沈線文上端および Y 字状文内部に刺突が施される。

4 は胴部上半に、2 条の沈線により、連結した U 字・逆 U 字状文を描く。U 字状文の下端から、胴部下半に沈線が伸びる。5 も 2 条の沈線による、連結した U 字・逆 U 字状文。6 は、2 条の沈線により U 字状文を挟む Y 字状文が描かれる。U 字状文端部に刺突が施される。底部付近まで縄紋が施されていたようである。7 ～ 11 の沈線文も、2 条の沈線により描出される。

・器形 I 類イ（12 ～ 17）

12 は、上端が逆 U 字状に連結した懸垂文を描く。胴上半に 2 条の沈線による逆 U 字状文が連続する。懸垂文は 1 つおきに、中央付近が円文を挟む矢印状となるもの、下方に向かって細くなるものが繰りかえされる。矢印状になる部分は、2 条の沈線による一対の鉤状文と Y 字状文の組み合わせからなり、先細りの懸垂文は上半部が 2 本の沈線で描かれる。懸垂文内の上半部、矢印状文内の円文付近には、刺突文が加えられる。

13 は胴上半に幅の狭い逆 U 字状文が連続する。内部に沈線や 2 条の沈線が垂下するものは、2 条の沈線による逆 U 字状文に類似する。胴上半の逆 U 字状文で下端が U 字状に閉じるものには、胴下半に垂下する逆 U 字状沈線文が対向する。底部は際まで縄紋が施される。

14 は、刺突のある円形貼付文を 3 単位配し、その下に 2 条の沈線による U 字状文を挟む Y 字状文を描く。その

間には、逆U字文や崩れたY字状文を描き、それぞれの上半部分を充填するように刺突文が付加されている。左端の逆U状文内上端には穿孔がみられる。

15は、短いU字状文の下に沈線を垂下させたものと、沈線を付加した逆U字状文、垂下する2条の沈線などからなる。16は口縁部直下に沈線文が施される。

17は無紋の口縁及び、横位沈線が認められる。

◎装飾a' 類（第9図18～23）

・器形Ⅰ類ア（18～21）

18の胴上半はU字状文が連続するが、一部幅広になっている。U字状文上端は1・2条の沈線により口縁直下で連結し、閉じて楕円状になる部分もある。胴下半は、上半の文様と対向した逆U字条文が連続する。やはり一部分が幅広となる。

19は2条沈線によるU字状文、x字状文、3重の同心円文を縦位に配し、その下部に沈線を垂下させる。U字状文は、内側の沈線が閉じて楕円文状となる。刺突が、U字状文内とx字状文の端部に施される。

20は、2条の沈線が斜位に走り、口縁直下で連結して閉じている。口縁直下左端に、1条の横位沈線が僅かに認められる。口縁部は2条の沈線が施されている。段に沈線を有するものは20のみで、胎土の特徴も他の土器とは異なる。21は2条の沈線とそれに沿った刺突が施される。

・器形Ⅰ類イ（22、23）

22、23は段の部分が不明瞭であるが、a' 類に分類しておく。両破片とも口縁部下に横位沈線文、22は左端に刺突が認められる。

24～32は、口縁部を欠くため、a類、a' 類の判別ができない。24は口縁部直下の胴部破片で、2条の沈線によるY字状文を連結させて描く。25は胴部中央から下半。穿孔があり、その下に2条の沈線による崩れたx字状文と垂下する沈線文を配し、1、2条の垂下沈線や逆U字状文もみられる。26は口縁部直下の胴部破片で、2条の沈線による逆U字状文が連続する。

27は口縁直下の胴部上半の破片である。中央に刺突文列を配した逆U字状文を連続させる。28は、懸垂文の上端がY字状に連結する。2条の沈線によるU字状文の下端が一部認められる。

29は口縁部直下の胴部破片で、1に類似する文様をもつが、別個体である。30は幅の狭いH字状が連続する。31は上端が逆U字状文に連結する懸垂文。上部に大きい刺突が施される。32は3条の垂下沈線間にU字状の沈線を施したもの。U字状文の中央に縦位に3ヶ所、左の垂下沈線上下端に1ヶ所ずつ刺突が認められる。

なお、a類、a' 類の刺突は、竹菅状の器具により、器面に対し垂直に押捺されるという特徴がみられる。

◎装飾b類、器形Ⅰ類ア（33～36）、**イ**（37～44）

◎装飾b' 類、器形Ⅰ類ア（45～47）、**イ**（48～52）

◎装飾c類、器形Ⅰ類ア（53～66）、**イ**（67～102）

◎装飾c' 類、器形Ⅰ類ア（103～108）

109、110は胴部破片。b、b'、c、c' 類の判別は不可。

◎装飾d類、器形Ⅰ類ア（111）、**イ**（112、113）

111は縦位の沈線を施した後に上部を逆U字状に繋ぐ。逆U字状内部は、縄紋を磨り消している可能性もある。

112は幅の狭い逆U字状沈線文内部に、沈線が垂下する。113は右下がりの2条の沈線と思われるものが破片下半に僅かに認められる。

【深鉢形Ⅱ類】（第13図114～143）

胴部中央付近に屈曲をもち、上半が緩やかに屈曲しながら立ち上がるもの。胴部上半～口縁部は無文で、下半に文様が描かれる。

114は、沈線を加えた横位の橋状把手をもつ。内外面全体が赤彩される。115は、屈曲部に円形突起と2条の沈線が巡る。突起には、中空の竹管状器具による刺突が認められる。116にも、屈曲部に沈線が施される。117は原体圧痕の下部に続き縄紋が施される。118には縄紋が認められない。119から135は口縁部破片。

136～143は胴部破片。136は屈曲部に2条の沈線を巡らし、その下に刺突を縦位に配したU字状文が配される。U字状文の上端は逆U字状に連結する。137、138は屈曲直下の破片である。屈曲部に沈線が巡り、胴部に3条1単位の沈線が垂下する。138、波状に連結したU字状文と、その下端に対向する逆U字状文からなる。U字状文内に縦位に3、4個、逆U字状文との接点の両側に1対の刺突が施される。139は2条沈線によるU字状文が連続する。140は、屈曲部の2条の沈線の間に刺突が施される。

141、142は、他とは異なり、器面に対し斜め方向に刺突が施される。143は屈曲部破片と考えられる。縄紋が施されていると思われ、2条の沈線間に刺突が3ヶ所認められる。円形貼付内にも刺突が施される。

【底部破片】（第14図144～170）

144から163は、底部の際まで縄紋が施されている。144から149には網代痕が認められる。164から167は底部際が無紋である。

【その他】（第14図171～177）

所謂「最花式」以外の土器がごく僅か含まれていた。171は榎林式土器。172～177は中期末から後期初頭の土器であろう。172～175は、縄紋及び撚糸圧痕文を有する。176、177は縄紋及び沈線文が施されている。

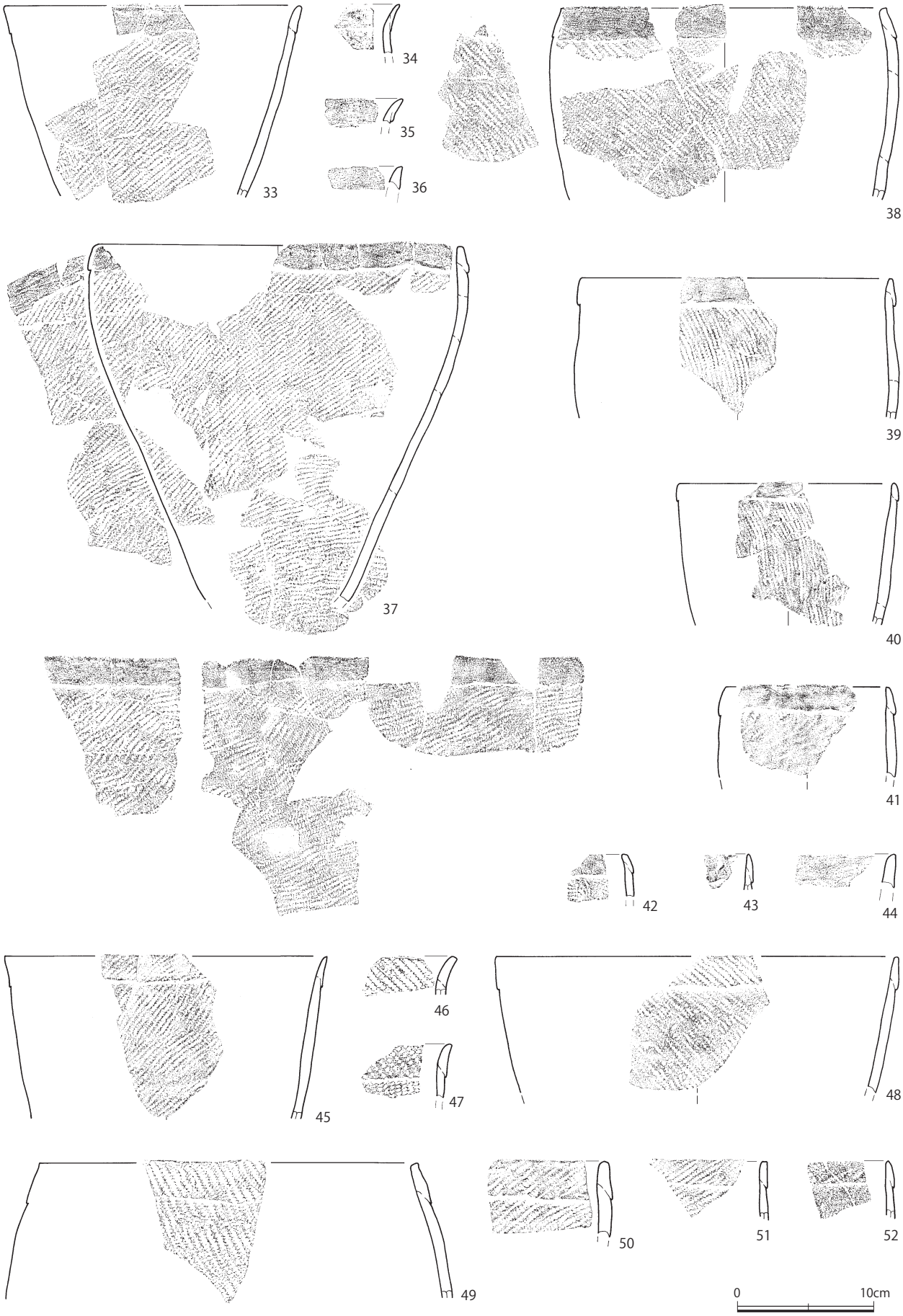
（安達香織）

第６図　最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器①

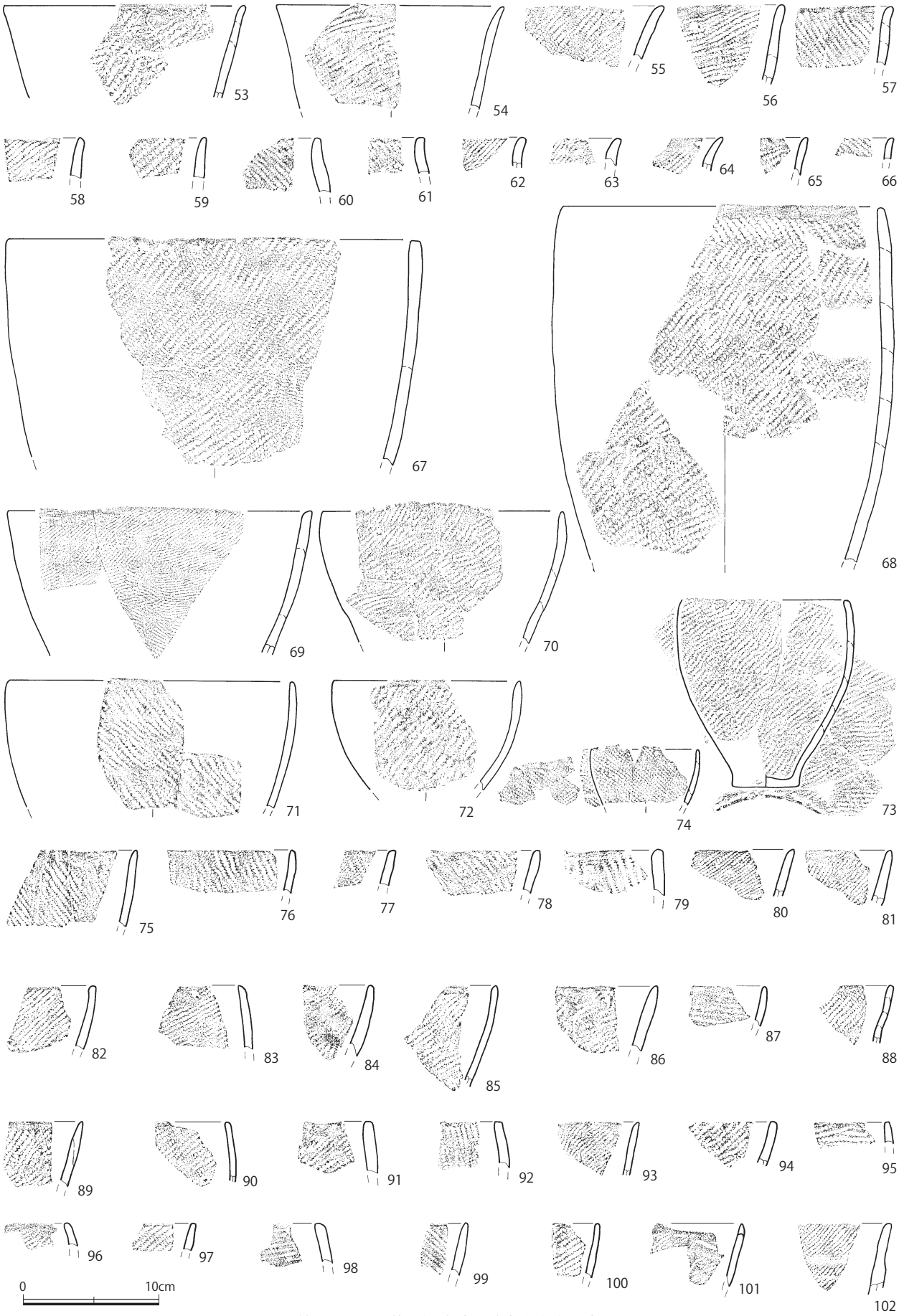
第７図　最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器②

第８図　最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器③

第９図　最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器④

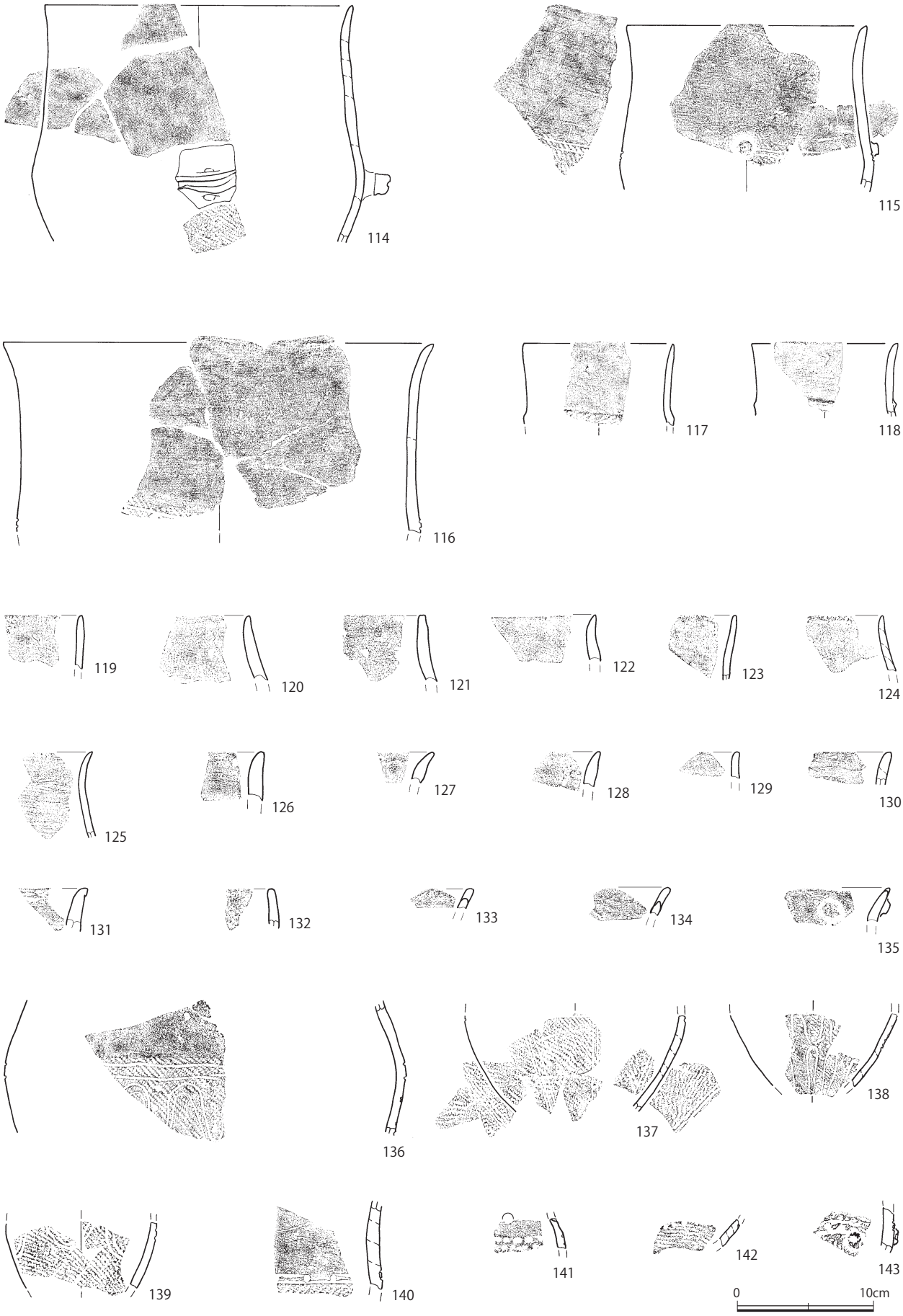


第 10 図　最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器⑤

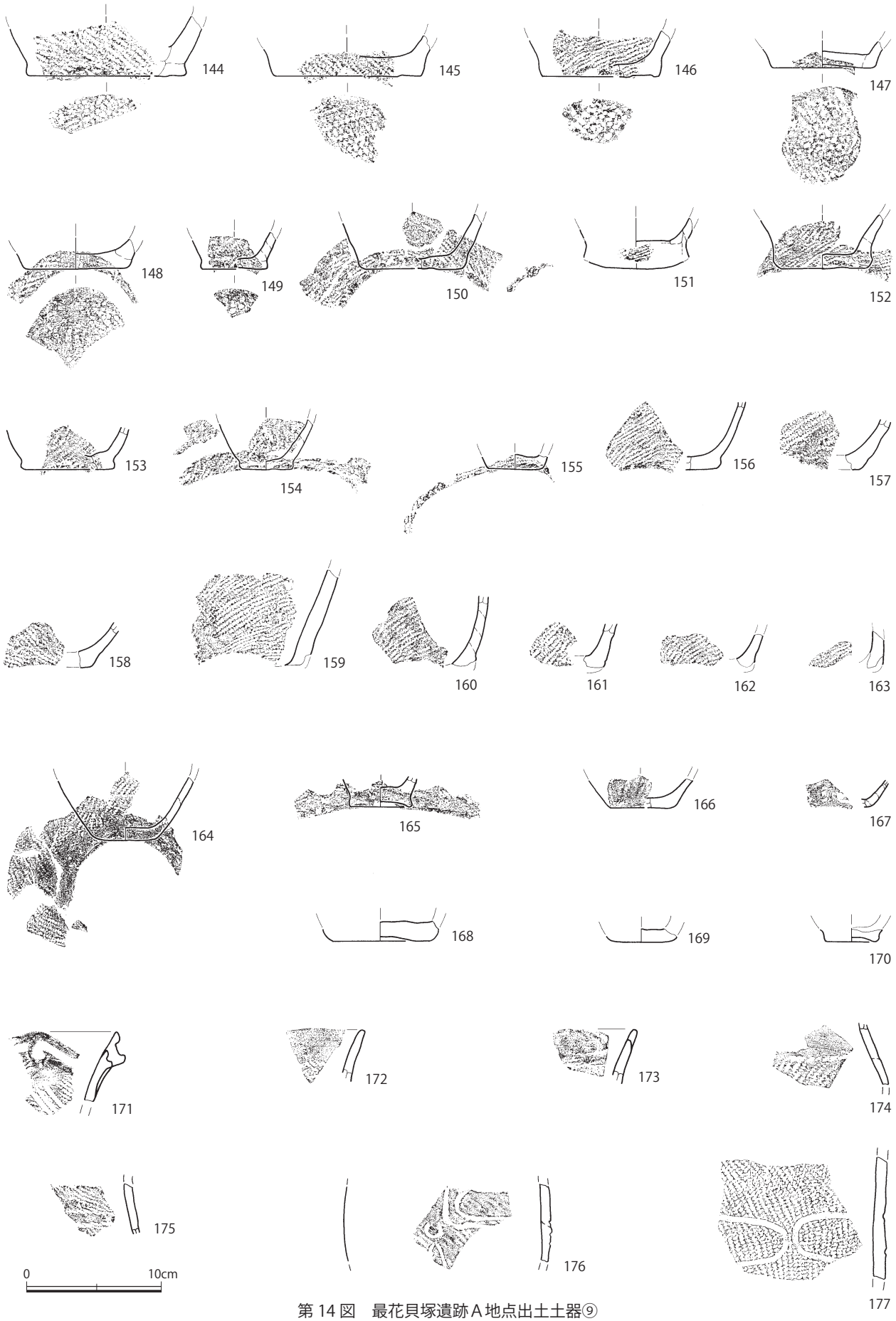


第 11 図　最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器⑥

第 12 図　最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器⑦



第 13 図　最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器⑧



第 14 図　最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器⑨

表１　最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器観察表

図	No.	出土地点 地　区	層　　位	器種・部位	口径 〔底径〕	器高 （残存高）	外　　面	内　　面	胎　　土	外面色調	内面色調	備　　考
6	1	A-2-1 東拡張区 /C	第２貝層下 / 第２貝層	深鉢形Ⅰｱａ類・口縁	30.0	(22.7)	RL 横→口縁段作出→沈線→刺突	横位ナデ・横位ミガキ（上部ほどミガキ良好）	骨針状物質僅かに含む（～１㎜）、礫僅かに含む（２～３㎜）粗砂多含、細砂多含	橙色（7.5YR7/6）、暗灰色（N3/0）	橙色（7.5YR7/6）、黒色（10YR2/1）	口縁部横位ミガキ、中実の刺突具
6	2	Ｂ？	－65㎝	深鉢形Ⅰｱａ類・口縁	29.0	(12.3)	RL 横→口縁段作出→沈線・刺突	横位ナデ・横位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	灰黄褐色（10YR5/2）、橙色（5YR6/6）、胴部にぶい黄橙色（10YR7/3）	橙色（5YR6/6）、褐灰色（10YR4/1）、胴部浅黄橙色（10YR8/3）	口縁部横位ミガキ、中空の刺突具
6	3	A-2-1 拡張区	第１貝層と第２貝層の中間	深鉢形Ⅰｱａ類・口縁	26.0	(13.8)	上部：RL 横、下部：LR 横→口縁段作出→円形突起・沈線→刺突	上部：横位～ナデ・右下がりミガキ、下部：縦位ナデ・縦位ミガキ	礫僅かに含む（２～５㎜程度）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/4）、暗灰色（N3/0）	にぶい黄橙色（10YR7/4）、褐灰色（10YR4/1）	口縁部横位ミガキ、中実の刺突具
6	4	A-1-1		深鉢形Ⅰｱａ類・口縁	22.0	(12.4)	RL 横→口縁段作出・沈線	横位ナデ・横位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	橙色（7.5YR7/6）、黒色（10YR2/1）	橙色（7.5YR6/6）	口縁部横位ミガキ、縦位沈線→上部を繋ぐ
6	5	A-2-1/A-2-1 拡張区	貝層下半－50～－80㎝ / 第１貝層と第２貝層の中間	深鉢形Ⅰｱａ類・口縁	22.0	(8.5)	RL 横→口縁段作出・沈線	横位ナデ・横位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/3）	橙色（7.5YR7/6）、～にぶい黄橙色（10YR6/3）	口縁部横位ミガキ
6	6	A-2-1/A-2-1 拡張区	貝層下半－50～－80㎝ / 第１貝層と第２貝層の中間	深鉢形Ⅰｱａ類・口縁～底	20.0 〔6.0〕	23.0	RL 横→口縁段作出・沈線→刺突	上部：横位ナデ・横位ミガキ、下部：横位ナデ、縦位ミガキ（ミガキ良好）	粗砂多含、細砂多含	黒色（10YR2/1）、下部にぶい褐色（7.5YR5/4）	橙色（5YR6/6）、黒色（N2/0）	口縁部横位ミガキ
6	7	A-1-1		深鉢形Ⅰｱａ類・口縁			RL 横→口縁段作出・沈線	上部：横位ナデ・横位ミガキ、下部:右下がりナデ・右下がりミガキ	骨針状物質含む（～1.2㎜）、粗砂多含、細砂多含	橙色（7.5YR7/6）～下部橙色（7.5YR6/6）	上部にぶい黄橙色（10YR6/3）、下部橙色（5YR6/6）	口縁部横位ミガキ
6	8	A-2-1	貝層下半－50～－80㎝	深鉢形Ⅰｱａ類・口縁			LR 横→口縁段作出・沈線	横位ナデ・横位ミガキ	礫含む（２～３㎜）、粗砂多含、細砂多含	灰黄褐色（10YR5/2）	10YR6/3（にぶい黄橙）	口縁部横位ミガキ
6	9	A-1-1	中央貝層下－25～－45㎝	深鉢形Ⅰｱａ類・口縁			LR 横→口縁段作出・沈線	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質極僅かに含む（1.5㎜）、粗砂多含、細砂多含	10YR6/4（にぶい黄橙）	橙色（7.5YR6/6）	口縁部横位ミガキ
6	10	A-1	貝層下土層	深鉢形Ⅰｱａ類・口縁			RL 横→口縁段作出・沈線	横位ナデ・横位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	黒褐色（10YR3/1）	上部黒褐色（10YR3/1）、にぶい黄褐色（10YR5/3）	口縁部横位ミガキ
6	11	A-2-1 拡張区	第１層と第２貝層の中間	深鉢形Ⅰｱａ類・口縁			RL 横→口縁段作出→沈線	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質極僅かに含む（0.8㎜）粗砂多含、細砂多含	黒褐色（10YR3/1）	褐灰（10YR4/1）	口縁部横位ミガキ
6	12	Ｂ？	－65㎝	深鉢形Ⅰｲａ類・口縁	33.0	(28.0)	RL 横→口縁段作出→沈線→刺突	横位ナデ、左斜め上がりミガキ（上部ほど密）	粗砂多含、細砂多含	橙色（7.5YR6/6）、黒色（10YR2/1）	明赤褐色（2.5YR5/8）、まだらににぶい黄橙色（10YR7/4）、暗灰色（N3/0）	口縁部横位ミガキ、中空の刺突具、口縁部断面観察可
7	13	A-2-1/A-2-1 拡張区	貝下半－50～－80㎝・最下層 / 第１貝層と第２貝層の中間・－	深鉢形Ⅰｲａ類・口縁～底	26.0 〔13.0〕	46.0	RL 横→口縁段作出→沈線	横位ナデ・横位ミガキ（上部ほど良好）	粗砂多含、細砂多含	橙色（5YR6/8）、暗灰色（N3/0）	灰黄褐色（10YR4/2）、一部上端にぶい黄橙色（10YR7/2）～黒色（10YR2/1）	口縁部横位ミガキ
8	14	A-1-1/A-1	中央貝層下－25～－45㎝ / 北壁	深鉢形Ⅰｲａ類・口縁	24.0	(20.3)	RL 横→口縁段作出→円形突起・沈線→刺突	上部：横位ナデ・横位ミガキ、下部：縦位ナデ・右下がりミガキ（ミガキ良好）	骨針状物質僅かに含む（1㎜）、粗砂多含、細砂多含	橙色（5YR6/8）、黒色（10YR2/1）	橙色（5YR6/8）、黒色（N1.5/0）	口縁部横位ミガキ、中空の刺突具、深い刺突部分は内面膨らむ、外面からの穿孔あり
8	15	-	第１貝層	深鉢形Ⅰｲａ類・口縁	28.0	(27.5)	LR 斜→口縁段作出→沈線	上部：横位ナデ・横位ミガキ、下部：縦位ナデ・縦位ミガキ	骨針状物質極僅かに含む(1㎜)、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）、暗灰色（N3/0）	橙色（5YR6/6）､黒（N2/0）	口縁部横位ミガキ、弧状（左から右へ）の後垂下沈線（上から下へ）
8	16	A-2-1 拡張区	第１貝層	深鉢形Ⅰｲａ類・口縁			RL 横→口縁段作出→沈線	横位ナデ・横位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	橙色（5YR6/6）	橙色（7.5YR6/6）、まだらに褐灰色（7.5YR5/1）	口縁部横位ミガキ、器面は粗い
8	17	A-2-1 拡張区	第１層と第２貝層の中間	深鉢形Ⅰｲａ類・口縁			横位沈線	横位ナデ・横位ミガキ	礫極僅かに含む（2.9㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	口縁部横位ミガキ
8	18	A-2-1 東拡張区	第２貝層下	深鉢形Ⅰｱａ' 類・口縁	26.0	(22.2)	RL 横→口縁段作出→口縁 RL 横→沈線	上部：横位ナデ・横位ミガキ、下部：縦位ナデ・縦位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	口縁にぶい黄橙色（10YR7/4）、下半橙色（7.5YR7/6）､黒色（N2/0）	橙色（7.5YR7/6）、黒褐色（10YR3/1）	
8	19	-	第１貝層	深鉢形Ⅰｱａ' 類・口縁	31.0	(23.0)	RL 横→口縁段作出→口縁 RL 横→胴沈線→刺突	横位ナデ・横位ミガキ（上部ほど密）	粗砂多含、細砂多含	橙色（5YR7/6）、暗灰色（N3/0）	にぶい橙色（7.5YR7/4）、褐灰色（10YR4/1）	中空の刺突具（径 4mm）、円(左廻り)の後垂下沈線(上から下へ)
8	20	A-2-2	貝層なし	深鉢形Ⅰｱａ' 類・口縁	36.0	(10.5)	RL 横→口縁段作出→口縁 RL 横→口縁沈線（・胴部沈線）	横位ナデ・横位ミガキ	礫僅かに含む（２～３㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/3）、右下端暗灰色（N3/0）	浅黄橙色（10YR8/3）	
8	21	A-2-1 拡張区	第１層と第２貝層の中間	深鉢形Ⅰｱａ' 類・口縁			LR 横→口縁段作出→口縁 LR 横→沈線	最上部：横位ナデ・横位ミガキ、下部：右下がりミガキ	骨針状物質僅かに含む（～0.2㎜）礫僅かに含む（4㎜）、粗砂多含、細砂多含	黒褐色（10YR3/1）	にぶい褐色（7.5YR5/4）	口唇部平坦に作出、焼成良好、直径 6㎜中空の刺突具

図	No.	出土地点 地　区	層　　位	器種・部位	口径 〔底径〕	器高 （残存高）	外　　面	内　　面	胎　　土	外面色調	内面色調	備　　考
8	22	A-1-1	中央貝層下－ 25 ～－ 45cm	深鉢形Ⅰイa' 類・口縁			（胴縄紋→口縁段作出→）RL 横→沈線・刺突	ナデ・ミガキ不明瞭	骨針状物質含む（～ 0.8 ㎜）、礫僅かに含む（6㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/3）～右半橙色（5YR6/6）	橙色（7.5YR7/6）～右半にぶい黄橙色（10YR7/3）	口唇部平坦に作出、器面上端部縄施紋部分に覆いかぶさる
8	23	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形Ⅰイa' 類・口縁			LR 横→沈線、刺突	ナデ・ミガキ不明瞭	骨針状物質含む（～ 0.3 ㎜）、礫僅かに含む（4㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/3）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	口唇縁端部平坦に作出、内面上端部に覆いかぶさる、内面に 2 箇所指紋（指先を下に向けている）。1 ヶ所はその上に口縁端部平坦に作出時の粘土が被さる、器面は粗い
8	24	A-2-1 拡張区	第 1 貝層と第 2 貝層の中間	深鉢形Ⅰa/Ⅰa' 類・胴部			RL 横→沈線	横位ナデ、横位ミガキ良好	骨針状物質僅かに含む（～ 0.5 ㎜）、礫含む（～ 7㎜）、粗砂多含、細砂多含	灰黄褐色（10YR4/2）	上部にぶい黄褐色（10YR5/3）、下部黒褐色（10YR3/1）	
8	25	A-1	貝層下土層	深鉢形Ⅰa/Ⅰa' 類・胴部			RL 横→沈線、穿孔	横位ナデ、横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～ 0.5 ㎜）、礫僅かに含む（3㎜）、粗砂多含、細砂多含	下端橙色（7.5YR6/6）、ほか全体的に黒褐色（10YR3/1）	灰黄褐色（10YR5/2）	外面スス
9	26	A-1-1/A-1	中央貝層下－ 25 ～－ 45cm / 貝層下土層	深鉢形Ⅰa/Ⅰa' 類・胴部			RL 横→沈線	横位ナデ、横位ミガキ	骨針状物質極僅かに含む（～ 0.8 ㎜）、礫含む（～ 6㎜）、粗砂多含、細砂多含	上半褐灰色（10YR4/1）、下半黒褐色（10YR3/1）	外面に対応して上半黒褐色（10YR3/2）、下半橙色（7.5YR7/6）	外面スス
9	27	A-2-1 拡張区	第 1 貝層と第 2 貝層の中間	深鉢形Ⅰa/Ⅰa' 類・胴部			RL 横→沈線、刺突	横位ナデ、横位ミガキ	骨針状物質含む（～ 0.8㎜）、礫僅かに含む（～ 4㎜）、粗砂多含、細砂多含	黒褐色（10YR3/1）、まだらににぶい黄橙色（10YR5/3）	にぶい黄橙色（10YR6/4）	中空の刺突具
9	28	A-1-1		深鉢形Ⅰa/Ⅰa' 類・胴部			LR 横→沈線	横位ナデ、縦位ミガキ	骨針状物質極僅かに含む（～ 0.5 ㎜）、礫僅かに含む（3㎜）、粗砂多含、細砂多含	黒褐色（10YR3/1）、下半灰黄褐色（10YR5/2）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	沈線鋭い（深さ 2㎜）
9	29	A-2-1 東拡張区 /C	第 2 貝層下土層 / 第 2 貝層	深鉢形Ⅰa/Ⅰa' 類・胴部			RL 横→沈線→刺突	横位ナデ、横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～ 0.5 ㎜）、礫僅かに含む（3㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/2）、黒褐色（10YR3/1）	外面にぶい黄橙色部分に対応して黒褐色（10YR3/1）、上端・下端はにぶい黄橙色（10YR7/4）	
9	30	A-2-1 拡張 / A-2-1	第 1 貝層と第 2 貝層の中間 / 最下層	深鉢形Ⅰa/Ⅰa' 類・胴部			RL 横→沈線	横位ナデ、縦位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～ 0.5 ㎜）、礫僅かに含む（～ 4㎜）、粗砂多含、細砂多含	上半黒褐色（10YR3/1）、下半にぶい橙色（7.5YR6/4）	暗灰色（N3/0）、上部まだらに灰黄褐色（10YR4/2）	外面スス
9	31	A-2-1 拡張区 /A-2-2	第 1 貝層と第 2 貝層の中間 / 貝層なし	深鉢形Ⅰa/Ⅰa' 類・胴部			RL 横→沈線→刺突	横位ナデ、横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～ 1 ㎜）、礫含む（～ 4㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/3）～黒褐色（10YR3/1）	にぶい橙色（7.5YR6/4）	中実の刺突具
9	32	A-1-1	中央貝層下－ 25 ～－ 45cm	深鉢形Ⅰa/Ⅰa' 類・胴部			RL 横→沈線→刺突	横位ナデ、横位→斜位ミガキ	骨針状物質含む（～ 0.8㎜）、礫僅かに含む（～ 4㎜）、粗砂多含、細砂多含	浅黄橙色（10YR8/4）	浅黄橙色（10YR8/3）	
10	33	A-2-1/A-2-1 拡張区	最下層 / 第 1 貝層と第 2 貝層の中間	深鉢形Ⅰアb 類・口縁	26.0	(14.0)	LR 横→口縁段作出	横位ナデ・横位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	口縁一部橙色（5YR6/6）、にぶい褐色（7.5YR5/3）、黒褐色（10YR2/1）	橙色（5YR6/6）、黒褐色（10YR3/1）	原体末端痕
10	34	A-1-1	貝層下－ 25 ～－ 45cm	深鉢形Ⅰアb 類・口縁			RL 横→口縁段作出	横位ナデ・横位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	黄灰色（2.5Y4/1）	にぶい黄橙色（10YR7/4）、黄灰色（2.5Y4/1）	口縁部横位ミガキ
10	35	A-2-1 拡張区	第 1 層と第 2 貝層の中間	深鉢形Ⅰアb 類・口縁			縄紋か→口縁段作出	横位ナデ・横位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	黒褐色（10YR3/1）	上端橙色（7.5YR7/6）、暗灰色（N3/0）	口縁部横位ミガキ
10	36	A-2-1	最下層	深鉢形Ⅰアb 類・口縁				横位ナデ・横位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	黒褐色（10YR3/1）	褐灰色（10YR4/1）	口縁部横位ミガキ
10	37	A-2-1/A-2-1 拡張区	貝層下半－ 50 ～－ 80cm・貝層及び上層 / －	深鉢形Ⅰbⅱ類・口縁	27.0	(26.0)	LR 横→口縁段作出	上部：横位ナデ・横位ミガキ、下部：縦位ナデ・縦位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（1㎜）、礫僅かに含む（4 ～ 8㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/3）、黒色（10YR2/1）	にぶい黄橙色（10YR6/3）、橙色（5YR6/6）、下半黒色（10YR2/1）	口縁部横位ミガキ
10	38	A-2-1 拡張区 /-	第 1 貝層と第 2 貝層の中間 / 第 1 貝層	深鉢形Ⅰbⅱ類・口縁	24.0	(14.0)	RL 横→口縁段作出	横位ナデ・横位ミガキ（弱く粗い）	礫僅かに含む（2 ～ 4㎜）、粗砂多含、細砂多含	明褐色（7.5YR5/6）、黒褐色（10YR3/1）	橙色（5YR6/6）、一部にぶい黄橙色（10YR7/4）、黒色（N2/0）	口縁部横位ミガキ
10	39	A-2-1	貝層下半－ 50 ～－ 80cm	深鉢形Ⅰbⅱ類・口縁	23.0	(13.0)	RL 横～斜→口縁段作出	上部：横位ナデ・横位ミガキ、下部：縦位ナデ・縦位ミガキ	礫僅かに含む（1㎜）、粗砂多含、細砂多含	黒色（2.5YR）	黒褐色（10YR3/1）	口縁部横位ミガキ
10	40	A-1-1		深鉢形Ⅰbⅱ類・口縁	16.0	(10.4)	RL 横～斜→口縁段作出	上部：横位ナデ・ミガキ、下部：縦位ナデ・ミガキ	骨針状物質僅かに含む（1㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/3）、褐灰色（10YR4/1）	にぶい黄橙色（10YR7/3）	口縁部横位ミガキ

図	No.	出土地点 地　区	層　　位	器種・部位	口径 〔底径〕	器高 （残存高）	外　　面	内　　面	胎　　土	外面色調	内面色調	備　　考
10	41	A-1 ～２？	貝層の左の部分	深鉢形Ⅰｂⅱ類・口縁	12.0	(6.7)	LR 横→口縁段作出	上部：横位ナデ・横位ミガキ、下部：縦位ナデ・縦位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～１㎜）、礫僅かに含む（２～3㎜）	橙色（7.5YR7/6）、黒褐色（10YR3/1）	上端橙色（7.5YR6/6）、中部黒褐色（10YR3/1）、下部灰黄褐色（10YR6/2）	口縁部横位ミガキ
10	42	A-1 ～２？	貝層の左の部分	深鉢形Ⅰｂⅱ類・口縁			RL 横→口縁段作出	横位ナデ・横位ミガキ（不明瞭）	骨針状物質含む（～２㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/3）	上端にぶい黄橙色（10YR6/3）、暗灰色（N3/0）	口縁部横位ミガキ
10	43	A-2-1 拡張区	第１層と第２貝層の中間	深鉢形Ⅰｂⅱ類・口縁			縄紋？→口縁段作出	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～１㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/3）、橙色（5YR6/6）	褐灰色（10YR4/1）	口縁部横位～右下がりミガキ
10	44	A-2-1 拡張区	第１層と第２貝層の中間	深鉢形Ⅰｂⅱ類・口縁			口縁段作出	上部：横位ナデ・横位ミガキ（細かく密）→下部：縦位ナデ・右下がりミガキ（幅 3㎜程度）	骨針状物質僅かに含む（～１㎜）、粗砂多含、細砂多含	黒褐色（2.5Y3/1）	橙色（5YR6/6）	口縁部横位～左下がりミガキ
10	45	A-2-1 拡張区	第１貝層	深鉢形Ⅰｂ´ⅰ類・口縁	24.0	(11.9)	LR 横→口縁段作出→口縁 LR 横	最上部：横位ナデ・横位ミガキ、上部：横位ナデ・右下がりミガキ、下部：縦位ナデ・縦位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（1㎜）、粗砂多含、細砂多含	浅黄橙色（10YR8/3）、灰黄褐色（10YR5/2）	浅黄橙色（10YR8/4）、褐灰色（10YR4/1）	
10	46	A-1 ～２？	貝層の左の部分	深鉢形Ⅰｂ´ⅰ類・口縁			縄紋か→口縁段作出→口縁 RL 横	横位ナデ・横位ミガキ	礫僅かに含む（２～４㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄褐色（10YR5/3）	にぶい黄褐色（10YR5/3）	
10	47	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形Ⅰｂ´ⅰ類・口縁			RL 斜→口縁段作出→口縁 RL 横	横位ナデ・縦位ミガキ（不明瞭）	骨針状物質僅かに含む（～１㎜）、粗砂多含、細砂多含	灰黄褐色（10YR6/2）	灰黄色（2.5Y7/2）	混和物多く器面はざらつく
10	48	A-1-1	中央貝層下－ 25 ～－ 45㎝	深鉢形Ⅰｂ´ⅱ類・口縁	30.0	(10.0)	RL 横→口縁段作出→口縁 RL 横	上部：横位ナデ・横位ミガキ、下部:左下がりナデ・左下がりミガキ	粗砂多含、細砂多含	灰黄褐色（10YR5/2）	橙色（5YR6/6）	
10	49	-	第１貝層	深鉢形Ⅰｂ´ⅱ類・口縁	28.0	(9.9)	RL 横→口縁段作出	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（2㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/2）、褐灰色（10YR4/1）	にぶい黄橙色（10YR7/3）、黒色（N2/0）、上端黒色（10YR2/1）	
10	50	A-2-1 拡張区	第１貝層と第２貝層の中間	深鉢形Ⅰｂ´ⅱ類・口縁			LR 横→口縁段作出→口縁 LR 横	横位ナデ・横位ミガキ	礫僅かに含む（4㎜）、粗砂多含、細砂多含	黒褐色（10YR3/1）	にぶい黄橙色（10YR6/4）、黒褐色（2.5Y3/1）	
10	51	A-2-1	貝層下半－ 50 ～－ 80㎝	深鉢形Ⅰｂ´ⅱ類・口縁			LR 横→口縁段作出→口縁 LR 横	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～１㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）	にぶい黄橙色（10YR6/3）	
10	52	A-1 ～２？	貝層の左の部分	深鉢形Ⅰｂ´ⅱ類・口縁			LR 横→口縁段作出→口縁 LR 横	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質（～１㎜）、礫（1㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	混和物多く内面はざらつく
11	53	A-2-1	貝層及び上層 / 最下層	深鉢形Ⅰアｃ類・口縁	18.0	(6.8)	LR 横	上部：横位ナデ・横位ミガキ、下部：縦位ナデ・縦位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～１㎜）、礫僅かに含む（3㎜）、粗砂多含、細砂多含	口縁一部橙色（5YR7/6）、灰褐色（10YR4/1）	橙色（5YR6/6）、黒褐色（10YR3/1）	縄施紋法（右から左への回転を順次下から上へ）
11	54	A-1 ～２？	貝層の左の部分	深鉢形Ⅰアｃ類・口縁	17.0	(7.5)	LR 横	横位ナデ・横位ミガキ（鋭く密）	骨針状物質僅かに含む（～１㎜）、粗砂多含、細砂多含	黒褐色（10YR3/1）	灰黄褐色（10YR6/2）、暗灰色（N3/0）	
11	55	A-2-1 拡張区	第１貝層と第２貝層の中間	深鉢形Ⅰアｃ類・口縁			LR 横	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～１㎜）、粗砂多含、細砂多含	褐灰色（10YR4/1）	にぶい黄橙色（10YR7/3）	
11	56	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形Ⅰアｃ類・口縁			LR 横	横位ナデ・横位ミガキ、下部：一部縦位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～１㎜）、礫僅かに含む（2.2㎜）、粗砂多含、細砂多含	上部浅黄橙色（10YR8/4）、暗灰色（N3/0）	橙色（5YR7/6）～左半浅黄橙色（10YR8/4）	
11	57	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形Ⅰアｃ類・口縁			RL 横	上部：横位ナデ・横位ミガキ（不明瞭）	礫極僅かに含む（3㎜）、粗砂多含、細砂多含	黒褐色（10YR3/1）	暗灰色（N3/0）	縄紋施紋後口唇部平坦にした痕
11	58	A-2-1	最下層	深鉢形Ⅰアｃ類・口縁			LR 横	横位ナデ・右下がりミガキ	骨針状物質僅かに含む（～１㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）	暗灰色（N3/0）	
11	59	A-1-1	中央貝層下－ 25 ～－ 45㎝	深鉢形Ⅰアｃ類・口縁			LR 横	横位ナデ・横位ミガキ（弱く粗い）	骨針状物質僅かに含む（～１㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/3）、左半黒褐色（10YR3/1）	にぶい橙色（7.5YR7/4）、上半暗灰色（N3/0）	口唇部平坦にした痕
11	60	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形Ⅰアｃ類・口縁			RL 横	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～１㎜）、礫僅かに含む（２～3㎜）、粗砂多含、細砂多含	橙色（5YR7/6）	にぶい黄橙色（10YR7/3）	
11	61	A-2-2	貝層なし	深鉢形Ⅰアｃ類・口縁			RL 横	不明	骨針状物質僅かに含む（～１㎜）、礫僅かに含む（3㎜）、粗砂多含、細砂多含	橙色（7.5YR6/6）	にぶい黄橙色（10YR6/3）	縄紋施紋後口唇部平坦にした痕
11	62	A-1 ～２？	貝層の左の部分	深鉢形Ⅰアｃ類・口縁			LR 横	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～0.5㎜）、礫僅かに含む（2.5㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい橙色（7.5YR7/4）	橙色（7.5YR7/6）	混和物多く器面はざらつく
11	63	A-2-2	貝層なし	深鉢形Ⅰアｃ類・口縁			LR 横	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質極僅かに含む（～１㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/3）	橙色（7.5YR7/6）	擬似口縁の可能性

図	No.	出土地点 地　区	層　　位	器種・部位	口径 〔底径〕	器高 （残存高）	外　　面	内　　面	胎　　土	外面色調	内面色調	備　　考
11	64	A-2-1	最下層	深鉢形Ⅰア c 類・口縁			LR 横	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、礫僅かに含む（2.5㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）	橙色（5YR7/6）	混和物多く内面はざらつく
11	65	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形Ⅰア c 類・口縁			LR 横	不明	粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/2）	灰白色（10YR8/2）	縄紋施紋後口唇部平坦にした痕
11	66	A-1 ～２？	貝層の左の部分	深鉢形Ⅰア c 類・口縁			RL 横	縦位ナデ・縦位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、粗砂多含、細砂多含	黄灰色（2.5Y4/1）	灰黄褐色（10YR6/2）	
11	67	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形Ⅰイ c 類・口縁	31.0	(16.6)	LR 横	上部：横位ナデ・横位ミガキ（良好）→下部：縦位ナデ･縦位ミガキ（良好）	骨針状物質極僅かに含む（～1㎜）、礫極僅かに含む（2～3㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/4）～赤褐色（5YR4/6）、褐灰色（10YR4/1）	明赤褐色（2.5YR5/8）、下端暗赤褐色（5YR3/4）	内面光沢あり
11	68	A-2-2	貝層なし	深鉢形Ⅰイ c 類・口縁	24.0	(26.1)	上部：LR 縦、下部：LR 横	横位ナデ・右下がりミガキ	骨針状物質含む（～1㎜）、粗砂多含、細砂多含	口縁部や下半にぶい黄橙色（10YR7/4）、黒色（10YR2/1）	にぶい黄橙色（10YR6/3）	外面に一度縄施紋後に上に輪積みした痕、縄施紋法（上部：上から下への回転を、順次左から右へ、下部：右から左への回転を順次下から上へ）
11	69	A-2-1 東拡張区 /A 東南隅	第２貝層下土層 / 暗褐色土層包含最下	深鉢形Ⅰイ c 類・口縁	23.0	(10.6)	L 横	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質含む（～1㎜）、粗砂多含、細砂多含	口縁一部にぶい黄橙色（10YR7/4）、灰黄褐色（10YR5/2）、黒色（10YR2/1）	灰黄褐色（10YR6/2）	
11	70	-	第１貝層	深鉢形Ⅰイ c 類・口縁	18.0	(9.7)	LR０段多条Ⅲ（または LRL０段多条 rrr か）横	横位ナデ・横位ミガキ、指で上から押さえつけた痕	骨針状物質極僅かに含む（～1㎜）、礫僅かに含む（4㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄褐色（10YR5/3）、黒褐色（10YR3/1）	にぶい黄褐色（10YR5/3）、黒褐色（10YR3/1）	外面に粘土紐を上から下へ押さえつけた痕が整えられず残る、作りが粗く口唇平坦でない
11	71	A-2-1	表土	深鉢形Ⅰイ c 類・口縁	21.0	(9.3)	RL 横	横位ナデ・横位ミガキ（不明瞭）	骨針状物質僅かに含む（～2㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄褐色（10YR5/3）、黒褐色（10YR3/1）	灰黄褐色（10YR5/2）	
11	72	A-1 ～２？	貝層の左の部分	深鉢形Ⅰイ c 類・口縁	14.0	(8.1)	LR 横	縦位ナデ・右下がりミガキ（不明瞭）	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、礫僅かに含む（3㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/4）、黒褐色（10YR3/1）	にぶい黄橙色（10YR6/4）	
11	73	A-2-1	最下層	深鉢形Ⅰイ c 類・口縁	１１.０ 〔5.0〕	13.8	LR 横	上部：横位ナデ・横位ミガキ、下部：縦位ナデ・縦位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	口縁部にぶい黄橙色（10YR7/3）、黒色（N2/0）	にぶい黄橙色（10YR7/3）、黒色（N2/0）	
11	74	A-2-1 拡張区	第１貝層と第２貝層の中間	深鉢形Ⅰイ c 類・口縁	8.0	(4.1)	RL 横	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、礫僅かに含む（2.2㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/4）～明赤褐色（5YR6/8）	にぶい黄褐色（10YR5/3）	外面に粘土紐を上から下へ押さえつけた痕が一部残る
11	75	A-2-1	最下層	深鉢形Ⅰイ c 類・口縁			RL 横	横位ナデ・右下がりミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、礫僅かに含む（4㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）、黒褐色（10YR3/1）	にぶい黄橙色（10YR6/4）～灰黄褐色（10YR4/2）	
11	76	A-2-1	最下層	深鉢形Ⅰイ c 類・口縁			RL 横	横位ナデ・右下がりミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、礫僅かに含む（4㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）、黒褐色（10YR3/1）	にぶい黄橙色（10YR6/4）～灰黄褐色（10YR4/2）	
11	77	A-2-1	最下層	深鉢形Ⅰイ c 類・口縁			RL 横	横位ナデ・右下がりミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、礫僅かに含む（4㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）、黒褐色（10YR3/1）	にぶい黄橙色（10YR6/4）～灰黄褐色（10YR4/2）	
11	78	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形Ⅰイ c 類・口縁			RL 横	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、礫僅かに含む（3～4㎜）、粗砂多含、細砂多含	橙色（7.5YR7/6）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	
11	79	A-1-1		深鉢形Ⅰイ c 類・口縁			LR 縦	横位ナデ→縦位ミガキ	骨針状物質含む（～1㎜）、礫僅かに含む（2～4㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい橙色（7.5YR7/4）	にぶい黄橙色（10YR7/4）、橙色（5YR6/6）	器面が乾いていない段階で縄施紋、内面光沢あり
11	80	A-2-1 拡張区	第１貝層と第２貝層の中間	深鉢形Ⅰイ c 類・口縁			LR 横	横位ナデ・横位ミガキ、一部縦位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、礫僅かに含む（7㎜）、粗砂多含、細砂多含	浅黄橙色（10YR8/4）、上端灰色（N4/0）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	
11	81	A-2-1	最下層	深鉢形Ⅰイ c 類・口縁			LR 横	横位ナデ・横位ミガキ（3㎜）	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、礫僅かに含む（2～3㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）、灰黄褐色（10YR5/2）	灰色（4/0）	内面ナデ・ミガキ→口唇平坦
11	82	A-2-1 拡張区	第１貝層	深鉢形Ⅰイ c 類・口縁			LR 横	縦位ナデ・左下がりミガキ	骨針状物質極僅かに含む（～1㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）	灰黄褐色（10YR6/2）、黒褐色（10YR3/1）	

図	No.	出土地点 地　区	層　　位	器種・部位	口径 〔底径〕	器高 （残存高）	外　　面	内　　面	胎　　土	外面色調	内面色調	備　　考
11	83	A-2-2	貝層なし	深鉢形Ⅰイc類・口縁			LR横	左下がりナデ・左下がりミガキ	骨針状物質僅かに含む（～0.5㎜）、粗砂多含、細砂多含	浅黄橙色（10YR8/4）	浅黄橙色（10YR8/3）、下半灰色（N4/0）	
11	84	A-1-1		深鉢形Ⅰイc類・口縁			RL横	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、礫僅かに含む（3㎜）、粗砂多含、細砂多含	橙色（5YR7/6）	橙色（5YR6/6）	
11	85	A-2-1拡張区	第1貝層	深鉢形Ⅰイc類・口縁			LR横	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、礫僅かに含む（2～3㎜）、粗砂多含、細砂多含	黒褐色（2.5Y3/1）	にぶい黄橙色（10YR6/3）、暗灰色（N3/0）	
11	86	A-2-2	貝層なし	深鉢形Ⅰイc類・口縁			LR横	横位ナデ・右下がりミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、礫僅かに含む（2～2.5㎜）、粗砂多含、細砂多含	橙色（5YR7/6）	浅黄橙色（7.5YR8/6）	
11	87	A-2-1拡張区	第1貝層と第2貝層の中間	深鉢形Ⅰイc類・口縁			LR横	横位ナデ・左下がりミガキ	粗砂多含、細砂多含	右下灰黄褐色（10YR4/2）、暗灰色（N3/0）	暗灰（N3/0）	
11	88	A-2-1拡張区	第1貝層	深鉢形Ⅰイc類・口縁			LR横	縦位ナデ・縦位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、粗砂多含、細砂多含	黒色（5Y2/1）	灰黄褐色（10YR5/2）	内面に輪積痕明瞭
11	89	A-2-2	貝層なし	深鉢形Ⅰイc類・口縁			LR横	上部：横位ナデ・横位ミガキ、下部：縦位ナデ・縦位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、粗砂多含、細砂多含	上端にぶい褐色（7.5YR6/3）、褐灰色（7.5YR4/1）	にぶい橙色（7.5YR7/4）	
11	90	A-2-1拡張区	第1貝層と第2貝層の中間	深鉢形Ⅰイc類・口縁			LR横	縦位ナデ・縦位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～2㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい褐色（7.5YR5/4）	にぶい褐色（7.5YR5/4）	
11	91	A-2-1拡張区	第1貝層	深鉢形Ⅰイc類・口縁			LR横	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質含む（～1㎜）、粗砂多含、細砂多含	橙色（5YR7/6）	橙色（5YR6/6）	
11	92	A-2-2	貝層なし	深鉢形Ⅰイc類・口縁			RL斜	上部：横位ミガキ、横位ナデ下部：左下がりミガキか	骨針状物質僅かに含む（～1.㎜）、礫含む（2～4㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい橙色（7.5YR7/4）	橙色（7.5YR7/6）	器面は粗い、混和物多く内面はざらつく
11	93	A-2-1	貝層下半－50～－80㎝	深鉢形Ⅰイc類・口縁			LR横	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、礫僅かに含む（3～5㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい橙色（7.5YR7/4）	にぶい黄橙色（10YR6/3）	外面下端に焼成前の爪か、の痕跡
11	94	A-1-1		深鉢形Ⅰイc類・口縁			RL横	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、礫僅かに含む（2～4㎜）、粗砂多含、細砂多含	褐灰色（10YR4/1）	にぶい黄橙色（10YR7/3）	混和物多く内面はざらつく
11	95	A-1～2？	貝層の左の部分	深鉢形Ⅰイc類・口縁			LR横	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい橙色（7.5YR7/4）	橙色（7.5YR7/6）	
11	96	A-2-1拡張区	第1貝層	深鉢形Ⅰイc類・口縁			LR縦	横位ナデ・横位ミガキか	礫僅かに含む（2～4㎜）、粗砂多含、細砂多含	褐灰色（10YR4/1）	浅黄橙色（10YR8/4）	
11	97	A-2-1	貝層下半－50～－80㎝	深鉢形Ⅰイc類・口縁			LR横	ミガキ（良好）	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、粗砂多含、細砂多含	灰黄褐色（10YR5/2）	にぶい橙色（7.5YR6/4）	
11	98	A-1～2？	貝層の左の部分	深鉢形Ⅰイc類・口縁			LR横	縦位ナデ・縦位ミガキか	骨針状物質僅かに含む（～0.5㎜）、礫僅かに含む（3㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい橙色（7.5YR6/4）	褐灰色（10YR5/1）	
11	99	A-2-1拡張区	第1貝層と第2貝層の中間	深鉢形Ⅰイc類・口縁			RL横	横位ナデ・横位ミガキ、縦位ミガキ	礫僅かに含む（2.1㎜）、粗砂多含、細砂多含	灰褐色（7.5YR5/2）	にぶい黄橙色（10YR7/3）	
11	100	A-2-2	貝層なし	深鉢形Ⅰイc類・口縁			LR横	縦位ナデ・縦位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、粗砂多含、細砂多含	灰黄褐色（10YR6/2）	灰色（N4/0）	
11	101	A-2-1	貝層下半－50～－80㎝	深鉢形Ⅰイc類・口縁			LR横	縦位ナデ・縦位ミガキか	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、粗砂多含、細砂多含	橙色（7.5YR7/6）	褐灰色（7.5YR5/1）	
11	102	A-2-2	貝層なし	深鉢形Ⅰイc類・口縁			LR横	最上部：横位ナデ・横位ミガキ→下部：縦位ナデ・縦位ミガキ	骨針状物質含む（～1.1㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/3）	橙色（7.5YR7/6）	
12	103	A-2-1/A-1～2？	表土／貝層の左の部分	深鉢形Ⅰイc'類・口縁	28.0	(23.0)	LR斜→口縁横位ナデ・横位ミガキ	最上部：横位ナデ・横位ミガキ→下部：縦位ナデ・縦位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～2㎜）、礫僅かに含む（5～7㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/4）～橙色（2.5YR6/8）、黒褐色（10YR3/1）	橙色（5YR6/8）、～にぶい黄褐色（10YR5/4）	口唇部平坦にした痕
12	104	A-2-2	貝層なし	深鉢形Ⅰイc'類・口縁	16.0	(4.9)	RL横→口縁横位ナデ・横位ミガキ	横位ナデ・横位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	暗灰色（N3/0）	黒褐色（10YR3/2）～黒褐色（10YR3/1）	
12	105	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形Ⅰイc'類・口縁			LR横→口縁横位ナデ・横位ミガキ	上部：横位ナデ・縦位ミガキ（細かく密）、下部縦位ナデ・縦位ミガキ（細かく密）→右さがりミガキ（幅4㎜程度）	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、粗砂多含、細砂多含	浅黄橙色（10YR8/3）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	焼成良好、縄施紋→口縁部横位に磨消

図	No.	出土地点 地　区	層　　位	器種・部位	口径 〔底径〕	器高 （残存高）	外　　面	内　　面	胎　　土	外面色調	内面色調	備　　考
12	106	A-2-2	貝層なし	深鉢形Ⅰイc' 類・口縁			RL 横→口縁横位ナデ・横位ミガキ	上部：横位ナデ・横位ミガキ、下部：右下がりミガキ	粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/3）、灰黄褐色（10YR5/2）	にぶい黄橙色（10YR6/3）	焼成良好、縄施紋→口縁部横位に磨消
12	107	A-2-1	第１貝層と第２貝層の中間	深鉢形Ⅰイc' 類・口縁			LR 横→口縁横位ナデ	上部：横位ナデ・横位ミガキ→下部：縦位ナデ・縦位ミガキ	骨針状物質極僅かに含む（～0.5㎜）、礫僅かに含む（2～5㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/3）	灰黄褐色（10YR6/2）	
12	108	A-2-2	貝層なし	深鉢形Ⅰイc' 類・口縁			縄紋か→口縁横位ナデ・横位ミガキ	ナデ・ミガキ不明瞭	骨針状物質僅かに含む（～0.8㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/3）～下部褐灰色（10YR4/1）	上部褐灰色（10YR4/1）、下部灰黄褐色（10YR6/2）	
12	109	A-2-1 拡張区/A-2-1	第１貝層と第２貝層の中間/貝層下半－50～－80cm	深鉢形Ⅰb/Ⅰb'/Ⅰc/Ⅰc' 類・胴部			RL 横	横位ナデ、横位ミガキ、口縁部付近縦位ミガキ	骨針状物質含む（～1.2㎜）、礫含む（～3㎜）、粗砂多含、細砂多含	上半黒褐色（10YR3/1）、下半にぶい黄橙色（10YR7/3）	外面と対応して上半浅黄橙色（10YR8/3）、下半黒色（10YR2/1）	胴部形成途中に縄紋、その上に輪積痕がかぶる部分あり
12	110	A-2-1 拡張区	第１貝層と第２貝層の中間	深鉢形Ⅰb/Ⅰb'/Ⅰc/Ⅰc' 類・胴部			LR 横～斜、原体端部痕	横位ナデ、縦位ミガキ、横位ミガキ	礫僅かに含む（4㎜）、粗砂多含、細砂多含	橙色（5YR6/6）	灰褐色（7.5YR6/2）、右半は黒色（7.5YR2/1）	
12	111	A 東南隅	暗褐色土層包含最下層	深鉢形Ⅰアd 類・口縁			RL 縦→沈線	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～0.9㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/3）	にぶい黄橙色（10YR7/3）	縦位沈線施文後上部を弧状に閉じる
12	112	A-2-1	貝層下半－50～－80cm	深鉢形Ⅰイd 類・口縁			RL 横→沈線	横位ナデ・横位ミガキ	礫僅かに含む(4mm)、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/4）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	口唇部平坦に作出
12	113	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形Ⅰイd 類・口縁			LR 横→沈線	横位ナデ、右下がりミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1.2㎜）粗砂多含、細砂多含	橙色（7.5YR6/6）	橙色（7.5YR7/6）～左下にぶい黄橙色（10YR7/4）	左端に垂下沈線、中央から下端へ右下がりの並行沈線
13	114	A-2-1 拡張区/A-2-1 拡張区	第１貝層と第２貝層の中間/－	深鉢形Ⅱ類・口縁	23.0	(17.5)	上部：横位ナデ・横位ミガキ、橋状把手貼付→沈線、橋状把手以下：RL 横	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）、無紋部下半暗灰色（N3/0）、赤彩部赤色（10R5/8）	灰黄褐色（10YR5/2）～褐灰色（10YR4/1）	赤彩、内面に輪積痕
13	115	A-2-1 拡張区	第１貝層と第２貝層の中間・第１貝層	深鉢形Ⅱ類・口縁	18.0	(12.2)	上部：横位ナデ・横位ミガキ、下部：RL 横→沈線・円形突起貼付	横位ナデ・横位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/3）、黒色（10YR1.7/1）	橙色（7.5YR7/6）、左端暗灰色（N3/0）	半裁した管状のものにより左から右へ沈線、２度描き部分あり
13	116	-	第１貝層	深鉢形Ⅱ類・口縁	30.0	(13.9)	上部：横位ナデ・横位ミガキ、下部：RL 横→沈線	横位ナデ・横位ミガキ	礫僅かに含む（2～4㎜）、粗砂多含、細砂多含	橙色（7.5YR7/6）、左端暗灰色（N3/0）	上部一部にぶい黄橙色（10YR7/4）、にぶい黄褐色（10YR5/3）、左端黒褐色（10YR3/1）	
13	117	A-1-1	中央貝層下－25～－45cm	深鉢形Ⅱ類・口縁	11.0	(6.0)	上部：横位ナデ・横位ミガキ、中央：LR 原体圧痕、下部：LR 横	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～0.5㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/3）	橙色（7.5YR7/6）	
13	118	A-2-1 拡張区	第１貝層	深鉢形Ⅱ類・口縁	11.0	(5.4)	横位ナデ・横位ミガキ（良好）、中央：隆線	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、礫僅かに含む（3㎜）、粗砂多含、細砂多含	暗灰色（N3/0）	上半褐灰色（7.5YR4/1）、下半一部橙色（7.5YR7/6）	内外面共に光沢あり
13	119	A-2-2	貝層なし	深鉢形Ⅱ類・口縁			横位ナデ・横位ミガキ	横位ナデ、縦位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	上端などにぶい黄橙色（10YR6/3）～下部暗灰色（N3/0）	にぶい黄橙色（10YR6/3）	
13	120	A-1-1	中央貝層下－25～－45cm	深鉢形Ⅱ類・口縁			横位ナデ・横位ミガキ	横位ナデ・横位ミガキ（良好）	礫僅かに含む（～4㎜）、粗砂多含、細砂多含	明赤褐色（2.5YR5/6）	橙色（5YR6/6）	
13	121	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形Ⅱ類・口縁			横位ナデ・横位ミガキ	横位ナデ、左下がりミガキ	骨針状物質僅かに含む（～0.8㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい橙色（7.5YR6/4）～褐灰色（7.5YR4/1）	にぶい黄橙（10YR7/3）	口縁端部平坦に作出
13	122	A-1～2？	貝層の左の部分	深鉢形Ⅱ類・口縁			横位ナデ・横位ミガキ（良好）	横位ナデ・横位ミガキ（良好）	骨針状物質僅かに含む（～0.8㎜）、礫僅かに含む（～5㎜）、粗砂多含、細砂多含	左半橙色（5YR6/6）、右半にぶい黄橙色（10YR6/3）～褐灰色（10YR4/1）	上部橙色（5YR6/6）、下部黒褐色（5YR3/1）	
13	123	A-1-1	中央貝層下－25～－45cm	深鉢形Ⅱ類・口縁			横位ナデ・横位～右下がりミガキ	横位ナデ、縦位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～0.9㎜）、礫極僅かに含む（2.3㎜）、粗砂多含、細砂多含	橙色（7.5YR6/6）～下部黄灰色（2.5YR5/1）	橙色（7.5YR7/6）	焼成良好
13	124	A-2-1 拡張区	第１貝層と第２貝層の中間	深鉢形Ⅱ類・口縁			横位ナデ・横位、縦位ミガキ	不明	骨針状物質僅かに含む（～0.5㎜）、礫僅かに含む（3㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）	にぶい黄橙色（10YR7/3）	器面は粗い、混和物多くとくに内面はざらつく、内面に輪積痕明瞭
13	125	A-1～2？	貝層の左の部分	深鉢形Ⅱ類・口縁			横位条線	横位ナデ・横位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	橙色（5YR7/6）～下部黄灰色（2.5Y4/1）	黄灰色（2.5Y4/1）	ミガキ深い（～1㎜）
13	126	A-2-1	最下層	深鉢形Ⅱ類・口縁			横位ナデ・横位ミガキ	横位ナデ、右下がりミガキ	骨針状物質含む（～1.2㎜）、粗砂多含、細砂多含	灰黄橙色（10YR6/2）	にぶい黄橙色（10YR7/3）	
13	127	A-2-1 拡張区	第１貝層	深鉢形Ⅱ類・口縁			横位ナデ・横位ミガキ	横位ナデ・横位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	混和物多くとくに内面はややざらつく

図	No.	出土地点 地　区	層　　位	器種・部位	口径 〔底径〕	器高 （残存高）	外　　面	内　　面	胎　　土	外面色調	内面色調	備　　考
13	128	A-2-1	最下層	深鉢形Ⅱ類・口縁			横位ナデ・横位ミガキ	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～0.2㎜）、礫極僅かに含む（3㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）	上端浅黄橙色（10YR8/3）、（5YR6/6）	
13	129	A-2-1 拡張区	第１貝層	深鉢形Ⅱ類・口縁			未穿孔か・横位ナデ・横位ミガキ	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、粗砂多含、細砂多含	灰黄褐色（10YR4/2）	にぶい黄褐色（10YR5/3）	
13	130	A-2-1 拡張区	第１貝層と第２貝層の中間	深鉢形Ⅱ類・口縁			横位ナデ・横位ミガキ	不明	粗砂多含、細砂多含	灰黄褐色（10YR5/2）	にぶい黄橙色（10YR7/3）	混和物多く内面はややざらつく
13	131	A-2-1 拡張区	第１貝層と第２貝層の中間	深鉢形Ⅱ類・口縁			横位ナデ・横位ミガキ	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質含む（～1.2㎜）、礫極僅かに含む（2.1㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/3）	灰黄褐色（10YR5/2）	
13	132	A-2-1 拡張区	第１貝層と第２貝層の中間	深鉢形Ⅱ類・口縁			横位ナデ・横位、縦位ミガキ	横位ナデ、縦位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～0.5㎜）、粗砂多含、細砂多含	黒褐色（10YR3/1）	黒褐色（10YR3/1）	
13	133	A-2-1	表土	深鉢形Ⅱ類・口縁			横位ナデ・横位ミガキ	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～0.8㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙（10YR6/3）	にぶい黄褐色（10YR5/3）	
13	134	A-2-1 拡張区	第１貝層	深鉢形Ⅱ類・口縁			横位ナデ・横位ミガキ	横位ナデ・横位ミガキ	骨針状物質僅かに含む（～0.2㎜）、礫極僅かに含む（4㎜）、粗砂多含、細砂多含	黒褐色（10YR3/1）	灰黄褐色（10YR4/2）	
13	135	A-1 ～２？	貝層の左の部分	深鉢形Ⅱ類・口縁			円形突起貼付・横位横位ナデ・横位ミガキ	横位ナデ・横位ミガキ	礫極僅かに含む（3㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）	橙色（7.5YR7/6）	
13	136	A-1-1	中央貝層下－25～－45㎝	深鉢形Ⅱ類・胴部			RL 横→沈線、刺突	横位ナデ、縦位ミガキ	礫僅かに含む（5㎜）、粗砂多含、細砂多含	褐灰色（10YR4/1）	にぶい黄橙色（10YR6/4）、黒褐色（10YR3/1）	
13	137	-	第１貝層	深鉢形Ⅱ類・胴部			RL 横→沈線	横位ナデ、横位ミガキ良好	骨針状物質含む（～1.5㎜）、粗砂多含、細砂多含	橙色（7.5YR7/6）、まだらに黒褐色（7.5YR3/1）	橙色（7.5YR6/6）、バンド状に黒褐色（7.5YR3/1）	
13	138	A-2-1/B-1-2	貝層下半－50～－80㎝／－20～－40㎝	深鉢形Ⅱ類・胴部			RL 横→沈線、刺突	横位ナデ、横位ミガキ	骨針状物質多含（～1㎜）、粗砂多含、細砂多含	上部にぶい黄橙色（10YR6/3）、黒褐色（10YR3/1）	黒褐色（10YR3/1）	
13	139	A-2-1 拡張区	－	深鉢形Ⅱ類・胴部			RL 横→沈線	横位ナデ、横位ミガキ良好	骨針状物質僅かに含む（～1㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい橙色（7.5YR6/4）、下部黒褐色（7.5YR3/1）	黒色（10YR2/1）	
13	140	A-2-1 拡張区	貝層下半－50～－80㎝	深鉢形Ⅱ類・胴部			横位ナデ、横位ミガキ（良好）、LR 横→沈線→横位刺突列	横位ナデ、横位ミガキ良好	粗砂多含、細砂多含	橙色（5YR6/6）～灰黄褐色（10YR5/2）	橙（5YR6/6）～灰黄褐色（10YR5/2）	
13	141	A-2-1	最下層	深鉢形Ⅱ類・胴部			横位ナデ、横位ミガキ（良好）、横位刺突列	横位ナデ、横位ミガキ良好	粗砂多含、細砂多含	にぶい褐色（7.5YR5/3）	灰褐色（7.5YR4/2）	右方向に刺突具倒す
13	142	A-1 ～２？	貝層の左の部分	深鉢形Ⅱ類・胴部			RL 斜→刺突列	横位ナデ	骨針状物質多含（～1.5㎜）、粗砂多含、細砂多含	褐灰色（10YR4/1）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	
13	143	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形Ⅱ類・胴部			LR 横か→沈線→横位刺突列→円形貼付	横位ナデ、横位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	褐灰色（10YR4/1）	褐灰色（10YR4/1）	中空の刺突具、円形貼付内刺突
14	144	A-1-1		深鉢形・底部	〔12.0〕		RL 横、底面網代痕		礫極僅かに含む（3㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい赤褐色（5YR5/4）～橙色（5YR7/6）／底面にぶい橙色（5YR6/4）、外周に沿って 5mm 内側に暗灰色（N3/0）	橙色（7.5YR7/6）	
14	145	A 東南隅	暗褐色土層包含最下層	深鉢形・底部	〔11.0〕		RL 横、底面網代痕		骨針状物質僅かに含む（～1mm）、礫含む（2～3mm）、粗砂多含、細砂多含	黄橙色（7.5YR7/8）～灰白色（7.5YR8/2）／底面黄橙色（7.5YR7/8）	橙色（7.5YR6/6）～明褐灰色（7.5YR7/2）	
14	146	A-1-1	中央貝層下－25～－45㎝	深鉢形・底部	〔9.0〕		LR 横、底面網代痕		骨針状物質含む（～2mm）、礫僅かに含む（3mm）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/2）／底面にぶい橙色（7.5YR7/4）～灰褐色（7.5YR5/2）	浅黄橙色（10YR8/4）	
14	147	A-2-2	貝層なし	深鉢形・底部	〔8.0〕		LR 横、底面網代痕		骨針状物質僅かに含む（～1mm）、粗砂多含、細砂多含	橙色（5YR7/6）／底面褐灰色（5YR5/1）	にぶい黄橙色（10YR7/3）、一部灰色（N4/0）	
14	148	A-2-1 拡張区	第１貝層と第２貝層の中間	深鉢形・底部	〔8.0〕		RL 横、底面網代痕		礫極僅かに含む（3mm）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）／底面橙色（7.5YR7/6）	褐灰色（10YR5/1）～にぶい黄橙色（10YR7/3）	
14	149	A-2-1 拡張区	第１貝層と第２貝層の中間	深鉢形・底部	〔5.0〕		LR 横、底面網代痕		骨針状物質僅かに含む（0.3mm）、粗砂多含、細砂多含	橙色（2.5YR6/6）／底面灰色（N4/0）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	

図	No.	出土地点 地　区	層　　位	器種・部位	口径 〔底径〕	器高 （残存高）	外　　面	内　　面	胎　　土	外面色調	内面色調	備　　考
14	150	A-1-1		深鉢形・底部	〔8.0〕		RL 横		礫含む（2 ～ 4㎜）、粗砂多含、細砂多含	橙色（5YR6/6）～にぶい黄橙色（10YR6/3）／底面黒褐色（10YR3/1）～まだらに浅黄橙色（7.5YR8/6）	にぶい黄橙色（10YR6/4）	
14	151	A-2-1 拡張区	―	深鉢形・底部	〔7.0〕		LR 横		骨針状物質僅かに含む（～0.5mm）、礫含む（2 ～ 5mm）、粗砂多含、細砂多含	橙色（2.5YR7/6）、にぶい褐色（7.5YR5/3）／底面橙色（2.5YR6/8）	にぶい黄橙色（10YR7/3）	
14	152	A-2-1 拡張区	第 1 貝層と第 2 貝層の中間	深鉢形・底部	〔7.0〕		LR 横		骨針状物質含む（～ 1mm）、礫含む（2 ～ 6mm）、粗砂多含、細砂多含	橙色（7.5YR7/6）～橙色（5YR7/6）／底面橙色（5YR7/6）～褐灰色（5YR5/1）	橙色（7.5YR7/6）～褐灰色（7.5YR5/1）	
14	153	A-1 ～ 2 ？	貝層の左の部分	深鉢形・底部	〔7.0〕		LR 横		骨針状物質含む（～ 1mm）、礫含む（2 ～ 6mm）、粗砂多含、細砂多含	橙色（5YR6/6）～にぶい黄橙色（10YR7/3）／底面にぶい黄橙色（10YR7/3）	灰黄褐色（10YR6/2）	
14	154	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形・底部	〔4.0〕		LR 横		骨針状物質僅かに含む（～0.5mm）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）／底面（10YR4/1）	にぶい黄橙色（10YR7/3）	
14	155	A-2-1	貝層下半－ 50 ～－ 80㎝	深鉢形・底部	〔4.0〕		LR 横		粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）／底面にぶい黄橙色（10YR7/4）、（10YR4/1）	橙色（5YR6/6）	
14	156	A-1-1	第三焼土層－ 75㎝	深鉢形・底部			LR 横		骨針状物質含む（～ 0.8mm）、礫僅かに含む（2 ～ 3mm）、粗砂多含、細砂多含	上部橙色（2.5YR6/8）、下部灰黄褐色（10YR6/2）／底面灰黄褐色（10YR5/2）	上部暗灰色（N3/0）、下部にぶい黄橙色（10YR7/4）	
14	157	A-1-1	中央貝層下－ 25 ～－ 45㎝	深鉢形・底部			LR 横		礫僅かに含む（3 ～ 4㎜）、粗砂多含、細砂多含	橙色（5YR6/6）	橙色（5YR7/6）	
14	158	A-1-1		深鉢形・底部			LR 横		礫僅かに含む（3㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/4）	上部にぶい黄橙色（10YR6/3）、下部にぶい黄橙色（10YR7/4）	
14	159	A-2-1 拡張区	第 1 貝層と第 2 貝層の中間	深鉢形・底部			LR 横		骨針状物質含む（～ 0.8mm）、粗砂多含、細砂多含	にぶい橙色（7.5YR6/4）、下部褐灰色（N3/0）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	
14	160	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形・底部			RL 横		骨針状物質極僅かに含む（～0.5mm）、礫僅かに含む（3mm）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/3）	にぶい黄橙色（10YR6/3）	
14	161	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形・底部			LR 横		骨針状物質含む（～ 0.8mm）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/3）	橙色（5YR7/6）	
14	162	A-2-1 拡張区	第 1 貝層と第 2 貝層の中間	深鉢形・底部			LR 横		粗砂多含、細砂多含	上部褐灰色（10YR4/1）、下部橙色（5YR7/6）	にぶい黄橙色（10YR7/3）	
14	163	A-2-1 拡張区	第 1 貝層と第 2 貝層の中間	深鉢形・底部			LR 横		骨針状物質僅かに含む（～1.8mm）、礫僅かに含む（4mm）、粗砂多含、細砂多含	橙色（7.5YR7/6）	橙色（5YR6/6）	
14	164	A-2-1	最下層	深鉢形・底部	〔4.5〕		LR 横		骨針状物質含む（～ 1mm）、礫含む（2 ～ 4mm）、粗砂多含、細砂多含	橙色（5YR6/6）～暗灰色（N3/0）／底面橙色（5YR6/6）、中央暗灰色（N3/0）	灰黄褐色（10YR5/2）	
14	165	A 東南隅	暗褐色土層包含最下層	深鉢形・底部	〔4.5〕		RL 横		骨針状物質含む（～ 1mm）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/3）／底面灰色（N4/0）	にぶい黄橙色（10YR6/4）	
14	166	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形・底部	〔5.0〕		-		骨針状物質含む（～ 1mm）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR6/4）／底面にぶい黄橙色（10YR6/4）	灰黄褐色（10YR5/2）、にぶい黄橙色（10YR6/3）	
14	167	A-1-1	中央貝層下－ 25 ～－ 45㎝	深鉢形・底部			-		骨針状物質僅かに含む（～0.7mm）、粗砂多含、細砂多含	橙色（7.5YR6/6）／底面にぶい黄橙色（10YR7/4）	褐灰色（10YR4/1）	
14	168	A-2-1 拡張区	第 1 貝層	深鉢形・底部	〔8.5〕		-		骨針状物質僅かに含む（～0.5mm）、礫僅かに含む（3 ～ 4mm）、粗砂多含、細砂多含	底面にぶい黄橙色（10YR7/4）、褐灰色（10YR4/1）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	
14	169	A-2-1 拡張区	第 1 貝層と第 2 貝層の中間	深鉢形・底部	〔5.0〕		-		骨針状物質僅かに含む（～0.5mm）、粗砂多含、細砂多含	底面灰黄褐色（10YR5/2）	浅黄橙色（10YR8/4）	

図	No.	出土地点 地　区	層　　位	器種・部位	口径 〔底径〕	器高 （残存高）	外　　面	内　　面	胎　　土	外面色調	内面色調	備　　考
14	170	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形・底部	〔4.0〕		-		骨針状物質含む（～0.8mm）、粗砂多含、細砂多含	底面橙色（7.5YR7/6）	にぶい黄橙色（10YR6/4）	
14	171	A-1-1		深鉢形・口縁			LR縦→沈線	ナデ・ミガキ不明瞭	骨針状物質含む（～1㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい橙色（7.5YR7/4）～褐灰色（7.5YR4/1）	浅黄橙色（10YR8/3）～灰黄褐色（10YR5/2）	
14	172	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形・口縁			LR原体押圧、下部：不明・横位ナデ・横位ミガキ	横位ナデ・右下がりミガキ	骨針状物質含む（～0.8㎜）、礫極僅かに含む（2.2mm）、粗砂多含、細砂多含	黒褐色（10YR3/1）、一部にぶい褐色（7.5YR5/4）	灰黄色（2.5Y6/2）	粘土紐接合痕外面無紋部に残る
14	173	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形・口縁			LR原体押圧、下部：不明・横位ナデ	横位ナデ・右下がりミガキ	骨針状物質含む（～0.9㎜）、礫僅かに含む（2～2.9㎜）	橙色（5YR6/6）	左下にぶい黄橙色（10YR7/4）	
14	174	A-1-1	第三焼土層－75㎝	深鉢形・胴部			横位ナデ、横位ミガキ、RL原体圧痕、RL縦	横位ナデ、横位ミガキ	骨針状物質含む（～1㎜）、粗砂多含、細砂多含	灰黄褐色（10YR4/2）	灰黄褐色（10YR6/2）	
14	175	A-2-1拡張区	第1貝層	深鉢形・胴部			LR原体圧痕2条、LR縦	横位ナデ、横位ミガキ、縦位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	にぶい橙色（7.5YR6/4）	にぶい橙色（7.5YR6/4）	
14	176	A-2-1拡張区	第1貝層と第2貝層の中間	深鉢形・胴部			RL横→沈線	横位ナデ、横位ミガキ	骨針状物質多含（～0.8㎜）、粗砂多含、細砂多含	にぶい黄橙色（10YR7/3）	灰黄褐色（10YR5/2）	
14	177	A-2-1	貝層及び上層	深鉢形・胴部			RL横→沈線	横位ナデ、横位ミガキ、縦位ミガキ	骨針状物質含む（～1.2㎜）、礫僅かに含む（3㎜）、粗砂多含、細砂多含	黒褐色（10YR3/1）	黒褐色（10YR3/2）	

注）出土地点・地区：層位が「第一貝層」で出土地点、地区が不明のものは、日誌より、「A-2-1」または「A-2-1拡張区」出土
　　胎　土：「僅かに含む」（1％未満）「含む」（1％以上5％未満）「多含」（5％以上）
　　：「礫」（＞2㎜）「粗砂」（2㎜～0.2㎜）「細砂」（0.2㎜～0.02㎜）

２．青森県八幡堂遺跡出土土器の分析

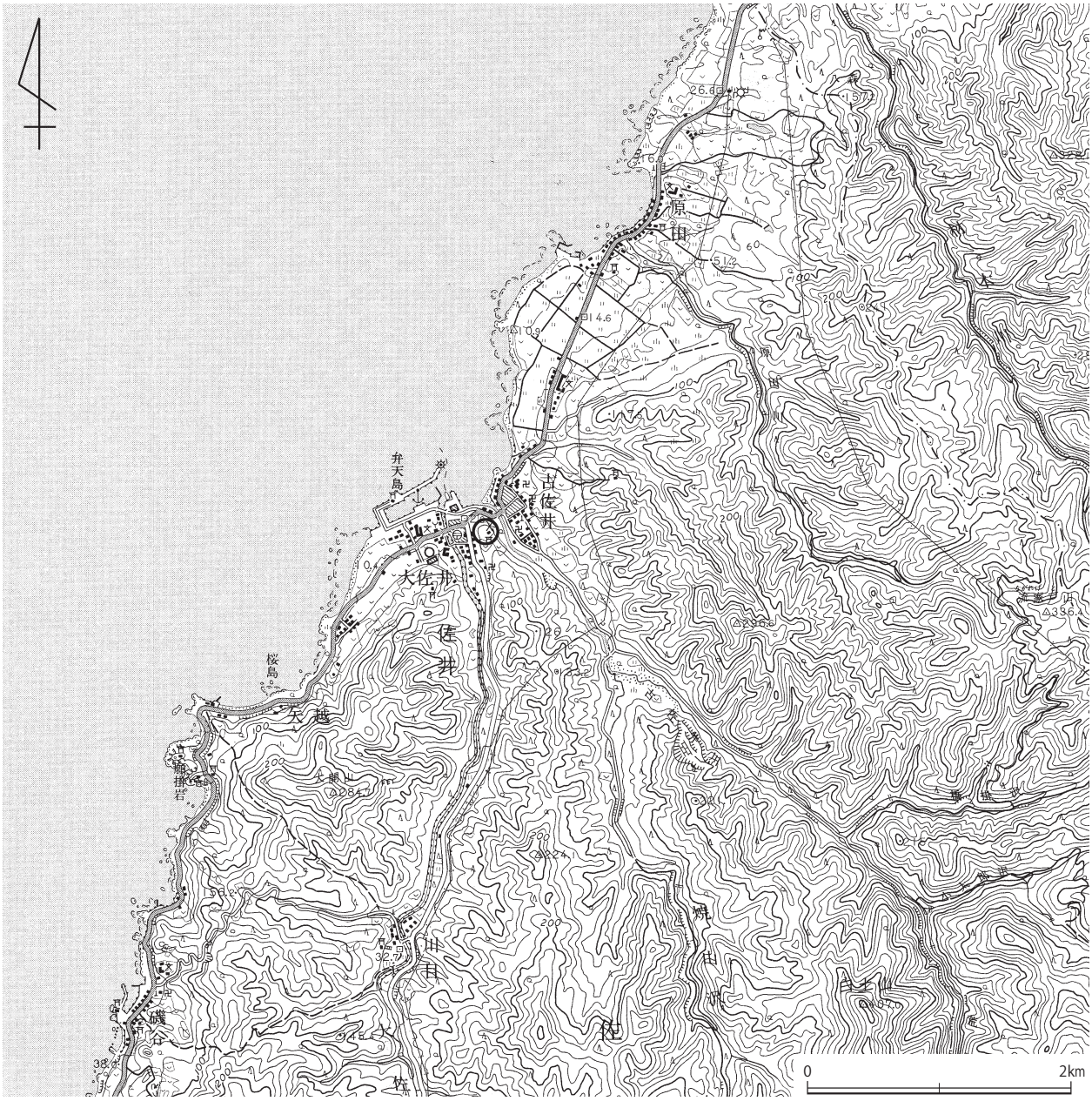
（1）八幡堂遺跡 1968 発掘調査の概要

ａ．遺跡の概要

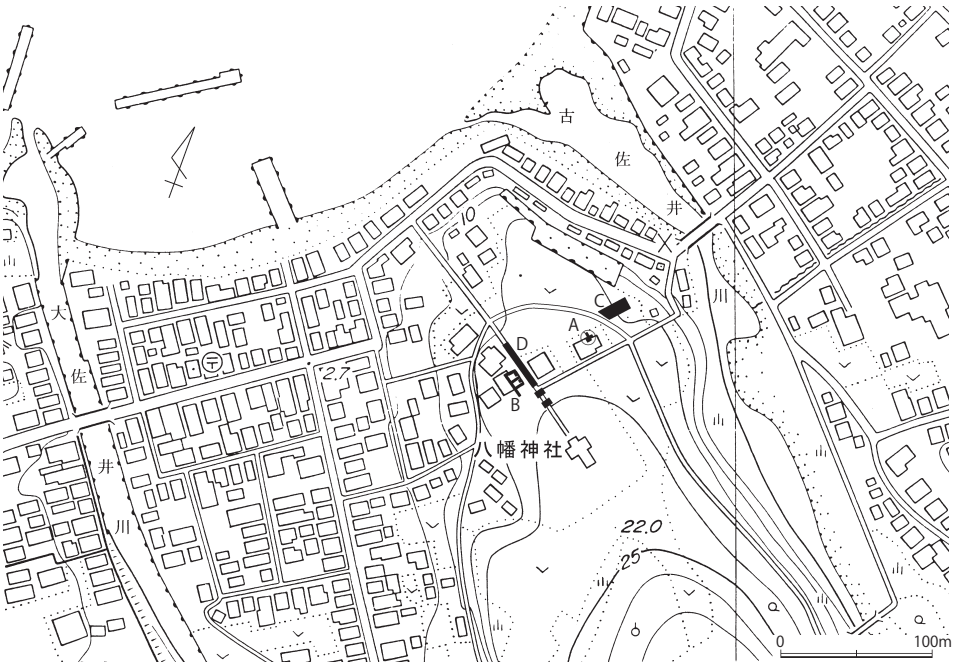
八幡堂遺跡は、青森県下北郡佐井村大字佐井字八幡堂に所在する。佐井村の市街地を東西に分断するように突出する舌状の台地上、箭根八幡神社境内を中心とする標高 15 ～ 25 m程度の緩斜面に立地する遺跡である。佐井村のある下北半島西部は、山地が海岸に達し、急峻な崖線となる場所が多くなっているが、そのなかにあって、大間町から佐井村市街地に至る海岸部には、標高 90 m程度までの間に複数段の海成段丘が広くみられる。遺跡の立地する舌状の台地は、下末吉段丘に相当する海岸段丘の南端部に位置し、このあたりの段丘面が、西の大佐井川、東の古佐井川によって開析されて形成された場所である。

八幡堂遺跡は、江戸時代より石鏃等が発見される場所として知られており、箭根という地名もそこに由来する。そのため、古くから遺物の採集、乱掘等が繰り返されていたようである。そうしたなかで、遺跡の発掘が初めて行われたのは 1967 年９月であり、以後 1995 年までに計４回の発掘調査が実施されている。

最初に行われた 1967 年の調査は、神社参道西側における下北信用金庫の社宅建設に伴う緊急調査であった（岩本 1970）。翌 1968 年８月に行われたのが、今回報告する遺



第 15 図　八幡堂遺跡の位置（国土地理院　1/50000『佐井』より）



A：1968 年調査区　B：1967 年調査区　C：1985 年調査区　D：1995 年調査区

第 16 図　八幡堂遺跡（佐井村教育委員会 1986 より加工・転載）

物を出土した発掘調査である。その後、1985 年９月には、古佐井川に近い台地の縁辺において住宅地の造成に伴う発掘調査が（佐井村教育委員会 1991）、1995 年４～７月には、参道の改修工事に伴う発掘調査が行われている（佐井村教育委員会 1997）。

1968 年の調査を除く３回の調査では、いずれも円筒上層式土器を中心とする縄文時代前期～後期の遺物が主体となっており、今回報告するような縄文時代晩期～弥生時代の遺物はきわめて少ない。後述するように、1968 年の調査では、縄文時代晩期～弥生時代の遺物は表土下の黒色土（黒褐色土）層に包含され、その下の褐色土（暗褐色土）層から、円筒上層式等が出土することが明らかになっている。これに対し、他の調査区では、縄文時代晩期～弥生時代の包含層である黒色土層は非常に薄いか、部分的に認められるのみで、多くの場所で表土直下が暗褐色土層となるようである。現在でも、台地上のいくつかの地点で縄文時代晩期～弥生時代の遺物を採集することはできるが（齋藤・福田 2003）、台地全体に広がる様子は認められない。比較的狭い舌状台地上で耕作が古くから繰り返されてきたこともあり、一部の地点を除いて、縄文時代晩期～弥生時代の遺物包含層が流失もしくは削平されている可能性が考えられる。

b．1968 年の発掘調査の概要

現在までに確認した、1968 年の発掘調査に関する記録類は、図面５枚（セクション図１枚、石器等の平面分布図３枚、完形土器群出土状態図１枚）、日誌１セット、調査時の 35mm モノクロフィルム２本、アルバム１冊である。まだ未発見の記録類が存在する可能性は高いが、以下、これらの記録類からうかがい知ることができる調査の内容をまとめておく。

今回確認した記録類には、発掘調査地点の位置を記したものがなく、残念ながらその正確な位置を特定することができなかった。第 16 図の調査地点は、調査当時撮影された複数の写真に写っている特定の樹木や電信柱、建物、遠方の海岸地形等の位置を検討し、その後の調査で撮影された写真との対比、さらには現地での確認作業等により推測したものである。なお、1970 年刊行の『佐井村誌』では、1968 年の調査地点を N 地点と呼び、今回推定した地点よりも北西 20 m程度離れた場所を示している（第 18 図）。しかし、その地点では、写真に写った道や樹木、電信柱等の配置にどうしても矛盾が生じてしまうため、誤認があるものと判断した。

1968 年の発掘調査は、考古学ジャーナル誌上の速報では、８月１～３日の３日間で行われたことになっている（第 19 図、江坂 1968）。しかし、日誌の作業記録は、１日と２日の２日間のみであり、少なくともトレンチ内の掘削は、この両日で行われたものと考えられる。３日は埋め戻しや片付け等にあてられたのであろうか。調査の参加者は、日誌によると、調査員として江坂輝彌、橘善光、森本岩太郎の３氏、調査補助員として岡本孝之、鈴木道之助、三宅徹也、の各氏となっている。

調査区は、写真を見る限り、古佐井川側に抜ける神社の参道の方向を基準にして設定されたようである。まず、A

～Ｃトレンチと名付けられた、長さ３ｍ、幅 1.5 ｍの調査区を長辺・短辺を接するように３ヶ所設定・掘削し、Ｂトレンチの山側からＡ・Ｃトレンチにかけて検出された、縄文時代晩期～弥生時代の土器を包含する黒色土層の範囲を確認するために、Ｃトレンチの南側に長さ２ｍ、幅 1.5 ｍの調査区（Ｄトレンチ）を追加している（第 17 図）。掘削面積は合計で 16.5㎡程度である。

縄文時代晩期～弥生時代の遺物を包含する黒色土層は、Ｂトレンチ海側では認められず、そこでは、表土の直下が円筒上層式を包含する褐色土層となる。黒色土層は、この褐色土層を掘り込むような落ち込み内に堆積しており、1 日目の日誌では、参加者の多くが、この黒色土層を住居址などの遺構覆土と考えていたことが読み取れる。２日目の日誌では、積極的に遺構覆土とする意見がみられなくなるが、これは黒色土層の下面が、東側に向かって傾斜していることや褐色土層上面に凹凸が確認されたためと考えられる。現在我々の手元にある記録類では、この落ち込みが遺構であるか自然地形であるか判断することはできないが、最近のむつ市江豚沢遺跡の砂沢式期の住居址などの調査所見などを見る限りでは、住居址である可能性がなお残されていると考えておきたい。なお、拡張したＤトレンチは、橘善光氏が小発掘を行って遺物を採取した場所（橘 1970）にあたることが明らかになったと記録されている。

縄文時代晩期～弥生時代の遺物包含層である黒色土層中からは、大洞 A_2 式～砂沢式土器、宇鉄Ⅱ式土器等の多量の遺物が出土した。宇鉄Ⅱ式土器は、表土直下、黒色土層の上層部分からまとまって出土し、特にＡトレンチの東南部分からＣトレンチにかけて個体資料が集中していたようである（写真８）。宇鉄Ⅱ式の集中層より下では、一度遺物が少なくなり、黒色土層の下半から大洞 A_2 式～砂沢式を多量に含む包含層となる。

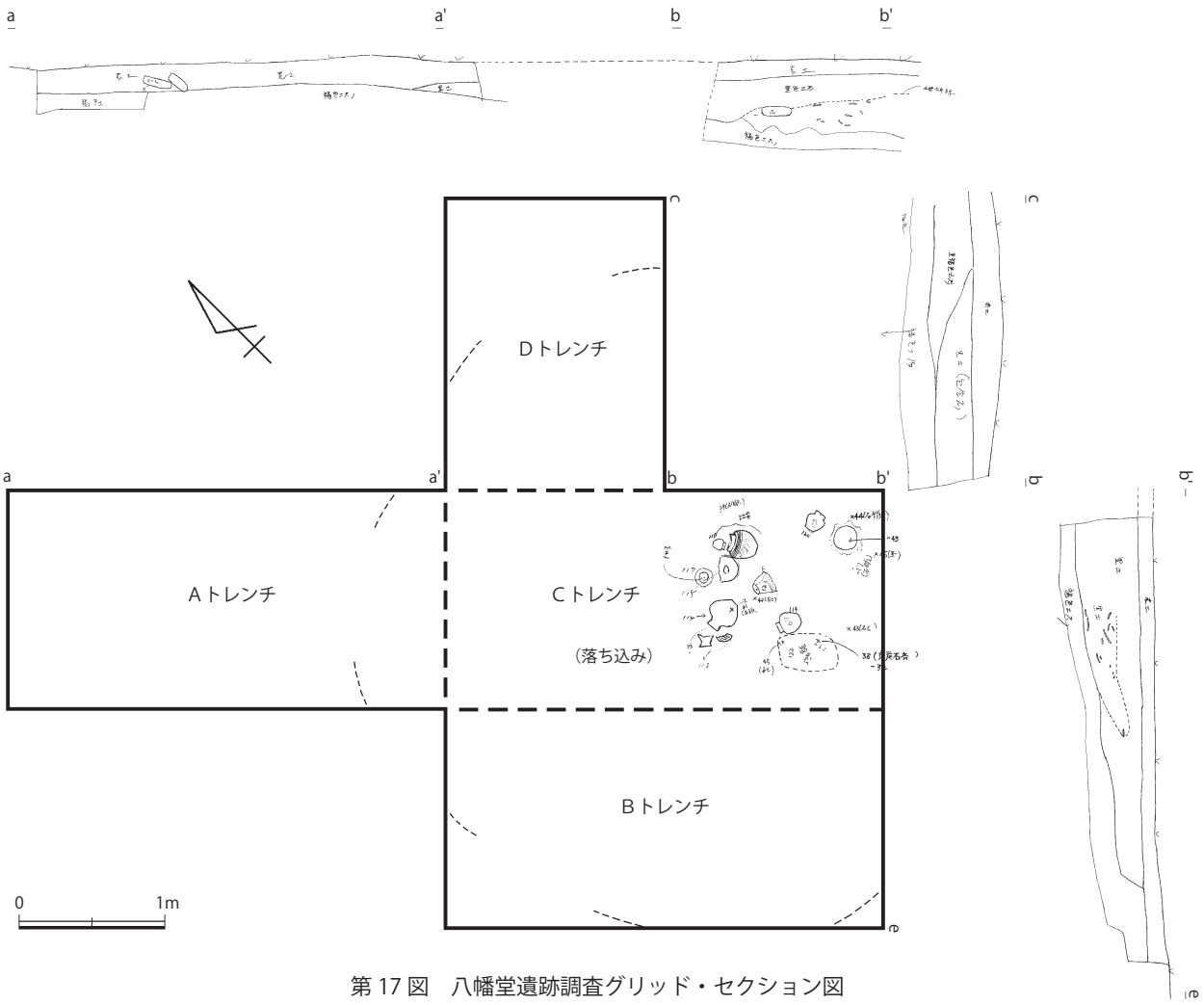
包含層より出土した土器の多くは、各トレンチを海側・山側に二分したうえで、調査区ごとに一括して取り上げられている。写真もそれほど残されていないため、包含層全体の土器群の出土状態については不明な点が多い。ただ、Ｃトレンチの山側には、大洞 A' 式の完形土器が集中しており、この部分については、平面図が記録され、写真も数多く撮影されている（第 17 図、写真９・10）。この完形土器のまとまりが、包含層のなかでも注目すべき特異な出土状況であったことが窺われる。

ただし、この完形土器群を、直ちに時間的にまとまった一括資料として扱い得るわけではない。写真から特定できる土器については、実測図の番号を付しておいたが、これらのほとんどは大洞 A' 式（大坂研究報告の「八幡堂２群」）であり、確かに比較的短い時間で埋没した一群の土器と考えることは可能である。しかし、その一方で、時期の異なる土器（「八幡堂３群」、第 23 図 25）が近接して出土していたことも明らかになっている。そもそも黒色土層自体が最大で 50cm 程度の厚さであり、大洞 A_2 式～砂沢式の包含層も下半の 30㎝に過ぎない。その中に夥しい数の土器が包含されていることからすると、単純に近接して出土した土器を同時期と判断するには注意が必要となる。

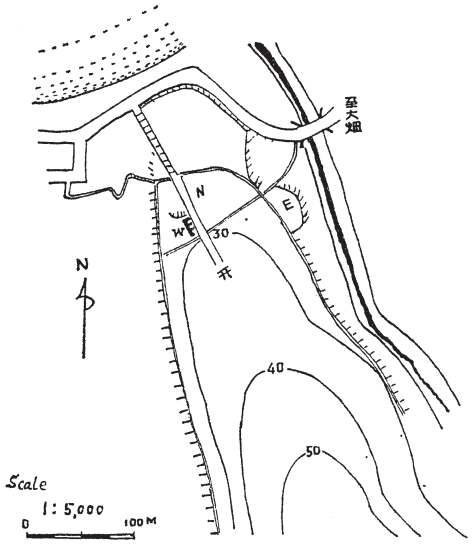
引用・参考文献

岩本義雄　1971「３ 八幡堂遺跡」『佐井村誌 上巻』佐井村　8-30 頁
江坂輝彌　1968「本州北端の弥生遺跡 八幡堂遺跡」『考古学ジャーナル』No.24　ニューサイエンス社　巻頭
齋藤瑞穂・福田正宏　2003「縄文／弥生移行期の下北半島についての一考察－一般調査の成果にもとづいて－」『北方探究』第５号　北方談話会　26-49 頁
佐井村教育委員会　1991『八幡堂遺跡発掘調査報告書－宅地造成に伴う緊急発掘調査－』
佐井村教育委員会　1997『八幡堂遺跡発掘調査報告書（２）－村道八幡宮線改修工事に伴う緊急発掘調査－』
橘　義光　1970「青森県佐井八幡堂の弥生土器について」『北海道考古学』第６輯　北海道考古学会　39-45 頁

（安藤広道）



第 17 図　八幡堂遺跡調査グリッド・セクション図



挿図Ⅱ　八幡堂遺跡
　W地点　昭和42年 9 月発掘地域（現在、
　　下北信用金庫社宅地）
　N地点　昭和43年 8 月江坂輝弥氏発掘
　E地点

第 18 図　『佐井村誌 上巻』（佐井村 1971）による八幡堂遺跡

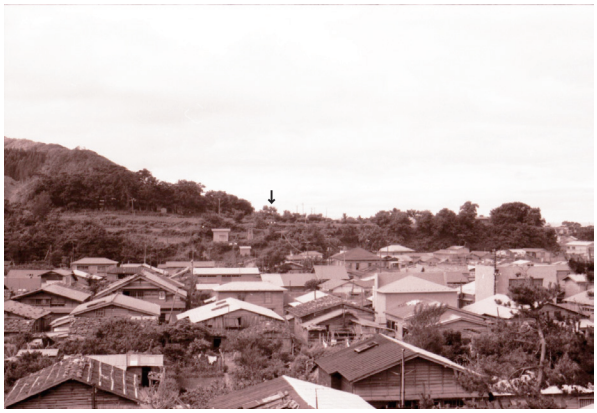


写真５　八幡堂遺跡遠景

写真６　八幡堂遺跡近景（古佐井川より）

写真７　八幡堂遺跡調査風景

写真８　弥生時代中期土器出土状態

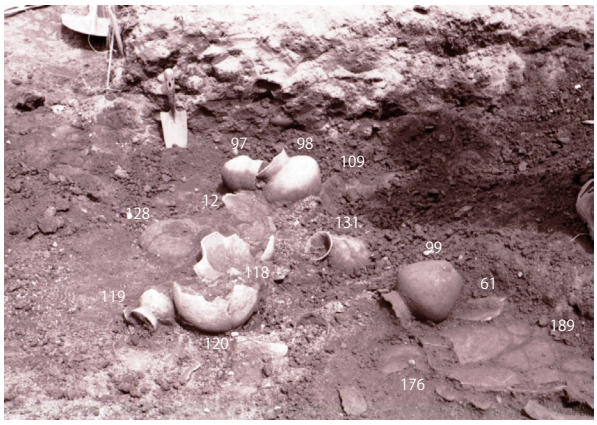
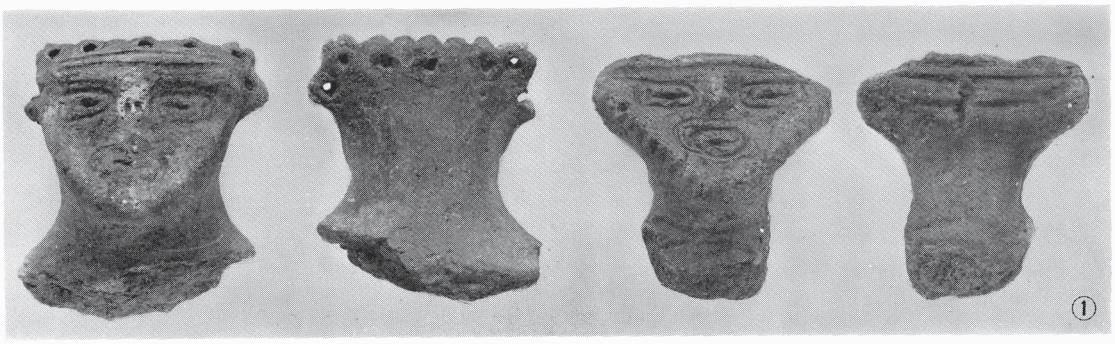


写真９　落ち込み内の土器出土状態①

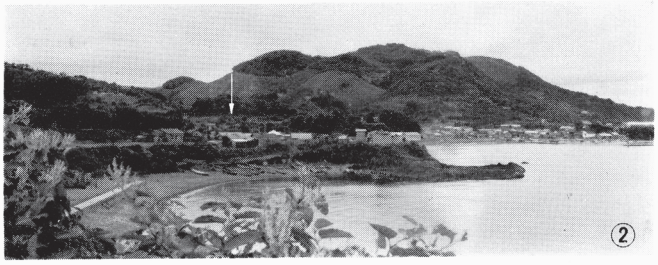
写真 10　落ち込み内の土器出土状態②

写真 11　落ち込み内の土器出土状態③

写真 12　トレンチ完掘状況



①弥生土偶。大洞A′式以降の土偶は弘前市東郊、田舎館遺跡の出土例が知られているが、青森県下での発見例はきわめて少ない。ここに顔面部破片が2例加わったわけである。口唇部には刺青の痕跡か外縁の沈線を赤く塗っている。(左側のもの)
②北方より遺跡地を望む(遺跡は矢印の地区)。



本州最北端の弥生遺跡
八 幡 堂 遺 跡

八幡堂遺跡は青森県下北郡佐井村にある。ここの佐井八幡社のわきから、石鏃が出土することは江戸時代にすでに菅江真澄の紀行文によって知られていた。

この佐井八幡社の鎮座する台地には、旧石器時代のポイントを出土する遺跡、縄文前期、中期の遺跡もある。神社の参道左側の畑地が八幡堂遺跡である。

さる8月1日から3日間慶応義塾大学考古学研究室がこの遺跡の発掘調査を行なった。その結果、縄文晩期末の大洞A′式直後の二形式の土器が多量に発掘されたが、住居址、墓域などの遺構は認められなかった。

(写真提供　江坂輝弥)

③遺跡における土器と足形底部破片出土状態。
④大洞A′式直後の台付浅鉢出土状態。
⑤足形底部破片出土状態。大土偶の脚部かコップ形容器の特異な底面か不明。足ゆびの先端にまた5本のゆびがある。左から2本目のみ完存、他は欠損している。

第19図　八幡堂遺跡1968年調査の速報(『考古学ジャーナル』No.24より転載)

(2) 八幡堂遺跡出土土器の分析

a．遺物の保管状態と整理作業の方法

(1) 資料の所在と公表の状況

1968 年度調査で八幡堂遺跡から出土した資料群は、過去に論文や図録でその一部が紹介されたほか、調査時の所見についての言及がなされたこともあり、当該期の研究における重要な資料と目されてきた。しかし、その大半は未整理で十分な利用が難しい状況が続いてきた。

本研究に伴う整理作業に着手した時点で、出土遺物は、西校舎 4 階に、大別 3 グループに分けて保管されていた。第一のグループは完形資料を中心とする土器群および土偶頭部 2 点で、プラスチックケース 6 箱に収納されており、過去に論文等に掲載された資料の大部分がこれに含まれる。第二のグループは発掘調査の時点で遺物番号が付与された遺物のうち石器、石製品、土器片の一部で、ビニール袋 2 袋に簡単に土が除去されたものと未水洗ものが、発掘区ないし遺物番号を記したカードと共に梱包されていた。第三のグループには上記 2 グループに属さない大部分の遺物が相当し、木箱 94 箱に多くが未水洗の状態で、発掘区ないし取り上げ番号を記したカードと共におさめられていた。このほかに、上記の資料群の中に接合するものを含む若干の土器破片が他遺跡の資料と混在していたため、これらは適宜抽出した。

(2) 整理作業と掲載資料の選択基準

整理作業では、出土資料群のうち未水洗のものを水洗したのち、遺物の材質から分類したうえで土器小破片、石器、土製品を除き注記を行った。並行して遺物台帳および平面図、写真記録と対比可能な遺物を特定するとともに、過去に公表されていた資料との対照 (表 2) も行った。この作業の過程で、カードの腐食や紛失によって出土区が不明なもの、木箱が破損したため本来は別の区・層に由来する資料が混在しているとみられるものもあった。また、工藤竹久氏によって紹介された 3 点のうち 1 点 (工藤 1987 第 3 図 16) の所在が確認できなかった。

次に、出土土器群の大別分類を行い、縄文時代前期・中期の土器群、縄文時代晩期末～弥生時代前期の土器群、弥生時代中期前半の恵山Ⅰａ式 (大坂 2007) に属する土器群および弥生時代中期後半の「念仏間式土器」が含まれていることを確認した。これらのうち、縄文時代晩期末～弥生時代前期の土器群、弥生時代中期前半の恵山Ⅰａ式に属する土器群は出土量が際立って多く、この二つのグループで資料群の大部分を占めている。「念仏間式」は破片 1 点のみである。二枚橋式土器は含まれていなかった [1)]。これらの土器群はそれぞれ胎土の特徴による判別ができるので、可能な限り小さな破片まで分類し、後の作業に備えた。接合作業は、縄文時代晩期末～弥生時代前期の土器群、弥生時代中期前半の恵山Ⅰａ式に属する土器群に対して行ない、図化のために必要な範囲でセメダインと石膏を用いて復元を加えた。作業を進めていく過程で諸般の事情から本研究報告に掲載する資料を縄文時代晩期末～弥生時代前期の土器群に限ることとしたため、恵山Ⅰａ式に属する土器群の接合作業は中断した。

図化にあたっては、①口縁部から底部までが接合する個体、②文様単位が 1 以上確認可能で口縁部の残るものを抽出し、上記の基準から外れる資料の中から、特徴的な文様が認められるものを中心に任意に抽出したものを加えた。よって、類似する個体が存在する場合にはその中から遺存状態の良好なもののみ図示する場合が多くなるし、口縁部であっても小破片の大部分は抽出外とせざるを得なかった。以上の点から、本章で提示する資料群は出土土器群の型式学的属性に関する定性的なバリエーションをある程度反映しているものの、ここでのデータをもとに定量的な分析を行うことは難しいことに注意する必要がある。

なお、本研究の過程で第 6 回海峡土器編年研究会 (2008 年 7 月 5・6 日) において整理作業の中間成果として出土土器群の実測図 67 点とそれらの編年的位置に関する見通しを公表した (大坂 2008)。ただし、その後の作業の過程で破片が接合して形状の認識を変更したものもあるため、提示した実測図に変更が加わっているものがある。

b．出土土器の分類

以下の記述にあたり、出土土器群の器形分類を提示するが、ここでの分類は時期差を反映していない部分もあり、一貫した体系というよりも事実記載のための便宜に近い。

(1) 台付浅鉢形

浅鉢形土器に高い台のついた土器を「台付浅鉢形土器」とする。

(2) 浅鉢形

口径よりも器高が低く、緩やかに開く形の土器を「浅鉢形土器」とする。台付浅鉢形としたものにつく台よりも相対的に低い台がつくものもこれに含める。

(3) 鉢形

口径と器形が同じ程度のもので、屈曲部をもつ土器を「鉢形土器」とする。

(4) 壺形

胴部がおおむね球形で、頸部がすぼまった土器を「壺形土器」とする。

(5) 台付深鉢形

深鉢に相対的に高い台がついた土器を「台付深鉢形土器」とする。

（6）深鉢形

口径よりも器形が高く、体部が深い土器を「深鉢形土器」とする。器形のほか容量から分類できる可能性もあるが、全形のうかがえる資料が多くはないためここでは立ち入った細分は控える。

（7）蓋形

半球形で他の器形と組み合わせたと考えられるものを「蓋形土器」とする。

c．出土土器

ここでは、実測図および観察表からは判断が難しい項目を中心に簡単な観察結果を述べる。記載は前節で行った器形分類をもとに進めるが、破片資料のため判断がつきかねるものは便宜的にそのほかの特徴が類似する資料群に含めて扱う。

（1）台付浅鉢

1 ～ 6、11、12、21 ～ 25 は台部まで残存し、7、20 は台部との接合面が残存するため台付浅鉢と判断されるもので、8 ～ 10、13 ～ 19、26 ～ 33 は器形の特徴から台付浅鉢の可能性があるものの、浅鉢の可能性もある。

1 ～ 19、23 ～ 25 は波状口縁のもの。1 は口縁部に小さな突起が 4 箇所現存し、いずれも文様の頂点とずれた部位に位置する。文様は 4 単位と思われるうち 2 単位が現存し、主線内部の沈線構成が異なっている。内面沈線は太く、粘土のまくれが残る。2 は器表面があれる。文様は拓本で示した部位のみが残存する。沈線施文に先行する縄文はやや浅く施文される。沈線は細く鋭い沈線の上に幅広で浅いナゾリが加えられるため内部に段が残り、段の内部には粗い粘土のまくれが残る。3 は台部に一対の焼成前穿孔がある。5 は全体に摩滅が著しい。細く鋭い沈線で文様が描かれる。6 は接合しない破片を合成して作図した。全体に薄手でやや脆い。7 は異なる形態の突起が 2 種交互に配置され、幅広の突起の上面には口唇部沈線が続く。

8 は口唇部沈線の施文によって口縁部が外面側に強くせり出す部分がある。内面には突起に沿った沈線がめぐり、突起頂部の割り込みへ続く。この特徴は 12 と共通する。9・10 は同一個体の可能性もあるが接合しない。口縁部に幅広の突起があり、頂部上面に刻みが加えられる。縄文は RL で、施文後の調整で条間の潰れが著しい。11 は無欠損。口縁部の突起は大きなものとやや小さいものが各 4 箇所交互に配置される。LR 施文後にミガキによる条間の潰れが著しい。12 は口縁部に 4 箇所の突起が現存する。内面には突起に沿った沈線がめぐり、突起頂部の割り込みへ続く点で 8 と共通する。13・14 は同一個体と考えられるが接合しない。15 は口唇部沈線の施文によって口縁部が外面側に強くせり出す部分がある。17・19 は同一個体の可能性があるが接合しない。胎土は 32 と共通し、これも同一個体の可能性がある。19 は一部に色調の異なる部分があり、変形工字文の下側に位置する粘土粒が焼成後に剥離したものとみられる。

20 ～ 22 は平縁のもの。20 は図示していない同一個体と考えられる破片があり、台部との接合を示す剥離面が観察されるため、浅鉢の可能性は低い。沈線の形態などは 21 と類似する。21 は口縁部が拓本を示した部分のみが現存する。鉢部の屈曲点よりやや下に周回する剥離面があり、製作途中での停止点を示すものと考えられる。22 は口縁部内面に粗い成型時の痕跡が残る。沈線は細く、ややぶれている。23 は接合しない 2 組の破片を合成して作図した。鉢部の底部内面に円形の沈線文がある。胎土が非常に緻密で、明るい色調を呈する。24 は台部に被熱による歪みがある。口縁部内面の沈線は上部が不明瞭になる。25 は全体が被熱して歪みが著しく、一部の破片は発泡している。二つ以上の破片をまたいで連続する歪みがある一方で、発泡するものとしないものが隣接する例もある。これは、ほぼ完形の状態で被熱が開始し、土器そのものの破損をはさみ更に被熱が加わったことを示すと考える。ただし、この過程が一連のものなのか、間にある程度の時間差があったものかは分からない。

26 ～ 33 は台部。31・32 は上面に円形の沈線文がある。32 は上面の外周に接合面が露呈する。

（2）浅鉢

34、36、42、43、47、48、51、52、59 ～ 61、63、65 ～ 67、70、72、74、79、81、83、87 は底部まで現存するため確実に浅鉢と判断されるもので、35、37 ～ 41、44 ～ 46、49、50、53 ～ 58、62、64、68、69、71、73、75 ～ 78、80、82、84 ～ 86、88 ～ 92 が器形の特徴から浅鉢の可能性が高いもの。

34 は外面がやや摩滅している。文様は 3 単位で構成されると考えられ、およそ 2 単位が現存する。36 は口縁部突起が文様と対応しない。文様は 3 単位で構成される。口縁部内面沈線は太く、周囲に粘土のまくれが残るほか、やや曲線的になる。37 は下部の沈線が底部付近の可能性もある。40 は文様部分にも縄文が残る。文様を描出する沈線は細く鋭いもので、やや曲線的でぶれた印象をうける。口縁部内面沈線は太く、粘土のまくれが残るほか、ややぶれた印象をうける。内面に接合痕が露呈する。41 は文様構成が 40 とほぼ共通する。文様を描出する沈線は 40 と比較して相対的に太く沈線内に複数回のなぞりが施されている。42 は口縁部突起が 7 箇所あり、いずれも 4 単位の文様と明確な対応関係にない。内外面ともに摩滅した部分

が多い。口縁部内面沈線は浅く幅広。43 は拓本で図示した部分のみが現存する。底部からの立ち上がりは強い丸みを帯びており、明瞭な屈曲がない。47 は 4 単位の文様がある。口縁部内面沈線は太く、粘土のまくれが残るほか、ややぶれた印象をうける。内面に接合痕が露呈する。

48 は低い台部がある。4 単位の文様は口縁部の突起と対応しない。口唇部に沈線がめぐる。49 は全体に摩滅が著しい。50 は細く鋭い沈線の上をやや幅広になぞることで、沈線中に粘土のまくれが残るように見える。この特徴は 2、34、35、53、88 ～ 90、122 などに共通する。51 は口縁部突起が 2 箇所現存し、文様と対応していない。52 は口縁部の突起と文様が対応する位置と、ややずれた部分がある。全体に薄くもろい。口縁部内面にケズリが残るなど、他の浅鉢と比較してやや調整が粗い部分がある。54 は口縁部に非常に細く鋭い刻みがある。口縁部内面に接合面が露呈する部分がある。61 は口縁部に 2 種の突起が交互に 4 単位ずつある。口縁部内面に、波状口縁に沿った沈線がある。よく共通した特徴を示す破片がほかに少なく見積もって 3 個体分あるが、いずれも文様の詳細な構成が不明なため図示していない。

62 は接合しない破片を含めて全体の約 60 パーセントほどが残存しているものと考えられる。文様は頂点の下部が全面にわたって削去されており、三角形の平坦面を構成する。こうした削去の特徴は、平坦面の部位は異なるものの 65、68、69、72、74、77、80、82 ～ 84、95、100、104 などに共通する。胴部には黒色物質が帯状に付着しており、赤色顔料の塗布に先行する段階に施されている。こうした黒色物質の付着状況は 63、65 にも認められる。64 は拓本で図示した部分のみが現存する。文様は 4 単位と考えられるが判然としない。65 は内外面ともに丁寧なミガキがみられる。文様は下から 3 条目の沈線が上端が削去されて平坦面をなしている。

66 の文様は拓本を図示した部分のみが現存する。口縁部には 2 種の突起が交互に 4 単位ずつ配置される。口縁部内面の沈線は深く鋭いもので、69 と類似している。67 は接合しない 2 組の破片を合成して作図した。口縁部は 2 種の突起が交互に 4 単位ずつ配置される。全面に丁寧なミガキがみられる。68 は文様は全体に彫去するもので、83、84 と強い共通性がある。縄文は施文後の強いミガキによって節がやや潰れている。70 は文様が図示した部分のみ現存するため、文様の詳細な構成には判然としない部分がある。変形工字文と 2 条の沈線に区画された部分は凹部をなしている。この特徴は 71 ～ 73、106 と共通する。底部はあげ底。71 は拓本で図示した部分のみが現存する。口縁部内面沈線の上部が突起の平坦面を構成して、沈線の境界が不明瞭になっている部分が多い。この特徴は 5、13、14、24、25、72 ～ 78、100、101、112、127、144、157 と共通する。73 は波状口縁とみられる。79 は器厚が非常に薄く、部分的に 3 mm程度になる。87 は口縁部に大ぶりの突起があるものと考えられるものの、単位数などは判然としない。縄文はやや不均等な撚りで 1 条ごとに条が不明瞭になる部分がある。

(3) 鉢

93 ～ 97 を全体の器形が不明なものもあるが、鉢とした。95 は波状口縁をなすものの、突起の頂部がすべて欠損しており、どのような形態をなすものかは明らかではない。文様は 2 単位の可能性もある。97 は口縁部にかけてやや内湾する。底部は丸みを帯びておりやや摩滅している。

(4) 壺

98 ～ 129 が壺。98、99 は口縁部の一部を欠損する。口縁部には 2 種の突起が交互にそれぞれ 4 単位配置される。文様は 4 単位。100 の文様は一部が凹部をなしている。胴部は 2 次焼成を受けて脆く、やや歪みが認められる。106 は全体に丁寧なミガキがみられる。無文部分は一段彫りくぼめられて凹部をなしている。109 は口縁部内面沈線が口縁部の突起に対応しているものと考えられるが、口縁部が大きく欠損しているため単位数などは判断できない。111 は口縁部内面沈線が突起に対応している。胴部破片の約 40 パーセントを欠損するが、一部で口縁部から底部付近と思われる接合面露呈部分まで接合している。

112 ～ 117 は隆線の文様があるもの。112 は摩滅した部分が多いが、一部で非常に丁寧なミガキが観察できる。頸部に 1 対、口頸部と胴部の間に 2 対の補修孔がある。117 は口縁部に獣頭形の突起が 4 単位ある。118 は無文部分がナデによってゆるやかな凹部をなしている。125、127 は拓本で示した部分のみが現存する。122、129 は全体に斑状の剥離が著しい。

(5) 台付深鉢

131、153 は台部まで現存するため確実に台付深鉢と判断できるもので、132 ～ 144 は他の特徴の類似から台付深鉢の可能性が高いもの。131 は台部に 1 箇所の焼成前穿孔がある。132 は、134・136・139 と同様に突起内面に沿って沈線が逆 T 字状をなす部分がある。153 は非常に精良な胎土で、縄文施文の特徴なども壺の 120 と類似する一方、131 ～ 144 と類似しない部分が多い。口縁の形態から口縁部突起は 8 分割とみられるが、現存しない部分が多いため 2 種の突起が交互に 4 単位ずつ配置されるのか、同じ形状の突起が 8 単位で配置されるのかわからない。下部は赤化しているが、内面の炭化物付着などと併せて考えれば、24、25 や 100 などのように通常の使

用法と異なった被熱ではなく一般的な煮沸に伴う使用痕跡と考えられる。

(6) 深鉢

146、147、151、152、154、162、169、170、177、189、193 は底部まで現存するため確実に深鉢で、145、148 ～ 150、155 ～ 161、163 ～ 168、171 ～ 176、178 ～ 188、190 ～ 192 はその他の特徴から深鉢の可能性が高いもの。146 は胴部に二種類の縄文原体が用いられており、粗いＬＲの後に相対的に細いＬＲが施文されている部分がある。147、156 は口縁部に 2 種の突起が交互に 4 単位ずつ配置される。157 は口縁部の突起を正面に合成して作図した。口縁部内面沈線は上端が曖昧になり、段のようになった部分が多い。162 ～ 168 は矢羽根状文があるもの。刻みがあるものでは、口唇部外面側に偏るもの (162 ～ 164、166)、口唇部上面のもの (165) がある。169 は器形の歪みが大きい。171、172 は口縁部が横方向にナデられた後に上面から連続するおさえが加えられることで小波状口縁をなしており、その際に生じた粘土の盛り上がりが残されている。177 は下部に補修孔があり、周囲の色調から強い二次焼成の後に穿孔されたようだ。181 は 182 と同一個体の可能性があるもので、一部分のみに沈線がみられる。191 は外面に粗い条痕、内面にハケ目が見られるもので、192 も同一個体の可能性がある。193 はやや傾いている。

(7) 蓋形

130 の一点が出土している。ほぼ円形で、中心を通る 1 条の貼付隆帯は頂点部分で井戸枠状をなす。貼付隆帯は一部分剥離する。内面は丁寧にみがかれている。全体に黒色物質と赤色顔料が付着している。

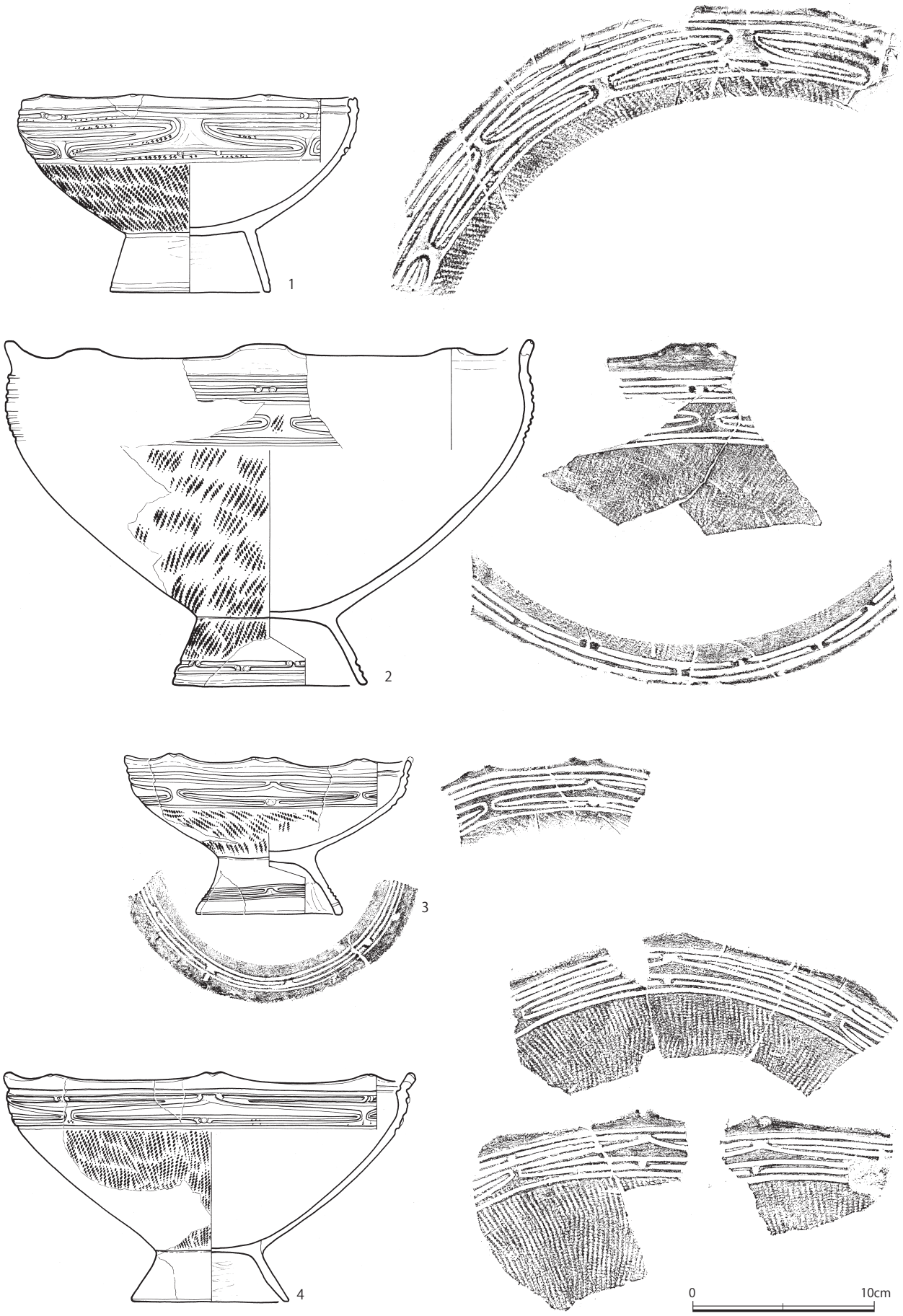
註

1）本節で用いる「二枚橋式土器」は須藤隆氏によって設定された土器型式であるが、とくに下限に見解の相違が残されていたため、型式内容を筆者が再定義した内容 (大坂 2007) に基づいている。高瀬克範氏による「二枚橋式古段階」(高瀬 1998) とほぼ共通する。

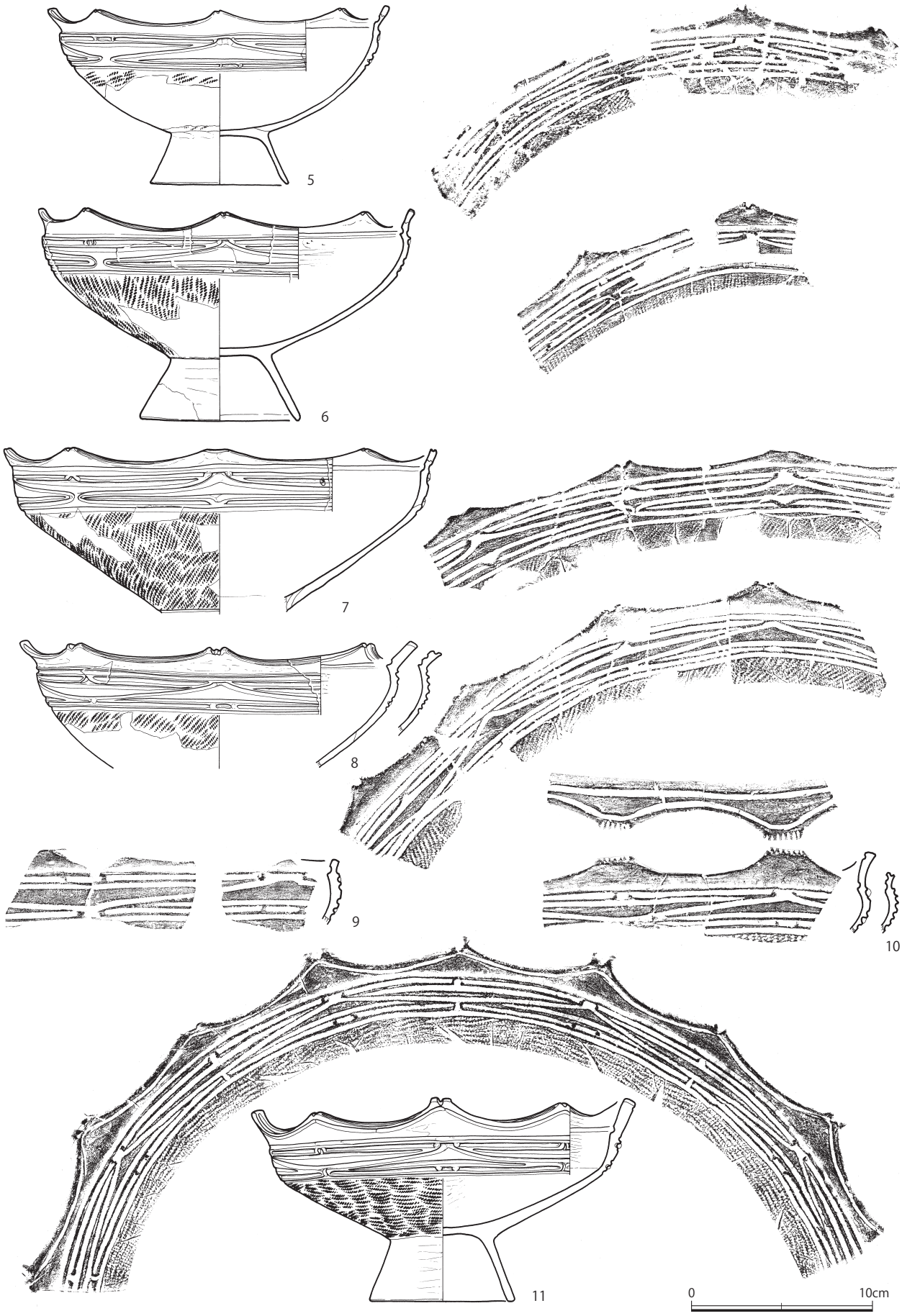
引用文献

大坂　拓　2007「恵山式土器の編年」『駿台史学』第 130 号　51-83 頁
大坂　拓　2008「下北地域の集成と諸問題」『弥生時代における砂沢式土器の諸問題－資料集－』海峡土器編年研究会　51-78 頁
工藤竹久　1987「東北北部における亀ヶ岡式土器の終末」『考古学雑誌』第 72 巻第 4 号　日本考古学会　39-68 頁

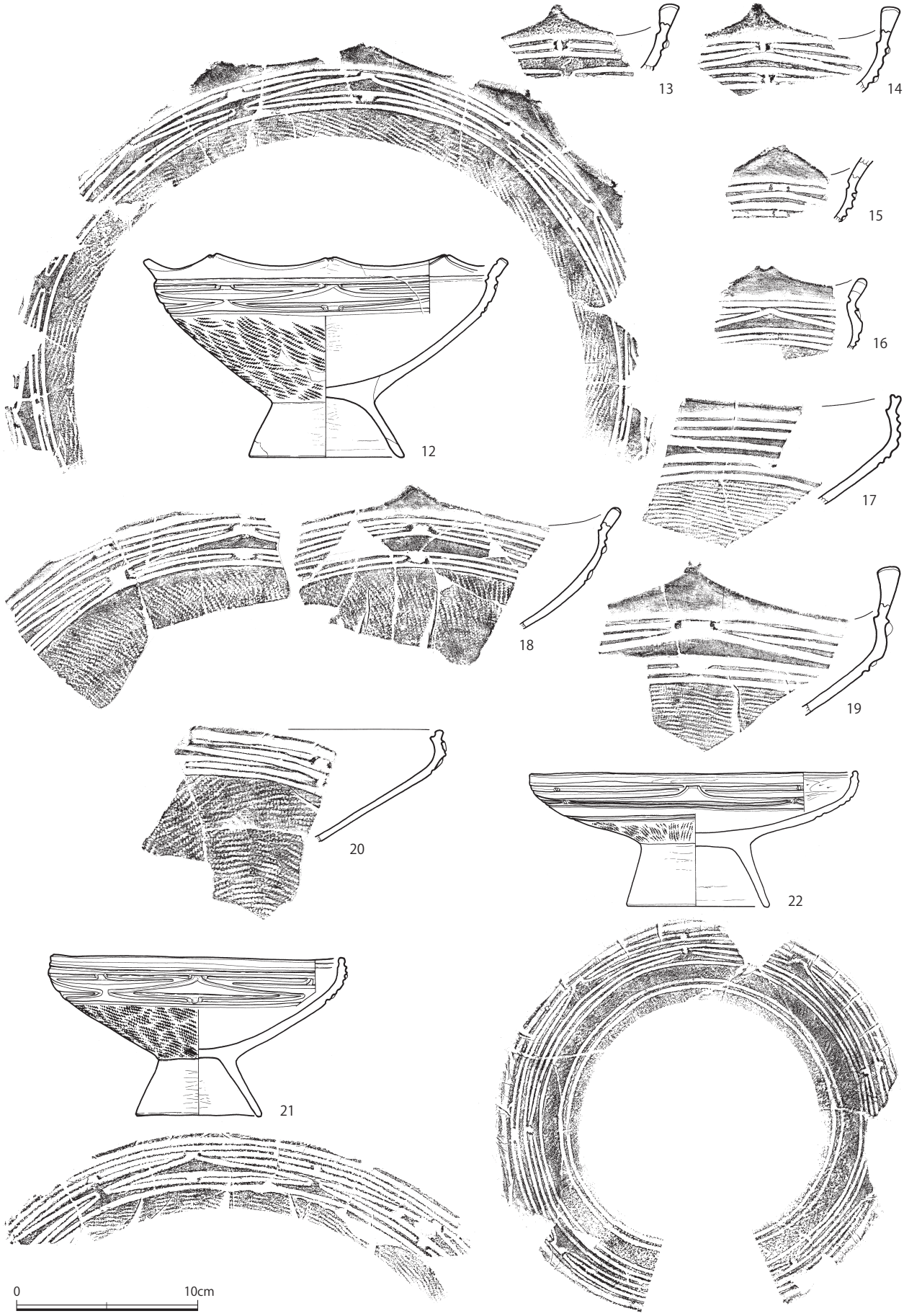
（大坂　拓）



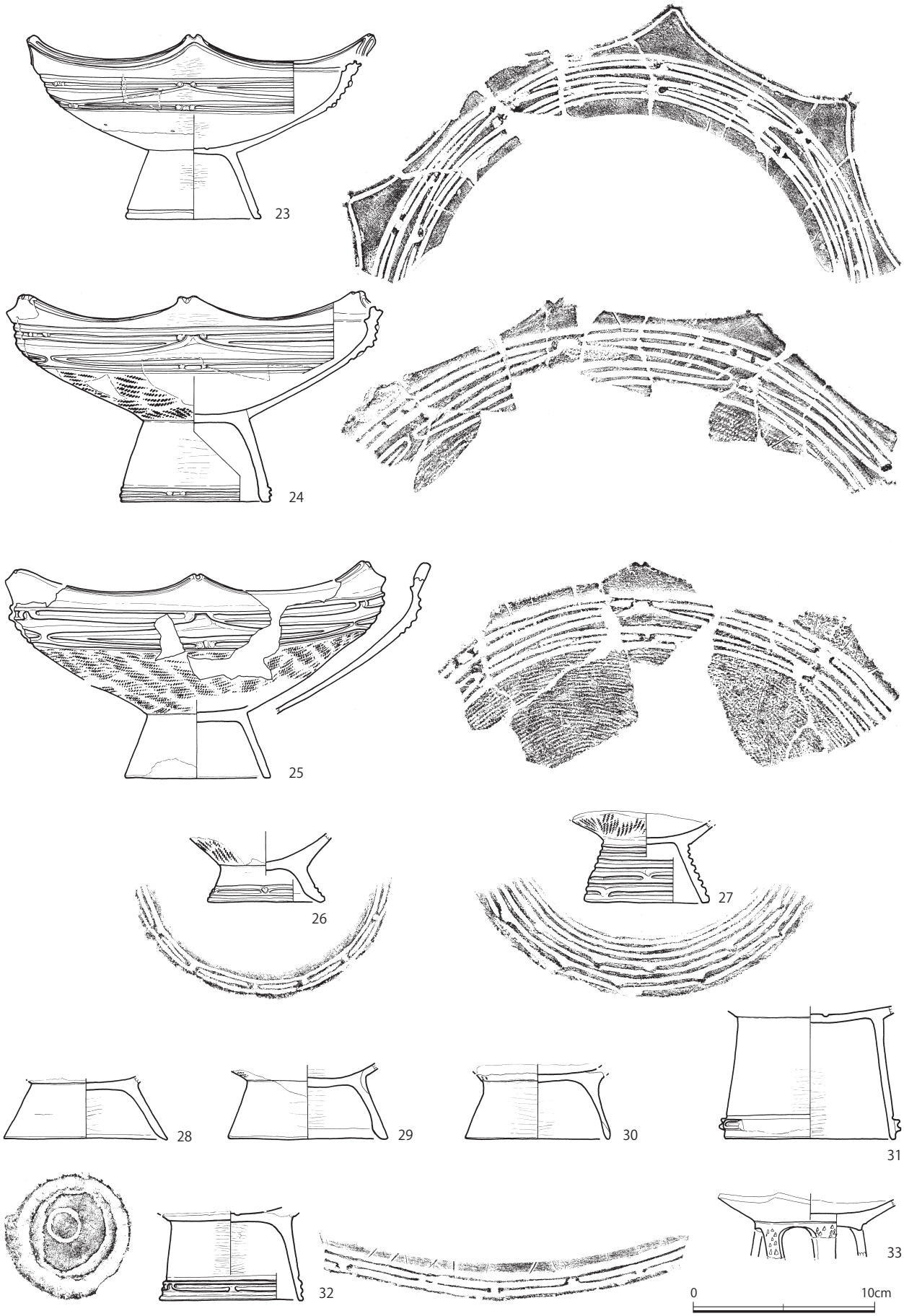
第 20 図　八幡堂遺跡出土土器①



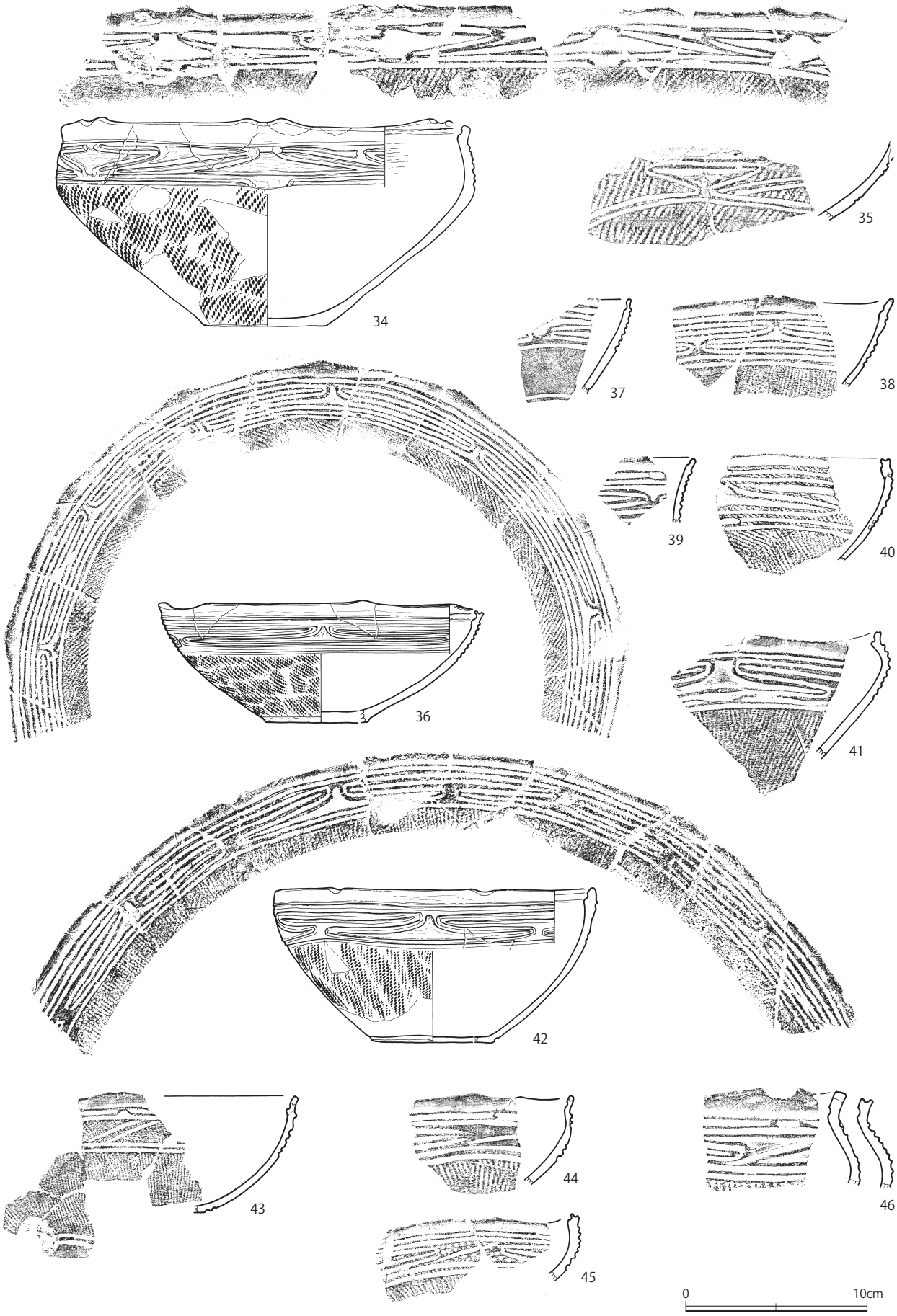
第 21 図　八幡堂遺跡出土土器②



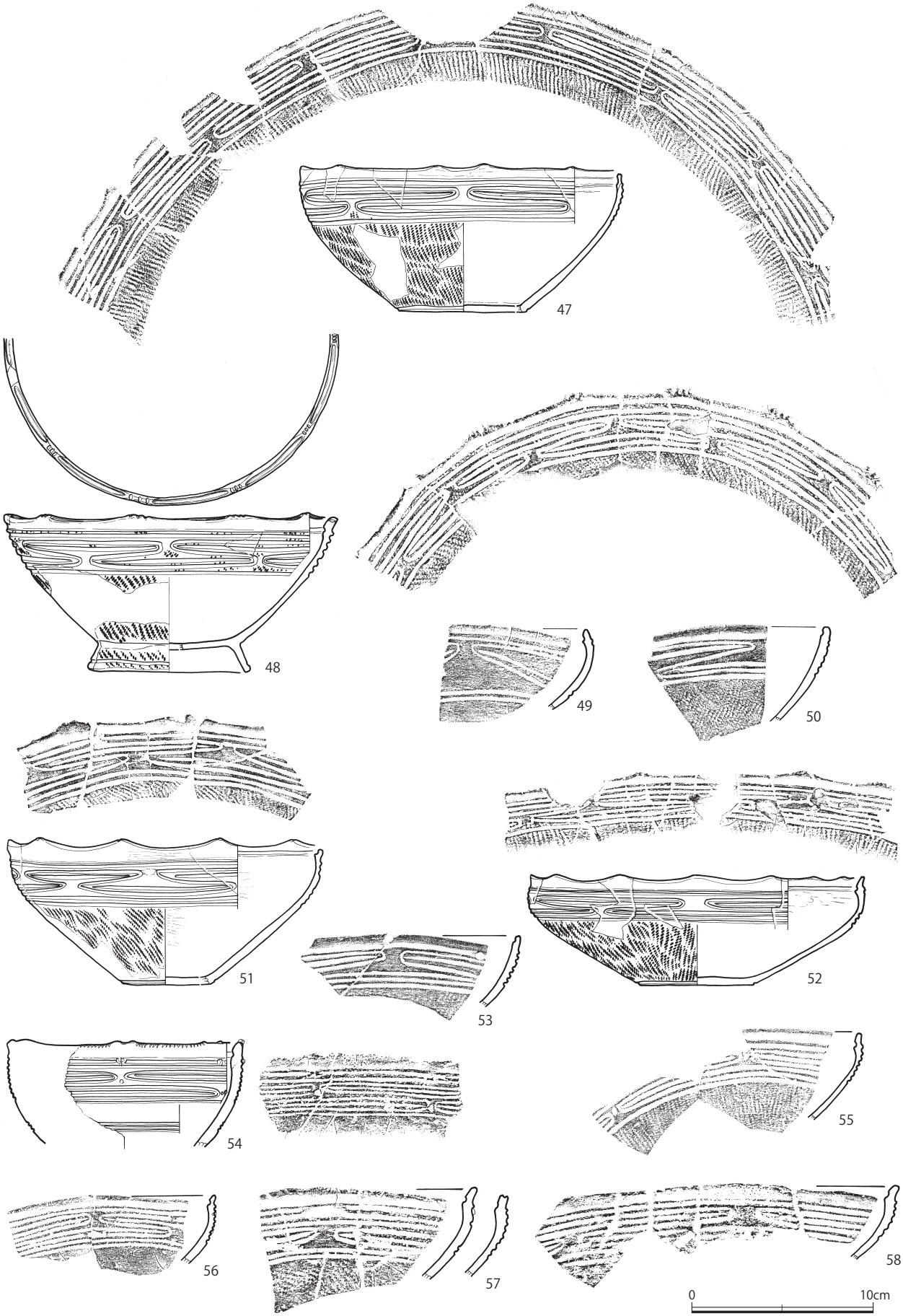
第 22 図　八幡堂遺跡出土土器③



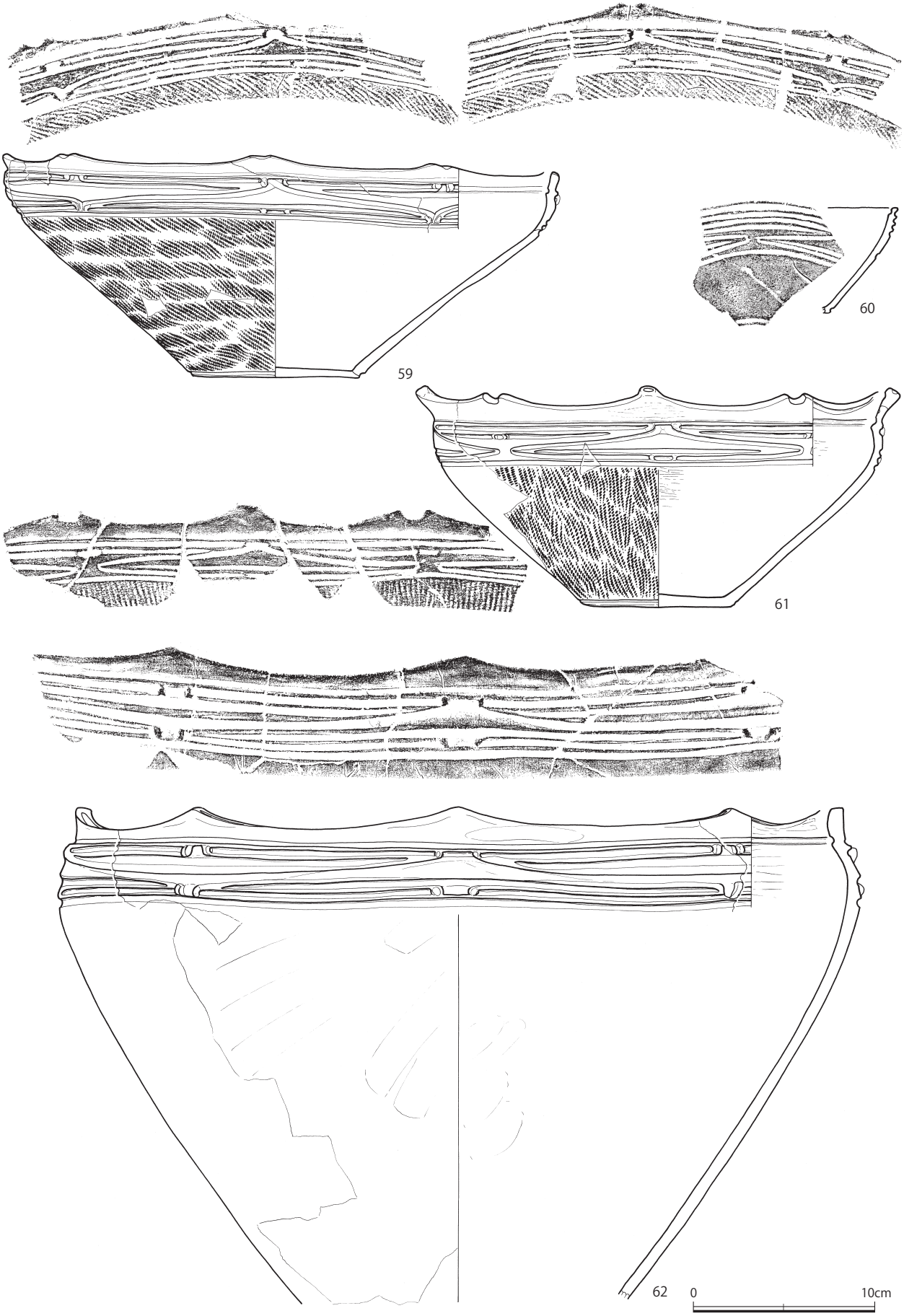
第 23 図　八幡堂遺跡出土土器④



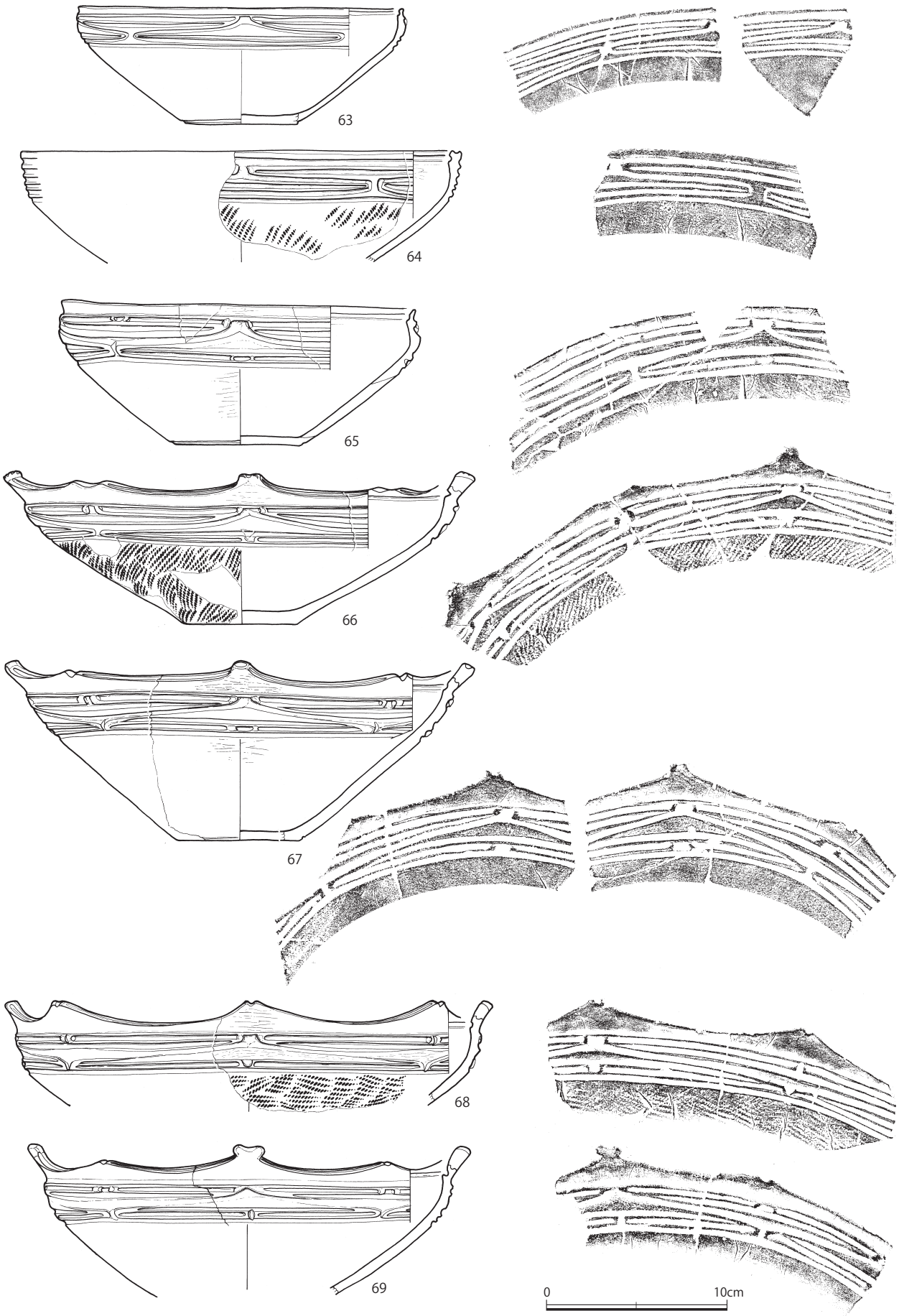
第 24 図　八幡堂遺跡出土土器⑤



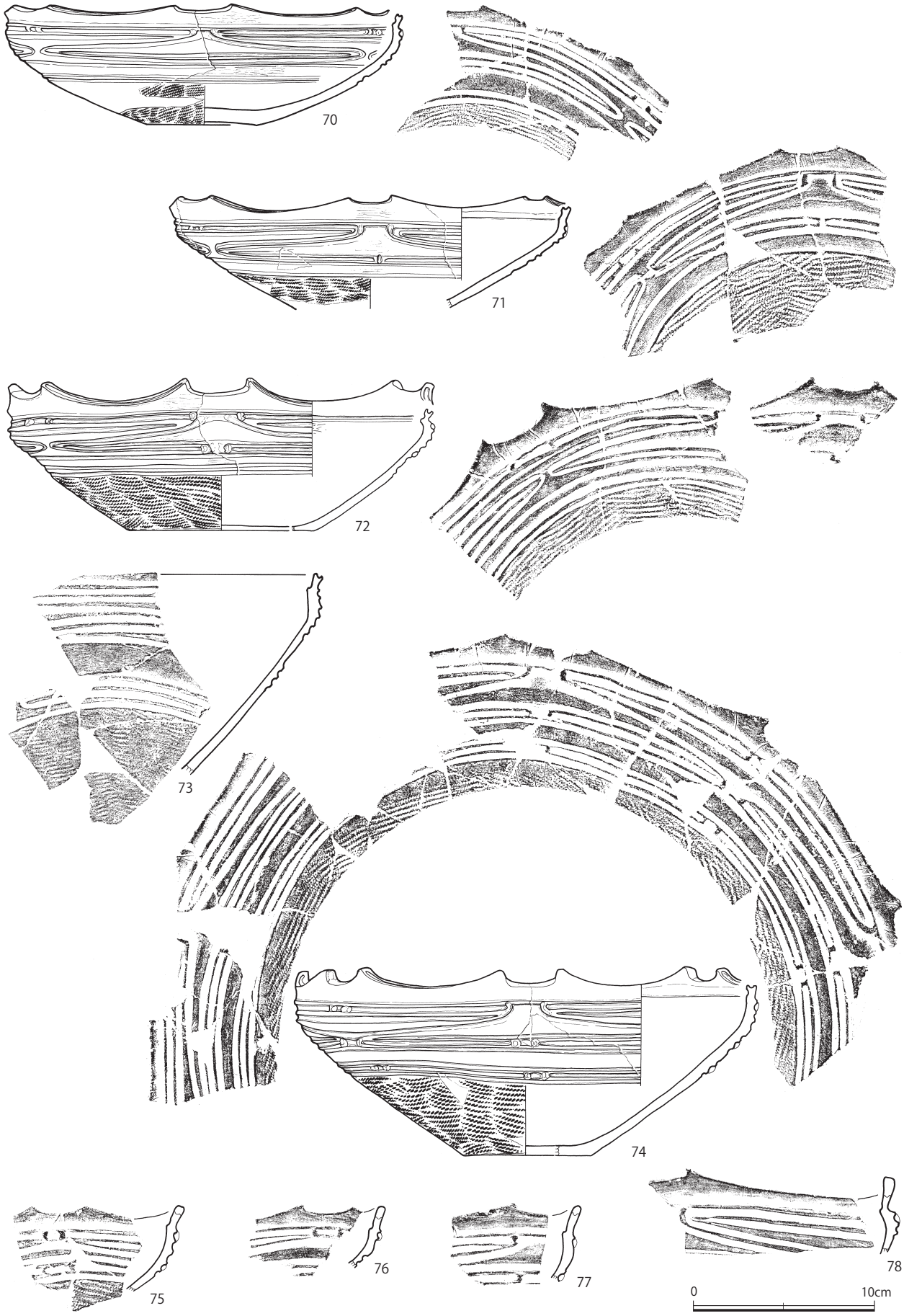
第 25 図　八幡堂遺跡出土土器⑥



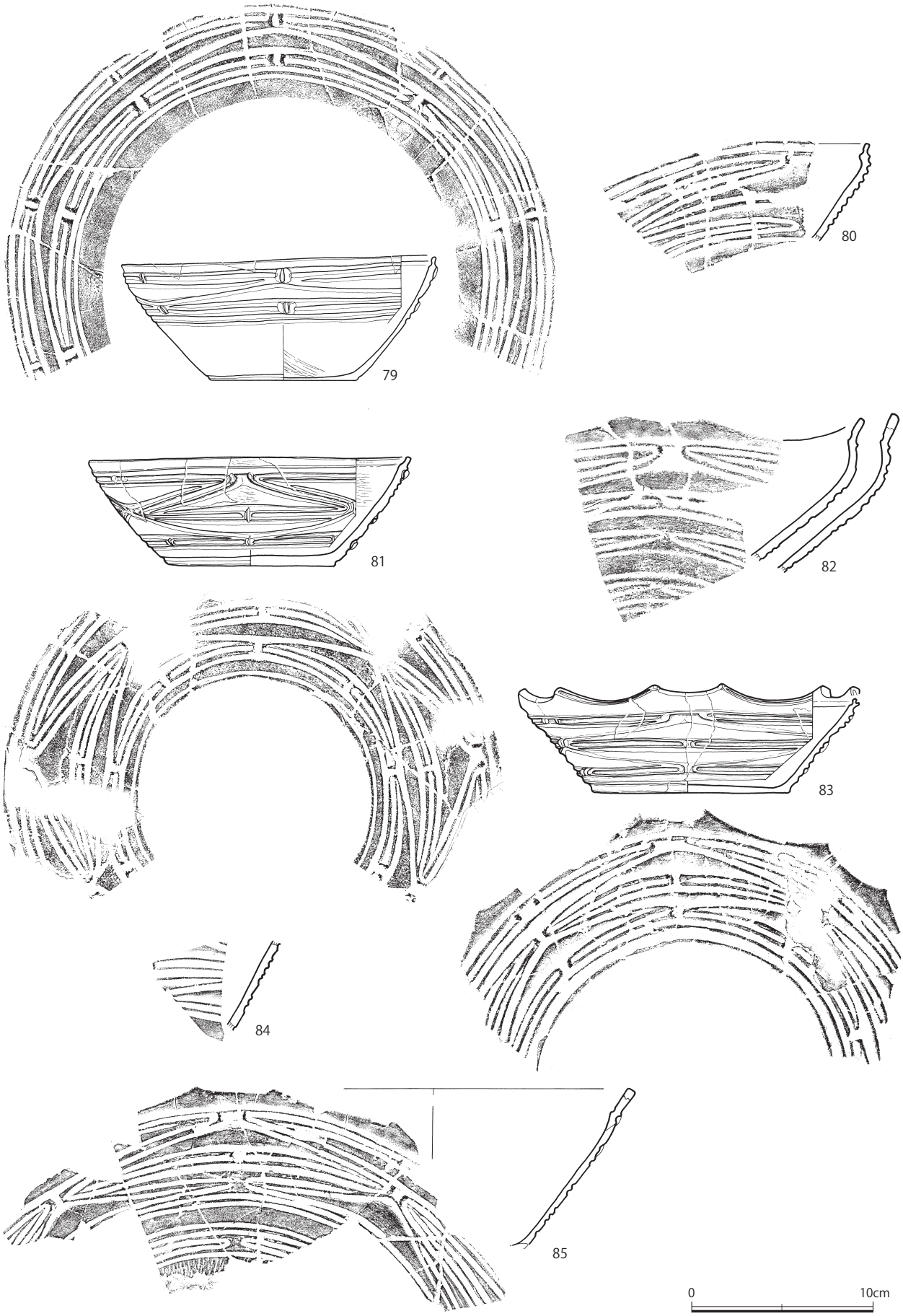
第 26 図　八幡堂遺跡出土土器⑦



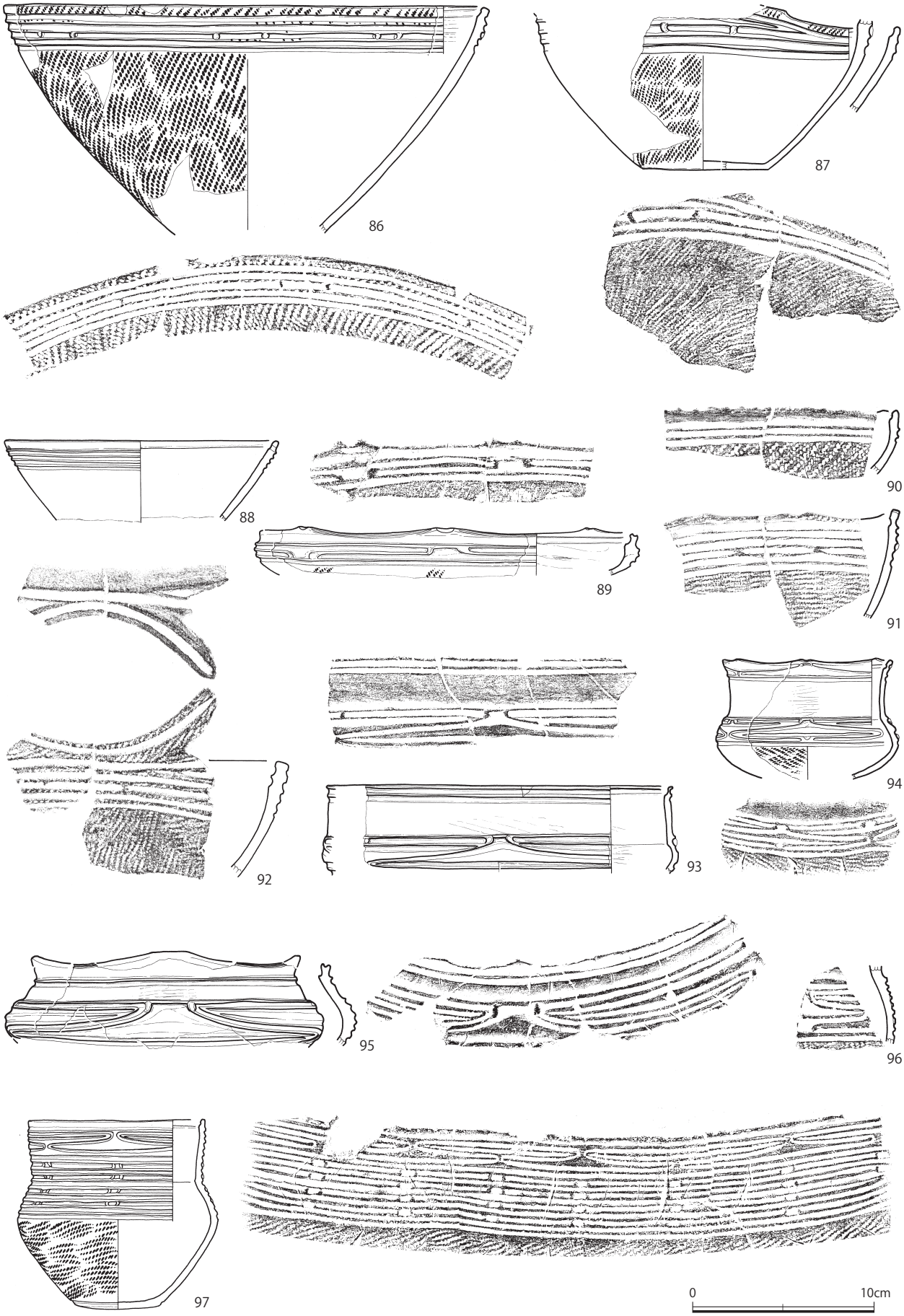
第 27 図　八幡堂遺跡出土土器⑧



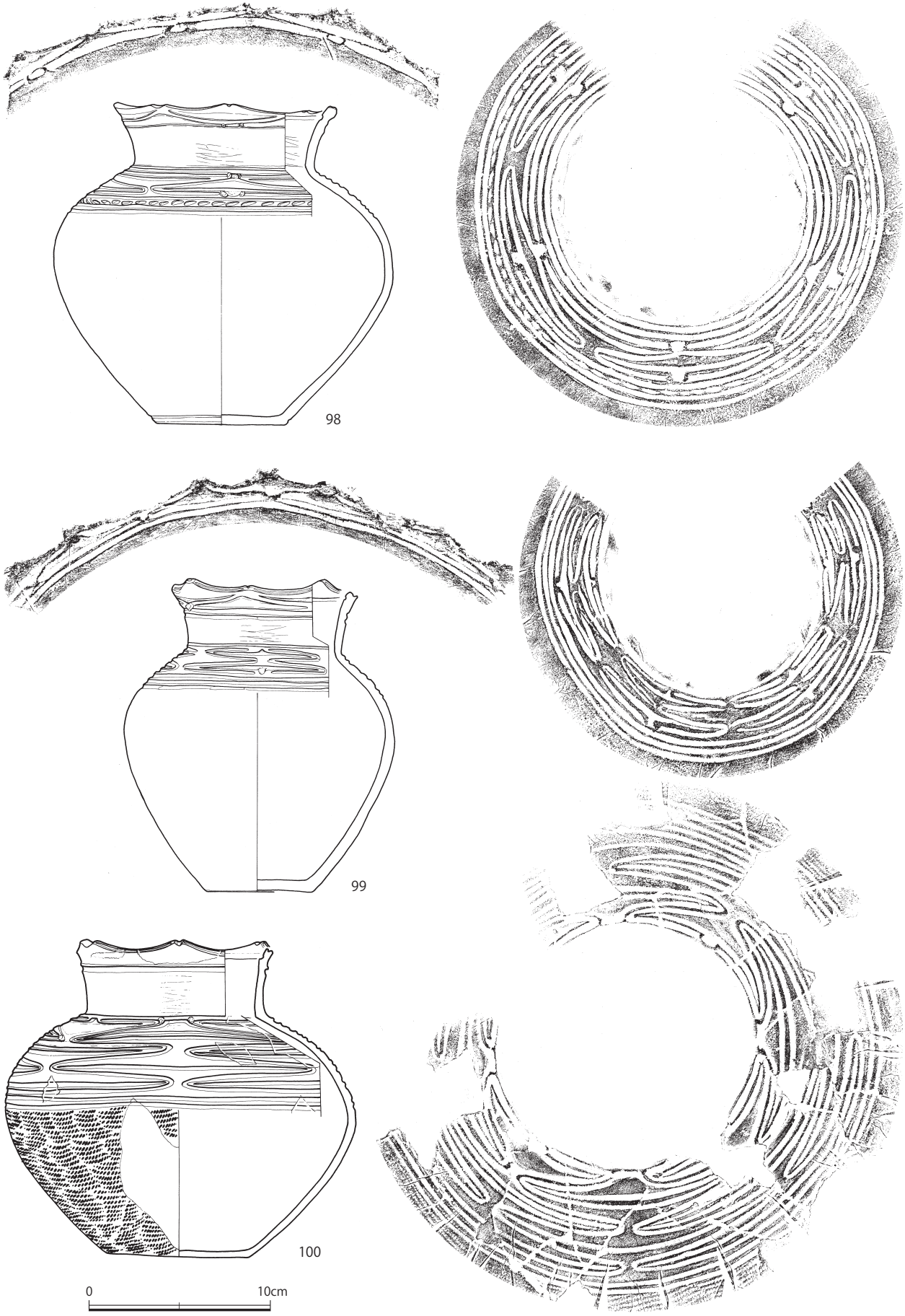
第 28 図　八幡堂遺跡出土土器⑨



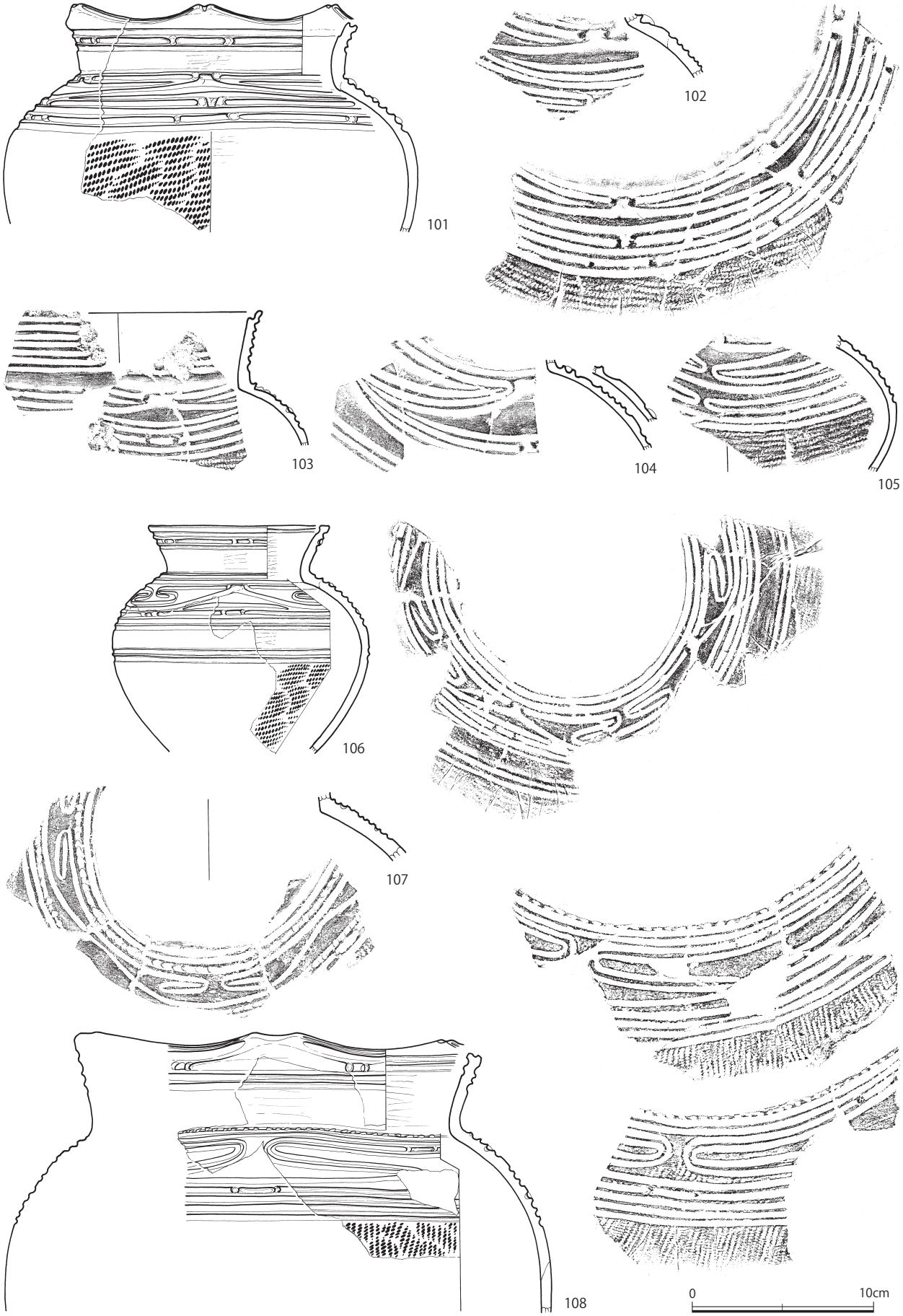
第 29 図　八幡堂遺跡出土土器⑩



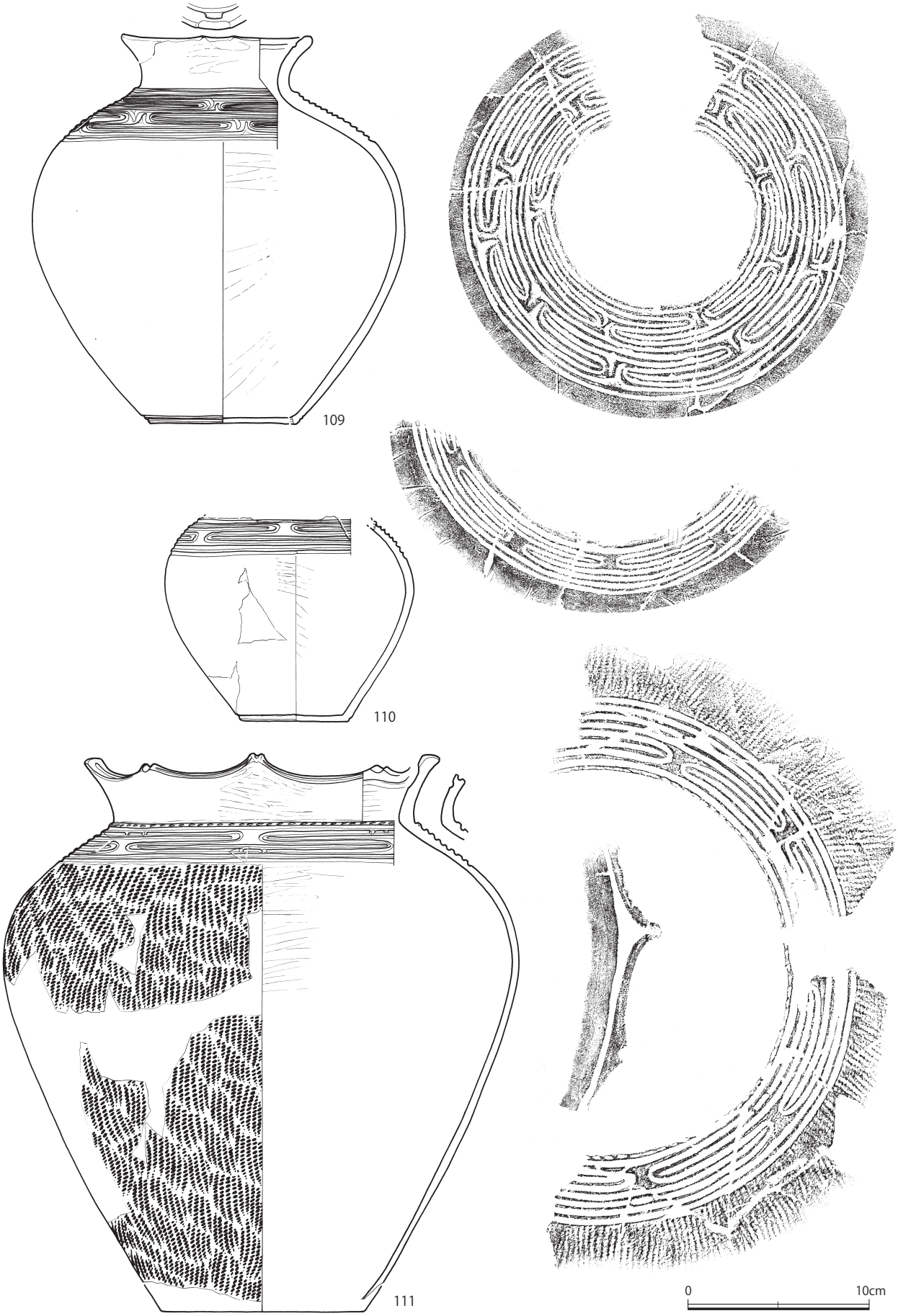
第 30 図　八幡堂遺跡出土土器⑪



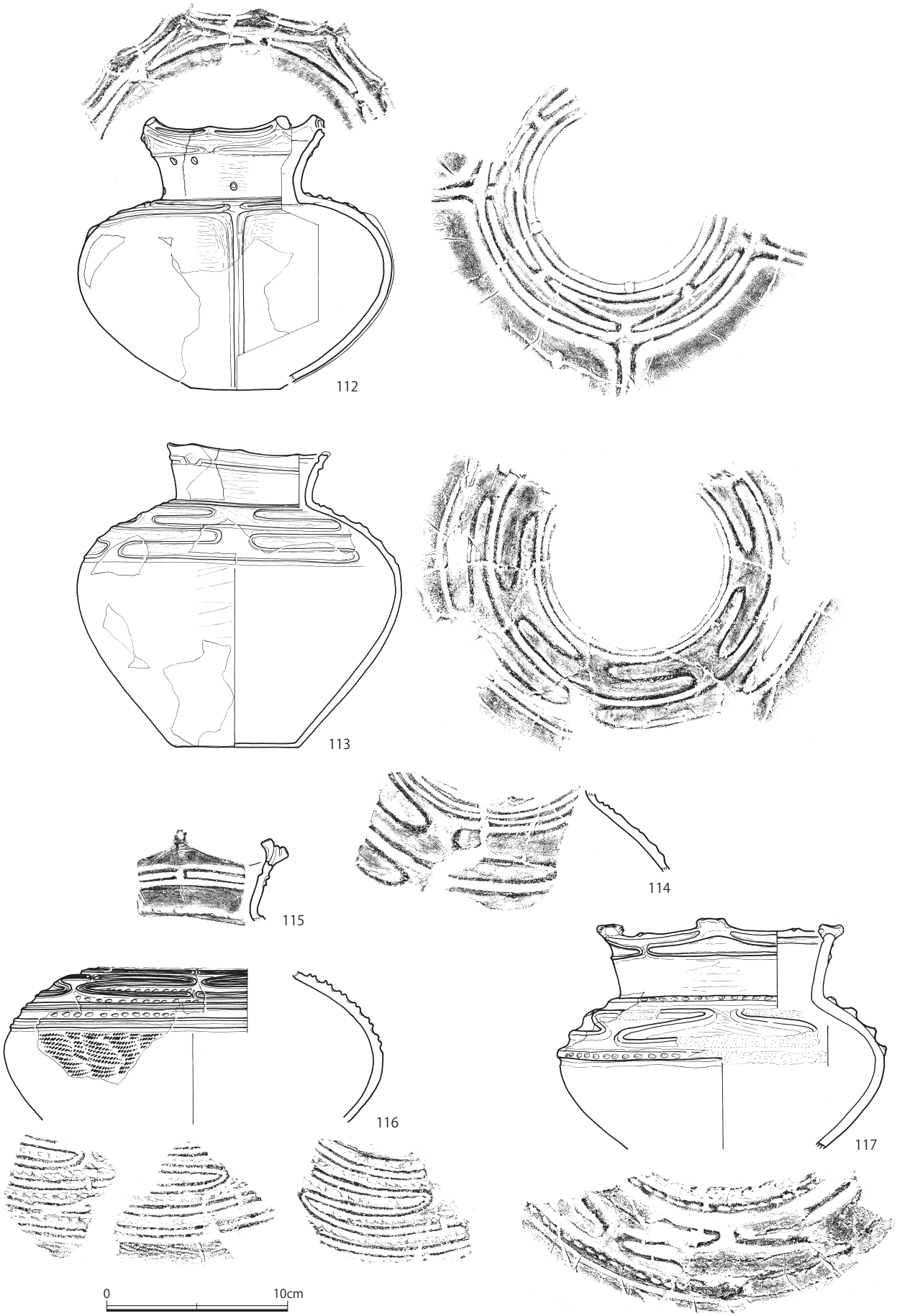
第 31 図　八幡堂遺跡出土土器⑫



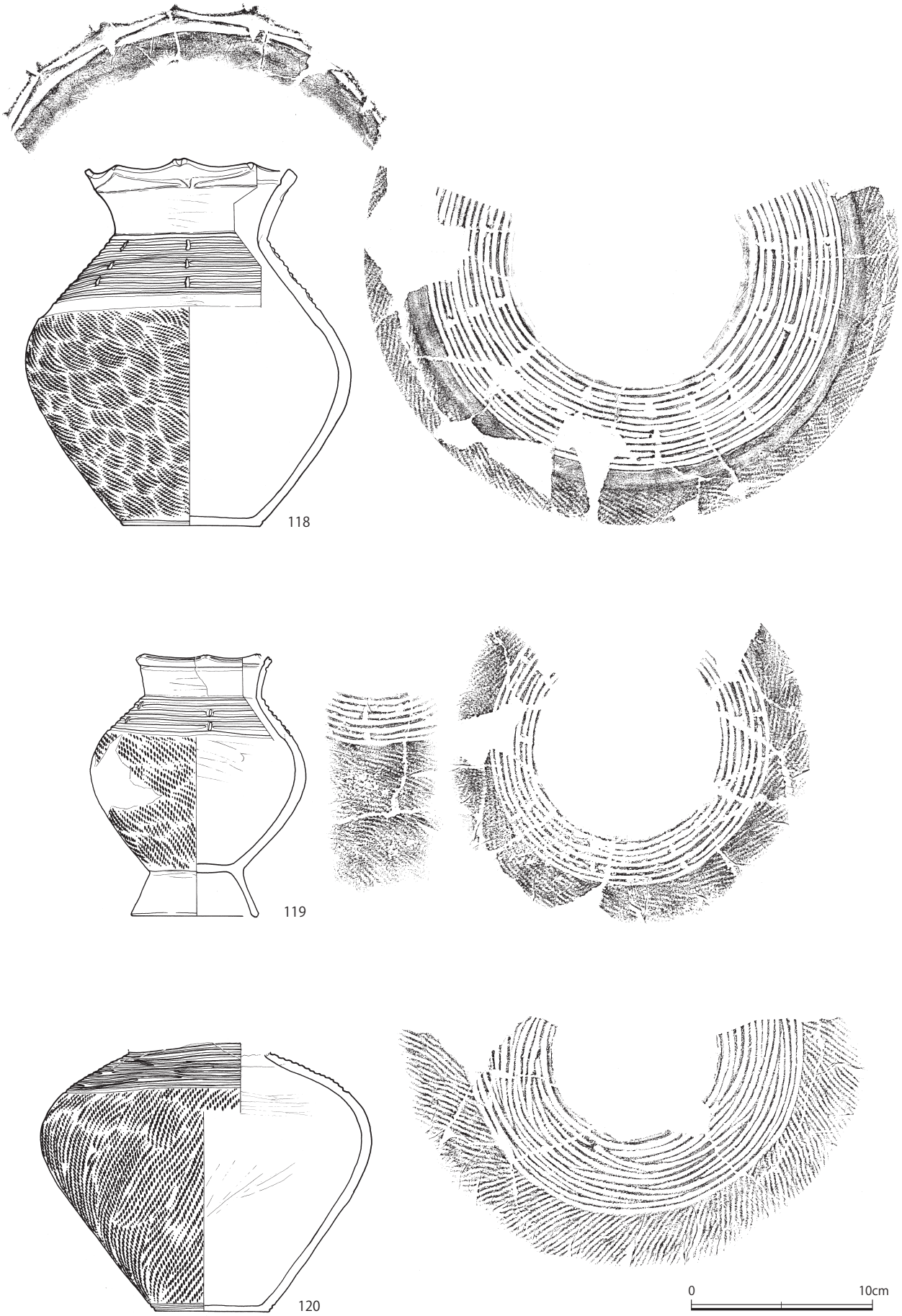
第 32 図　八幡堂遺跡出土土器⑬



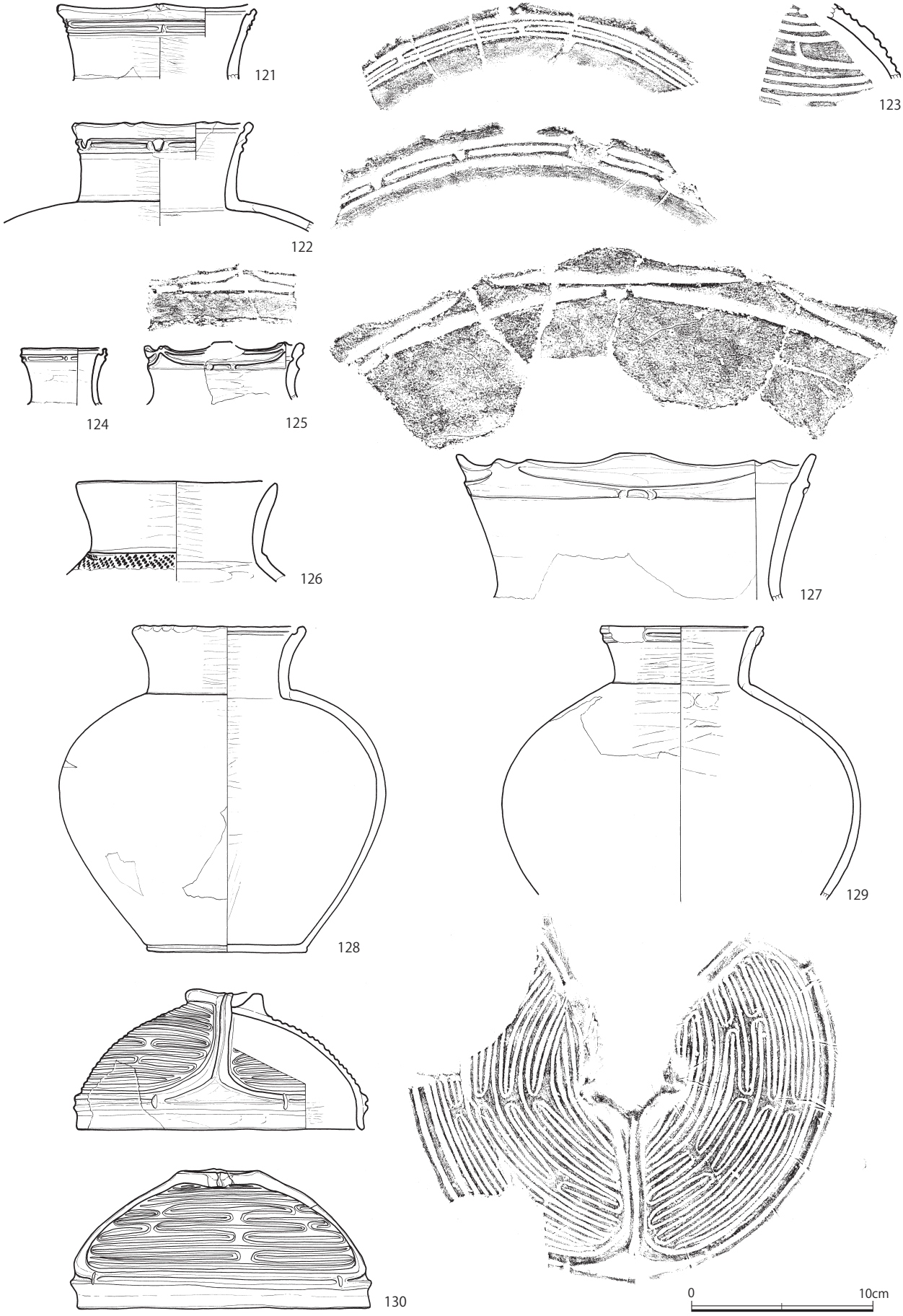
第 33 図　八幡堂遺跡出土土器⑭



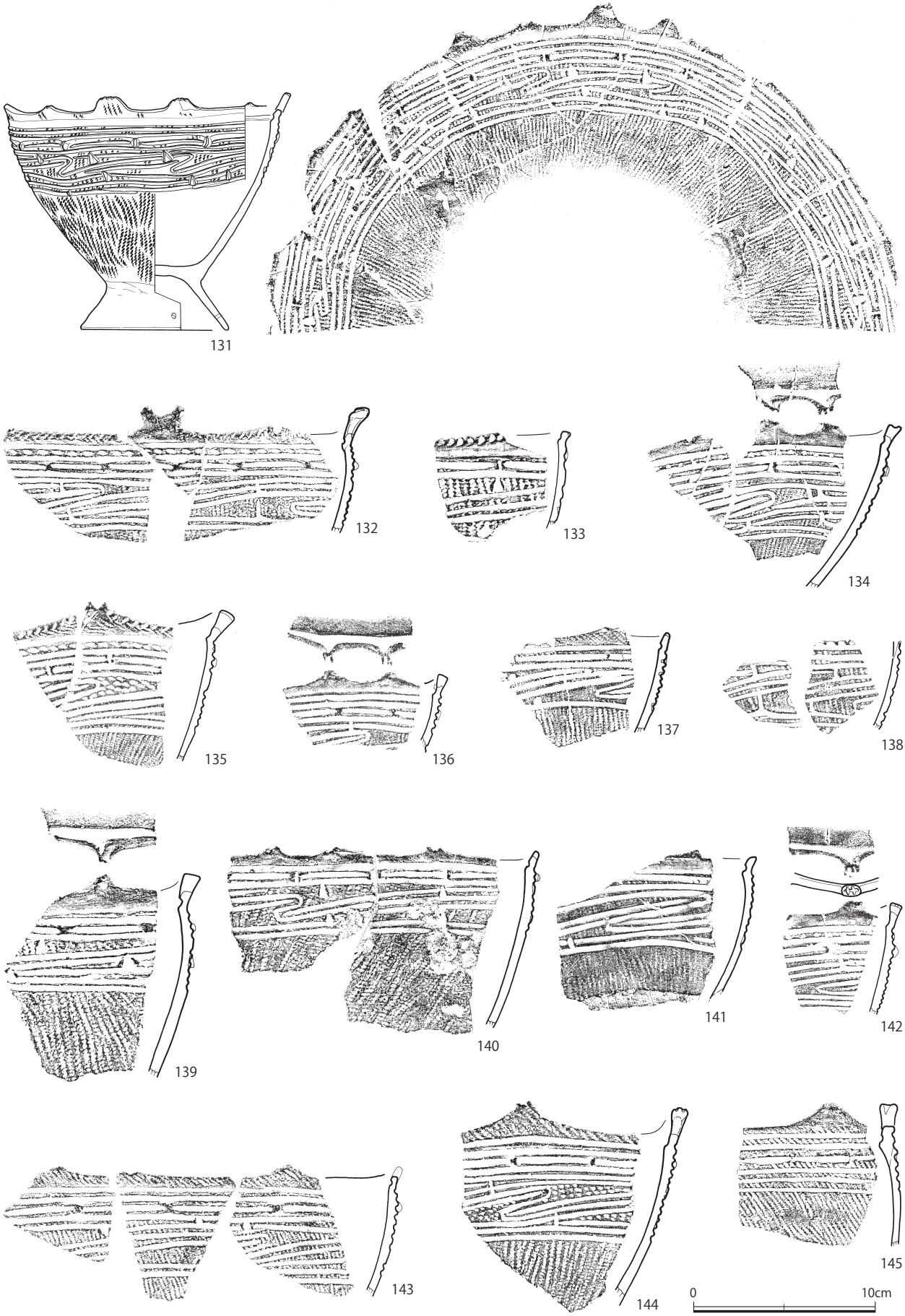
第 34 図　八幡堂遺跡出土土器⑮



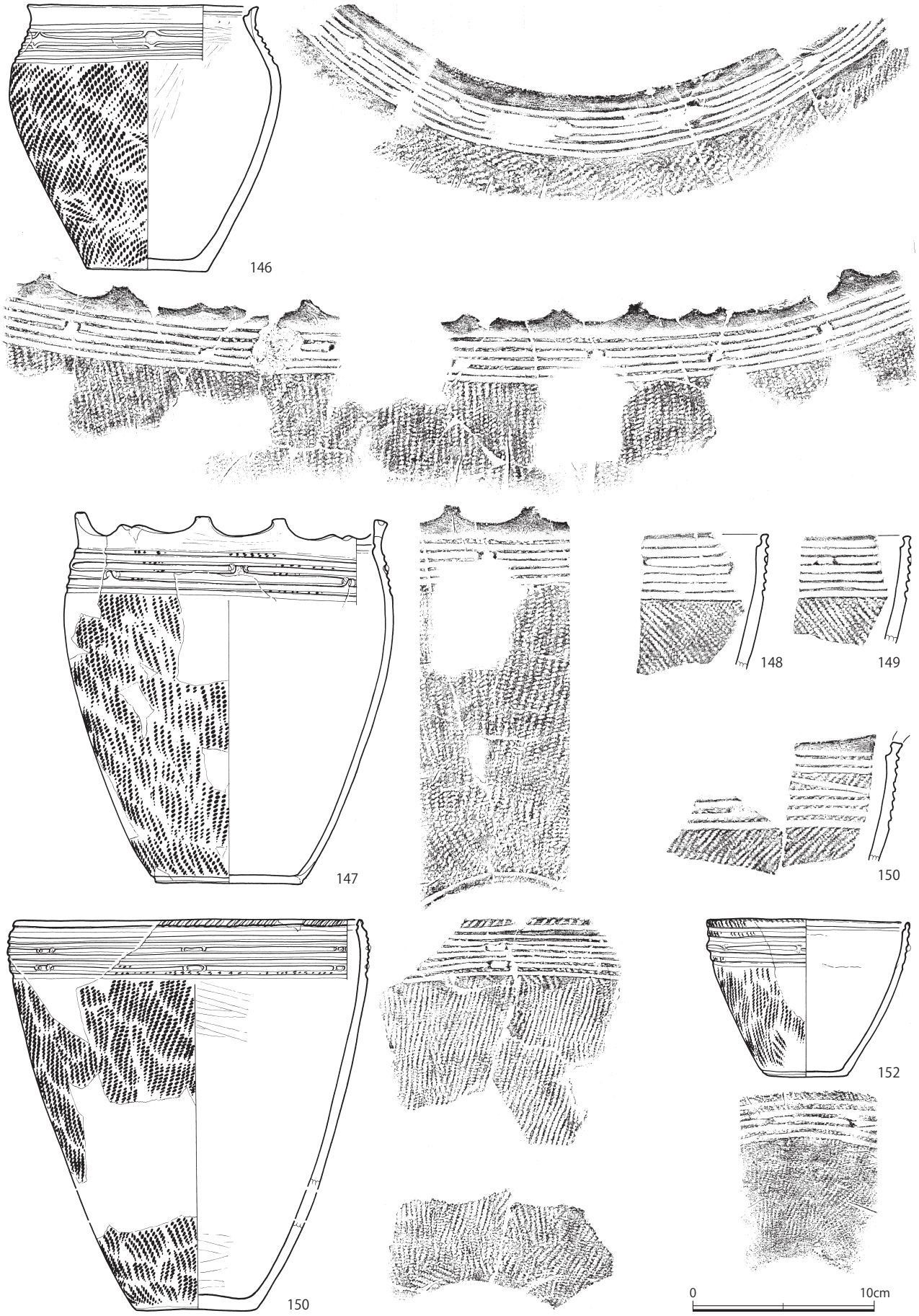
第 35 図　八幡堂遺跡出土土器⑯



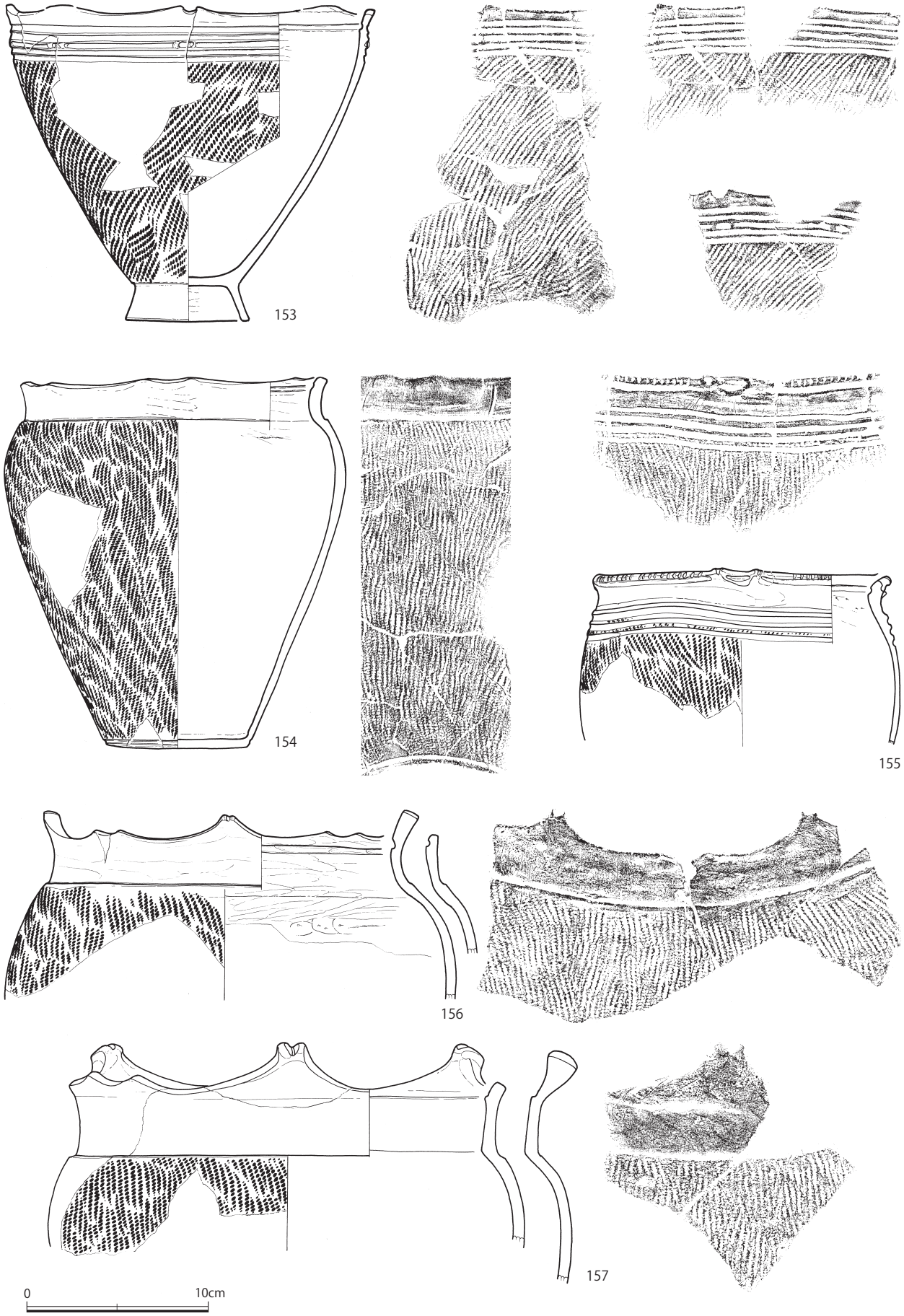
第 36 図　八幡堂遺跡出土土器⑰



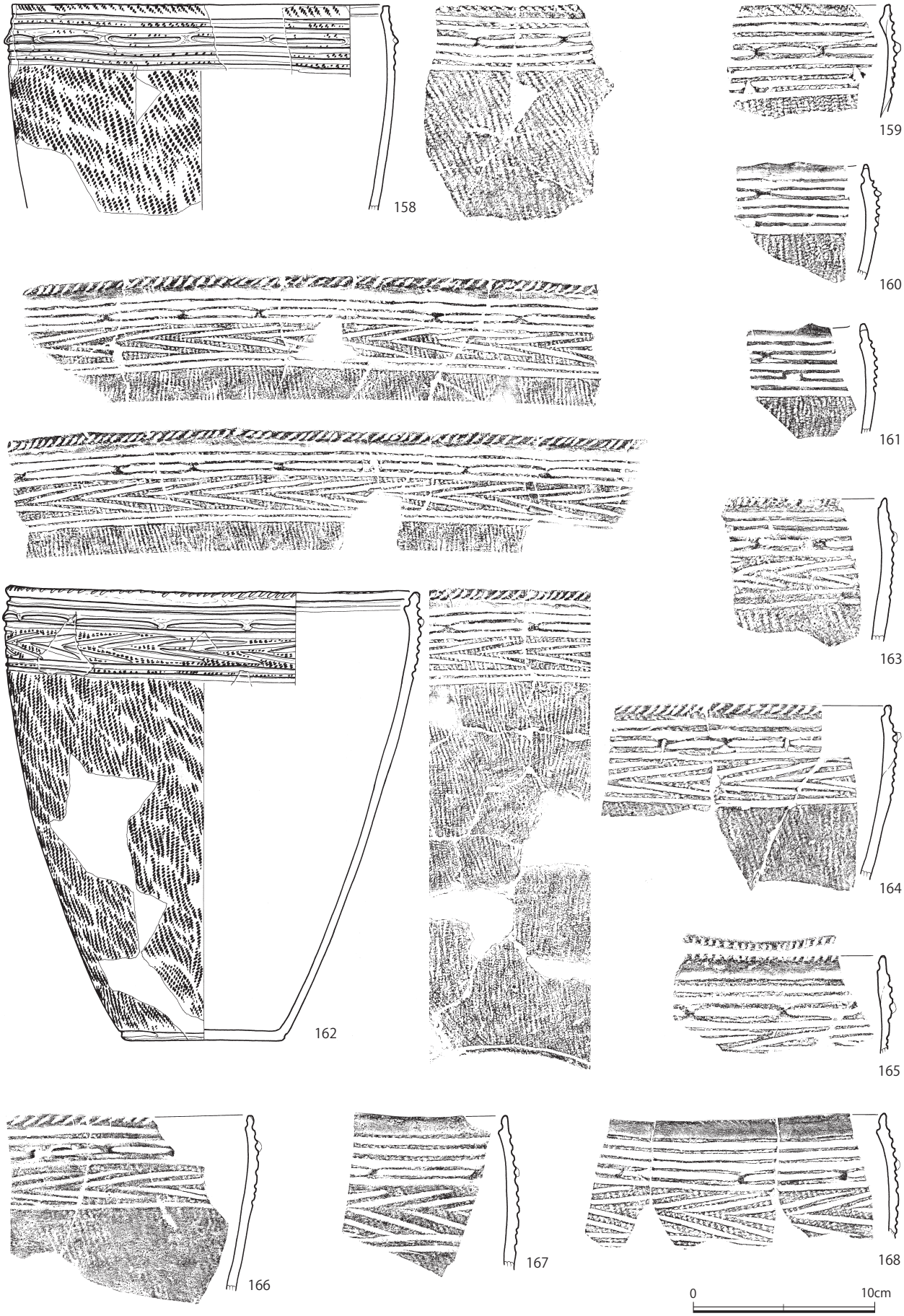
第 37 図　八幡堂遺跡出土土器⑱



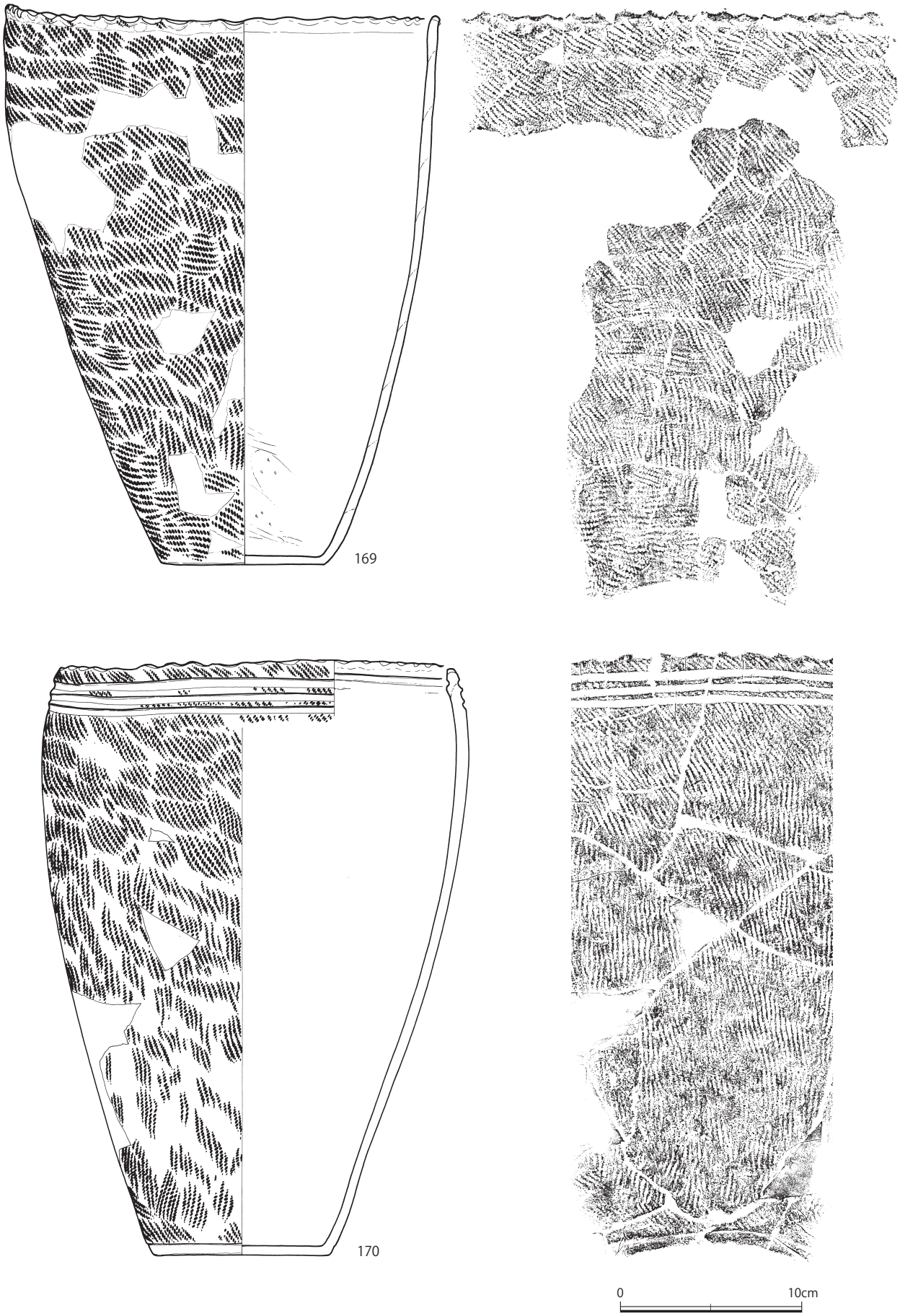
第 38 図　八幡堂遺跡出土土器⑲



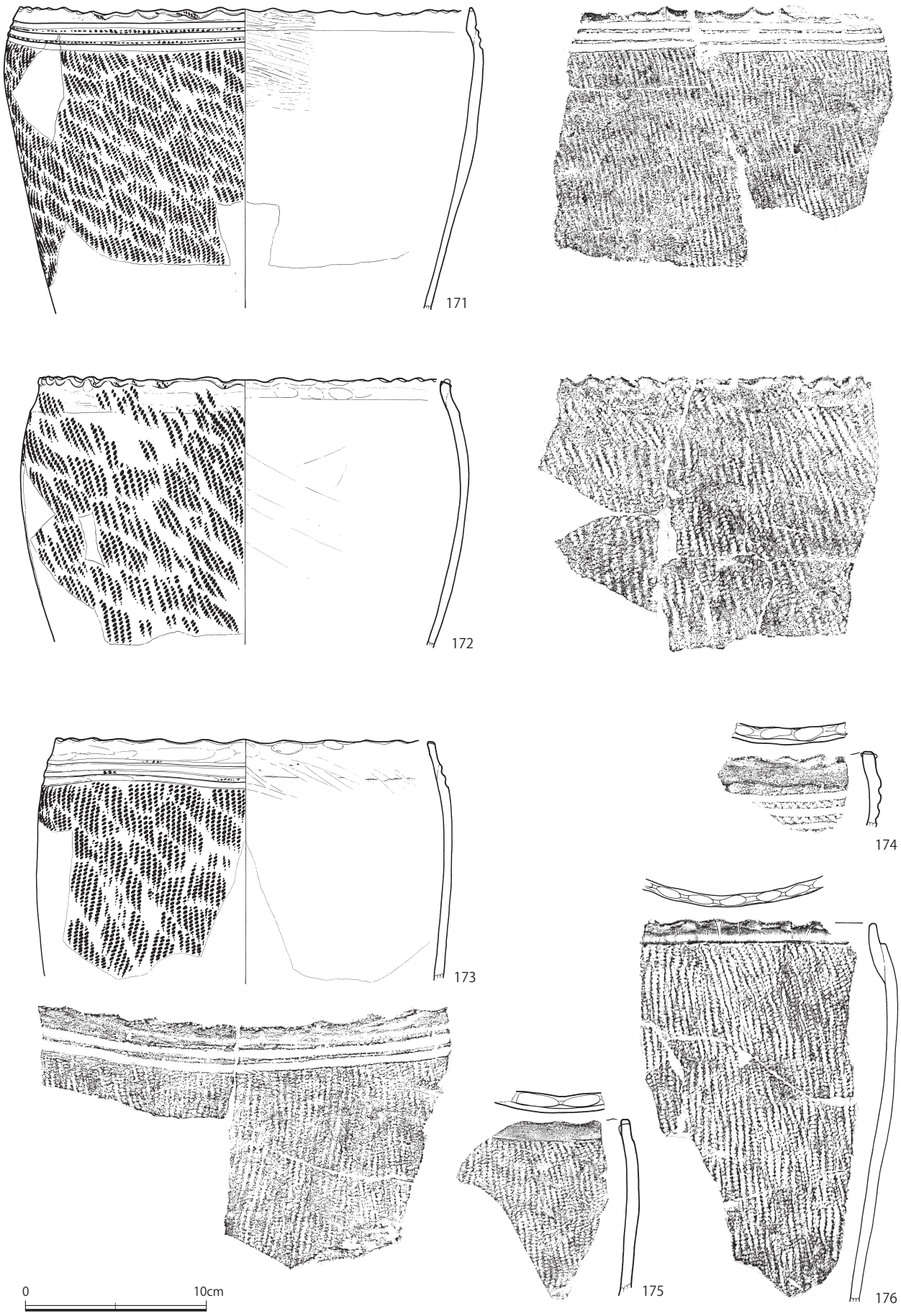
第 39 図　八幡堂遺跡出土土器⑳



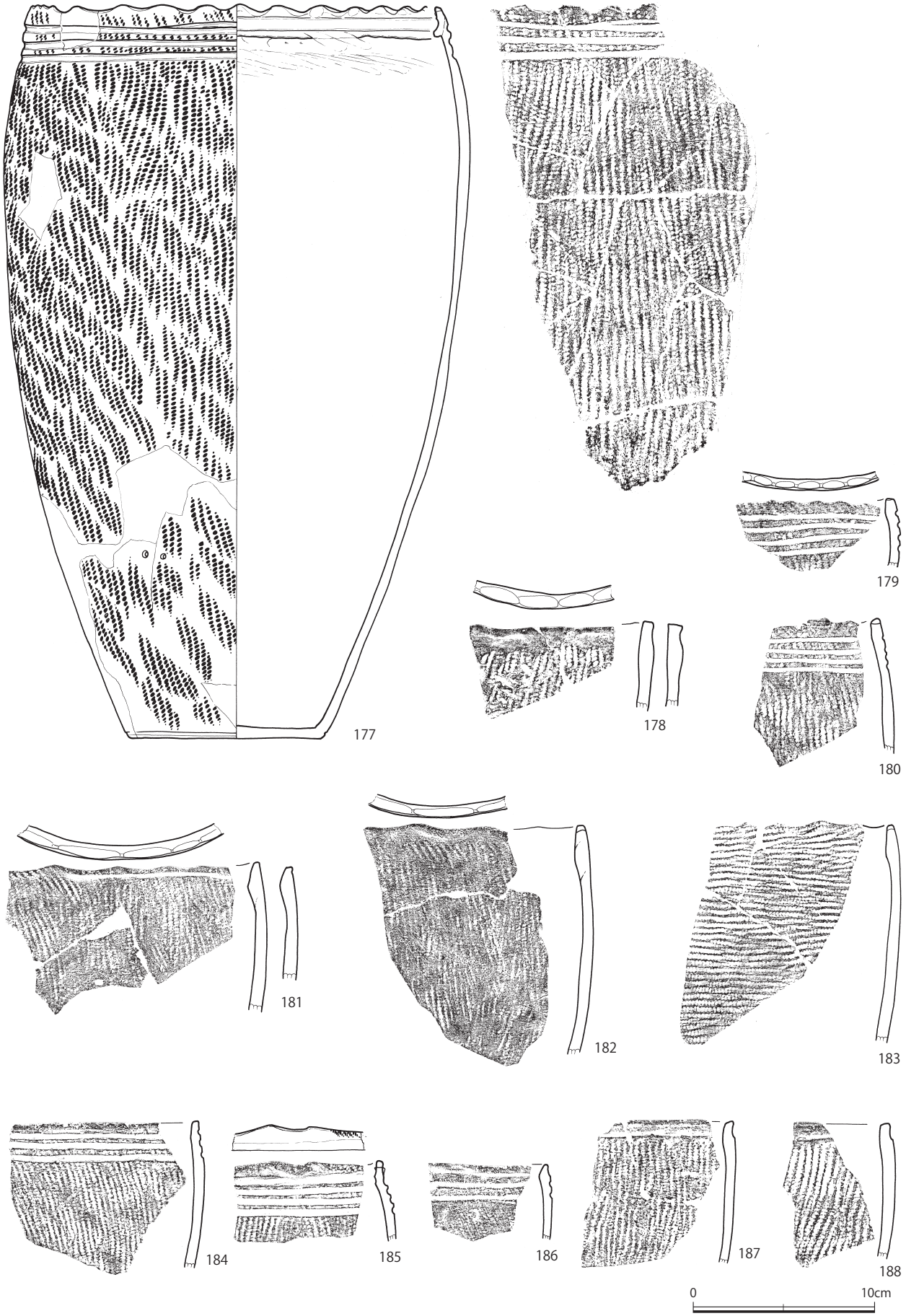
第 40 図　八幡堂遺跡出土土器㉑



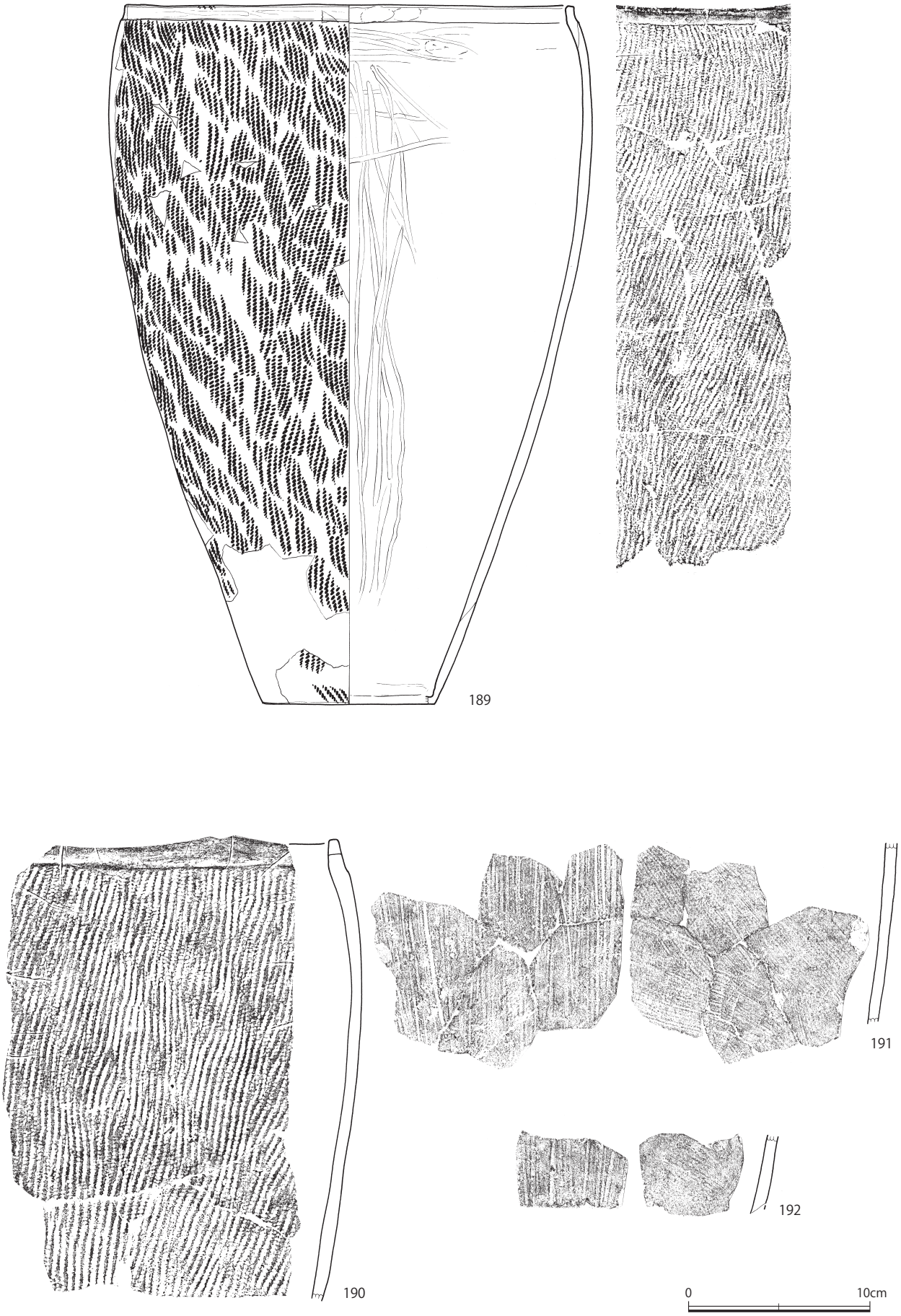
第 41 図　八幡堂遺跡出土土器㉒



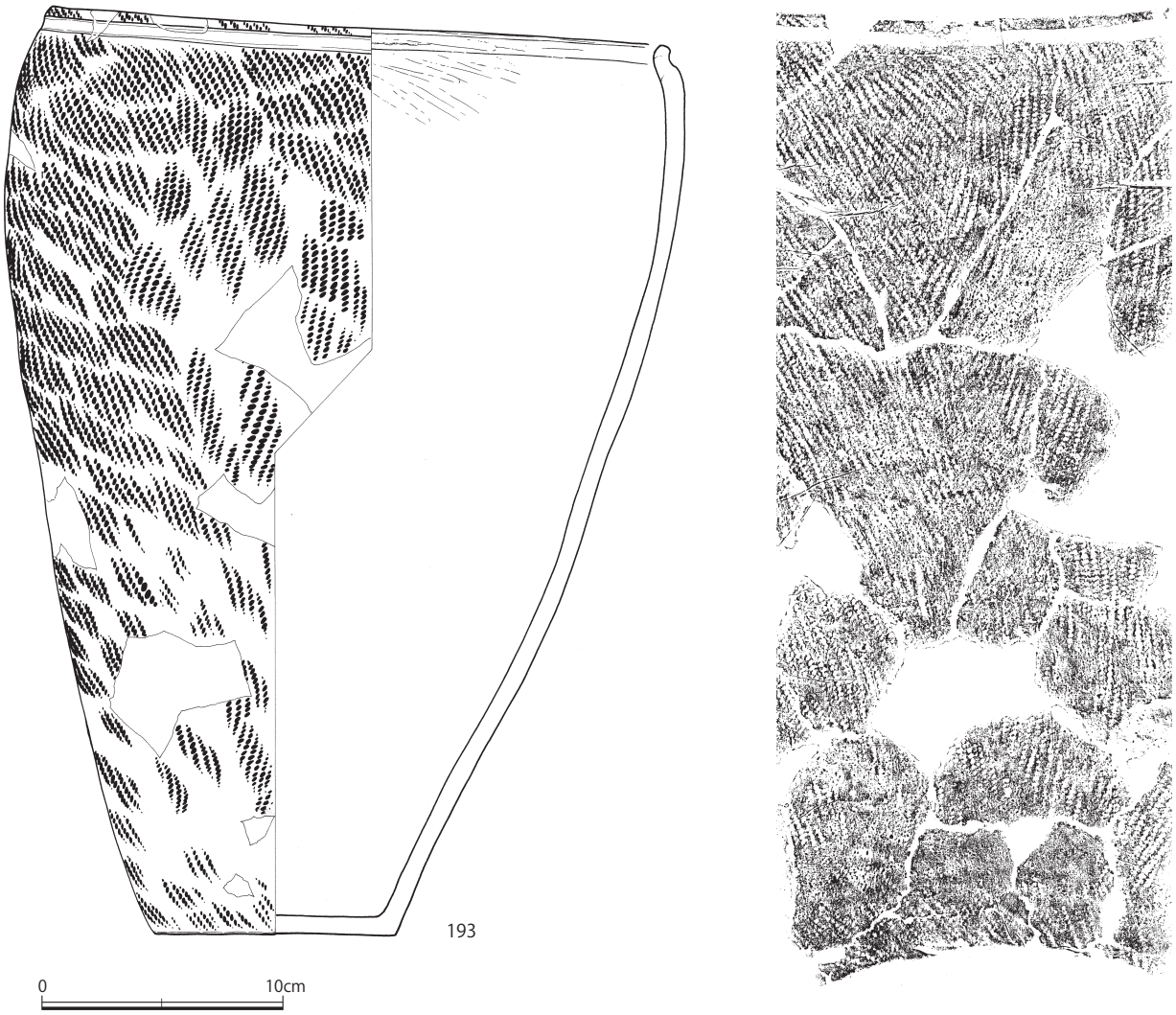
第 42 図　八幡堂遺跡出土土器㉓



第 43 図　八幡堂遺跡出土土器㉔



第 44 図　八幡堂遺跡出土土器㉕



第 45 図　八幡堂遺跡出土土器㉖

表２　八幡堂遺跡出土土器観察表

図	№	出土地点・層位・遺物番号	器　種	部　位	成　型	内面調整	施　文	胎　土	色　調	備　考
20	1	不明／C区中・黒土	台付浅鉢	口縁部～台部	接合面露呈せず	摩滅している、台部は丁寧なミガキ(横)	口唇部沈線、鉢部外面に RL→上半に変形工字文	0.3 mm程度の白色粒子を多量、黒色粒子やや多量	外面：明黄褐色（10YR6/6） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	工藤 1987 第３図 - 1
20	2	C区山側・黒土・123	台付浅鉢	口縁部～台部	接合面露呈せず	摩滅が著しいため不明瞭	口唇部沈線、鉢部外面に LR 横→上半に変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子多量、黒色粒子やや多量、金雲母少量	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：明黄褐色（10YR6/6）	馬淵・新井田川流域以南から搬入と考えられる。
20	3	A区山側・黒土	台付浅鉢	口縁部～台部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ(横)	口唇部突起、鉢部外面に変形工字文、RL 横との施文順序は不明	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量、ごく少量の繊維を含む	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/3）	外面、鉢部内面に黒色物質付着。
20	4	A区山側・黒土/C区山側・黒土	台付浅鉢	口縁部～台部	台部上部外周に鉢部との接合面露呈	ミガキ(横)	鉢部外面に RL→変形工字文→ミガキ、縄文は施文後のナデで節が半ば潰れる部分がある	0.3 mm程度の透明粒子、半透明粒子、黒色粒子やや多量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/3）	
21	5	C区山側・黒土	台付浅鉢	口縁部～台部	台部上部外周に鉢部との接合面露呈	摩滅が著しいため不明瞭	鉢部外面 LR→変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子、0.3 mm程度の赤褐色粒子少量、金雲母、海綿骨針微量	外面：橙色（7.5YR7/6） 内面：橙色（7.5YR7/6）	馬淵・新井田川流域以南から搬入と考えられる。
21	6	A区山側・黒土	台付浅鉢	口縁部～台部	接合面露呈せず	ミガキ(横)	鉢部外面 RL→変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子、透明粒子微量	外面：黄褐色（2.5Y5/4） 内面：黄褐色（10YR5/6）	沈線中に黒色物質、赤色顔料が付着。
21	7	C区山側・黒土/C区(A区近接)山側・黒土	台付浅鉢	口縁部～台部	胴部と台部に接合面３段露呈	ミガキ(横)	鉢部外面 LR→変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、黒色粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/4）	沈線周辺に赤色顔料付着
21	8	C区山側・黒土	台付浅鉢／浅鉢	口縁部～台部	外傾接合面１段露呈	ミガキ(横)	口唇部沈線、鉢部外面に LR 横→変形工字文、口縁部突起に沿う内面沈線が突起頂部に至る	0.2 mm程度の透明粒子、黒色粒子微量。	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	
21	9	A区山側・黒土／A区西半・黒土	台付浅鉢／浅鉢	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ(横)	変形工字文	0.2 mm程度の透明粒子、黒色粒子微量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	外面に黒色物質が薄く付着。
21	10	A区山側・黒土	台付浅鉢／浅鉢	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ(横)	変形工字文	0.2 mm程度の透明粒子、黒色粒子微量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/3）	外面に黒色の層が薄く付着。
21	11	C区山側・黒土・番号なし	台付浅鉢	口縁部～台部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ(横)	口唇部沈線、口縁部突起に沿う沈線、鉢部外面に LR 横→変形工字文、口縁部突起に沿う沈線	0.2 mm程度の透明粒子、黒色粒子微量	外面：にぶい橙色（7.5YR6/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/2）	沈線中に赤色顔料が付着。鈴木・林編 1981 - 119。平面図に記載があるが、番号がない。
22	12	C区山側・黒土・115	台付浅鉢	口縁部～台部	接合面１段露呈	丁寧なミガキ(横)	鉢部外面に LR 横→変形工字文、口縁部突起に沿う内面沈線が突起頂部に至る、縄文は施文後のナデで節が半ば潰れ	0.2 mm程度の透明粒子、黒色粒子やや多量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/4）	沈線中に赤色顔料付着。
22	13	C区山側・黒土	台付浅鉢／浅鉢突起	口縁部	接合面露呈せず	ナデ→粗いミガキ(横)	変形工字文	0.3 mm程度の白色粒子、灰色粒子がやや多量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/4） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	外面に赤色顔料付着。14 と同一個体の可能性がある。
22	14	C区山側・黒土	台付浅鉢／浅鉢突起	口縁部	接合面露呈せず	ナデ→粗いミガキ(横)	変形工字文	0.3 mm程度の白色粒子、灰色粒子がやや多。	外面：にぶい黄橙色（10YR7/4） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	13 と同一個体の可能性がある。
22	15	C区山側・黒土	台付浅鉢／浅鉢突起	口縁部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ(横)	丁寧なミガキ(横)	0.3 mm程度の白色粒子、灰色粒子がやや多量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：灰黄褐色（10YR4/2）	
22	16	C区山側・黒土	台付浅鉢／浅鉢突起	口縁部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ(横)	変形工字文	0.3 mm程度の白色粒子、灰色粒子がやや多量	外面：にぶい橙色（7.5YR6/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/2）	
22	17	C区山側・黒土・109-200	台付浅鉢／浅鉢	口縁部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ(横)	ＬＲ→ミガキ、変形工字文	0.1 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/4）	外面に黒色物質付着。19 と同一個体。32 と同一個体の可能性がある。
22	18	A区海側・黒土／C区山側・黒土／C区（A近接）・黒土	台付浅鉢／浅鉢	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ(横)	ＲＬ→変形工字文	0.3 mm程度の白色粒子、灰色粒子がやや多量	外面：にぶい橙色（7.5YR6/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/2）	沈線中に黒色物質、厚い赤色顔料が付着。
22	19	A区山側・黒土／C区山側・黒土	台付浅鉢／浅鉢突起	口縁部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ(横)	ＬＲ→ミガキ、変形工字文	0.1 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/4）	17 同一個体。32 と同一個体の可能性がある。他に接合しない破片が４点ある。
22	20	D区山側・黒土	台付浅鉢	口縁部～胴部	接合面１段露呈	ミガキ	ＬＲ→変形工字文→ミガキ	0.2 mm程度の白色粒子、透明粒子少量、海綿骨針含む	外面：灰黄褐色（10YR5/2） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	接合しない破片が１点ある。
22	21	C区山側・黒土・200	台付浅鉢	口縁部～台部	接合面１段露呈	ミガキ(横)	LR→変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：灰黄褐色（10YR5/2） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	全面に黒色物質付着。
22	22	不明	台付浅鉢	口縁部～台部	接合面露呈せず	口縁部ナデ、頸部ケズリ(横)→ミガキ(横)	ＬＲ、変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：灰黄褐色（10YR5/2） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	土器集中写真に同一個体の可能性があるものがあるが確認できない。
23	23	A区山側・黒土/C区山側・黒土	台付浅鉢	口縁部～台部	台部上部外周に鉢部との接合面露呈	丁寧なミガキ(横)	変形工字文	0.1 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/4）	鉢部と台部は接合しないものを合成して作図。12 箇所の補修孔が現存し、うち４箇所は対をなしている。

図	No.	出土地点・層位・遺物番号	器　種	部　位	成　型	内面調整	施　文	胎　土	色　調	備　考
23	24	D 区・黒土	台付浅鉢	口縁部～台部	台部上部外周に鉢部との接合面露呈	丁寧なミガキ (横)	LR →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	台部内面に黒色物質付着。台部が二次焼成によりやや歪む。
23	25	C 区山側・黒土・105・114	台付浅鉢	口縁部～台部	接合面露呈せず	全面に摩滅が著しい	LR →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：橙色（5YR6/6） 内面：暗灰黄色（2.5Y5/2）	沈線中に赤色顔料付着。全体に二次焼成による歪みが激しい。
23	26	C 区山側・黒土	台付浅鉢	口縁部～台部	接合面露呈せず	鉢部内面ナデ、台部内面ナデ	RL、工字文	0.3 mm程度の白色粒子、灰色粒子がやや多量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/3）	沈線中に赤色顔料付着。
23	27	A 区山側・黒土	台付浅鉢	胴部～台部	接合面露呈せず	鉢部内面ナデ、台部内面ナデ	RL、工字文	0.3 mm程度の白色粒子、灰色粒子がやや多量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/2）	沈線中に赤色顔料付着。
23	28	A 区山側・黒土	台付浅鉢	台部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	ミガキ（横）	0.2 mm程度の透明粒子、黒色粒子微量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/4） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	
23	29	C 区山側・黒土	台付浅鉢	台部	接合面 1 段露呈	ミガキ (横)	ミガキ（横）	0.2 mm程度の透明粒子、黒色粒子微量	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：灰黄褐色（10YR4/2）	
23	30	C 区山側・黒土	台付浅鉢	台部	接合面 1 段露呈	ミガキ (横)	ミガキ（横）	0.2 mm程度の透明粒子、黒色粒子微量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：黒褐色（10YR3/1）	
23	31	C 区山側・黒土	台付浅鉢	台部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	ミガキ（横）	0.1 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：褐灰色（10YR5/1）	
23	32	C 区山側・黒土	台付浅鉢	台部	台部上部外周に鉢部との接合面露呈	丁寧なミガキ (横)	鉢部内面に円文、台部に工字文	0.1 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	17・19 と同一個体の可能性がある。
23	33	C 区山側・黒土	台付浅鉢	胴部～台部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	台部に刺突	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい橙色（7.5YR6/4） 内面：にぶい橙色（7.5YR6/4）	脚部の透かしは 6 単位前後とみられる。
24	34	A 区山側・黒土 /A 区海側・黒土 /C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	LR →変形工字文	0.3 mm程度の白色粒子多量、黒色粒子やや多量	外面：橙色（5YR6/6） 内面：明赤褐色（5YR5/6）	全面に斑状の剥離がみられる。馬淵・新井田川流域以南から搬入と考えられる。
24	35	C 区山側・黒土・122	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	LR →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、黒色粒子少量、黒雲母少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	接合しない破片が 1 点ある。馬淵・新井田川流域以南から搬入と考えられる。
24	36	C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子を多量、黒色粒子やや多量、海綿骨針少量	外面：暗褐色（7.5YR3/4） 内面：暗褐色（7.5YR3/4）	外面に黒色物質付着。
24	37	C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/3）	全面に黒色物質が付着。
24	38	A 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ナデ	R L →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子を多量、黒色粒子やや多量、海綿骨針少量	外面：灰黄褐色（10YR4/2） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/3）	接合しない破片が 2 点ある。
24	39	B 区・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ナデ	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子を多量、黒色粒子やや多量、海綿骨針少量	外面：暗褐色（10YR3/3） 内面：灰黄褐色（10YR5/2）	
24	40	C 区山側・黒土 / C 05	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	R L →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子を多量、黒色粒子やや多量、海綿骨針少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：橙色（7.5YR6/6）	接合しない破片が 3 点ある。
24	41	C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
24	42	A 区 (C 区近接) 山側・黒土 /C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	全面に摩滅が著しい	RL →変形工字文	0.3 mm程度の白色粒子を多量、黒色粒子やや多量	外面：橙色（7.5YR6/6） 内面：橙色（7.5YR6/6）	口縁部に植物の葉の圧痕がある。
24	43	A 区山側・黒土 / A 区海側・黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面 1 段露呈	ミガキ (横)	RL →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：橙色（7.5YR6/6） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
24	44	不明	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/3） 内面：灰黄褐色（10YR6/2）	
24	45	B 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子、透明粒子やや多量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	
24	46	C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	沈線中に赤色顔料付着。
25	47	C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面 1 段露呈	ミガキ (横)	RL →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子を多量、黒色粒子やや多量、海綿骨針少量	外面：黒褐色（10YR3/1） 内面：灰黄褐色（10YR6/2）	外面に黒色物質付着。
25	48	C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～台部	接合面露呈せず	ナデ (横)	RL →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子を多量、黒色粒子やや多量、海綿骨針少量		
25	49	A 区・黒土褐色	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	摩滅が著しいため不明瞭	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、黒色粒子少量。	外面：にぶい黄橙色（10YR7/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/4）	
25	50	C 区山側・黒土 /C05・105	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ナデ→ミガキ (横)	L R →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子、金雲母微量。	外面：橙色（5YR6/6） 内面：明赤褐色（5YR5/6）	外面に赤色顔料が付着。馬淵・新井田川流域以南から搬入と考えられる。他に接合しない破片 5 点。
25	51	C 区山川・黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	RL →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	外面に黒色物質付着。

図	No.	出土地点・層位・遺物番号	器　種	部　位	成　型	内面調整	施　文	胎　土	色　調	備　考
25	52	A 区 (C 区近接) 山側・黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	ミガキ	ＲＬ→変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子、透明粒子やや多量	外面：灰黄褐色（10YR4/2） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/3）	外面に赤色顔料が付着。
25	53	C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	ＬＲ→変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、黒色粒子少量、黒雲母少量	外面：橙色（7.5YR6/6） 内面：灰褐色（7.5YR4/1）	馬淵・新井田川流域以南から搬入と考えられる。補修孔がある。
25	54	D 区・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面１段露呈	ナデ	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子を多量、黒色粒子やや多量	外面：橙色（7.5YR6/8） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/2）	
25	55	A 区・黒土 / A 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	摩滅が著しいため不明瞭	ＲＬ→変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子、黒色粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：灰黄褐色（10YR5/2）	
25	56	A 区西半・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子を多量、黒色粒子やや多量、海綿骨針多量	外面：黄橙色（10YR8/8） 内面：黄橙色（10YR8/8）	黒色物質の上に赤色顔料が付着。
25	57	A 区 (C 区近接) 山側・黒土、C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子、黒色粒子少量	外面：明黄褐色（10YR6/6） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/4）	
25	58	A 区海側・黒土	浅鉢	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子、黒色粒子少量	外面：明黄褐色（10YR6/6） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/4）	
26	59	C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面２段露呈	ミガキ (横)	RL →変形工字文	0.4 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子多量。	外面：灰褐色 (10YR4/2) 内面：灰褐色 (10YR4/2)	
26	60	A 区海側・黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	ナデ	変形工字文	0.3 mm程度の透明粒子、0.2 mm程度の黒色粒子やや多量、白色粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	外面に黒色物質付着。
26	61	C 区山側・黒土・122	浅鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	RL →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：灰黄褐色（10YR5/2）	外面と口縁部内面に黒色物質付着、沈線中に赤色顔料付着。土器集中部写真で 122 とともに写る。
26	62	A 区山側・黒土 /C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	変形工字文	0.4 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子多量、黒色物質少量。	外面：にぶい黄褐色（10YR5/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/4）	沈線中に赤色顔料付着。
27	63	A 区山側・黒土 / A 区西半・黒土 / C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	全面にハケ目状の痕跡をもった黒色物質が付着。他に接合しない破片５点。
27	64	A 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ	LR →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色 (10YR7/2) 内面：にぶい褐色（7.5YR6/4）～ にぶい黄橙色 (10YR7/2)	全面に黒色物質付着。
27	65	C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面１段露呈	丁寧なミガキ (横)	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	全面に黒色物質付着。
27	66	D 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	ＬＲ→変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：明褐色（7.5YR5/8） 内面：明褐色（7.5YR5/6）	外面に黒色物質付着、沈線中に赤色顔料付着、接合しない破片が２点ある。底面に圧痕。
27	67	A 区西・黒土 /C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量、海綿骨針含む	外面：にぶい黄褐色（10YR4/3） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/3）	外面と口唇部に黒色物質付着、口唇部に赤色顔料付着。接合しない２点の破片を合成して作図。
27	68	C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	ＬＲ、変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：黒褐色（5YR3/1） 内面：にぶい褐色（7.5Y5/3）	外面に黒色物質付着、接合しない破片１点。
27	69	C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色 (10YR7/3) 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
28	70	A 区山側・黒土 /A 区西・黒土 /C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	LR、変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：灰黄褐色（10YR4/2）～ にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：灰黄褐色（10YR4/2）	4 箇所の補修孔がある。
28	71	A 区海側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	LR、変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：にぶい赤褐色（5YR4/4） 内面：灰褐色（7.5YR5/2）	沈線中に赤色顔料付着。
28	72	A 区山側・黒土 /A 区・黒土直上 /C 区山側・黒土 /D 区黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	LR、変形工字文→全面にミガキで、縄文は節が半潰れ	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：橙色（7.5YR6/6） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	外面全体に赤色顔料付着。接合しない破片を合成して作図。
28	73	C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	LR、変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：灰黄褐色（10YR5/2） 内面：にぶい橙色 (7.5YR6/4)	
28	74	D 区・黒土	浅鉢	口縁部～手部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	LR、変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：にぶい黄褐色（10YR5/4） 内面：褐色（7.5YR4/4）	C 区の破片が混在している可能性がある。
28	75	D 区山側・黒土	浅鉢	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	ＬＲ→変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	
28	76	C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：橙色（7.5YR6/6） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
28	77	B 区山側・黒土	浅鉢	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：灰黄褐色（10YR6/3） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	
28	78	A 区山側・黒土	浅鉢	口縁部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：橙色（7.5YR6/6） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	沈線中に赤色顔料付着。

図	No.	出土地点・層位・遺物番号	器種	部位	成型	内面調整	施文	胎土	色調	備考
29	79	A 区・黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子ごく少量、0.1 mm程度の白色粒子やや多い、海綿骨針含む	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：褐灰色（10YR4/1）	沈線中に赤色顔料付着。
29	80	D 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子、褐色粒子少量、0.1 mm程度の白色粒子やや多量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：灰黄褐色（10YR5/2）	
29	81	D 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：灰黄褐色（10YR4/2）～にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：灰褐色（7.5YR4/2）	外面は底部まで黒色付着物。内面は口縁部付近のみ黒色付着物。内面に植物の葉など三か所の圧痕が認められる。
29	82	不明	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：橙色（7.5YR6/6） 内面：橙色（7.5YR6/6）	
29	83	C 区山側・黒土 / C 区中・黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：橙色（7.5YR6/6） 内面：橙色（7.5YR6/6）	
29	84	C 区山側・黒土	浅鉢	胴部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	馬淵・新井田川流域以南から搬入と考えられる。
29	85	C 区山側・黒土 / C 区中・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面 2 段露呈	丁寧なミガキ (横)	変形工字文、刺突	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	底部との接合面から剥離しているものとみられる。
30	86	A 区山側・黒土 /C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	LR →沈線	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：黒褐色（10YR3/2）～にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：黒褐色（10YR3/2）～にぶい褐色 (7.5YR5/4)	内面にバンド状に炭化物、外面下部赤化
30	87	D 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	ナデ	LR →沈線	0.3 mm程度の白色粒子、透明粒子やや多量	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	突起部は残存しない。外面に黒色付着物。
30	88	A 区山側・黒土 /C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	LR →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、黒色粒子少量、黒雲母少量	外面：橙色（5YR6/6） 内面：明赤褐色（5YR5/6）	馬淵・新井田川流域以南から搬入と考えられる。
30	89	A 区西・黒土 /D 区山側・黒土	浅鉢	口縁部	接合面 1 段露呈	全面に摩滅が著しい	並行沈線	0.2 mm程度の白色粒子少量、黒色粒子少量、黒雲母少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	馬淵・新井田川流域以南から搬入と考えられる。
30	90	A 区西・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	LR →平行沈線	0.2 mm程度の白色粒子少量、黒色粒子少量、黒雲母少量	外面：にぶい褐色（7.5YR6/4） 内面：にぶい褐色（7.5YR6/4）	馬淵・新井田川流域以南から搬入と考えられる。
30	91	C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ナデ	１R→並行沈線	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい褐色（7.5YR5/3） 内面：褐灰色（7.5YR4/1）	
30	92	A 区山側・黒土 / B 区山側・	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ	ＲＬ→沈線	0.3 mm程度の白色粒子、透明粒子やや多量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：褐灰色（10YR4/1）	
30	93	A 区山側・黒土 /C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	変形工字文	0.2 mm程度の透明粒子、黒色粒子微量。	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：橙色（7.5YR6/6）	
30	94	C 05・105	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ナデ	口縁部に浮線状の文様、胴部上半に変形工字文→ミガキ、ＬＲ	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：褐灰色（10YR4/1） 内面：灰黄褐色 (10 Y R 6/2) ～黒褐色（10YR3/1）	赤色顔料付着。
30	95	C 区山側・黒土	浅鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子、褐色粒子少量、0.1 mm程度の白色粒子やや多量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/4）	突起部は残存しない。
30	96	C 区山側・黒土	鉢	胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	変形工字文	0.3 mm程度の白色粒子、灰色粒子がやや多量	外面：黒褐色（10YR3/1） 内面：黒色（10YR7/5）	
30	97	C 区山側・黒土・110	鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	ミガキ（横）	変形工字文	0.3 mm程度の白色粒子、灰色粒子がやや多量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：灰黄褐色（10YR5/2）	胴部外面下部に赤色顔料付着。鈴木・林編 1981 － 176
31	98	C 区山側・黒土・117	壺	口縁部～底部	接合面露呈せず	ナデ (横) →口縁部・胴部下半ミガキ (横)	口縁部に浮線状の文様、胴部上半に変形工字文→ミガキ	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：橙色（7.5YR6/6） 内面：橙色（7.5YR6/6）	資 25
31	99	C 区山側・黒土・119	壺	口縁部～底部	接合面露呈せず	ナデ (横) →口縁部・胴部下半ミガキ (横)	口縁部に浮線状の文様、胴部上半に変形工字文→ミガキ	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	全面に黒色物質付着。「八幡堂遺跡 No121　資⑦ 749 － 629 － No2」カードが付帯するものの平面図中の No119。
31	100	C 区山側・黒土 /D 区山側・黒土 /D 区・黒土上	壺	口縁部～底部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	口縁部に沈線、胴部に LR →上半に変形工字文→ミガキ	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：橙色（5YR6/6） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/2）	
32	101	D 区 /D 区山側・黒土 /D 区山側・黒土上部	壺	口縁部～胴部	頸部に接合面 1 段露呈	丁寧なミガキ (横)	口縁部に沈線、胴部に LR →上半に変形工字文→ミガキ	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
32	102	C 区山側・黒土	壺	胴部	接合面露呈せず	ナデ (横)	変型工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：橙色（7.5YR6/6） 内面：橙色（7.5YR6/6）	
32	103	C 区山側・黒土・122	壺	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ナデ (横) →口頸部ミガキ (横)	LR →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：橙色（7.5YR6/6） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	口縁部付近に黒色物質付着。沈線中の一部に赤色顔料。
32	104	A 区 (C 区近接) 山側・黒土	壺	胴部	接合面露呈せず	摩滅が著しいため不明瞭	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：灰黄褐色（10YR5/2） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/3）	

図	No.	出土地点・層位・遺物番号	器　種	部　位	成　型	内面調整	施　文	胎　土	色　調	備　考
32	105	A 区山側・黒土	壺	胴部	接合面露呈せず	摩滅が著しいため不明瞭	LR →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：暗灰黄色（2.5Y5/2） 内面：暗灰黄色（2.5Y5/2）	沈線中に赤色顔料付着。
32	106	A 区山側・黒土 /C 区山側・黒土	壺	口縁部～胴部	頸部に接合面 1 段露呈	ナデ (横) →口頸部ミガキ (横)	LR →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子やや多量	外面：にぶい黄褐色（10YR5/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	黒色物質、赤色顔料付着。文様は 107 に類似する。
32	107	A 区山側・黒土	壺	口縁部	接合面露呈せず	ナデ	ＲＬ→沈線	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/2） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/3）	黒色物質付着。
32	108	A 区山側・黒土 /A 区西・黒土 /C 区山側・黒土 /C05/D 区山側・黒土・105	壺	口縁部～胴部	接合面 1 段露呈	ナデ (横) →頸部ミガキ (横)	RL →変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	遺物カードの内容は C 区土器集中 105 番を示すものと考えられる。口縁部突起は接合しない破片を合成して作図。
33	109	C 区山側・黒土	壺	口縁部～底部	接合面露呈せず	ナデ (横) →頸部ミガキ (横)	変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい褐色（7.5YR5/3） 内面：橙色（7.5YR6/6）	土器集中部写真に写る。
33	110	A 区山側・黒土	壺	胴部～底部	接合面露呈せず	ナデ (横) →ミガキ (横)	変形工字文→ミガキ	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/4）	
33	111	A 区山側・黒土	壺	口縁部～胴部	底部直上に接合面 1 段露呈	ナデ (横) →ミガキ (横)	RL →変形工字文→ミガキ	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4）～明褐色（7.5YR5/6） 内面：明褐色（7.5YR5/6）	
34	112	A 区山側・黒土 /C 区山側・黒土	壺	口縁部～胴部	頸部に接合面 1 段露呈	ナデ (横) →口頸部ミガキ (横)	隆線変形工字文→ミガキ (横)	0.2 mm程度の白色粒子少量、黒色粒子少量、黒雲母少量	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面：明赤褐色（5YR5/6）	口頸部に 1 対、口縁部・胴部間に 2 対の補修孔が現存する。馬淵・新井田川流域以南から搬入と考えられる。
34	113	A 区山側・黒土 /C 区山側・黒土	壺	口縁部～底部	接合面露呈せず	ナデ	隆線変形工字文	0.3 mm程度の白色粒子やや多量、半透明粒子やや多量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/2） 内面：にぶい褐色（7.5YR6/4）	外面がやや摩滅する。外・内面に黒色物質付着。
34	114	D 区山側・黒土	壺	胴部	接合面ろ	ナデ	隆線変形工字文	0.3 mm程度の白色粒子やや多量、半透明粒子やや多量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/2） 内面：にぶい褐色（7.5YR6/4）	
34	115	不明	壺	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ（横）	並行沈線	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：橙色 (7.5YR6/6) 内面：橙色 (7.5YR6/6)	116 と同一個体の可能性がある。
34	116	A 区山側・黒土 / A 区西半・黒土 / A 区・表土 / C 区山側・黒土	壺	胴部	接合面露呈せず	ミガキ（横）	隆線変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：明赤褐色（5YR5/6）～にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：明赤褐色（5YR5/6）	接合しない 3 群のまとまりからなる。115 と同一個体の可能性がある。
34	117	C 区山側・黒土	壺	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ナデ	隆線変形工字文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：にぶい褐色（7.5YR6/4）	口縁部の突起は獣頭形をなす。貼付による変形工字文の剥離が著しい。
35	118	C 区山側・黒土	壺	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ナデ	ＬＲ、平行沈線→ 8 単位縦刻線	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/3）	外面に黒色物質、赤色顔料付着。
35	119	C 区山側・黒土・118	壺	口縁部～底部	接合面露呈せず	ナデ→ミガキ（横）	並行沈線→ 6 単位縦刻線	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：橙色 (7.5YR6/6) 内面：橙色 (7.5YR6/6)	
35	120	C 区山側・黒土・118	壺	胴部～底部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ	ＬＲ長条縄文→沈線文	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：灰黄褐色（10YR5/2） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	沈線文中に 4 単位と思われるエグリが 3 か所現存する。外面に黒色物質→赤色顔料付着。153 と胎土・縄文が類似する。
36	121	A 区山側・黒土 / C 区山側・黒土 / D区・黒土	壺	口縁部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ（横）	並行沈線	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/3）	
36	122	C 区山側・黒土	壺	口縁部～胴部	接合面 1 段露呈	ナデ、上半は丁寧なミガキ (横)	ミガキ（横）	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量、金雲母多量	外面：明赤褐色（7.5YR5/6） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/4）	馬淵・新井田川流域以南から搬入と考えられる。
36	123	D 区・黒土	壺	胴部	接合面露呈せず	ミガキ（横）	波状工字文か？	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：にぶい褐色（7.5YR6/3）	
36	124	D 区山側・黒土	壺	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ	眼鏡状隆帯	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	
36	125	A 区西半・黒土	壺	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ（横）	眼鏡状隆帯	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	
36	126	C 区・黒土	壺	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ（横）	口縁部ミガキ（横）、胴部ＲＬ	0.3 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/3）	
36	127	C 区山側・黒土	壺	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ（横）	眼鏡状隆帯	0.4 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子多量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：灰褐色（7.5YR5/2）	
36	128	C 区山側・黒土 / C 区海側・黒土 / C 05・105/123	壺	口縁部～底部	頸部に接合面 1 段露呈	ミガキ（横）	口頸部ミガキ（横）、胴部は摩滅	0.2 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/3）	遺物カードの内容は C 区土器集中 105 番を示すものと考えられる。
36	129	A 区海側・黒土 / C 区山側・黒土 / C 区（A 近接）・黒土	壺	口縁部～胴部	内傾接合面 4 段露呈	ミガキ（横）	口縁部貼付隆帯、ミガキ（横）	0.2 mm程度の赤褐色の鉱物、白色粒子を多く含む。	外面：にぶい橙色（7.5YR6/4）～橙色 (7.5YR6/6) 内面：橙色 (7.5YR6/6)	口縁部内面沈線は摩滅のため観察できない部分が多いものと考えられる。馬淵・新井田川流域以南から搬入と考えられる。
36	130	C 黒土層？・23 か？	蓋	口縁部～頂部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	粘土紐貼付による隆起帯→ナデ→沈線	0.2 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	外面に黒色物質付着、沈線中に赤色顔料付着。上面観はほぼ正円形をなす。出土位置は台帳の記載にある「蓋」と考えた場合。

図	No.	出土地点・層位・遺物番号	器種	部位	成型	内面調整	施文	胎土	色調	備考
37	131	C 区山側・黒土・121	台付鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →波状工字文・粘土粒貼付	0.2㎜程度の白色粒子を多量に含む。	外面：にぶい赤褐色（5YR5/3）～にぶい黄褐色（10YR4/3） 内面：にぶい赤褐色（5YR5/3）	台部に 2 箇所一対の焼成前穿孔、工藤 1987 第 3 図 - 25
37	132	A 区山側・黒土	台付鉢	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →波状工字文・粘土粒貼付	0.2㎜程度の白色粒子を多量に含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/4）	
37	133	C 区山側・黒土	台付鉢	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →沈線→沈線間列点・粘土粒添付	0.2 ㎜程度の赤褐色の鉱物、白色粒子を多く含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：灰黄褐色 (10YR4/2)	内外面に炭化物付着。
37	134	C 区山側・黒土	台付鉢	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →波状工字文・粘土粒貼付	0.2 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	
37	135	A 区西半・黒土	台付鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →波状工字文、沈線間列点、粘土粒貼付	0.2 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：灰褐色 (10YR4/2) 内面：灰褐色 (10YR4/2)	
37	136	不明	台付鉢	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →沈線→粘土粒添付	0.2 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄褐色 (10YR5/3) 内面：灰褐色 (10YR4/2)	
37	137	C 区山側・黒土	台付鉢	口線部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →波状工字文	0.2 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	
37	138	D 区・黒土	台付鉢	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →波状工字文・粘土粒貼付	0.2 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄褐色 (10YR5/3) 内面：灰褐色 (10YR4/2)	
37	139	C 区山側・黒土	台付鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ナデ→ミガキ (縦)	RL →波状工字文・粘土粒貼付	0.2 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：黒褐色 (10YR3/1) 内面：黒褐色 (10YR3/1)	
37	140	C 区山側・黒土	台付鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →波状工字文・粘土粒貼付	0.2 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：黒褐色 (10YR3/1) 内面：にぶい橙色 (7.5YR6/4)	内外面に炭化物付着。
37	141	C 区山側・黒土	台付鉢	口縁部～胴部	接合面 1 段露呈	ミガキ (横)	RL →沈線	0.2 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：黒褐色 (10YR3/1) 内面：黒褐色 (10YR3/1)	内外面に炭化物付着。
37	142	C 区山側・黒土	台付鉢	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →波状工字文・粘土粒貼付	0.2 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄褐色 (10YR5/3) 内面：灰褐色 (10YR4/2)	
37	143	A 区山側・黒土 /C 区山側・黒土	台付鉢	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →波状工字文・粘土粒貼付	0.2 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄褐色 (10YR5/3) 内面：灰褐色 (10YR4/2)	
37	144	C 区山側・黒土	台付鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	L R →沈線→沈線間列点・粘土粒添付	0.2 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄褐色 (10YR5/4) ～明褐色 (7.5 Y R 5/6) 内面：黒色 (10YR2/1)	
37	145	C 区山側・黒土	鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ナデ (横)	R L →沈線→粘土粒貼付→沈線ナゾリ	0.2 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：橙色（7.5YR6/6） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	粘土粒は焼成後に剥離したもの。
38	146	C 区山側・黒土・120	深鉢	口縁部～底部	内傾接合面 1 段露呈	頸部ケズリ→ミガキ (横) →胴部丁寧なミガキ (縦)	口縁部ナデ (横)、LR →匹字文	0.3 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：明黄褐色（10YR6/6） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	赤色顔料付着。内面にバンド状に炭化物、外面下部赤化。
38	147	C 区山側・黒土	深鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ	口縁部ミガキ (横)、RL →匹字文・底部付近沈線 1 条	0.3 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：灰褐色（7.5YR4/2） 内面：暗褐色（7.5YR3/3）	内面下部に喫水線を示す炭化物付着、外面に筋状の炭化物付着、下部赤化。
38	148	C 区山側・黒土	深鉢	口縁部	接合面露呈せず	強いミガキ (横)	RL →匹字文→ミガキ (横)	0.3 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄褐色（10YR4/3） 内面：黒褐色（10YR3/3）	149 と同一個体
38	149	A 区海側・黒土	深鉢	口縁部	接合面露呈せず	強いミガキ (横)	RL →匹字文→ミガキ (横)	0.3 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/4） 内面：灰褐色 (10YR4/2)	148 と同一個体
38	150	D 区山側・黒土	深鉢	口縁部	接合面露呈せず	強いミガキ (横)	LR →断面角形の沈線	0.3 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい褐色（7.5YR6/4） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	接合しない破片 5 点付帯
38	151	D 区・黒土	深鉢	口縁部～胴部、底部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	RL →沈線 8 条→エグリ・口唇部刻み (外)	0.3 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：黒褐色（10YR3/1）～にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：黒褐色（10YR3/1）	内面上半に炭化物付着。口縁部と底部は接合しない。
38	152	不明	深鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	ナデ (横)	RL →沈線 4 条→粘土粒貼付→沈線ナゾリ、口唇部刻み (外)	0.3 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：にぶい黄橙色（10YR7/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/3）	沈線に黒色物質と赤色顔料付着。内面上半に炭化物付着、外面に煤付着。
39	153	C 区山側・黒土 /C 区 (D 区近接) 山側・黒土 /C 区海側・黒土	台付鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	LR 長条→沈線 5 条→口縁部・台部丁寧なミガキ (横)	0.2 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：灰褐色 (10YR4/2) 内面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	下部が被熱による赤化。120 と胎土・縄文が類似する。
39	154	A 区山側・黒土 /C 区山側・黒土	深鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	RL →口縁部ミガキ (横)・底部付近沈線 1 条	0.3 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：黒褐色（10YR3/2）～赤褐色 (5YR5/6) 内面：黒褐色（10YR3/1）	底部がやや丸みを帯びる。下部が被熱による赤化。
39	155	C 区山側・黒土	深鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	頸部ケズリ (横) →全面ナデ	口縁部沈線 1 条・4 単位突起→口唇部刻み (外)、RL →沈線 3 条	0.3 ㎜程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：黒褐色（10YR3/2） 内面：黒褐色（10YR3/2）	内外面に炭化物付着。
39	156	A 山黒土 /C 山黒土	深鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	頸部ケズリ (横) →全面ナデ	RL →口縁部ナデ	0.5 ㎜程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3）～黒褐色（10YR3/2） 内面：にぶい褐色（7.5YR6/4）	内外面に炭化物付着、内面は斑状。

図	№	出土地点・層位・遺物番号	器　種	部　位	成　型	内面調整	施　文	胎　土	色　調	備　考
39	157	D 区山側・黒土	深鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	摩滅が著しい	RL、摩滅が著しい	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：黒褐色（10YR3/1） 内面：黒褐色（7.5YR3/1）	
40	158	C 区山側・黒土	深鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	丁寧なミガキ (横)	口縁部ナデ (横) → RL →沈線 6 条→粘土粒貼付→沈線ナゾリ	0.3 mm程度の白色粒子少量、透明粒子少量	外面：橙色 (7.5YR6/6) ～ にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：灰褐色 (10YR4/2)	内外面に炭化物付着。
40	159	D 区・黒土	深鉢	口縁部	内傾接合面 2 段露呈	ミガキ (横)	RL →沈線 8 条→粘土粒貼付→沈線ナゾリ	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：灰褐色 (10YR4/2) 内面：灰褐色 (10YR4/2)	
40	160	D 区・黒土	深鉢	口縁部	接合面露呈せず	ナデ	RL →沈線 6 条・口縁部ナデ→ミガキ (横)	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：黒褐色（7.5YR3/1） 内面：黒褐色（7.5YR3/1）	内外面に炭化物付着。
40	161	D 区	深鉢	口縁部	接合面露呈せず	ナデ	RL →沈線 7 条・口縁部ナデ→ミガキ (横)	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：灰褐色（7.5YR4/2） 内面：褐灰色（7.5YR4/1）	内外面に炭化物付着。
40	162	A 区山側･黒土 /C 区山側･黒土･101	深鉢	口縁部～底部	接合面露呈せず	ミガキ	口唇部刻み (外)、RL →並行沈線・矢羽根文→粘土粒貼付→沈線ナゾリ	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：褐色（7.5YR4/3）～ 赤褐色 (2.5YR4/6) 内面：黒褐色（10YR4/1）	内面に厚く炭化物付着。年代測定資料。
40	163	D 区山側・黒土	深鉢	口縁部	接合面露呈せず	摩滅が著しい	口唇部刻み (外)、RL →並行沈線・矢羽根文→粘土粒貼付→沈線ナゾリ	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：灰褐色 (10YR4/2) ～ にぶい黄橙色（10YR7/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	
40	164	C 区山側・黒土	深鉢	口縁部～胴部	内傾接合面 1 段露呈	ナデ (横)	口唇部刻み (外)、RL →並行沈線・矢羽根文→粘土粒貼付→沈線ナゾリ、粘土粒頂刻み	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：黒褐色（2.5Y3/2） 内面：にぶい橙色（7.5YR 7/4）	外面に炭化物付着。
40	165	A 区山側・黒土	深鉢	口縁部	内傾接合面 1 段露呈	ナデ (横)	口唇部刻み (上)、RL →並行沈線・矢羽根文→粘土粒貼付→沈線ナゾリ	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：黒褐色（10YR3/1） 内面：黒褐色（10YR3/1）	
40	166	C 区山側・黒土	深鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ナデ (横)	口唇部刻み (外)、RL(?) →並行沈線・矢羽根文→粘土粒貼付→沈線ナゾリ	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：にぶい黄橙色（10YR7/3） 内面：にぶい褐色（7.5YR6/3）	
40	167	不明	深鉢	口縁部	接合面露呈せず	ナデ (横)	RL →並行沈線・矢羽根文→粘土粒貼付→沈線ナゾリ	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	
40	168	A 区山側・黒土	深鉢	口縁部	接合面露呈せず	ナデ (横)	RL →並行沈線・矢羽根文→粘土粒貼付→沈線ナゾリ	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：黒褐色（10YR3/2） 内面：黒褐色（10YR3/3）	
41	169	C 区山側・黒土	深鉢	口縁部～底部	内傾接合面 9 段露呈	胴下部ケズリ (横) →ナデ (横)、上部ナデ (横)	口縁部ナデ (横) →口縁部小波状→ RL	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：明赤褐色（5YR5/6）～ にぶい黄褐色 (10YR4/3) 内面：明赤褐色（5YR5/6）～ 灰褐色 (10YR4/2)	胴部下半二次焼成著しい。
41	170	A 区山側・黒土、C 区山側・黒土	深鉢	口縁部～底部	内傾接合面 1 段露呈	ケズリ (横) →ミガキ	口縁部小波状→ RL(0 段多条) →沈線 3 条・鄭部付近ミガキ	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：灰褐色（10YR4/2）～ にぶい黄褐色 (10YR6/3) 内面：黒褐色（2.5Y3/1）～ にぶい黄褐色 (10YR6/3)	胴部下半二次焼成著しい。
42	171	A 区 (C 区近接) 山側・黒土、C 区山側・黒土、不明	深鉢	口縁部～胴部	内傾接合面 1 段露呈	ナデ、上半は丁寧なミガキ (横)	口縁部小波状→ RL →沈線 3 条	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：にぶい黄褐色（10YR4/3） 内面：褐色（7.5YR4/3）	内外面に炭化物付着。
42	172	A 区山側・黒土	深鉢	口縁部～胴部	内傾接合面 1 段露呈	幅広いナデ (横)	ナデ (横) →口縁部小波状→ RL	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：黒褐色（2.5Y3/2） 内面：黄褐色（2.5Y5/85）	外面に厚く炭化物付着。
42	173	不明	深鉢	口縁部～胴部	内傾接合面 1 段露呈	指圧痕･ケズリ (横)→ナデ (横) →ミガキ (横)	RL→口縁部ナデ (横)･沈線 2 条、口縁部は部分的にミガキ (横)	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：灰黄褐色（10YR4/2） 内面：にぶい褐色（7.5YR6/4）	内外面に炭化物付着。
42	174	D 区・黒土	深鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ナデ	RL →口縁部ナデ (横) →口縁部ミガキ (横) →沈線 3 条、口縁部小波状	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：にぶい黄褐色（10YR4/3）	内外面に炭化物付着。
42	175	D 区・黒土	深鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ミガキ (横)	RL →口縁部ミガキ (横)、口縁部小波状	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：褐色（7.5YR4/3） 内面：にぶい褐色（7.5YR6/4）	外面に炭化物付着。
42	176	C 区山側・黒土・122	深鉢	口縁部	内傾接合面露呈	口縁部直下指圧痕・胴部にケズリ→ナデ (横) →ミガキ (縦)	口縁部小波状、RL →口縁部ミガキ	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：にぶい黄褐色 (10YR5/4) ～ にぶい黄橙色 (10YR7/4) 内面：褐色 (7.5YR4/4) ～ にぶい黄橙色（10YR6/4）	外面に炭化物付着。
43	177	A 区海側・黒土	深鉢	口縁部～底部	内傾接合面 1 段露呈	接合面下部ケズリ (横) →ミガキ	口縁部小波状→ RL →口縁部沈線 3 条、底部付近沈線 1 条	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	低部付近に被熱と摩滅が著しい。
43	178	D 区・黒土	深鉢	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ	横方向のナデ→ RL、口縁部小波状	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/3）	外面に炭化物付着。
43	179	C 区山側・黒土	深鉢	口縁部	接合面露呈せず	ナデ	RL →沈線 4 条、口縁部小波状	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：褐色（7.5YR4/3） 内面：褐色（7.5YR4/3）	外面に炭化物付着。179 と同一個体

図	No.	出土地点・層位・遺物番号	器　種	部　位	成　型	内面調整	施　文	胎　土	色　調	備　考
43	180	C 区山側・黒土	深鉢	口縁部	接合面露呈せず	ナデ	RL →沈線 5 条、口縁部小波状	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：黒褐色（7.5YR3/1） 内面：褐色（7.5YR4/4）	180 と同一個体
43	181	C 区山側・黒土	深鉢	口縁部～胴部	口縁部直下に内傾接合面 1 段露呈	ナデ	口縁部小波状→ RL →沈線	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4） ～灰黄褐色（10YR4/2）	182 と同一個体
43	182	C 区山側・黒土	深鉢	口縁部～胴部	口縁部直下に内傾接合面 2 段露呈	ナデ	口縁部小波状→ RL	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4） ～灰黄褐色（10YR4/2）	181 と同一個体
43	183	C 区山側・黒土	深鉢	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ	RL →強いナデ	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：にぶい黄褐色 (10YR5/4) 内面：黒色 (10YR2/1)	外面に炭化物付着。
43	184	C 区山側・黒土	深鉢	口縁部	接合面露呈せず	ナデ→ミガキ	RL →沈線 3 条	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：にぶい褐色（7.5YR5/3） 内面：灰褐色（7.5YR4/2）	外面に斑状に炭化物付着。
43	185	A 区西半・黒土	深鉢	口縁部	接合面露呈せず	ナデ	RL →沈線 4 条、最上部の沈線は上端が不明瞭	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	外面に炭化物付着。
43	186	A 区・黒土	深鉢	口縁部	接合面露呈せず	ナデ	RL →沈線 3 条、最上部の沈線は上端が不明瞭	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：灰褐色（7.5YR4/2） 内面：黒褐色（10YR3/2）	
43	187	C 区山側・黒土	深鉢	口縁部	接合面露呈せず	ナデ (横)	RL →口縁部ナデ、縄文施文後に軽いナデで節が半ば潰れ	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：黒褐色（10YR3/1） 内面：黒褐色（10YR3/1）	外面に炭化物付着。
43	188	A 区山側・黒土	深鉢	口縁部	接合面露呈せず	ミガキ	RL →口縁部ミガキ	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	外面に炭化物付着。
44	189	C 区山側・黒土・122	深鉢	口縁部～底部	口縁部直下と胴下部に内傾接合面各 1 段露呈	口縁部付近は丁寧なミガキ (横)、胴下部にかけてミガキ (縦)	RL →口縁部横方向のミガキ、口唇部にわずかに縄文が残る	0.3 mm程度の白色粒子やや多量、透明粒子少量	外面：オリーブ褐色（2.5Y4/3） 内面：にぶい黄褐色（10YR4/3）	外面に斑状に炭化物付着。
44	190	C 区山側・黒土	深鉢	口縁部～胴部	接合面露呈せず	ナデ	RL 長条、施文後の強いナデで節が半ば潰れ	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：暗褐色 (10YR3/4) ～ 橙色 (7.5YR6/6) 内面：橙色 (7.5YR6/6)	外面全体、内面下部に炭化物付着。
44	191	A 区海側一括・黒土 / A 区・黒土	深鉢	胴部	接合面露呈せず	刷毛目	縦方向の粗い条痕	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：にぶい褐色（10YR5/3）	斑状にこげ付着。192 と同一個体の可能性がある。
44	192	A 区・黒土	深鉢	胴部	接合面露呈せず	刷毛目	縦方向の粗い条痕	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：にぶい褐色（10YR5/3）	胴部下半に二次焼成。191 と同一個体の可能性がある。
45	213	A 区山側・黒土 /C 区山側・黒土	深鉢	口縁部～底部	口縁部付近の内面に内傾接合面 1 段露呈	口縁部付近は丁寧なミガキ (横)、胴～底部ミガキ	RL →口縁部直下に沈線 1 条	0.5 mm程度の白色粒子、半透明粒子多量、	外面：褐灰色（10YR4/1）～ 灰黄褐色 (10 Y R 6/2) 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	胴部下半に二次焼成。

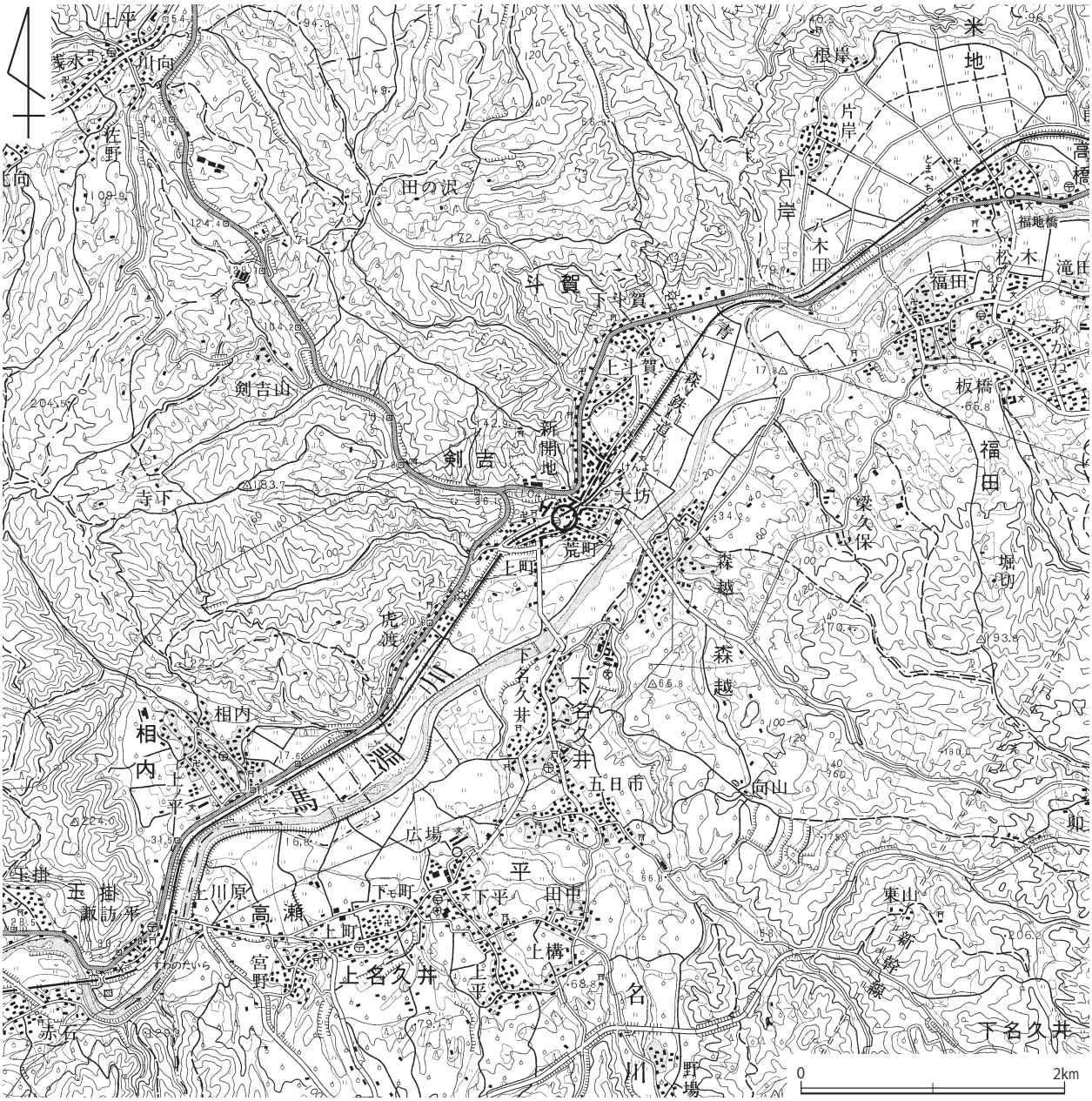
３．青森県剣吉荒町遺跡出土土器の分析

（1）剣吉荒町遺跡 1966 年発掘調査の概要

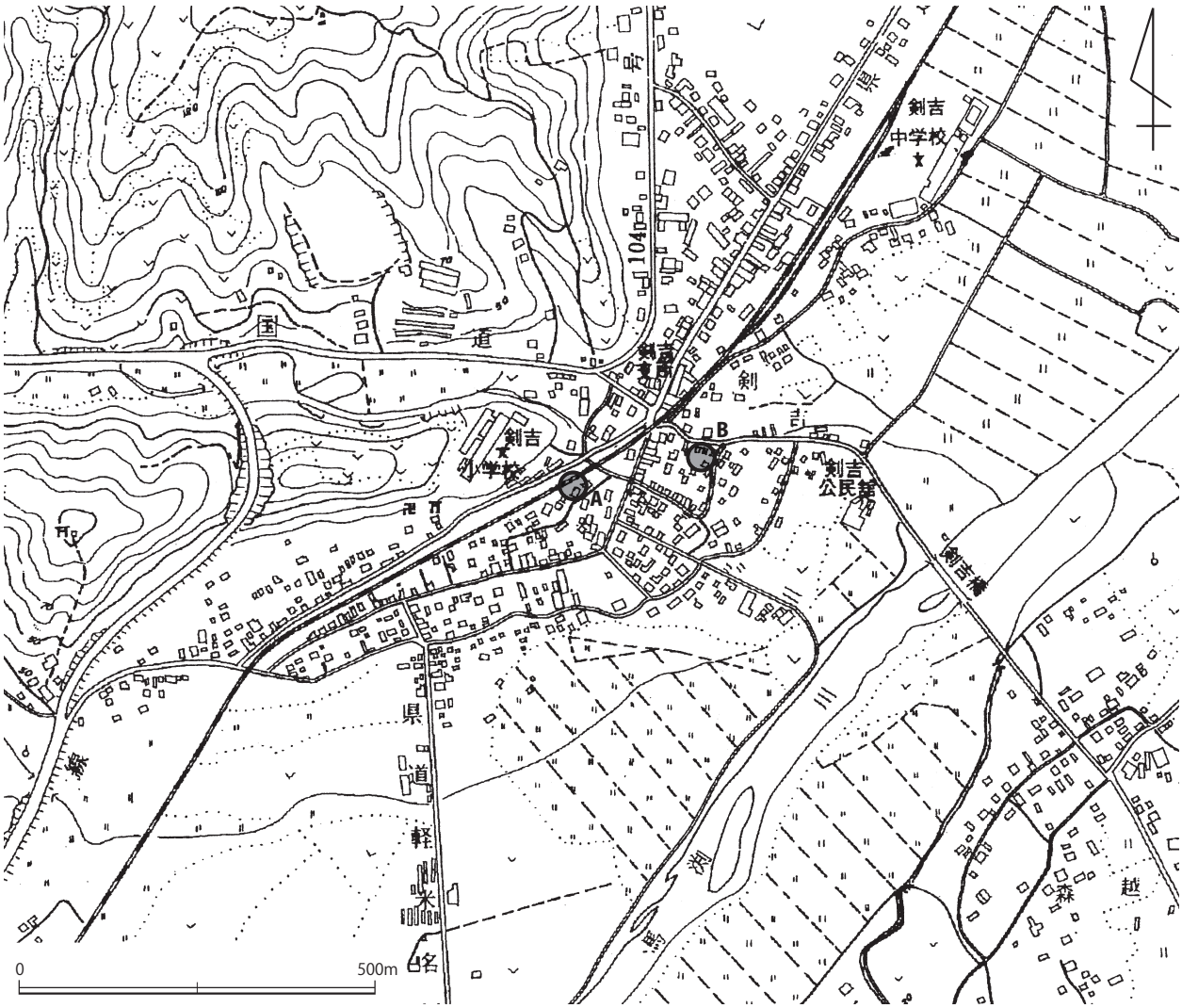
ａ．遺跡の概要

剣吉荒町遺跡は、馬淵川中流域の西岸、青森県三戸郡南部町大字剣吉字荒町に存在する。国道 104 号線を八戸方面より南下し、東北本線剣吉駅を過ぎたところで大きく西にカーブする地点の南側である。遺跡は、南北を馬淵川の小支流によって開析された東に細長く伸びる丘陵末端の緩斜面から、その先の低位の河成段丘に広がっている。

剣吉荒町遺跡の発掘調査は、これまで４回ほど実施されている。1956 年と 1966 年に、尾根の先端を横断する東北本線の西側において、慶應義塾大学江坂輝彌氏らによる発掘調査が行われ（江坂 1967a・1967b・1971）、1982 年と 1983 年には、それぞれ名川町教育委員会と青森県立郷土館が、江坂氏調査地点の東側約 200 mの低位段丘面で発掘調査を実施している（名川町教育委員会 1984、青森県立郷土館 1988）。江坂氏調査地点では、砂沢式土器を中心とする遺物が出土しており、名川町・青森県調査地点では大洞 A2 式～ A' 式土器が主体を占める。現在、江坂氏調査地点を第１地区、名川町教育委員会・青森県立郷土館調査地点を第２地区と呼んでいるが、これらをひとつの遺跡として評価し得るかという点を含め、遺跡の範囲については不明な点が多い（青森県史編さん考古部会 2005）。



第 46 図　剣吉荒町遺跡の位置（国土地理院　1/50000『三戸』より）



A：第１地区（1966 年調査）　B：第２地区（1982・1983 年調査）

第 47 図　剣吉荒町遺跡（南部町教育委員会より提供）

b．1966 年の発掘調査の概要

探索の結果、現在までに確認した 1966 年の発掘調査に関わる記録類は、発掘届等の書類、図面３枚（A トレンチセクション図１枚、遺物出土状態平面図２枚）、簡略な日誌１冊（大学ノート）、調査時の 35mm モノクロフィルム２本、青森県教育委員会に提出された概要報告である。ただし、まだ未発見の記録類が存在する可能性は高い。

これらの記録類のなかで、1966 年の発掘調査の内容が最もよく判るのは、1967 年３月に提出された概要報告である（江坂 1967a）。入手しにくい報告でもあるため、以下、その全文を再録し、調査の概要に代えたい。

なお、概要報告にあるＡ 10 区及び拡張区で出土した土器群のうち、３点（広口壺形土器、台付浅鉢形土器、鉢形土器）が、弘前大学所蔵となっている（伊東 1985）。また、弘前大学には、それ以外の資料も存在するようである。出土遺物が分割された経緯の詳細は不明だが、少なくとも、現在慶應義塾に所蔵されている剣吉荒町遺跡出土遺物は、1966 年に出土した遺物の全てではないことになる。また、慶應義塾所蔵の土器のなかには、寄贈Ａ・Ｂ・Ｃというラベルのついたものが存在するが、これらは、土器の時期からみて、この調査区一帯から出土したものである可能性が高く、報文に記載された調査前に出土した土器の一部とも考えられる。ただし、確証は得られなかった。

（以下、概要報告の再録）

青森県劒吉荒町遺跡調査略報

昭和 42 年３月 30 日　江坂輝彌

青森県名川町劒吉荒町遺跡調査速報

序　　本調査は日本国有鉄道、東北線複線化増設工事により遺跡の一部が破壊されることになり、日本国有鉄道盛岡工事局より青森県教育委員会に工事着手前に、その増線工事区域の発掘調査の依頼があった。東北本線は遺跡地の西北側を切通しにして現在単線で敷設されており、今回はその東南側、遺跡の西北端部の一部を掘り下げて複線化する

ことになつたので、市街地に所在の本遺跡も一部が壊滅することになつたわけである。江坂はかねて昭和３１年１０月、音喜多とともに本遺跡を緊急調査したことがあつたので、県教育委員会では本遺跡の今回の調査を江坂、音喜多、村越らに依嘱されたのであつた。本緊急発掘調査に際し、盛岡工事局。県教育委員会社会教育課の文化財係長　工藤俊雄氏、同主事の山田雄二氏、並びに名川町教育委員会の各位には種々と御高配と御協力をいただいた、ここに心から感謝の意を表する次第である。

なお江坂の身辺多事のため、本速報の発刊が非常に遅滞したことを心からお詫びする次第である。また本報告も何とか年内にまとめて出版の運びとしたいと考えている。

調査遺跡所在地　青森県三戸郡名川町大字劒吉小字荒町
調査期日　昭和４２年１１月２５日～２８日
調査者　青森県教育委員会

調査担当責任者		江　坂　輝　彌(主査)
調査担当者		村　越　　潔(副査)
〃		音喜多　富　寿(副査)
調査員	（慶大文学部助手）	鈴　木　公　雄
〃	（青森県文化財調査員）	栗　村　知　弘
〃	（　　〃　　）	市　川　金　丸
〃	（青森県立板柳高校教諭）	工　藤　泰　博
調査補助員	（慶大文学部学生）	岡　本　孝　之
〃	（　　〃　　）	藤　村　東　男
〃	（　　〃　　）	鈴　木　道之助
〃	（　　〃　　）	飯　塚　耀　子
〃	（　　〃　　）	大　石　美紀子
〃	（　　〃　　）	見　城　真智子
〃	（弘前大学教育学部学生）	今　　勝　康
〃	（　　〃　　）	奥　崎　　隆
〃	（東京教育大学文学部学生）	酒　井　仁　夫

調　査　概　要

１．遺　　跡

本遺跡は馬淵川左岸の低位段丘上にあり、名川町劒吉の市街地の一部である。

東北本線劒吉駅の西南５００メートル、国道１０４号線を八戸から苫米地を経て、劒吉駅前を通り、東北本線の劒吉踏切をわたつてしばらく進んだ向つて右側の丘の上で、国道と国鉄線路に挟れた地域である。標高は線路の切通し際の最も高い地域でほぼ２０メートルほどである。

本遺跡発見の端緒は同所の衣服商、川守田宇助氏が同氏宅裏手、国鉄線路よりの台地上にある家庭菜園で栽培した大根を冬がこいしようと昭和２９年１１月および３０年１２月上旬二回にわたつて、当時名久井農業高校在学中の令息稔氏が、同所に深さ５０センチ、１メートル四方程度のかこい穴を発掘したところ、二度ともかたまつておびただしい土器片が出土し、なかにはほぼ完形の細口壺、浅鉢などもあつた。稔氏は同校の出町俊教諭の指導を受け、考古学に対する知識もあつたので、それらの遺物を丹念に発掘し、一部を母校に持参した。江坂は３１年夏、同校を訪れこの資料を見学､注目すべき遺跡のように思われたので、１０月中旬家庭菜園の空いた期間を利用し、音喜多と共に出町俊教諭、川守田稔氏などの協力を得て、稔氏がかこい穴を発掘した南側隣接地を小規模に発掘してみたのであつた。

包含層の状況は黒褐色をした表土が２５センチ内外あり、その下に微細な軽石粒を混えた黒土層が厚さ５０センチ内外あり、その下には粗い軽石粒をかなり多量に混えた黒土層が３０センチ内外あり、その下は灰白色の火山灰層となつている。土器片は地表面下３０センチより５０センチ付近に包含されていた。しかしこの発掘壕では稔氏が発掘した時の所見のように土器片のみが層をなしているというような状況は見あたらなかつた。

稔氏の談から考えて、稔氏の発掘した地区には小ピツトがあり、そこに土器、土偶などが意識的に埋納されたような特異な遺構が所在したのではないかと想像された。しかし偶然の発掘で中心部と思われる箇所が破壊されてしまつているため、その詳細は明らかになし得なかつた。この時隣接の西南側も視察したが、幾分表土を削られた私道の道路面などに大洞Ａ’式土器の口縁部大破片など散見し、この地区を調査すると前記の川守田氏を裏の遺構と同一な遺構の発見の可能性があるように看取された。しかし隣接地は当時地主、借地人などが小地域に分れ、養豚小屋など小さな建築物が多数あつてトレンチを設定しての調査は困難なように思われたので時機の当来をまつことにしたのであつた。

今回は鉄道線路沿いの私道をさけて、線路と指導に沿つてその内側の畑地内へ略南北に巾２メートル、長さ２０メートルのＡトレンチを設定した。南側より２メートル平方ごとにＡ１区より１０区まで区分した。

Ａ５区でＡトレンチに直角に交る、巾２メートル、長さ７メートルのＢトレンチを設定、西より東へＢトレンチ１区～４区に区分した。

Ａトレンチ１区～４区までは攪乱層で遺物の発見も極めて微量、５区では表土の下に攪乱を受けない黒土層がみられたが､これは極部的な層でＡ６区には認められなかつた。

Ａトレンチ９区～１０区では現地表下２０センチほどの

耕作土を除去すると、この両区にはかなりの量の大洞Ａ'式土器が包含されていることが判明した。（６区～１０区は川守田氏を裏手菜園敷地内）Ａ９区と１０区の耕土下の大洞Ａ'式土器群は２カ所にわかれて群をなしているようであつた。Ａ１０区では北壁隅より出土した土器群全体を露出のため北壁と西壁の部分を北と西へ拡張発掘した。(北側２×1.5ｍ・西側0.5×２ｍ）またＡ８区～Ａ１０区は東壁も断面図作成後、断面にあわられたピツトと思われる箇所（Ａ９区）の土器片を発掘露出させる。

Ｂトレンチは鉄道線路に沿つた私道から直角に南折して、国道へ向う私道の南側、私道に沿つた畑地を発掘する。Ｂトレンチ３区を中心として大洞Ａ'式浅鉢土器、小深鉢など密集して埋没している地区を発見、掘り下げず、土器の露出に努力する。

Ｂトレンチ発掘中、私道の東北側、川守田氏宅地に接した建築資材置場の下からも壺形土器など発掘したという高校生の教示があり、１１月２７日Ａトレンチ７区の東南側（東壁に接して）Ａトレンチと直角にＣトレンチを設定、東南の方向に長さ４メートル、巾２メートルのトレンチを発掘した。遺物はＣ１区には少なく、高校生が発掘したＣ２区より出土した。Ｃ２区の南々東へ１×１ｍの拡張区を発掘、この地区より無文細口壺、小鉢形土器など出土する。

今回の調査ではＡトレンチ９区、１０区。Ｂトレンチ３区。Ｃトレンチ２区で大洞Ａ'式土器を同一平面に配列放置した状態で埋没した土器群を発掘した。

Ａトレンチ９区、１０区。Ｂトレンチ３区の場合も、完形品、大破片が、中央は幾分高く、周辺部に向うに従つて幾分低くく、外縁と中央部との比高は１０ないし２０センチぐらいであつた。これらの土器は遺体を埋葬し、盛土した上へ、台付浅鉢、深鉢、細口壺など、各種形態の生活用具一式の土器を副葬品として不規則に配列したものではなかろうか。これら長楕円形の土器配列下には、長楕円形の墓壙かと思われるピツトが認められた。しかしこのピツト内からは、これを確証するような遺物の発見はなかつた。

先年川守田稔氏が自宅の背後の宅地内に野菜のかこい穴発掘中の遺物発見の所見では、ピツト内から遺物が発見されたのではないかと想像したが、今回の調査で、ピツト状の竪穴を埋没した盛土の上に飾るようにして置かれた土器であることが判明した。

２．出　土　遺　物

今回の調査では墓壙と考えられる小ピツトの上に長楕円形内に不規則に配列された大洞Ａ'式土器以外にほとんど他の遺物は認められなかつた。生活用具として必要な石器類がほとんど発見されていないことも、本遺跡が住居のための集落址でなく、墓地のような特殊遺跡であることを暗示している。

出土遺物には大洞Ａ'式の壺、鉢、台付鉢、浅鉢などの器形のものがあり、特に副葬用に制作されたものではないかと思われる小型土器も出土している。

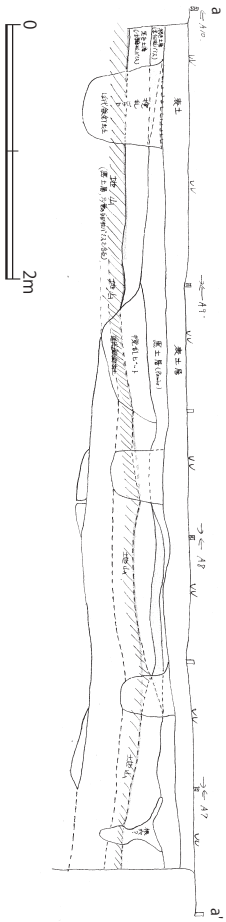
また出土資料は僅少であつたが縄文土器文化早期の貝殻腹縁文土器片も数片認められ、この場所に早期の時代の人々もかつて生活を営んでいたことがわかつた。

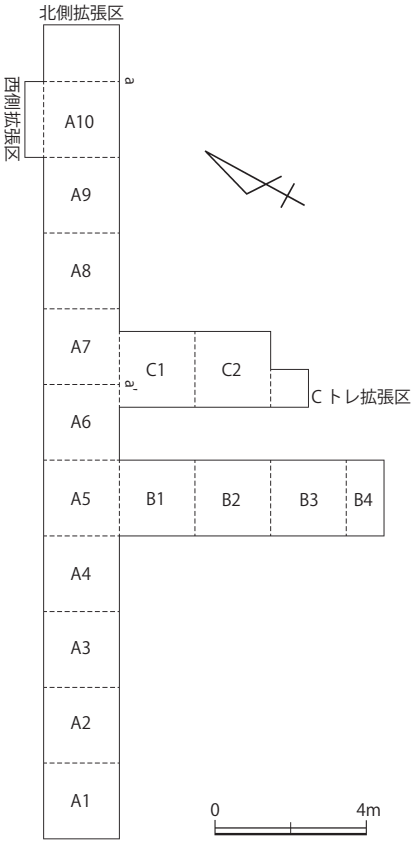
以　上

引用・参考文献

青森県史編さん考古部会　2005『青森県史 資料編 考古３』
青森県立郷土館　1988『名川町剣吉荒町遺跡（第２地区）発掘調査報告書』
伊東信雄　1985「東北地方における稲作農耕の成立」『日本史の黎明－八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』六興出版　335-365 頁
江坂輝彌　1967a『青森県劒吉荒町遺跡調査略報』
江坂輝彌　1967b「青森県名川町剣吉荒町遺跡の発掘調査」『考古学ジャーナル』No. 6　ニューサイエンス社　26 頁
江坂輝彌　1971「青森県名川町剣吉荒町遺跡」『日本考古学年報』19　日本考古学協会
名川町教育委員会　1984『剣吉荒町遺跡発掘調査報告書』

（安藤広道）





第 48 図　グリッド配置想定図、セクション図

写真 13　B トレンチ調査風景

写真 14　A10 区遺物出土状態①

写真 15　A10 区遺物出土状態②

(2) 剣吉荒町遺跡出土土器の分析

a．遺物の保管状態と整理作業の方法

剣吉荒町遺跡出土遺物は、慶應義塾三田キャンパスの西校舎4階の民族学考古学資料室に、いくつかのまとまりに分かれて保管されていた。個体資料の一部がプラスチックコンテナにまとめられていたほかは、全て浅い木製箱に入れられていた。確認できた箱数は61箱である。大半はチョーク等で「剣吉」とのみ書かれたものであったが、そのうち10箱には、「剣吉」の後に1～3、5～7、9～11、25の数字が記された紙ラベルがついていた。剣吉とのみ書かれた箱にも、本来はこれらの数字がふられていた可能性が高い。

遺物はすべて洗浄され、分類、接合、実測等も進められていたようである。しかし、残念なことに、注記は一切なされていなかった。出土地点等を示すラベルが残っていたのは34箱で、ほかに「寄贈A」・「寄贈B」・「寄贈C」というラベルが付された箱が3箱あった。それ以外の箱は、具体的な出土地点、層位等がわからなくなっていた。特に数字のふられた箱の資料に、出土地点の情報が失われたものが多い。この点について、幾人かの関係者から事情をうかがったところ、調査後それほど時間が経たないうちに、少なからぬ資料の出土地点がわからなくなっていたとのことである。

なお、1966年発掘時の出土遺物が、全て慶應義塾に搬入されたわけではないことも、先に記した通りである。また、いくつかの箱に、別の遺跡の遺物が混入していたことからすると、剣吉荒町遺跡の資料が、別の遺跡名が書かれた箱に混じっている可能性も否定できない。

さて、今回の整理では、まず遺物を箱ごとにプラスチックコンテナに移し替えることから始めた。その際、埃の付着したものについては、基本的にハケ等で落とし、汚れのひどいものや未洗のものは、水を使って洗浄した。遺物量の多かったり、大型の個体資料を含むいくつかの箱については、二箱に分割して箱に収めた。そのうえで、全ての遺物に注記を行った。

土器の接合や図化に際しては、コンテナ間の遺物の移動を極力避けることにし、接合等でやむ負えない場合のみ、記録をしたうえで移動をした。この研究期間において、接合作業は概ね完了したが、図化作業を終了させることはできなかった。

b．出土土器の分析

本研究の期間では、当初より、剣吉荒町遺跡出土遺物の全てを整理・報告することは困難と考えられたため、出土遺物のうち「遠賀川系の要素をもつ土器」の抽出と図化に主眼を置いて作業を進めることにした。本来であれば、出土遺物全体の分析結果と併せて、これらの土器群の分析結果を報告すべきであるが、その点については、後日に期すことにした。

1．遠賀川系の要素をもつ土器の抽出

遠賀川系の要素をもつ土器の抽出にあたっては、出土土器全体を見渡したうえで、以下の要素を重視することにした。

◎各器種に共通する要素

ア．口縁部内外面の同時ヨコナデによる口頸部のクビレ・外反（外傾）成形・整形。

イ．ハケ具（木口状の工具）による器面の成形・整形。口唇部の刻み。

ウ．粗砂･小礫を多く含む一方、細砂粒が目立たない胎土。

◎壺形土器の要素

エ．口頸部の短い広口壺形土器で、頸部と胴部上半、あるいは頸部に、1条～3条の明瞭な横方向沈線を施すという特徴。

オ．頸部や胴部上半の削り出し突帯、段。

◎深鉢形（甕形）土器の要素

カ．頸部に横長の列点を挟む数条の沈線文。

これらの要素を重視した理由は以下の通りである。

東北地方の所謂「遠賀川系土器」の要素については、まず1987年に、佐原真氏が、①砂粒の混和、②ヨコナデ、③ハケメ、④ヘラミガキ、⑤ヘラ描き沈線紋、⑥木目沈線紋、⑦横長の列点紋、⑧木目列点紋、⑨黒斑、⑩黒塗の10項目を挙げている。しかし、その後の研究において、その多くについて、さまざまな疑問が呈されており（木村2000、久世他1997、佐藤2003など）、分析にあたっては、個々の遺跡出土遺物の実態に即した項目の整理が不可欠となっている。

アのヨコナデについては、単なる横方向のナデの痕跡ではなく、器形の作出と密接に関係した成形に関わる要素であることを強調しておく。これは、土器を回転させながら、内外面同時にほぼ中断なく一周程度ナデ続ける行為の痕跡である。こうしたヨコナデは、遠賀川系土器には一般的であるが、大洞A式以前の土器製作技術のなかには今のところ認められないようである。もちろん、器面のミガキの状態、破片の大きさによっては、回転運動を伴わない横方向のナデと区別できないものもあるが、その範囲が口頸部のクビレ・外反・外傾の作出と関係する可能性が高く、かつ口唇部と平行し水平に、途切れなく施されるものについては、同様のものとして抽出することにした。

イのハケ具については、これまでも指摘があったように、

大洞Ａ式以前の土器に木口状の工具によると思われる条痕が認められるため、厳密には遠賀川系土器の要素と言えないものである。そこでここでは、内外面全体にハケが施されたと考えられる土器について、遠賀川系土器の成形技法を使ったものとして抽出することにした。ただし、ハケ後の施文や調整によって、その判断が難しいものがあるのも確かである。そうした資料は、観察表に記しておいた。

ウは、佐原氏の指摘以来、砂粒の混和と表現されてきたものである。しかし、実際に目立つのは、径１～２mm程度の鉱物粒であり、粗砂・（小）礫とすべきだろう。同程度の鉱物粒の混和自体は、亀ヶ岡系土器にもないわけではないが、ここで注目したのは、それらが多量に含まれる一方で、細砂粒の混入が目立たないという特徴である。もちろん、砂粒の混和状況の判断は、あくまでも感覚的なものに過ぎず、器面の調整や遺存状態によっても大きく左右されてしまうため、基準の曖昧さを否定することはできない。また、後述するように、分類に悩むような資料が少ないながら存在することも事実である。しかし、上記のような特徴をもつ胎土の土器の多くに、他の遠賀川系の要素がみられることは間違いない。その一方で、遠賀川系の要素をもたない土器では、判断に迷うようなものが少量認められる程度に止まるようである。

エ、オは、遠賀川系の壺形土器に通有の装飾手法である。頸部のみの沈線文については、所謂亀ヶ岡系の壺形土器にも頸部の屈曲に沈線を１条施す例があるため、遠賀川系土器の要素とは言い難いが、亀ヶ岡系土器の頸部沈線は、基本的に細頸壺形土器に限られ、浅いものや細いものが目立つため、広口短頸壺形土器に施された沈線がしっかりしているものについては、肩部の沈線文が省略されたものと考え分類に加えることにした。なお、剣吉荒町遺跡出土の壺形土器のなかには、横長列点文は存在しない。

カは、山陰地方の遠賀川系土器に目立つ要素であるが、一方で、大洞諸型式の要素から派生する可能性も捨てきれないものである。ただし、剣吉荒町遺跡出土土器の場合、口縁部が残るカをもつ土器は、いずれもアと組み合わさっており、遠賀川系土器の要素との関連性が強い。

なお、佐原氏の挙げた項目のうち、ヘラミガキ、ヘラ描沈線については、遠賀川系土器に特有の要素と評価することはできなかった。遠賀川系土器の要素を持つ深鉢（甕）形土器の頸部沈線には、佐原氏の指摘のように縁が盛り上がり、断面が円形を呈さないものが目立つようであるが、それは沈線施文後のミガキが施されていないことと関係すると考えられる。沈線の断面形も厳密な分類は不可能と判断した。その他の項目である、木目沈線、木目列点、黒塗は、剣吉荒町遺跡出土土器には確認できなかった。

ここでは、以上の６つの要素のうち、一つ以上をもつ土器を「遠賀川系土器の要素をもつ土器」として抽出した（第49図～第54図）。抽出の根拠となる要素については、観察表に記しておいた。これら以外の所謂亀ヶ岡系土器については、全てを図化することができなかったため、時期的な特徴を示すもの、遠賀川系の要素を持つ土器との比較対象となる土器を中心に提示しておく（第55図～第59図）。

２．遠賀川系土器の要素を持つ土器の分類

上記の要素によって抽出した土器を、以下のように分類する。

【広口短頸壺形土器】

◎器　形

〔口頸部〕

１類：短く太い頸部から弱く外反、あるいは外傾するもの（１・２・５）。

２類：短く太い頸部から強く外反するもの（３・４）。３の口唇部には１条の沈線がめぐる。

３類：頸部が屈曲気味となり、口頸部が短く直立気味に立ち上がるもの（９～11）。

〔胴　部〕

ⅰ類：胴部最大径が中位にあり、強く張るもの（８）。

ⅱ類：胴部最大径が上位にあるもの（９～12、18）。

◎装　飾

〔構　成〕

ａ類：頸部及び、胴部上半の最大径部よりも上に細い区画帯あるいは装飾帯を配するもの（８）。胴部の破片である13～17も、胴部最大径より上に沈線文をもつものであり、ａ類となる可能性が高い。

ｂ類：頸部と胴部最大径付近に細い区画帯あるいは装飾帯をもつもの（12）。

ｃ類：頸部のみに細い装飾帯をもつもの（９～11）。

〔施文要素〕

α類：１～３条の横走沈線（１～５、７～12、16、17）。

β類：ハケ具による削り出し突帯または段（６、13～15、145頁・写真52、54～56）。13～15は、胴部上半、胴部最大径より上部に施されたもので、段の下に沈線を１条付加している。

19～23は、要素イ・ウをもつ胴部破片である。

各分類項目と法量との関係をみると、口頸部１類、２類の個体は、口径20㎝以上の大型土器と考えられ、３類はそれ以下の中型、小型にみられる。胴部形態の判明するものは、いずれも中型、小型である。装飾については、構成ａ類は、胴部破片を含めると、１点（８）を除いて、いずれも大型の土器になるようである。ｂ類は小型、ｃ類は中

型、小型土器にみられる。装飾要素のβ類は大型土器になるようである。

【鉢形土器・蓋形土器】

24は、やや丸みのある胴部と弱く外反する口縁部をもつ鉢形土器で、胴部と口縁部の境界に1条の沈線を施している。口縁部の外反はヨコナデによって成形されている可能性が高い。遠賀川系土器にはみられない器形であるが、亀ヶ岡系とも言い難いため、遠賀川系の鉢形土器との関係を考えておきたい。

25は、外反して大きく開く口縁部状の破片で、口唇は面取りされ、内外面にしっかりとしたヨコナデ痕が認められるものの、ミガキは施されていない（146頁・写真58、59）。径が20㎝前後になると思われることや、内面の調整が粗いことなどから、遠賀川系の甕蓋形土器と判断した。甕蓋形土器であれば、東北地方では初めての確認例となる。

【深鉢（甕）形土器】

◎器　形

1類：弱く短く外反する口縁部に最大径があり、胴部上位が弱く張るものの、胴部に最大径をもたないもの（27、29）。

2類：短く外反する口縁部をもち、胴部最大径が胴部上位にくるもの。口径と胴部最大径は拮抗するか、やや胴部が上回る（26、28、34、47）。

3類：短く外反する口縁部をもち、胴部最大径が2類に比してやや低い位置にあるもの。口径と胴部最大径は拮抗するか、やや胴部が上回る（50）。

4類：短く直立気味に立ち上がる口縁部をもち、胴部最大径が胴部上位にくるもの。口径よりも胴部最大径が大きくなる（35）。

5類：短く屈曲気味に開く口縁部をもち、胴部が丸く張るもの。胴部に最大径がある（33、44）。

6類：短く強く外反する口縁部をもち、胴部最大径が胴部上位にくるもの。口径よりも胴部最大径が大きくなる（51、54）。

7類：頸部のくびれが非常に弱いもの。口縁部内面に稜をもつ（53）。

◎装　飾

〔口唇部〕

a類：ハケ具による刻み（27～30、34、37、38、40、41、42）。

b類：ヘラ条工具による刻み（47～50）。

c類：縄文（36、43～45、51）。

d類：無文（26、31、33、39、52～54）。

〔頸　部〕

α類：1～3条の沈線文（27～30、33～43）。

β1類：2条の沈線間に、縦長のハケ状工具による刻みを加えるもの（26）。

β2類：2・3条の沈線の間に、横長の列点文を挟むもの（44～49）。

γ類：無文（50～54）。

〔胴　部〕

ア類：ハケ目で終了するもの（26～32）。

イ類：ハケ目のうえに縄文を施すもの（33～36、39、40、42、43、50）。

ウ類：縄文（37、38、41、44～49、51～54）。

55、56、59は要素イをもつ胴部、底部破片。57と58はウをもつもの。

深鉢形土器の法量は、口径が判明したものでは、口径30cmを超える大型が1点、20cm前後の中型が6点、10cm前後の小型が3点となる。破片の多くは中型のものと考えられる。

3．遠賀川系の要素を持たない土器

第55図～第59図には、所謂亀ヶ岡系とされる、遠賀川系の要素を持たない土器をまとめた。全ての土器の図化が終了しているわけではないので、以下、器種ごとに簡単に触れるのみにとどめておく。

剣吉荒町遺跡出土土器の亀ヶ岡系土器は、砂沢式が主体を占めると考えている。ここで言う砂沢式は、本研究の大坂報告の八幡堂3群～戸沢川代段階に平行する時期としておく。したがって、大洞A'式とされることもある三戸町金田一川遺跡出土の浅鉢形土器は、砂沢式に含まれることになる。

砂沢式以前のものとしては、大洞A_1式とA_2式の破片資料がごく僅かに存在する（60～63）。A'式は破片資料が比較的多くみられるが（64～68）、大型破片や完形土器はないようである。

69～78は、浅鉢形土器。69、70は所謂カルデラ突起をもつもの。ともに八幡堂3群に近い時期のものであろう。78は金雲母を多量に含む北上川流域からの搬入品であり、岩手県金附遺跡報告Ⅲ群1類にあたる（岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター2006）。77はやや粗雑な変形工字文を重ねるもので、内面に籾痕がみられる（佐藤1969、151頁・写真98～100）。

80～84は台付浅鉢形土器。85～87は、肩部に文様帯をもつ壺形土器。86は大洞A'式とも考えられるが、文様帯が胴部最大径まで下がっており、砂沢式となる可能性もある。88～91は口縁部に匹字文系の文様をもつ胴部無文の壺形土器。89～91は胎土に金雲母を含む北上

川流域からの搬入品。沈線内を複数回なぞる特徴的な施文手法がみられる。92 ～ 94 は小型無文の壺形土器。95 は内面にハケ状の条痕をもつが、ハケではなく、草の茎状の繊維質を束ねたものの調整痕と判断した（151 頁・写真 94）。

96 ～ 124 は深鉢形土器。口縁部が弱く外反するものや、やや強めに屈曲するものがみられるほか、口縁部が内湾するものも少なくない。口縁部内面に沈線を加えるもの、弱い稜を形成するものも目立つ。最大径を胴部上半にもつものが多い点も特徴的である。

96 ～ 98 は変形工字文帯をもつ精製と言っていい深鉢形土器である。97 は金雲母を多量に含む、金附遺跡報告のⅢ群 1 類の搬入品。100 は大洞 A' 式か。102 ～ 104 は、砂沢式に一般的な装飾帯が口縁部と胴部に分かれるものである。

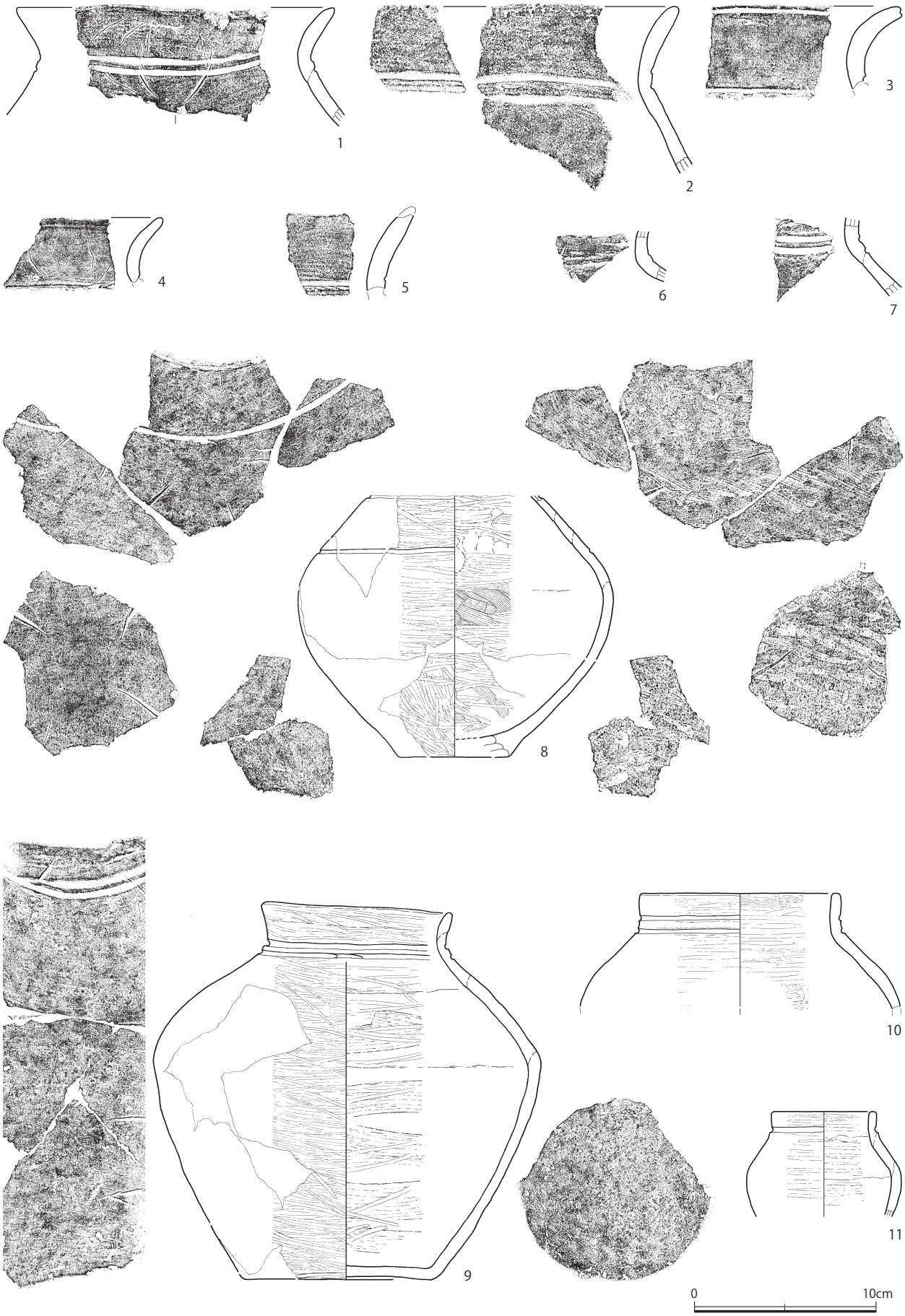
105 以下は、粗製の深鉢形土器である。105 ～ 115 には、口縁部下あるいは頸部に沈線による装飾帯をもつものをまとめた。口唇部に押捺を加えて波状とするものや、刻みを加えるものもみられる。沈線の条数、施文具は多様であるが、棒状工具によって頸部付近に数条の沈線を描き、口唇部に刻みをもつもののなかには、遠賀川系の要素をもつ土器によく似たものが存在する。特に、105 は、胎土も遠賀川系に近くなっており、遠賀川系の要素をもつ土器とするか否か、最後まで悩んだ資料である（151 頁・写真 96・97）。

116 ～ 122 は無文の深鉢形土器である。横方向のナデとミガキによる無文帯を口縁部に形成する個体が多い。外反する口縁部をもつもののなかには、ヨコナデの認められる 50 ～ 54 に類似したものが少なからず存在する。特に、ヨコナデと横方向のナデの区別がつきにくい小破片での分類は不可能に近い。

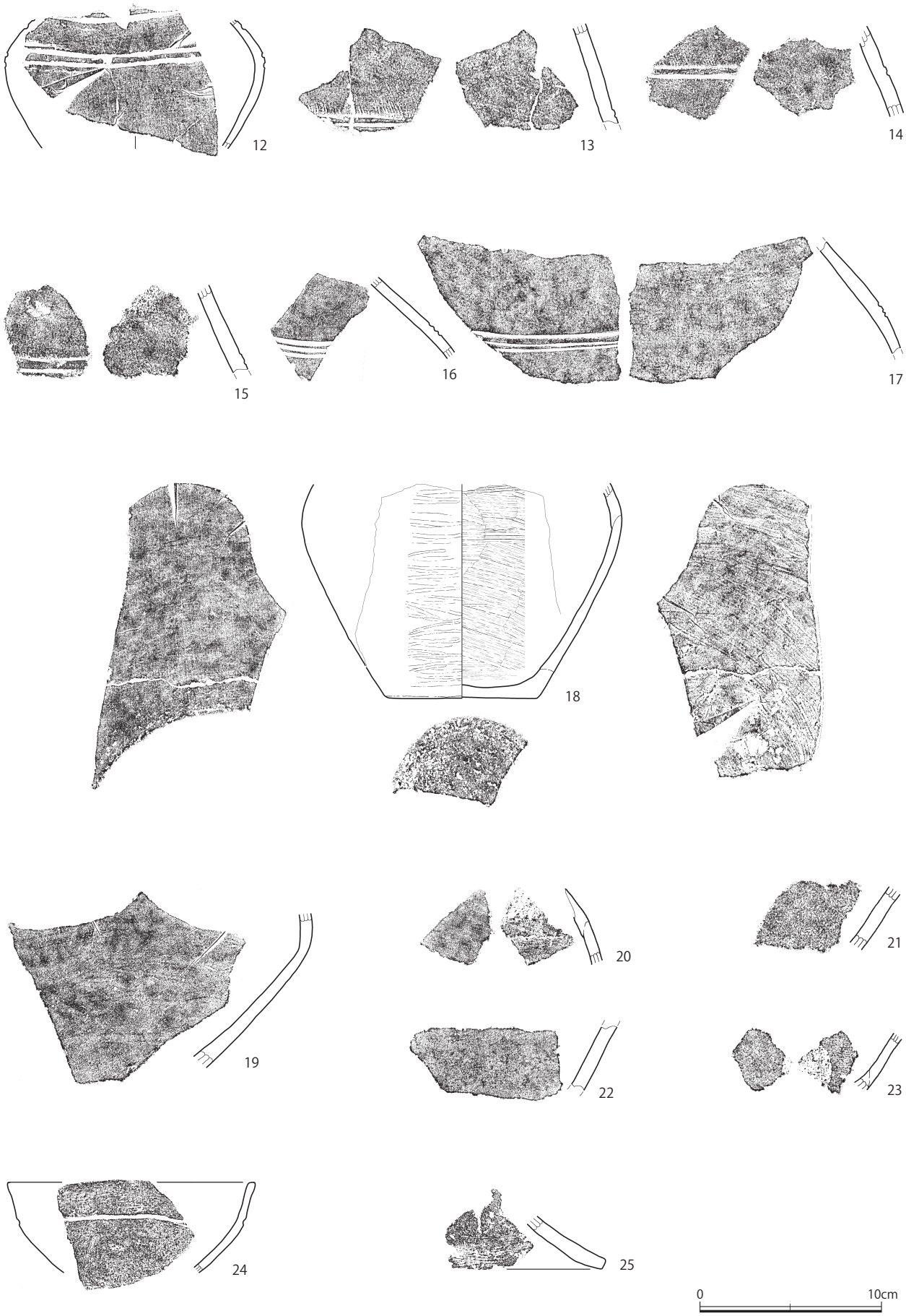
引用・参考文献

岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター　2006『金附遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第 482 集
木村早苗　2000「青森県出土の「遠賀川系土器」」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会　699-734 頁
久世健二・北野博司・小林正史　1997「黒斑からみた弥生土器の野焼き技術」『日本考古学』第 4 号　日本考古学協会　41-90 頁
佐藤敏也　1969「日本における稲の初現」『考古学ジャーナル』No.35　ニーサイエンス社　1－6 頁
佐藤由紀男　2003「本州北部の『遠賀川系的要素を持つ土器群』について」『みずほ』第 38 号　大和弥生文化の会　62-82 頁
佐原　眞　1987「みちのく遠賀川」『東アジアの考古と歴史 中 岡崎敬先生退官記念論集』同朋社出版　265-291 頁

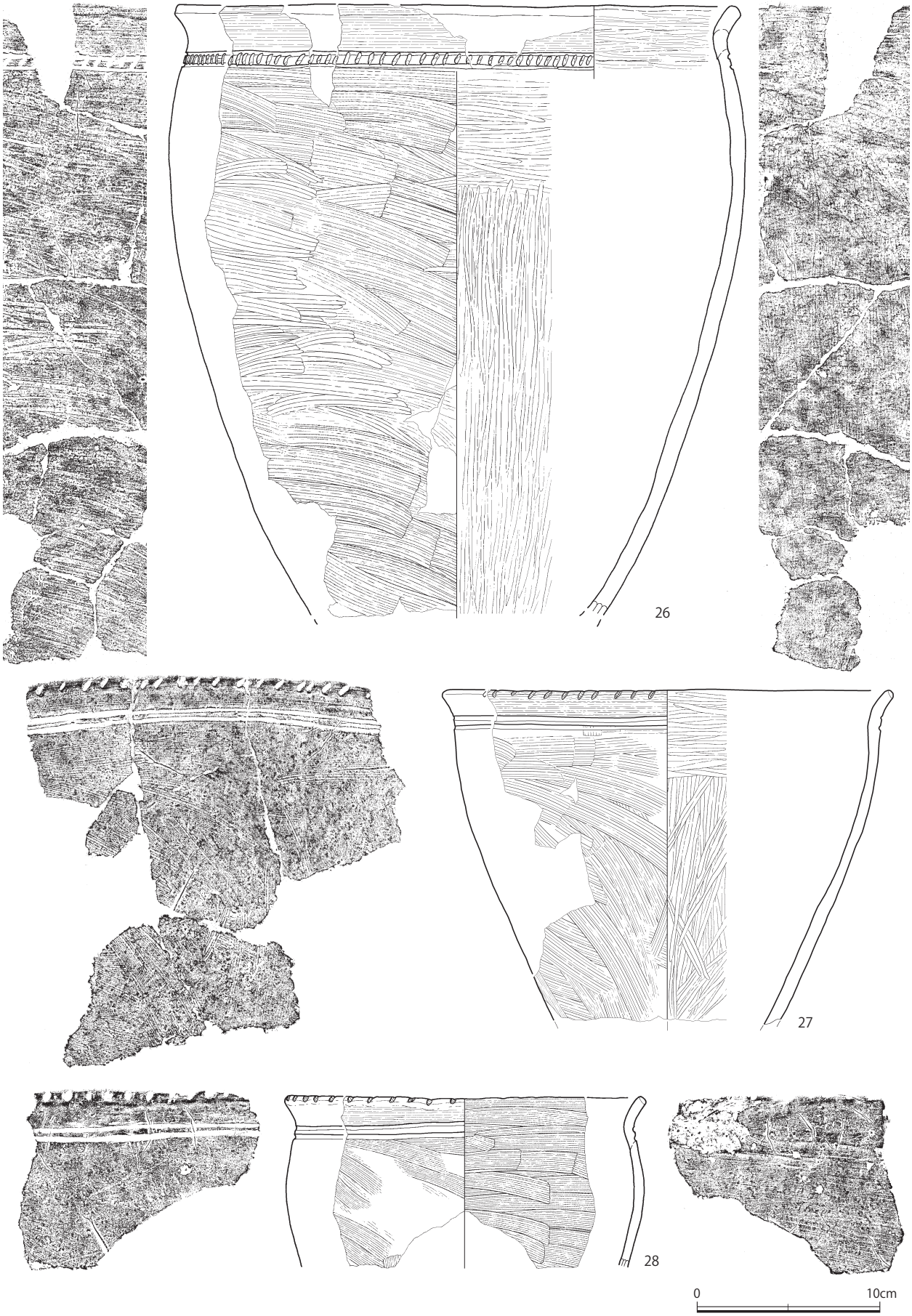
（安藤広道）



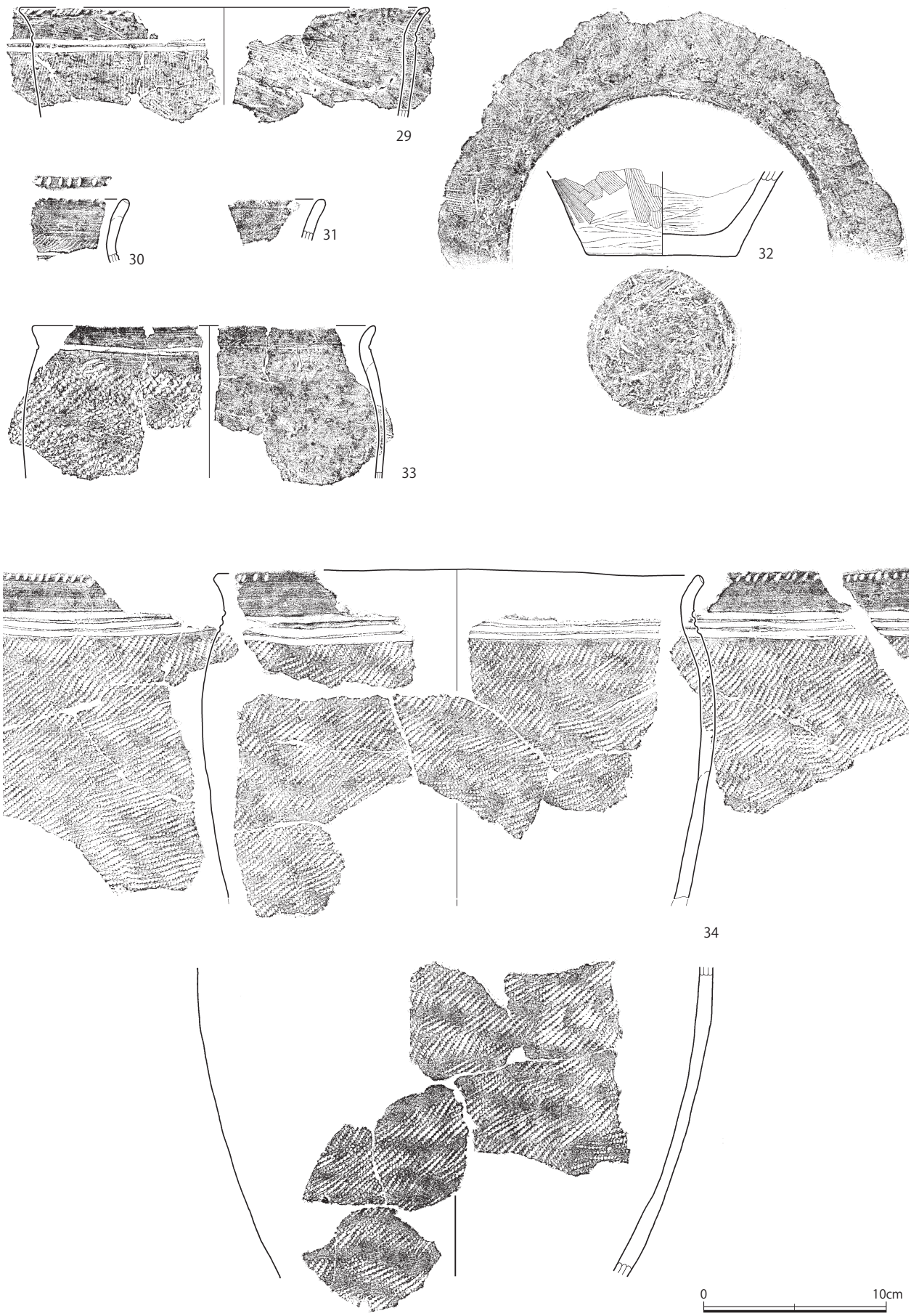
第 49 図　剣吉荒町遺跡出土土器①



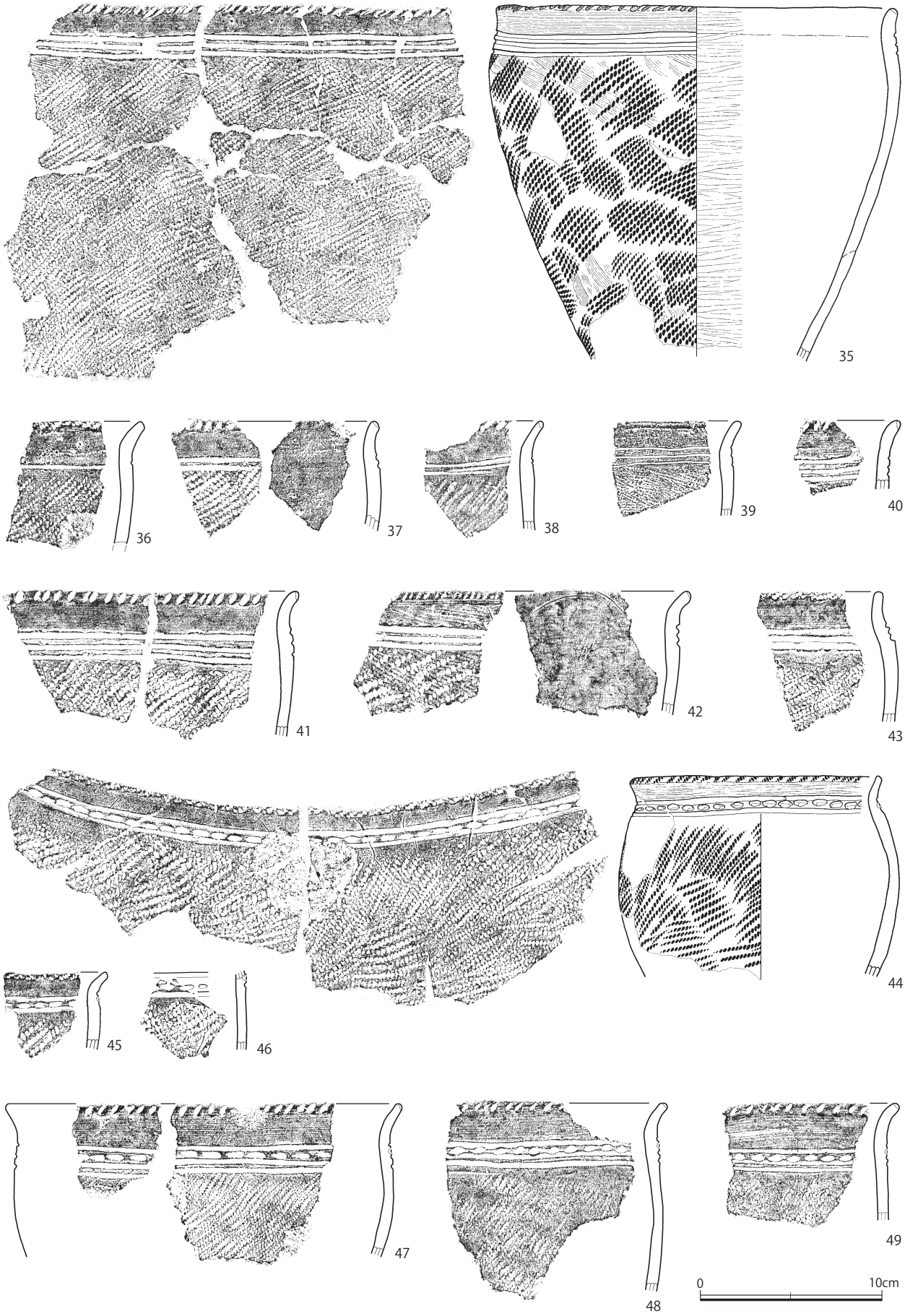
第 50 図　剣吉荒町遺跡出土土器②



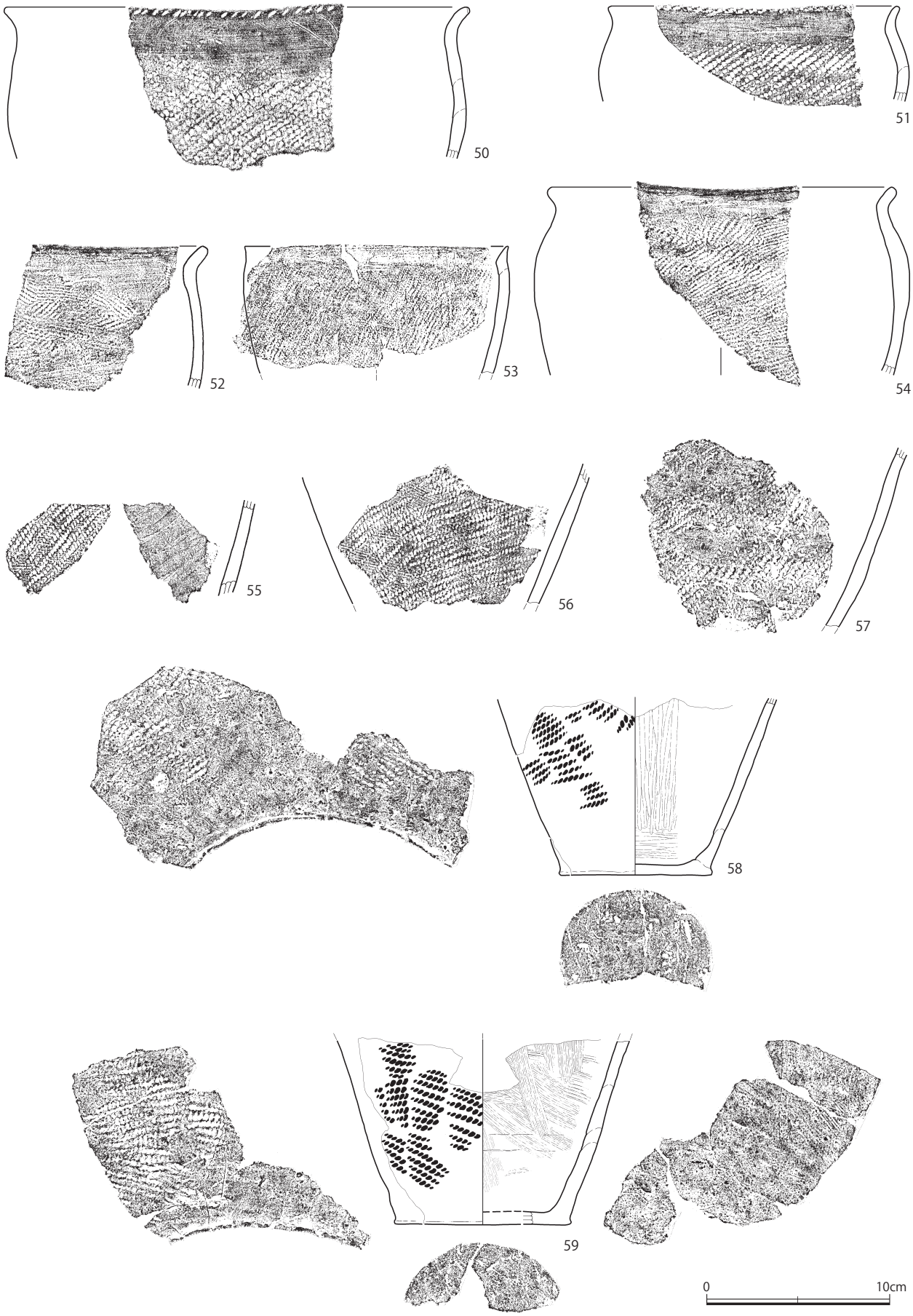
第 51 図　剣吉荒町遺跡出土土器③



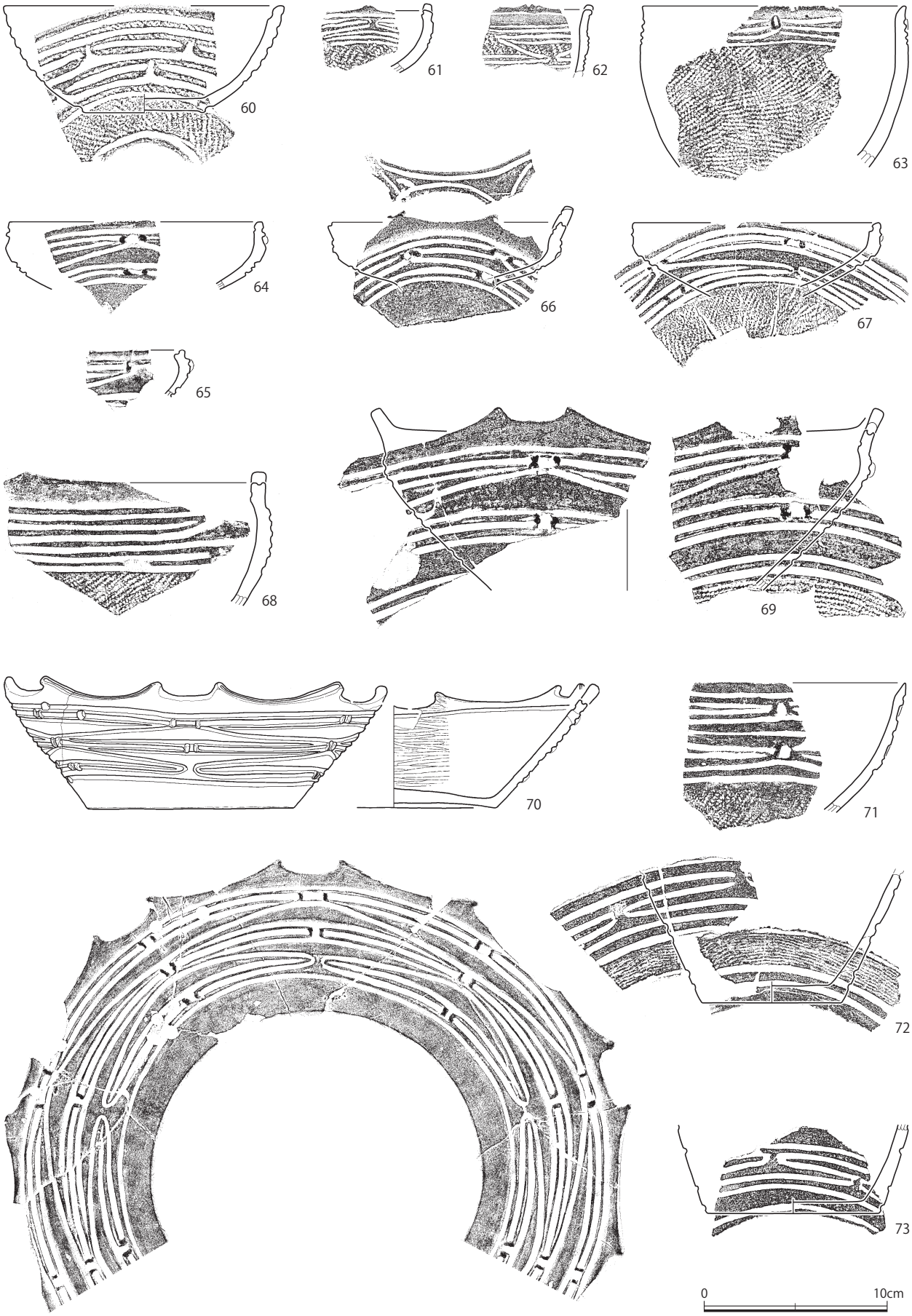
第 51 図　剣吉荒町遺跡出土土器④



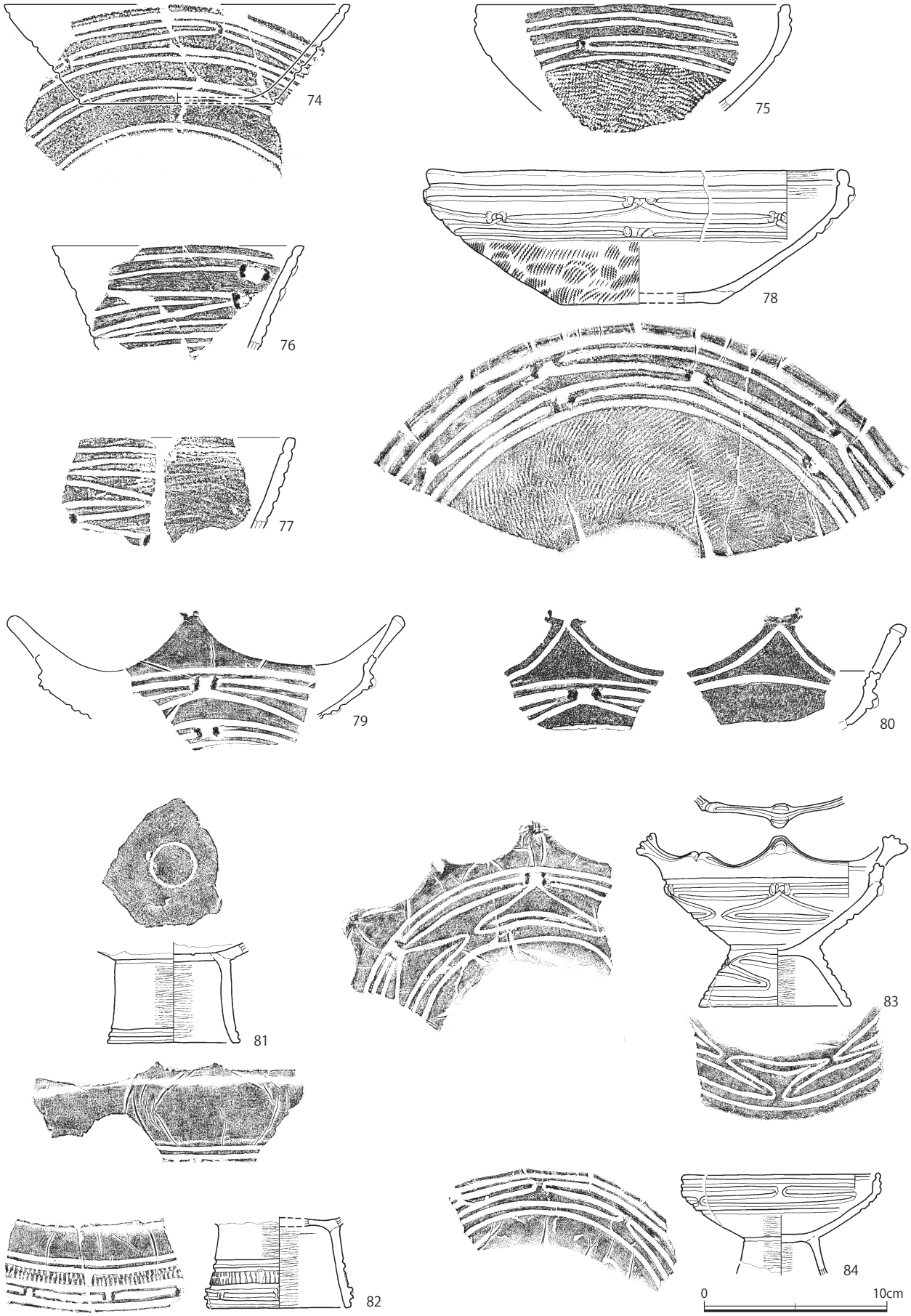
第 53 図　剣吉荒町遺跡出土土器⑤



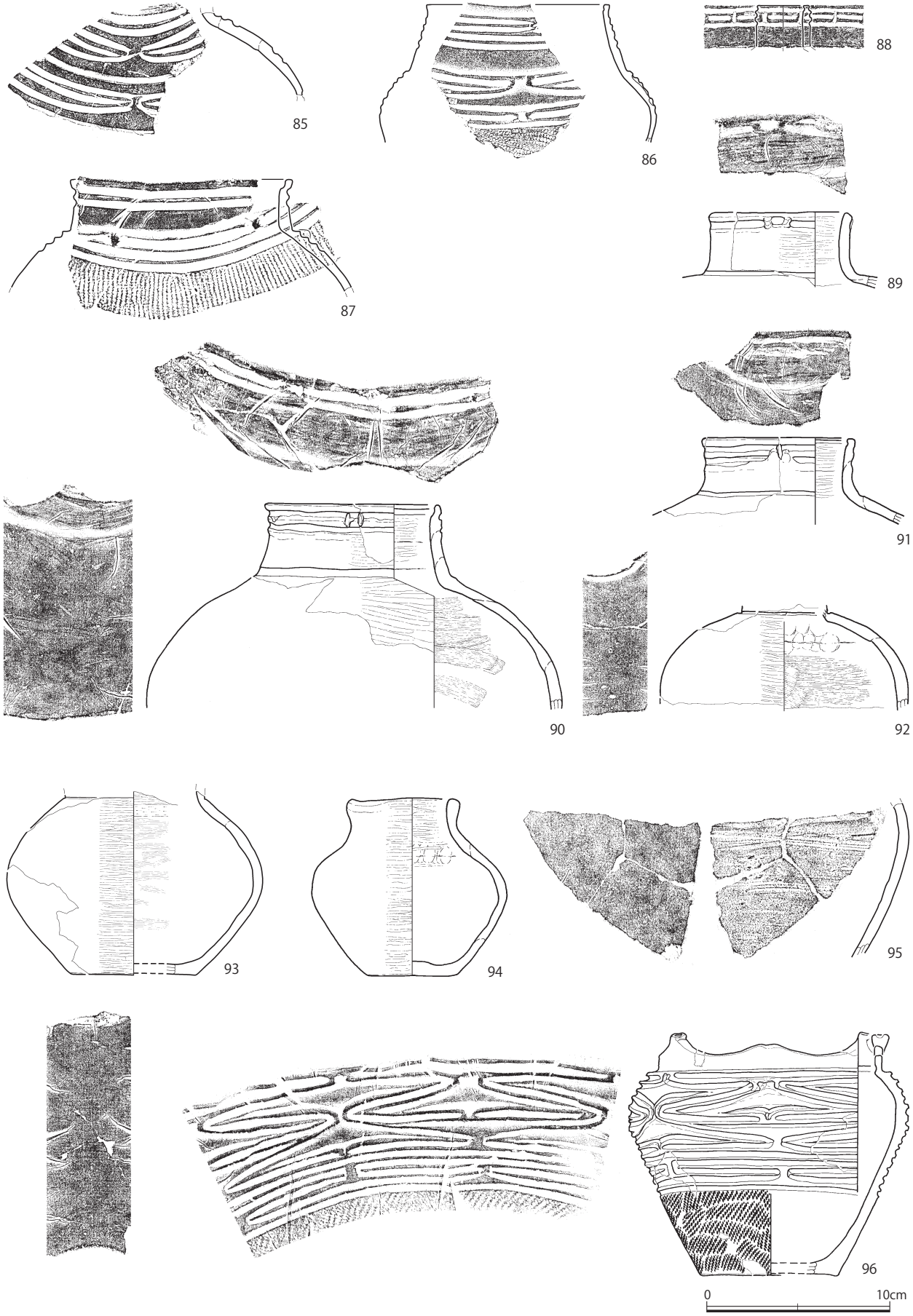
第 54 図　剣吉荒町遺跡出土土器⑥



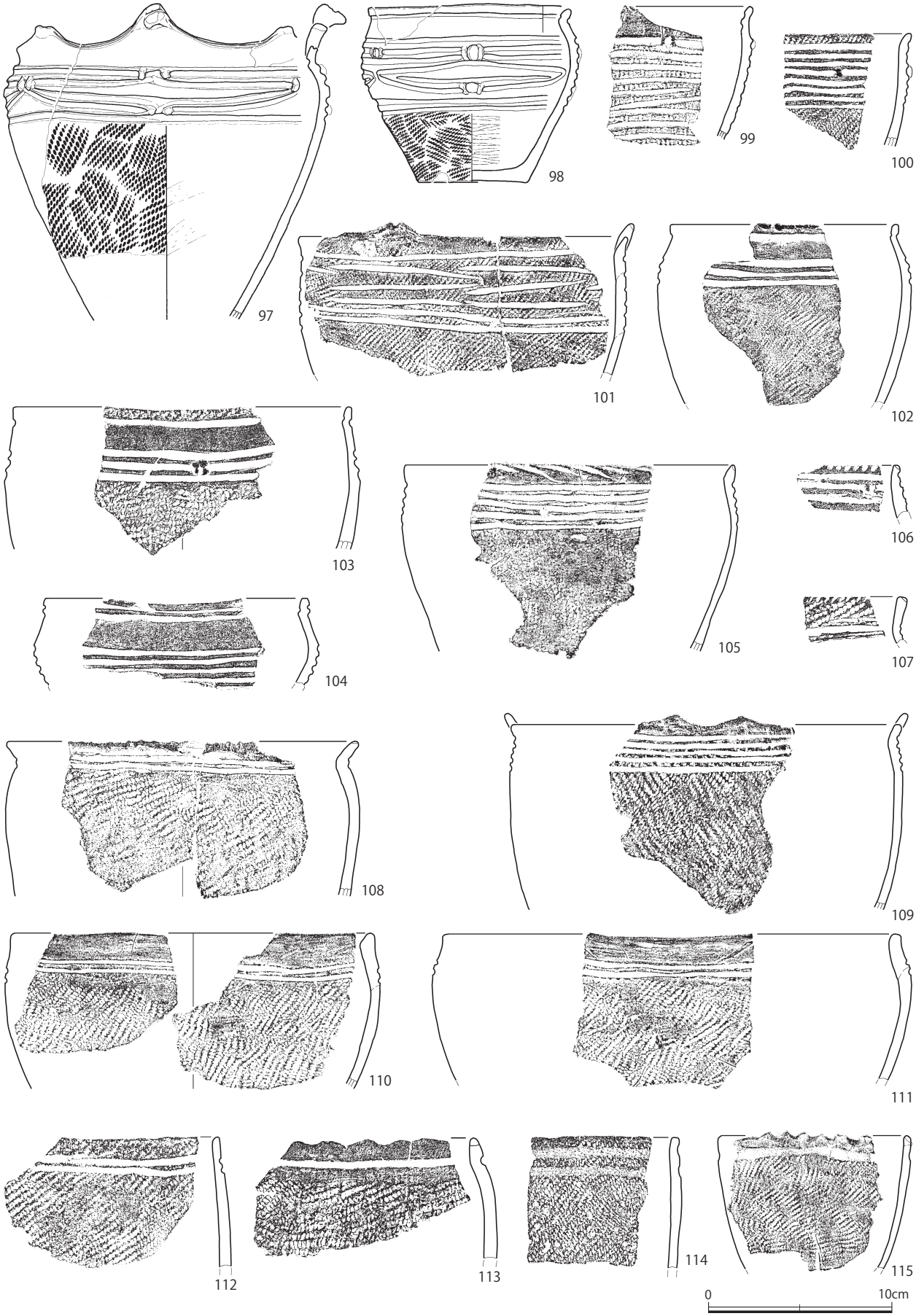
第 55 図　剣吉荒町遺跡出土土器⑦



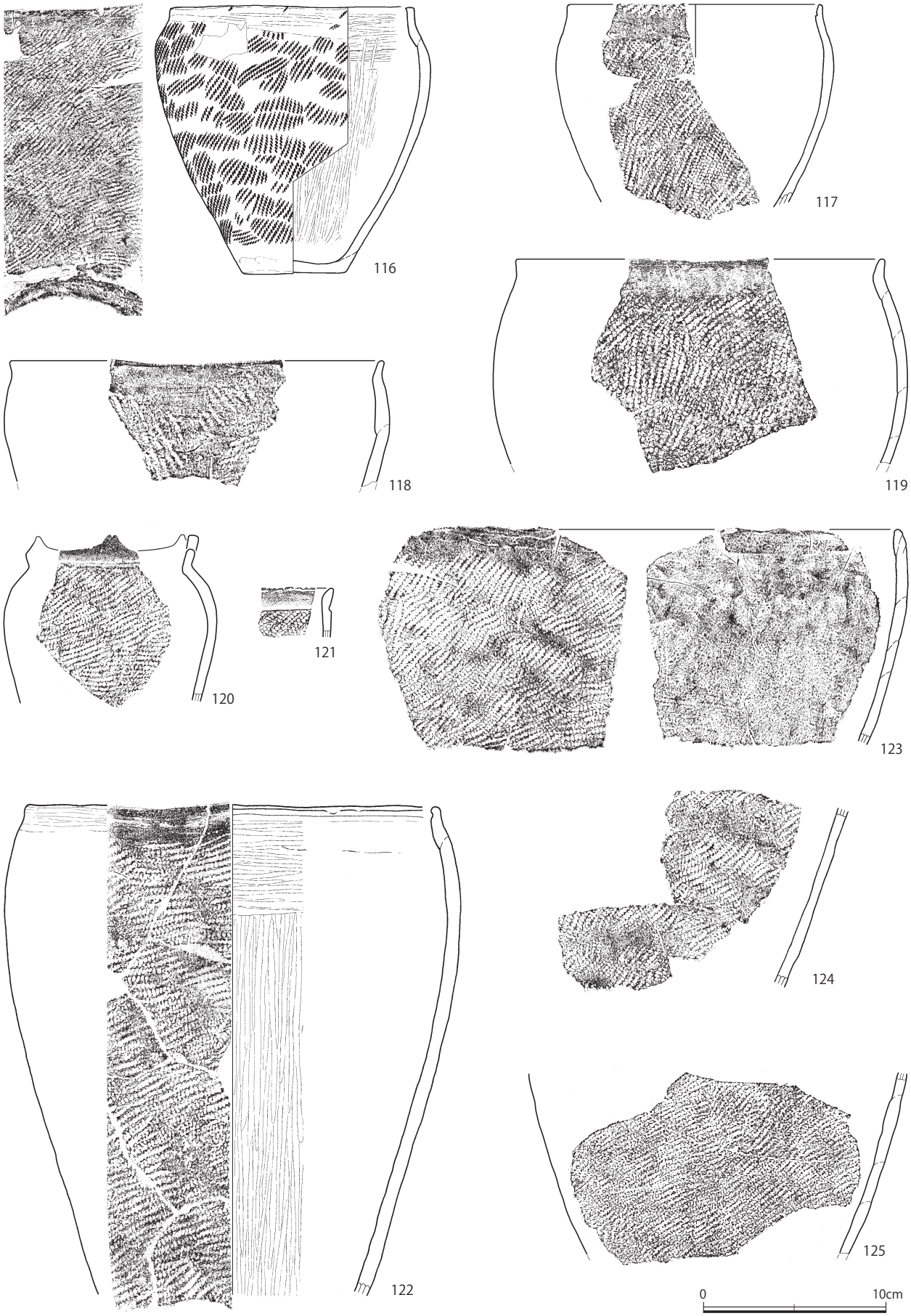
第 56 図　剣吉荒町遺跡出土土器⑧



第 57 図　剣吉荒町遺跡出土土器⑨



第 58 図　剣吉荒町遺跡出土土器⑩



第 59 図　剣吉荒町遺跡出土土器⑪

表３　剣吉荒町遺跡出土土器観察表

図	No.	出土地点・層位	器　種	部位・状態	成形・調整	施　文	胎　土	焼　成	色調（土色帖準拠）	備　考
49	1	不明	遠賀川系要素含・壺	口頸部破片	外面：口縁部ヨコナデ、施文→入念な横方向ミガキ。 内面：口縁部ヨコナデ→横方向ミガキ。胴部のミガキ粗い。輪積痕。	ミガキ前に頸部に沈線２条。沈線内にミガキ及ぶ。	砂粒(0.5mm以下、石英・白色粒子等)含。海綿状骨針少量。	良好	内外面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	口縁端部黒色化。
49	2	Ａ９・黒土	遠賀川系要素含・壺	口頸部破片	外面：横方向ミガキ。ミガキ前、口縁付近ハケ・ヨコナデ、頸部下ハケ。 内面：横方向ミガキ。一部ケズリの痕跡あり。	頸部に沈線２条。	石英含粗砂極多含。海綿状骨針、金雲母極少含。	良好	外面：灰色（5Y4/1） 内面：褐色（10YR4/6）	被熱？ 14・15と同一個体？
49	3	不明	遠賀川系要素含・壺	口頸部破片	内外面：ヨコナデ→横方向ミガキ。	ヨコナデ→口唇・頸部に沈線。後ミガキ。	小礫・粗砂多含。海綿状骨針少量。	良好	外面：明暗褐色（10YR7/6） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	
49	4	不明	遠賀川系要素含・壺	口頸部破片	外面：ヨコナデ→入念な横方向ミガキ。 内面：横方向ハケ、ヨコナデ→入念な横方向ミガキ。	ミガキ前に頸部に沈線。	小礫・粗砂やや多含。海綿状骨針少量。	良好	内外面ともにぶい黄橙色（10YR6/4）	
49	5	A10・表土	遠賀川系要素含・壺	口頸部破片、口唇部を欠く	外面：頸部付近横・斜方向ハケ、口頸部ヨコナデ→横方向ミガキ。 内面：ヨコナデ→横方向ミガキ。	頸部に沈線。２条目あり？	砂粒（1mm以下、石英等）やや多含。	良好	外面：黄褐色（2.5Y5/4） 内面：黄褐色（10YR5/6）	
49	6	A10北拡・表土	遠賀川系要素含・壺	頸部破片	外面：突帯上下斜方向ハケ→口頸部横方向ハケ、ヨコナデ→強いミガキ。 内面：横方向ミガキ。	頸部に突帯１条（ハケ具で上下に削り出し）。	砂粒（0.5mm以下、石英等）含。海面状骨針少含。	良好	外面：にぶい黄褐色（10YR5/4） 内面：橙色（7.5YR6/6）	
49	7	Ｃ２・カマボコ箱	遠賀川系要素含・壺	頸部破片	外面：口頸部粗いヨコナデ（右→左）。胴部横方向ケズリ？→ミガキ。 内面：横方向ケズリ、口頸部ヨコナデ→やや粗いミガキ。	ヨコナデ→ミガキ前に頸部に沈線２条。	砂粒（0.5mm以下、石英等）やや多、海面状骨針少含。	良好	外面：にぶい黄色（2.5Y6/3） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	黒斑あり。
49	8	不明	遠賀川系要素含・壺	胴部～底部・複数の破片	外面：ミガキ（上部ヨコ・ナナメ、中部ヨコ、下部タテ・ナナメ）。 内面：指頭圧痕→ハケ→ナデ→横方向ミガキ。輪積痕。	ミガキ前に胴上部に沈線２条。	粗砂やや多含。海綿状骨針含。	良好	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	黒斑あり（覆い焼き？）
49	9	不明	遠賀川系要素含・壺	口縁部～底部の一部を欠く	外面：横方向ナデ→横方向ミガキ。 内面：胴部ケズリ（一部ハケ？）→粗いミガキ。口頸部・底部入念な横方向ミガキ。輪積痕。	ミガキ前に頸部に沈線２条。	小礫・粗砂多含。海綿状骨針含。	良好	外面：黄褐色（2.5Y5/3） 内面：にぶい黄色（2.5YR6/4）	不整形の黒斑あり。
49	10	不明	遠賀川系要素含？・壺	口縁部～胴部上半破片	外面：横方向ケズリ→口縁部横方向ナデ。沈線施文→横方向ミガキ。 内面：横方向ケズリ、口縁部横方向ナデ→横方向ミガキ。	ナデ→ミガキ前に沈線２条。	粗砂含。小礫少含。海綿状骨針少含。	良好	外面：黄灰色（2.5Y4/1） 内面：暗灰黄色（2.5Y5/2）	
49	11	不明	遠賀川系要素含？・壺	口縁部～胴部破片	内外面：横方向ケズリ→横方向ミガキ。	ミガキ前に沈線１条。	砂粒含。海綿状骨針やや多含。	良好	外面：にぶい黄色（2.5Y6/3） 内面：暗灰黄色（2.5Y5/2）	
50	12	不明	遠賀川系要素含？・壺	胴部破片	外面：沈線→横方向ミガキ（単位不明瞭）。 内面：条・擦痕のつくナデ→胴下部に粗いミガキ。	胴部上半に２条１単位の沈線を２単位。	砂粒（1mm以下、石英含）含。海綿状骨針多含。	良好	外面：黒褐色（10YR3/2） 内面：黒褐色（10YR3/1）	在地系土器か？
50	13	Ａ９・黒土、A10・ピット直上	遠賀川系要素含・壺	胴上半破片	外面：斜方向ハケ→横方向ミガキ（単位不明瞭）。 内面：斜方向ハケ？、横方向条のつくナデの→横方向ミガキ（単位不明瞭）。	沈線２条。上部の沈線はハケ具による削り出し手法による。後ミガキ。	砂粒（0.5mm以下、石英・白色粒子）やや多含。	良好	外面：黄灰色（2.5Y5/1） 内面：橙色（7.5YR7/6）	
50	14	A10・ピット下部	遠賀川系要素含・壺	胴上半破片	外面：沈線より上、斜方向ハケ→全体に弱いミガキ。 内面：横方向ミガキ（単位不明瞭）。	沈線２条。上部の沈線はハケ具による削り出し手法による。その後ミガキ。沈線下、ミガキ後にごく弱い縄文（LR）？	砂粒（1mm以下）多含。	良好	外面：浅黄色（2.5Y7/4） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	被熱？ ２と同一個体か？
50	15	A10・表土	遠賀川系要素含・壺	胴上半破片	外面：沈線より上、縦方向ハケ→横方向ミガキ（単位不明瞭）。 内面：斜ハケ？→横方向ミガキ（単位不明瞭）。	沈線２条。上部の沈線はハケ具による削り出し手法による。	砂粒（1mm以下）多含。	良好	外面：にぶい黄橙色（10YR7/4） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	被熱？ ２と同一個体か？
50	16	不明	遠賀川系要素含・壺	胴上半破片	内外面：入念なミガキ（単位不明瞭）。	ミガキ前に沈線３条。	砂粒(0.5mm以下)、海面状骨針少含。	良好	外面：灰黄色（2.5Y6/2） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	
50	17	不明	遠賀川系要素含・壺	胴上半破片	外面：横方向ミガキ（単位やや不明瞭）。 内面：粗い横方向ミガキ。	ミガキ前に沈線３条。	砂粒（0.5mm以下）、海面状骨針含。	良好	内外面：灰黄色（2.5Y6/2）	不定形の黒斑。内面に黒色物質（スス？）付着。
50	18	Ａ５・黒土	遠賀川系要素含・壺	胴部～底部・大型破片	外面：横方向ハケ？の→入念な横方向ミガキ（単位不明瞭）、底部付近ミガキ前ケズリ。 内面：接合部に条の明瞭なハケ、全体に条の弱いハケ。底部付近ハケ前に横方向ナデ。輪積痕。		石英含む小礫・粗砂多含。海綿状骨針少量。	良好	外面：にぶい黄褐色（10YR5/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	明瞭な黒斑なし。
50	19	不明	遠賀川系要素含？・壺	胴下半破片	内外面：入念な横方向ミガキ。内面、斜方向ハケ？上部のミガキやや粗い。		砂粒（金雲母少含）少含。海綿状骨針含。	良好	外面：浅黄色（2.5YR7/4） 内面：にぶい黄色（2.5Y6/3）	外面に不整形の黒斑。亀ヶ岡系の可能性あり。
50	20	不明	遠賀川系要素含・壺	胴破片	外面：ミガキ。内面：横方向ハケ。		粗砂（石英他）やや多含。海綿状骨針含。	良好	外面：にぶい黄橙色（10YR7/4） 内面：灰黄褐色（10YR5/2）	
50	21	不明	遠賀川系要素含？・壺	胴下半破片	内外面ともに横方向ミガキ。外面入念、単位不明瞭。		小礫・粗砂やや多含。海綿状骨針含。	良好	外面：にぶい黄色（2.5Y6/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	亀ヶ岡系の可能性あり。
50	22	Ａ９・黒土	遠賀川系要素含？・壺	胴下半破片	外面：横方向ミガキ。 内面：横方向ミガキ。一部ケズリの痕跡。		石英含粗砂極多含。小礫、海綿状骨針、金雲母極少含。	良好	外面：灰色（5Y4/1） 内面：褐色（10YR4/6）	亀ヶ岡系の可能性あり。
50	23	A10・表土	遠賀川系要素含・壺	胴下半破片	外面：横方向ミガキ（単位不明瞭）。 内面：ハケ→ミガキ。輪積痕。		砂粒（0.5mm以下）やや多含。	良好	外面：浅黄色（2.5Y7/3）黒斑か？ 内面：にぶい黄橙色（10YR7/4）	

図	No.	出土地点・層位	器　種	部位・状態	成形・調整	施　文	胎　土	焼　成	色調（土色帖準拠）	備　考
50	24	A10・黒土	遠賀川系要素含？・鉢？	口縁～胴部上半破片	外面：口縁部ヨコナデ？→全体に横方向ミガキ。 内面：横方向ケズリまたはハケ？→横方向ミガキ。	ミガキ前、屈曲部に沈線１条。	小礫・粗砂含。海綿状骨針少含。	良好	外面：黄褐色（2.5Y5/3） 内面：にぶい黄色（2.5Y6/3）	
50	25	A10・黒土	遠賀川系要素含・蓋？	口縁部破片	外面：頸部斜めナデ→口縁部ヨコナデ。口唇面取り。 内面：口縁部ヨコナデ。		小礫・粗砂やや多含。	良好	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：黄灰色（2.5Y4/1）	
51	26	不明	遠賀川系要素含・甕	口縁～胴部大型破片	外面：斜方向ハケ→口縁～口唇ヨコナデ。 内面：ハケ→口頸部横方向ミガキ、胴部縦方向ミガキ。	ヨコナデ→頸部に沈線２条→縦列点。	小礫・粗砂（赤色粒子含）多含。海綿状骨針含。	良好	外面：黄褐色～にぶい黄色（2.5Y5/3 ～ 6/3） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	外面最大径付近に輪郭不明瞭な黒斑。
51	27	不明	遠賀川系要素含・甕	口縁～胴部大型破片	外面：胴部斜方向ハケ→ナデ。口頸部強いヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ→頸部付近まで横方向ミガキ、胴部斜方向ミガキ。	ヨコナデ→頸部に沈線２条。沈線をハケ具で描出。口唇ハケ刻み。	小礫・粗砂多含。海綿状骨針少含。	良好	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：灰黄褐色（10YR6/2）	
51	28	不明	遠賀川系要素含・甕	口縁～胴部上半大型破片	外面：斜・横方向ハケ→口縁部ヨコナデ。 内面：横方向ハケ→口縁部ヨコナデ。	ヨコナデ→頸部に沈線２条。口唇ハケ？刻み。	小礫・粗砂多含。海綿状骨針含。	良好	外面：にぶい黄橙色（10YR7/4） 内面：黒褐色（2.5YR3/1）	
52	29	不明	遠賀川系要素含・甕	口縁～胴部上半破片	外面：斜・横方向ハケ→胴部縦方向ハケ。口縁部弱いヨコナデ→弱いミガキ。 内面：斜・横方向ハケ→口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ。	ハケ、ヨコナデ→頸部に沈線２条。口唇部ハケ刻み。	小礫・粗砂多含。	良好	内外面：褐灰色（10YR4/1）	
52	30	Ａ９・表土	遠賀川系要素含・甕	口縁部破片	外面：斜方向ハケ→口縁部ヨコナデ。 内面：ヨコナデ→横方向ミガキ。	ハケ→頸部に沈線。口唇部にハケ刻み。	粗砂多含。小礫、海綿状骨針少含。	良好	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	
52	31	A10・ピット下部	遠賀川系要素含・甕？	口縁部破片	外面：ヨコナデ。内面：ナデ→ミガキ。		砂粒（1mm 以下石英主体）多含。海綿状骨針含。	良好	内外面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	
52	32	不明	遠賀川系要素含・甕	底部	外面：斜方向ハケ→底部付近横方向ミガキ。 内面：入念なヨコミガキ。		小礫・粗砂（石英主体）多含。海綿状骨針含。	良好	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：灰黄褐色（10YR5/2）	
52	33	不明	遠賀川系要素含・甕	口縁～胴部上半破片	外面：斜・横方向ハケ→口頸部ヨコナデ。 内面：斜方向ハケ→口頸部ヨコナデ。粗いミガキ。	ヨコナデ→頸部に沈線１条→胴部に LR。	小礫・粗砂極多含。海綿状骨針少含。	良好	内外面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	
52	34	A10・ピット直上、北拡張区表土、埋戻	遠賀川系要素含・甕	口縁～胴部大型破片・胴部破片多	外面：胴部横・斜方向ハケ→口頸部強いヨコナデ。 内面：口頸部ヨコナデ→胴上半横方向ミガキ、胴下半縦方向ミガキ（単位不明瞭）。	ヨコナデ→頸部に沈線３条→LR。口唇ハケ刻み。	小礫含。粗砂（赤色粒子含）多含。海綿状骨針含。	良好	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	内面にスス付着。内面に黒斑。
53	35	A10・ピット	遠賀川系要素含・甕	口縁～胴部大型破片	外面：斜方向ハケ→口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部横方向ハケ→胴部まで横方向ミガキ。	ヨコナデ→頸部に沈線３条→LR。口唇ハケ刻み。	小礫・粗砂（石英主体）多含。海綿状骨針少含。	良好	外面：灰黄褐色（10YR5/2） 内面：褐灰色（10YR4/1）	
53	36	A10・黒土	遠賀川系要素含・甕	口縁～胴部上半破片	外面：胴部横方向ハケ→口縁部強いヨコナデ（左→右）。 内面：口頸部ヨコナデ→横方向ミガキ。	ヨコナデ→頸部に沈線１条→胴上半に LR。口唇 LR。	砂粒（0.5mm 以下）少含。海綿状骨針含。	良好	外面：灰黄褐色（10YR4/2） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	外面スス付着。内面黒斑あり。
53	37	不明	遠賀川系要素含・甕	口縁～胴部上半破片	外面：口頸部ヨコナデ→入念な横方向ミガキ。胴部部分的にミガキ。 内面：口縁部ヨコナデ→全面に横方向ミガキ。	ヨコナデ後頸部に沈線２条→胴上半に LR。縄文→ミガキ。口唇刻み。	砂粒（1mm 以下）、海綿状骨針やや多含。	良好	外面：褐色（7.5YR4/3） 内面：褐色（7.5YR4/4）	胎土在地系土器に近似。
53	38	A10・No.15	遠賀川系要素含・甕	口縁～胴部上半破片	外面：口頸部ヨコナデ、胴部ナデ。 内面：口頸部ヨコナデ→全面横方向ミガキ。	ヨコナデ後頸部に沈線２条→胴上半に LR。口唇ハケ刻み。	粗砂極多含。	良好	外面：にぶい黄色（2.5Y6/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	内外面ともマメツ。
53	39	不明	遠賀川系要素含・甕	口縁部～胴部上半破片	外面：口縁部ヨコナデ。胴部斜め方向ハケ。 内面：横方向ミガキ。	ハケ、ヨコナデ→頸部に沈線３条→ RL。	小礫・粗砂含。	良好	外面：浅黄色（2.5Y7/3） 内面：灰黄色（2.5Y7/2）	
53	40	寄贈資料	遠賀川系要素含・甕	口縁部破片	外面：縦方向ハケ→口縁部ヨコナデ。 内面：横方向ミガキ。	ヨコナデ後に頸部に沈線３条→ LR。口唇にハケ刻み。	小礫・粗砂（石英主体）多含。海綿状骨針少含。	良好	外面：暗灰黄色（2.5Y4/2） 内面：灰黄色（2.5Y6/2）	
53	41	A10・埋戻	遠賀川系要素含・甕	口縁～胴部上半破片	外面：胴部斜方向ハケ。口縁部ヨコナデ。 内面：胴部横方向ナデ、口縁部ヨコナデ→横方向ミガキ。	ヨコナデ後に頸部に沈線３条→胴部に LR。口唇にハケ刻み。	小礫・粗砂やや多含。海綿状骨針少含。	良好	外面：にぶい黄褐色（10YR4/3） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	
53	42	Ａ９・表土	遠賀川系要素含・甕	口縁～胴部上半破片	外面：斜方向ハケ→口縁部強いヨコナデ。 内面：横方向ハケ？→ヨコナデ→入念な横方向ミガキ。	ヨコナデ後に頸部に沈線３条→胴部に LR。口唇にハケ刻み。	小礫・粗砂、海綿状骨針多含。	良好	外面：暗オリーブ褐色（2.5Y3/3） 内面：にぶい黄褐色（10YR4/3）	
53	43	不明	遠賀川系要素含・甕	口縁～胴部上半破片	外面：口頸部ヨコナデ。胴部横方向ハケ？→ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ→横方向ミガキ、胴部横方向ハケ？→横方向ミガキ。	ヨコナデ→頸部に沈線３条（上・下→中の順）。胴・口唇にナデ→ LR。	小礫・粗砂多含。海綿状骨針含。	良好	外面：褐色（7.5YR4/3） 内面：にぶい黄褐色（10YR4/3）	胴部下半にスス付着。
53	44	Ｃ２東拡張区・黒土	遠賀川系要素含・甕	胴下半～底部を欠く	外面：胴部横方向ナデ。口頸部ヨコナデ。 内面：最大径より上横方向ミガキ、下縦方向ミガキ。	胴部に LR。ヨコナデ→頸部に沈線２条→列点。内面ミガキ→口唇 LR。	砂粒やや多含。小礫少含。	良好	外面：にぶい黄褐色（10YR5/4） 内面：灰黄褐色（10YR5/2）	
53	45	不明	遠賀川系要素含・甕	口縁～胴部上半破片	外面：口頸部ヨコナデ。内面：横方向ミガキ。	ヨコナデ→頸部に沈線２条→列点。胴部・口唇に LR。	砂粒・海綿状骨針少含。	良好	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：暗灰黄色（2.5Y4/2）	44 と同一個体の可能性あり。
53	46	A10・埋戻	遠賀川系要素含・甕	頸～胴部上半破片	外面：頸部ヨコナデ。内面：横方向ミガキ。	ヨコナデ→頸部に沈線２条→列点→胴部に LR。	小礫・粗砂含。海綿状骨針含。	良好	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：にぶい橙色（10YR6/4）	
53	47	不明	遠賀川系要素含・甕	頸～胴部上半破片	外面：口頸部強いヨコナデ。胴部横方向ナデ→ミガキ？ 内面：口頸部強いヨコナデ→横方向ミガキ。	ヨコナデ、ナデ→頸部に沈線３条→列点→胴部に LR。口唇に刻み。	粗砂多含。海綿状骨針少含。	良好	外面：褐灰色（10YR5/1） 内面：灰黄褐色（10YR6/2）	
53	48	不明	遠賀川系要素含・甕	頸～胴部上半破片	外面：口頸部強いヨコナデ。胴部横方向ナデ。 内面：入念な横方向ミガキ。	ヨコナデ→頸部に沈線３条→列点。胴部に LR。口唇に刻み。	小礫・粗砂やや多含。海綿状骨針含。	良好	外面：灰黄褐色（10YR5/2） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/3）	49 と同一個体。

図	No.	出土地点・層位	器　種	部位・状態	成形・調整	施　　文	胎　　土	焼　成	色調（土色帖準拠）	備　　考
53	49	不明	遠賀川系要素含・甕	頸～胴部上半破片	外面：口頸部強いヨコナデ。胴部横方向ナデ。 内面：入念な横方向ミガキ。	ヨコナデ→頸部に沈線３条→列点。胴部に LR。口唇に刻み。	小礫・粗砂やや多含。海綿状骨針含。	良好	外面：暗灰黄色（2.5Y5/2） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	48 と同一個体。
54	50	不明	遠賀川系要素含・甕	口縁～胴部上半破片	外面：胴部横方向ハケ→口頸部ヨコナデ。口頸部横方向ミガキ。 内面：胴部横方向ケズリ？、口頸部ヨコナデ→入念な横方向ミガキ。	ヨコナデ→胴部に LR。口唇部ハケ？刻み。	粗砂、海面状骨針含。	良好	内外面：にぶい黄橙色（10YR7/4）	
54	51	不明	遠賀川系要素含・甕	口縁～胴部上半破片	外面：胴部ナデ、口頸部ヨコナデ、縄文施文→口縁部横方向ミガキ。 内面：口頸部ヨコナデ→入念な横方向ミガキ。	ヨコナデ→胴部に LR→ミガキ。	粗砂・細砂（白色粒子等）含。海面状骨針含。	良好	内外面：にぶい黄橙色（10YR7/4）	内外面、不定形黒斑あり。
54	52	不明	遠賀川系要素含・甕	口縁～胴部上半破片	外面：胴部ケズリ。口頸部ヨコナデ。口唇横方向ミガキ。 内面：口縁部ヨコナデ。胴部横方向ケズリ。	調整→LR。	砂粒（白色粒子・石英含）含。	良好	外面：黒褐色（10YR3/1） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	
54	53	不明	遠賀川系要素含・甕	口縁部～胴部上半破片	外面：口縁部ヨコナデ。胴部横方向ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ→横方向ミガキ。胴部横方向ケズリ→横方向ミガキ。	ヨコナデ→ＬＲ。	細砂やや多含。海綿状骨針少含。	良好	外面：灰黄色（2.5Y6/2） 内面：灰白色（2.5Y7/1）	内外面不定形黒斑、スス付着。
54	54	不明	遠賀川系要素含？・甕	口縁～胴部上半破片	外面：胴部ナデ、部分的にケズリ。縄文→部分的にミガキ。口頸部雑なヨコナデ→弱い横方向ミガキ。 内面：横・斜方向ケズリ→口縁部雑なヨコナデ。	ナデ→LR。	砂粒（白色粒子・石英含）含。	良好	外面：黒褐色（10YR3/1） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/3）	口縁部外面にスス付着。
54	55	A10	遠賀川系要素含・甕	胴下半破片	外面：縄文施文前ナデ。内面：斜方向ミガキ。	ナデ→LR。	小礫・粗砂多含。海綿状骨針少含。	良好	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/4）	
54	56	寄贈資料	遠賀川系要素含・甕	胴下半破片	外面：横・斜方向ハケ。内面：横方向ケズリ→斜方向ミガキ。	ハケ→LR。	小礫・粗砂含。海綿状骨針少含。	良好	外面：にぶい黄褐色（10YR4/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	外面スス付着。
54	57	A10 西拡・表土	遠賀川系要素含・甕	胴下半破片	外面:横方向ナデ。内面横方向ミガキ(剥離のため単位不明瞭)。	ナデ→LR。	小礫・粗砂極多含。海綿状骨針含。	良好	外面：黄褐色（2.5Y5/3） 内面：暗灰黄色（2.5Y4/2）	外面スス付着。
54	58	不明	遠賀川系要素含・甕	胴下半～底部破片	外面：ナデ。 内面：ナデ→縦方向ミガキ、底部付近横方向ミガキ。	ナデ→LR。	小礫・粗砂（赤色粒子含）多含。海綿状骨針含。	良好	外面：暗灰黄色（2.5Y5/2） 内面：暗灰黄色（2.5Y4/2）	内面スス付着。
54	59	Ａ３・４・表土	遠賀川系要素含・甕	胴下半～底部破片	外面：ナデ。内面：ハケ→斜方向ナデ（弱い擦痕）。	ナデ→LR。	小礫・粗砂多含。海綿状骨針少含。	良好	外面：黒褐色（10YR3/2） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	
55	60	不明	亀ヶ岡系・鉢	胴下半～底部破片	外面：施文→工字文一部ミガキ。内面：横方向ミガキ。	RL →工字文→ミガキ。	砂粒やや多含。海綿状骨針含。	良好	外面：暗灰黄色（2.5Y5/2） 内面：灰黄色（2.5Y6/2）	内面に黒斑あり。
55	61	C2・東拡張区・黒土	亀ヶ岡系・鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：施文。口縁部弱いミガキ。 内面：横方向ケズリ→横方向ミガキ。	胴部ＬＲ→沈線による工字文。口縁内面沈線１条。	砂粒（金雲母少）含。	良好	外面：にぶい黄色（2.5Y6/3） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	
55	62	不明	亀ヶ岡系・浅鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：施文→口縁部直下ミガキ。 内面：ケズリ→横方向ミガキ。	ＲＬ→変形工字文。突起上部に刻み２ヶ所。	砂粒含。海綿状骨針少含。	良好	外面：にぶい黄色（2.5 Y 6/3） 内面：にぶい黄褐色（10Y R 4/3）	
55	63	不明	亀ヶ岡系・鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：横方向ナデ→施文。口縁部弱いミガキ。 内面：横方向ケズリ→横方向ミガキ。	胴部ＬＲ→沈線による工字文。	小礫・粗砂やや多含。海綿状骨針少含。	良好	外面：黒褐色（2.5Y3/1） 内面：暗灰黄色（2.5Y4/2）	
55	64	不明	亀ヶ岡系・浅鉢	口縁部～胴部上半破片	内外面：施文→ミガキ。	変形工字文。口縁内面沈線１条。	砂粒やや多含。海綿状骨針やや少含。	良好	内外面：にぶい黄色（2.5 Y 6/3）	
55	65	A9・黒土	亀ヶ岡系・台付浅鉢	口縁部～胴部大型破片（口径の 1/4）	外面：施文→横方向ミガキ。 内面：横方向ナデ→施文→横方向ミガキ。	変形工字文（４単位）。口唇部沈線。突起上端刺突。口縁内面沈線１条。	砂粒多含。海綿状骨針極少含。	良好	外面：にぶい黄橙色（10 Y R6/3） 内面：にぶい黄褐色（10YR5/3）	
55	66	不明	亀ヶ岡系・浅鉢	口縁部～胴部上半破片（口径の 1/3）	外面：ナデ→施文→変形工字文部分ミガキ。 内面：施文→横方向ミガキ。	ＬＲ→変形工字文（３単位）。口縁内面沈線１条。	砂粒含。海綿状骨針少含。	良好	内外面：黄灰色（2.5 Y 6/1）	
55	67	Ａ１・表土	亀ヶ岡系・台付浅鉢	口縁部破片	内外面ともに入念なミガキ（単位不明瞭）。	ミガキ前に変形工字文。連結部に瘤、瘤間抉り。	砂粒（石英）含。海綿状骨針少含。	良好	外面：黒褐色（2.5Y3/1） 内面：黄褐色（2.5Y5/3）	
55	68	A10・灰面	亀ヶ岡系・浅鉢	口縁部～胴部上半破片	内外面：口縁部横方向ナデ、施文→横方向ミガキ。	LR →変形工字文→ミガキ。内面沈線１条。	粗砂含。海綿状骨針少含。	良好	外面：黒褐色（10YR3/1） 内面：灰黄色（2.5Y6/2）	外面スス付着。
55	70	不明	亀ヶ岡系・浅鉢	完形	内外面：ミガキ。	ミガキ前に変形工字文３単位。赤彩。	砂粒極少含。海綿状骨針少含。	良好	外面：褐色（7.5YR4/4） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	２個１対の補修孔３単位。
55	71	不明	亀ヶ岡系・浅鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：施文→ミガキ。内面：粗いミガキ。	下半に LR。上半に変形工字文２段。	粗砂多含。	良好	内外面：にぶい黄色（2.5 Y 6/3）	内外面不定形黒斑。外面黒色顔料塗布？内面スス付着。
55	72	不明	亀ヶ岡系・浅鉢	胴部～底部破片	外面：施文→入念なミガキ。底部、ケズリ。 内面：横方向ミガキ。	細いLR→沈線による工字文。底部付近沈線２条。	緻密。砂粒多含。	良好	内外面：にぶい黄色（2.5 Y 6/3）	内面にスス付着。
55	73	不明	亀ヶ岡系・浅鉢	胴部～底部破片	外面：施文→入念なミガキ。底部ミガキ。 内面：横方向ミガキ。	上下沈線区画の、工字文。底部付近に沈線１条。	緻密。砂粒含。	良好	外面：灰白色（2.5Y7/1） 内面：にぶい黄色（2.5 Y 6/3）	内外面に黒色顔料塗布？
56	74	不明	亀ヶ岡系・浅鉢	口縁部～底部大型破片（口径の 1/4）	外面：施文→横方向ミガキ。 内面：横方向ケズリ→施文→横方向ミガキ。	変形工字文（３単位）。胴部沈線２条、底部沈線１条。口縁内面沈線１条。	粗砂多含。海綿状骨針極少含。	良好	内外面：黒褐色（2.5 Y 3/1）	器面荒れる

図	No.	出土地点・層位	器　種	部位・状態	成形・調整	施　文	胎　土	焼　成	色調（土色帖準拠）	備　考
56	75	不明	亀ヶ岡系・浅鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：ナデ→施文。口縁部ミガキ。 内面：横方向ミガキ（単位明瞭）。	ＬＲ→変形工字文（３単位）。口縁内面沈線１条。	砂粒含。海綿状骨針やや少含。	良好	内外面：にぶい黄色（2.5 Y 6/3）	
56	76	A10・黒土	亀ヶ岡系・浅鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：横方向ナデ→施文。横方向ミガキ。 内面：横方向ケズリ→横方向ミガキ。	変形工字文（３単位）。口縁内面沈線１条。	砂粒含。海綿状骨針極少含。	良好	内外面：にぶい橫橙色（10 Y R6/4）	
56	77	不明	亀ヶ岡系・浅鉢	口縁部～胴部上半破片	内外面：横方向ケズリ→施文→ミガキ。	ケズリ→複段変形工字文。口縁内面沈線１条。粗い施文。	粗砂多含。海綿状骨針少含。	良好	内外面：にぶい褐色（7.5 Y 5/3）	内面に籾痕あり。
56	78	不明	亀ヶ岡系・浅鉢	全体の 1/3	外面:底部ミガキ。内面:ケズリ→入念なミガキ（単位不明瞭）。	胴下部 LR。ミガキ前に変形工字文３単位。文様複数回なぞる。赤彩。	金雲母多含。砂粒含。	良好	外面：褐色（7.5YR4/6） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	北上川流域から搬入？
56	79	Ｃ２東拡張区・黒土	亀ヶ岡系・台付浅鉢	口縁部破片	内外面ともに入念なミガキ。	ミガキ前に変形工字文。赤彩。口縁内面沈線。	砂粒（0.5mm 以下、白色粒子）含。海面状骨針少含。	良好	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：灰黄褐色（10YR4/2）	
56	80	A10・No.15	亀ヶ岡系・台付浅鉢	口縁部破片	施文→内外面ともに入念なミガキ。	ミガキ前に変形工字文。内外面波状口縁に沿って沈線１条。内面沈線１条。	細砂含。海綿状骨針少含。	良好	内外面：上部にぶい黄色（2.5 Y 6/3）、下部黄灰色（2.5Y4/1）	
56	81	A10・ピット下部	亀ヶ岡系・台付浅鉢	脚部	外面：施文→横方向ミガキ（単位不明瞭）。 内面：鉢部、脚部横方向ミガキ（単位不明瞭）。	ミガキ前に脚部端に沈線２条。鉢部底に円文。	砂粒（1mm 以下、石英等）含。海面状骨針含。精緻。	良好	外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 内面：黒褐色（2.5Y3/1）	外面黒斑あり。
56	82	不明	亀ヶ岡系・台付浅鉢	脚部	外面：施文→ミガキ。 内面：鉢部入念なミガキ、脚部やや粗いミガキ。	刺突→沈線(なぞり？)。赤彩。	砂粒極少含。海綿状骨針少含。精緻。	良好	外面：黒褐色（2.5Y3/1） 内面：黄灰色（2.5Y4/1）	
56	83	不明	亀ヶ岡系・台付浅鉢	全体の 1/2	内外面：ミガキ。台内面：ケズリ→やや粗いミガキ。	ミガキ前に変形工字文４単位。赤彩。	砂粒少含。海綿状骨針多含。	良好	外面：黄褐色（10YR5/6） 内面：黒褐色（2.5Y3/1）	
56	84	不明	亀ヶ岡系・台付浅鉢	脚部端を欠く	外面：施文→横方向ミガキ。 内面：鉢部横方向ミガキ（単位不明瞭）、脚部やや粗い横方向ミガキ。	ミガキ前に工字文。鉢・台接合部に沈線。口縁部内面沈線。	砂粒（1mm 以下、石英等）含。海面状骨針含。精緻。	良好	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：黄褐色（2.5Y5/3）	
57	85	不明	亀ヶ岡系・壺	胴部上半破片	外面：施文→ミガキ。 内面:指頭調整→横方向ナデ。頸部付近横方向ミガキ。輪積痕。	ミガキ前に変形工字文２段。	砂粒多含。	良好	内外面：にぶい黄色（2.5 Y 6/3）	外面不定形黒斑多。
57	86	不明	亀ヶ岡系・壺	口縁部～胴部上半破片	内外面：施文→入念な横方向ミガキ。	胴部に LR 施文→肩部に変形工字文。口縁部に工字文。口縁内面に沈線１条。	砂粒含。海綿状骨針少含。	良好	内外面：黒褐色（2.5Y3/1）	
57	87	不明	亀ヶ岡系・壺	口縁部～胴部上半破片	外面：施文→ミガキ。内面：横方向ミガキ。	胴部に RL 施文→肩部に沈線４条、口縁部に２条。肩部は２条目に瘤。	粗砂多含。海綿状骨針含。	良好	外面：にぶい黄色（2.5Y6/4） 内面：暗灰黄色（2.5Y5/2）	
57	88	A10・黒土	亀ヶ岡系・壺	口頸部	外面：施文→横方向ミガキ。 内面：施文前横方向ナデ。	眼鏡状文（５単位）。口縁内面沈線１条。	砂粒含。海綿状骨針含。	良好	外面：にぶい橫橙色（10 Y R6/3） 内面：灰黄褐色（10YR5/2）	
57	89	不明	亀ヶ岡系・壺	口縁部破片	内外面：横方向ミガキ。	ミガキ前に口縁部に沈線、交点。赤彩。	金雲母少含。砂粒（1mm 以下）含。	良好	外面：黒褐色（10YR3/1） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
57	90	不明	亀ヶ岡系・壺	口縁部～胴部上半大型破片	外面：横方向ミガキ。 内面：口頸部横方向ミガキ、胴部横方向板ナデ。	ミガキ前に口縁部に沈線。粗雑な交点８単位？沈線なぞり。口縁内面に沈線。	金雲母多含。砂粒含。	良好	内外面：にぶい橙色（7.5YR6/4）	北上川流域から搬入？
57	91	不明	亀ヶ岡系・壺	口縁部～胴部上半破片	外面：横方向ミガキ。内面：口頸部横方向ミガキ、胴部ナデ。	ミガキ前に口縁部に沈線、交点。赤彩。	金雲母多含。砂粒(0.5mm以下)少含。	良好	内外面：褐色（7.5YR4/6）	北上川流域から搬入？
57	92	不明	亀ヶ岡系・壺	胴部上半破片	外面：沈線→横方向ミガキ。 内面：指頭圧痕、以下板ナデ。輪積痕。	ミガキ前に頸部に沈線１条。	金雲母多含。砂粒含。	良好	外面：明褐色（7.5YR5/6） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	北上川流域から搬入？
57	93	不明	亀ヶ岡系・壺		外面：全面横方向ミガキ。底部ミガキ。 内面：頸部横方向ミガキ、胴部ナデ、頸部ケズリ。		砂粒（0.5mm 以下）少含。海面状骨針多含。	良好	外面：灰黄褐色（10YR6/2） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/3）	外面胴下半に黒斑。
57	94	Ｃ２東拡張区・黒土	亀ヶ岡系・壺		外面：横方向ミガキ。底部ミガキ。 内面：口頸部、ケズリ？→粗いミガキ、胴部ナデ、部分的にミガキ。輪積痕、指頭圧痕あり。		砂粒（1mm 以下、石英等）少含。海面状骨針多含。	良好	外面：にぶい黄褐色（10YR4/3） 内面：灰黄褐色（10YR4/2）	
57	95	A10・ピット直上	亀ヶ岡系・壺	胴下半破片	外面：入念な横方向ミガキ（単位不明瞭）。 内面：粗い条のつく横方向ナデ（右から左）、下半部擦痕のつくナデ。		粗砂多含。金雲母少含。	良好	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
57	96	不明	亀ヶ岡系・鉢		外面：施文→ミガキ。内面：横方向ミガキ	胴部 LR →複線の変形工字文３単位、その後ミガキ。赤彩。口縁部内面に沈線。口縁部直下まで赤彩。	砂粒（石英等）やや多含。	良好	外面：黒褐色（7.5YR3/1） 内面：にぶい褐色（7.5YR6/3）	内面スス付着。
58	97	Ａ９・黒土・ピット	亀ヶ岡系・深鉢	底部を欠く	外面：ケズリ→ミガキ。内面：ケズリ→ミガキ。	胴部 LR →変形工字文３単位、その後ミガキ、なぞり。赤彩。	金雲母多含。砂粒含。	良好	外面：にぶい赤褐色（5YR5/3） 内面：明赤褐色（5Y5/6）	内面スス付着。北上川流域から搬入？
58	98	不明	亀ヶ岡系・鉢		外面：施文→ミガキ。内面：横方向ミガキ	胴部 LR →変形工字文３単位、その後ミガキ。赤彩。	砂粒（1mm 以下、石英等）少含。	良好	外面：にぶい黄橙色（10YR7/4） 内面：にぶい黄橙色（10YR6/4）	

図	No.	出土地点・層位	器　種	部位・状態	成形・調整	施　文	胎　土	焼　成	色調（土色帖準拠）	備　考
58	99	不明	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：施文→ミガキ。 内面：ケズリ→横方向ミガキ（単位不明瞭）。	RL 地文後沈線。口縁部内面に沈線。	砂粒（石英・白色粒子）、海面状骨針含。	良好	外面：黄灰色（2.5Y4/1） 内面：暗灰黄色（2.5Y4/2）	内面部分的にスス付着。
58	100	不明	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：沈線上ミガキ。 内面：口縁部付近横方向ミガキ、以下縦方向ミガキ。	口縁～胴部に LR 施文→口頸部に沈線８条。４条目に瘤あり。	粗砂多含（石英・白色粒子）。海綿状骨針少含。	良好	内外面：黄灰色（2.5Y4/1）	
58	101	A９・黒土ピット	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：ナデ。内面：ケズリ→横方向ミガキ。	ナデ→ LR 地文。沈線区画の崩れた２段の矢羽状文。	砂粒（石英等）多含。	良好	内外面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	内外面スス付着。
58	102	不明	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：横方向ナデ→縄文、沈線施文→口縁部横方向ミガキ。 内面：横・縦方向ケズリ→ナデ。口縁端部、沈線→横方向ミガキ。	ナデ→ＬＲ→沈線３条。内面沈線１条。	小礫・粗砂含。海綿状骨針少含。	良好	内外面：灰黄色（2.5Y6/2）	内外面、不定形な黒斑多。外面スス付着。
58	103	不明	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：施文→頸部横方向ミガキ。 内面：口縁部横方向ミガキ、胴部縦方向ミガキ。	肩部匹字文→胴部 LR。口縁部 LR。口縁内面沈線１条。	砂粒含。海綿状骨針少含。	良好	外面：にぶい黄色（2.5 Y 6/3） 内面：黒褐色（2.5Y3/1）	外面スス付着。
58	104	A10・埋戻	亀ヶ岡系・鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：施文→横方向ミガキ。 内面：ケズリ→横方向ナデ。口唇部ミガキ。	口縁部突帯と沈線１条。肩部沈線５条以上。口縁内面沈線１条。	粗砂含。海綿状骨針含。	良好	外面：黒色（2.5Y2/1） 内面：黒褐色（2.5Y3/1）	内面スス付着。
58	105	不明	亀ヶ岡系・深鉢	口縁～胴部上半破片	外面：ナデ。 内面：ケズリ→横方向ミガキ。	ナデ→ LR。その後に口縁直下に沈線５条。口唇斜め刻み。	粗砂多含。遠賀川系に類似。	良好	外面：灰黄褐色（10YR4/2） 内面：にぶい黄橙色（10YR7/3）	内面スス付着。
58	106	C1・黒土	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部破片	外面：施文前横方向ナデ。 内面：ケズリ→上部横方向ミガキ。	沈線４条。口唇部外側に丸みをもつ刻み。	粗砂多含。	良好	内外面：にぶい黄褐色（10YR5/4）	外面スス付着。
58	107	A10・黒土	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部破片	外面：横方向ナデ。施文→ミガキ。内面：横方向ミガキ。	LR 施文→沈線１条。その上部に断続的な沈線付加。口唇部外面に刻み。	粗砂多含。	良好	外面：黒褐色（2.5Y3/1） 内面：黒色（2.5Y2/1）	
58	108	不明	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：横方向ナデ。 内面：口縁部横方向ナデ→横方向ミガキ。胴部斜め方向ケズリ→横方向ミガキ。	ナデ→ LR。縄文端部口縁部にみられる。後沈線２条。口唇上部、刻み→ミガキ。	砂粒（金雲母少含）含。	良好	内外面：黄灰色（2.5Y5/1）～黒色（2.5Y2/1）	内外面スス付着。
58	109	不明	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：横方向ナデ→縄文、沈線施文。 内面：ケズリ→口縁部粗い横方向ナデ。胴部縦方向ミガキ。	ナデ→ＲＬ→沈線５条。	小礫・粗砂含。海綿状骨針少含。	良好	外面：にぶい黄色（2.5Y6/4） 内面：暗灰黄色（2.5Y5/2）	外面不定形黒斑。内面スス付着。
58	110	不明	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：胴部ナデ。口縁部横方向ミガキ。 内面：ケズリ→横方向ミガキ。	口縁部ミガキ、LR 施文→口縁下部に沈線２条。	粗砂やや多含。小礫少含。海綿状骨針含。	良好	外面：にぶい黄褐色（10YR5/4） 内面：黒褐色（10YR3/2）	内面スス付着。
58	111	不明	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：胴部横方向ハケ？ナデ。口頸部横方向ミガキ。 内面：ケズリ→横方向ミガキ。	ナデ→ LR。口縁下部に沈線２条→ミガキ。	粗砂（金雲母含）少含。海綿状骨針やや多含。	良好	外面：暗灰黄色（2.5Y4/2） 内面：黄灰色（2.5Y4/1）	内面スス付着。
58	112	C1・黒土	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部～胴部上半破片	内面：横方向ケズリ？→ナデ？	LR →沈線２条。	粗砂多含。	良好	外面：灰白色（2.5Y8/2） 内面：浅黄色（2.5Y7/3）	内外面不定形黒斑多。二次焼成で器面荒れる。
58	113	不明	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：口縁部、縄文→横方向ナデ、横方向ミガキ。 内面：横方向ケズリ→横方向ミガキ。	LR →ナデ。口縁部に深い沈線１条。後ミガキ。	小礫・粗砂含。海綿状骨針少含。	良好	外面：褐灰色（10YR6/1） 内面：褐灰色（10YR5/1）	
58	114	不明	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：縄文前に横方向ナデ。 内面：横方向ナデ→横方向ミガキ。	LR →口縁部に浅い指ナデ沈線２条。	小礫・粗砂含。	良好	外面：浅黄色（2.5Y7/3） 内面：灰黄色（2.5Y7/2）	
58	115	不明	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部～胴部破片	外面：ナデ。内面：斜方向ミガキ。	ナデ→ LR →幅広の沈線。口唇部押捺→内面ミガキ。	砂粒（0.5mm 以下石英）含。海綿状骨針少含。	良好	外面：にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/3）	
59	116	不明	亀ヶ岡系・深鉢		外面：縄文施文→頸部ミガキ。 内面：口頸部横方向ミガキ、胴部縦方向ミガキ。	ミガキ前に胴部・口縁端部に LR。	粗砂（白色粒子・石英等）多含。。海綿状骨針やや多含。	良好	外面：にぶい黄褐色（10YR5/4） 内面：黒褐色（10YR3/1）	外面スス付着。
59	117	不明	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部～胴部破片	外面：縄文施文→頸部ミガキ（単位不明瞭）。胴部軽くミガキ。 内面：ナデ（弱い擦痕）。	ミガキ前に胴部・口縁端部に LR。	砂粒（1mm 以下、石英等）含。	良好	内外面：黒褐色（2.5Y3/2）	内外面上部にスス付着。
59	118	A１・表土	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：胴部横方向ナデ。口縁部雑なヨコナデ。 内面：口縁部雑なヨコナデ、胴部条のつく横方向ナデ。	ナデ→ LR。	砂粒多含。海綿状骨針少含。	良好	外面：黒褐色（2.5Y3/2） 内面：黄褐色（2.5Y5/4）	遠賀川系の要素含？
59	119	不明	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：横方向ナデ→縄文施文→口縁部横方向ミガキ。 内面：横方向ナデ→横方向ミガキ。内外面に輪積痕。	ナデ→ LR。	粗砂やや多含。	良好	内外面：黄灰色（2.5Y4/1）	
59	120	不明	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部～胴部上半破片	外面：縄文施文→口頸部横方向ミガキ。突起上端に刻み。 内面：横方向ケズリ→横方向ミガキ。	胴部ＬＲ。	砂粒含。海綿状骨針やや少含。	良好	外面：にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：黄褐色（2.5Y5/3）	不定形黒斑あり。
59	121	A10・埋戻	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部破片	外面：施文→口縁部横方向ミガキ。 内面：横方向ケズリ→横方向ミガキ。	LR →頸部段。内面ミガキ前に弱い沈線。口唇部刻み。	砂粒含。	良好	内外面：黒褐色（2.5Y3/1）	内外面、下部で明るくなる。
59	122	A９・黒土上面	亀ヶ岡系・深鉢	底部を欠く	外面：ケズリ→縄文施文→頸部ミガキ。 内面：ケズリ→口縁部付近横方向ミガキ、胴部縦方向ミガキ。	ケズリ後に LR。	小礫・粗砂やや多含。海綿状骨針少含。	良好	内外面：橙色（7.5YR6/6）	外面下部にスス付着。
59	123	不明	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部大型破片	外面：口縁部横方向ナデ→一部ミガキ。 内面：口縁部ナデ、胴部横方向板ナデ→粗いミガキ。	ナデの後 LR。	砂粒やや多含。海綿状骨針極少含。	良好	外面：黒褐色（2.5Y3/1） 内面：にぶい黄色（2.5Y6/3）	輪積の凹凸残る。124 と同一。
59	124	不明	亀ヶ岡系・深鉢	口縁部大型破片	内面：横・斜め方向板ナデ→粗いミガキ。	LR。	砂粒やや多含。海綿状骨針極少含。	良好	外面：黒褐色（2.5Y3/1） 内面：にぶい黄色（2.5Y6/3）	輪積の凹凸残る。123 と同一。
59	125	不明	亀ヶ岡系・深鉢	胴部下半大型破片	外面：縄文前にナデ。 内面：横方向ミガキ。内外面輪積痕残る。	LR。	砂粒やや多含。	良好	外面：灰黄色（2.5Y7/2） 内面：黒色（2.5Y2/1）	内外面スス付着。年代測定資料

Ⅲ．研究成果（2）　研究報告

１．最花貝塚遺跡の調査と最花式土器　安達香織・安藤広道
２．下北地域における初期弥生土器編年　大坂　拓
３．剣吉荒町遺跡出土の類遠賀川系土器について　櫻井はるえ
４．剣吉荒町遺跡出土土器における遠賀川系要素のあり方　安藤広道

付編　剣吉荒町遺跡・八幡堂遺跡出土土器付着物の ^{14}C 年代測定　小林謙一・遠部　慎・坂本　稔

本研究の成果と課題　安藤広道

１．最花貝塚遺跡の調査と最花式土器

安達香織・安藤広道

はじめに

東北地方北部の中期後葉に編年される「最花式」土器は、分類の標準としての資料が未報告のまま設定され、定着した土器型式である。「最花式」の内容は設定当初から不明確だったのであり、それが、現在に至るまで「最花式」の理解の障害になってきたことは疑いない。今回、そうした状況を鑑み、最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器の報告を行ったわけであるが、その内容と「最花式」をめぐる学史を調べていくなかで、この資料の分析によって、「最花式」を再設定できると考えるに至った。

そこで以下では、最花貝塚遺跡の発掘調査と「最花式」土器の型式設定の経緯、現在までの「最花式」に関する研究史を振り返ることで、その理由を説明したいと思う。

Ⅰ．最花貝塚遺跡の調査

(1) 地元研究者による最花貝塚遺跡の遺物採集

最花貝塚遺跡がはじめて活字となるのは、1934 年のことであった。地元小学校教員などを勤めた中島全二氏が、遺跡出土の「剣状石器」の写真を掲載しつつ、最花貝塚遺跡を「石器類」、「浮紋厚手」土器の分布域と記したものがそれである（中島 1934）。ほどなく、大塚彌之助氏も、「材料は青森県下北郡田名部町中島全二氏から贈られた」という最花貝塚遺跡採集の貝殻を鑑定、報告している（大塚 1936）。

一方、野辺地町出身の角鹿扇三氏は、最花貝塚遺跡の遺物を数多く収集しており、うち青竜刀形石器を東京国立博物館（東京国立博物館 1953、1999）に、鏃などの石器を青森県立野辺地町立歴史民俗博物館に寄託している。

(2) 東京の研究者による最花貝塚遺跡の発掘調査

地元の研究者たちの活動によって広く知られるようになっていた最花貝塚遺跡は、1947 年から 1964 年にかけ、東京の研究者によって４回ほど発掘調査が行われることになる。ただし、これらの調査は、いずれも正式な報告がなされておらず、その内容の詳細は不明であった。そればかりでなく、１～３回の調査については、出土遺物の所在もわからなくなってしまっている。つまり、今回の報告が、これらの調査で出土した資料の最初の報告ということになるのであり、慶應義塾に保管されている最花貝塚遺跡出土遺物が、これらの調査で出土した土器の内容を推測するための唯一の手がかりになるのである。

詳細は後述するが、「最花式」土器は、これら４回の調査が行われるなかで設定されたものである。「最花式」の標式とすべき資料を明らかにするうえでも、まずは、これらの調査の内容をまとめておく必要がある（表４）。

◎ 1947 年、1948 年の発掘調査とその記録

最花貝塚遺跡の１回目の発掘調査は、1947（昭和 22）年 12 月に、八幡一郎、中島寿雄、中島全二の３氏によって行われた。調査地点は、のちに江坂輝彌氏によってＡ地点とされる場所である。２回目の調査は、翌 1948（昭和 23）年 10 月に、八幡氏・江坂氏・中島全二氏によって行われた。調査地点は同じくＡ地点で、1964 年に江坂氏が調査したトレンチの西側隣接地にあたるようである。

表４　最花貝塚遺跡の発掘調査

調査年月	調査者	調査地点	報告書	「最花式」に関する動向
1947 年 12 月	八幡一郎・中島寿雄・中島全二	A		「最花式」が編年表ではじめて使用される（江坂 1950） 石神遺跡の資料による「最花式第３類」の設定（江坂 1970）
1948 年 10 月	八幡一郎・江坂輝彌・中島全二	A		
1951 年８月	鈴木　尚・酒詰仲男・埴原和郎・他 （下北総合学術調査団）	A （江坂 1969 では B）		
1964 年 10 月	江坂輝彌・金子浩昌・村越　潔・他 （九学会連合）	A・B・C		
1977 年７月	橘　善光・他	D	○	
1978 年 4･5 月	橘　善光・他	D	○	
1983 年８月	橘　善光・他	D	○	
1985 年 7･8 月	橘　善光・他	照徳神社背後	○	

1947 年、1948 年の発掘調査を率いた八幡氏は、1947 年に東京帝室博物館（東京国立博物館）の列品科嘱託、1948 年に東京国立博物館調査員と、東京大学文学部講師となった。1948 年は日本考古学協会が設立された年であり、5 月には委員となっている（江上 1985）。八幡氏が最花貝塚遺跡について書いた記録を見つけることはできなかったが、10 月には日本考古学協会第二回総会研究会発表で、「青森県下北郡最花貝塚」と題した発表をおこなっている（藤田 1951）。

1948 年調査から参加した江坂氏は、調査が行われた 1948 年に慶應義塾大学を卒業し、翌年大学院に入学した。氏は、その後、1950 年 5 月に発表した縄文土器編年表に、下北半島の中期最後の土器として、「最花」という名称を用いている（江坂 1950、第 60 図）。数回にわたる連載記事のなかに、最花貝塚遺跡や出土遺物に関する記述はみられないが、はじめて「最花」の名称とその編年的位置が記されたものとして注目すべき文献である。

一方、2 回の調査に参加した中島全二氏は、1950 年 11 月に、1947 年、1948 年の最花貝塚遺跡の発掘調査に触れ、遺跡に竪穴、石囲い炉が存在したことを記している（中島 1950）。出土土器は、縄文時代中期末と後期初頭、北海道と関東の中間性格であるとした。

このように、1947 年と 1948 年の調査によって、八幡氏、江坂氏、中島氏らのなかで、「最花式」という型式の認識がなされていったことが推測されるが、この時点で、その分類の標準になっていたのは、A 地点の出土土器であった。

土器編年表中で「最花」の名称をはじめて用いた江坂氏は、その後、最花貝塚遺跡の土器を提示して「最花式」土器の特徴を記すことはなかった。ただ、江坂氏は、1956 年、東北地方における縄文時代遺跡の発掘調査と出土土器についてまとめる中で、「…筆者はまた八幡一郎氏と共に昭和二十三年秋、青森県下北郡田名部町最花貝塚を調査し、この貝塚の貝層出土の土器が中期末の標式的資料であり、中期末の土器形式に最花式土器なる名称を附してはと考えた」と、1948 年調査での出土土器を「最花式」の標式資料としたことを明言している（江坂 1956）。

続いて江坂氏は、1958 年に、1948 年調査における自身の日誌の一部を公開した。そこには、中島氏の記述にあった竪穴、石囲い炉に加え、伸展葬人骨や頭蓋骨、貝、魚、獣骨、土器、石器、骨角器も出土したことが記されている（江坂 1958）。

さらに、1964 年 3 月には、「中期の土器」の概説文の中で、円筒上層 d 式に続き「このあと、器面全体に単方向斜縄文を施文し、口頸部に折返し突帯のある、筆者が最花式とも仮称したことがある土器があらわれて、後期へと引き続くのである」（江坂 1964）との文章を記している。これは、江坂氏が「最花式」の特徴を記した最初の文章であるが、器面全体の単方向の斜縄文、折り返し突帯という 2 つの特徴を挙げている点に注目しておきたいと思う。

江坂氏は、1965 年にも 1947 年、1948 年の調査について触れ、1948 年調査において、青森県下で初めて住居址の平面プランが明らかになったとし、径約 4 メートルで柱穴も検出されたことを記している（江坂 1965）。なお、炉の大きさに関して、前述の日誌では 90 センチ（江坂 1958）であったものが、この記述では 60 センチになっている。

◎ 1951 年の発掘調査とその記録

最花貝塚遺跡第 3 回目の発掘調査は、1951（昭和 26）年 8 月に行われたものである。下北総合学術調査団の先史人類学班による調査で、そのメンバーは、東京大学理学部人類学教室教授の鈴木尚氏、同月に東京大学理学部人類学教室助手から奈良県立橿原考古学研究所所員となった酒詰仲男氏、東京大学理学部人類学教室院生の埴原和郎氏であった。

この 1951 年調査の内容は、調査に参加した大湊高等学校の生徒による、ガリ版刷りの記録によって知ることができる（佐々木 1951）。入手し難いものであり、また、「最花式」土器の学史において重要となる記載もあるため、以下、最花貝塚遺跡に関する部分を全文引用しておこう。

「八月四日からおこなわれた、下北半島先史文化総合出（筆者註；原文ママ、以下同じ）掘調査は、毎日新聞社後授（筆者註；原文ママ）のもとに、昨年度（八月一日―二〇日）の吹切沢遺跡の出掘に引続いて、東京大学・慶應大学・明治大学教授等の指導のもとに同学生と地元田名部高等卒業生（田高生は不参加）と本部員の橘・立花両君と筆者の三人も参加して、考古学・人類学・地理学・動植物・古生物にわかれ最花（サイバナ）貝塚の人数（筆者註；原文ママ）班・尻屋ムシリ遺跡班下田屋チャス（筆者註；原文ママ）・動植物地理班の四班にわかれて田名部常念寺を本部としておこなわれた。

最花貝塚

田名部町最花村にあるこの遺跡は、昭和 24（筆者註；23 の誤り、以下同じ）年に東京大学教授八幡一郎氏によって一度出掘され男女の人体骨が出土している。

最花貝塚の指導は東京大学鈴木・酒詰両先生のもとにおこなわれた。

田名部町から自動車で二五分のこの遺跡の出掘は毎日（八月五日―十二日）九時―九半の始りで、終り

〔別表2〕　日本各地に於ける縄文式文化の変遷　（編年比較表）

（1950.3.13 作製）

時期＼地域	北海道渡島半島	下北半島	奥羽北半	奥羽南半	関東	新潟長野	東海	近畿	岡山広島	四国	九州	地域＼時期
	縄文土器文化（土師 須恵伴出）	稲山（土師・須恵伴出）	（土師・須恵）		鬼高							古墳文化（土師 須恵）
続縄文式文化	後北式 d c b a	濱尻屋		桝形囲	和泉 十王台		櫻内 瑞穂 高倉 貝田町	常内 西辻 新沢 泉津			水巻町 伊座 佐須	弥生式文化
	本輪西上ノ	高野川		大洞A′	前野町 弥生町 久ヶ原 宮ノ台 野沢 女方 須和田	六野瀬	西志賀	瓜破		阿方	下伊田	
晩期		葛沢	亀ヶ岡式 亀ヶ岡泥炭	大洞A	千網		稲荷山・保美	唐古	高島王泊下ノ		立屋敷	晩期
			新城	大洞 C_2 C_1	眞福寺（安行3C）		吉胡	宮瀧・日下 檀原・竹内	高島黒土上ノ		御領	
		八森	藤株	大洞 BC B	石神（安行3B A）		（麻生田）		馬取			
後期			（倉岡）	新地（ ）	安行（安行2） 岩井（安行1）					平城	西平 三萬田	後期
		荒川	鳴沢		（曽谷） 江原台 大森	上ノ段	西貝塚 西尾	北白川2	津雲A	宿毛	（市来） 鐘ヶ崎（押手洗）	
	青柳町		大湯下ノ		堀ノ内		亀山	（丹波市）				
中期		最花	榎林	大木 10 9	加曽利E（新）	尖石 3		（上賀茂）			南福寺（有萌）	中期
				大木8 B A	加曽利E（旧）	2			里木2			
			円筒土器上ノ式 B	大木7B	阿玉台 勝坂	1	北屋敷		船元		阿高	
			A	大木7A	五領ヶ台		柏窪					
前期			円筒土器下ノ式 D	大木 6 5	諸磯式 華花（十三坊台） 四枚畑	踊場		大歳山	里木1		轟	前期
		女館	C	大木 4 3	矢上 水子			国府・北白川（安土）	磯ノ森	南草木（祝谷）	曽畑 日勝山？ 手向山？	
			B	大木2 B A	黒濱（文蔵）		石塚					
			A	大木1	関山			（安土）			田中白坂	
	石川野	ノツコロ	深郷田	室濱 素山（槻木2）	茅山 花積下ノ 大串 下組 菊名 梶山		石塚下ノ 米白畑 上ノ山	石山				
早期	槻法華 住吉町	タチマツ 吹切沢 物見台		槻木下ノ 常世・館山	野島 子母口 花輪台？ 田戸上ノ（江月） 田戸下ノ II 井草 田戸下ノ I		嵩山・村上	高山寺	黄島	小鷲島	戦場ヶ谷 沈目	早期
					拝島							
					絡荷台		行人原					
					岩宿文化？							

第60図　「最花」式初出の編年表

は五時半頃である。東大学生二・三人と当部員橘・立花両君と筆者・人夫達によりABのトレンチが掘り出された。

・Aトレンチ・

このトレンチは幅四メートル・長さ約八メートル・深さ二メートルに掘られ左端に拡張部がもうけられた。

〈A部〉

土器類は中期の末から後期の初頭の堀之内式土器が細長い層となって多量に出土した。又貝類は「アサリ」も多量に出土しておる。又「ハマグリ」も小量出土した。

〈B部〉

この区は骨又骨工具・貝類が全体を通して一番多く遺物が出土した所である。遺物は土器（堀之内）が本量で大部分は貝である。

・遺物・

貝類

ニホンシジミ・カキ・サルボウ・ハマグリ

骨類

ニホンシカ（一番多量に出土した）・イノシシ・（ニホンシカとイノシシは歯も多く出土した）・イヌ・鳥・等と骨角器が出土した。

拡張部は石器と同じ遺物が出土した。又炉跡は左図の写真に指した通りである。

〈C部〉

この区は「サルボウ」が大部分でAB部と同じく堀之内式土器が出土した。その他に「ニホンシジミ」と「カキ」が小量出土した。

〈DEF部〉

この区は小量の「ニホンシジミ」・「アサリ」・「ハマグリ」・等と堀之内式土器も出土及び鳥類の骨・骨角器・歯等が出土した。

・Bトレンチ・

Aトレンチでは人骨体が出土が不可能とされ、Aトレンチに二・三日おくれて前記したように二四年度に東大八幡先生の出掘した横でBトレンチと名づけて出掘した。Aトレンチで出掘が不可能と見た隊員は、Bトレンチに希望をよせて出掘した。

正午頃一米ばかり掘ったトレンチの中心あたりから横に男女の二体の人骨が発見された。また続いて堀之内の完成土器も出土し、人骨体は一昨年の八幡先生の掘った三尺ぐらい横から出ておった。

又これら一帯に貝塚の層があり出掘した場所は小高丘となり畠の物を取りさって最花部落の人々の協力で出掘が終ったのである。

（前期の中期の土器は円筒上層であり後期は堀之内である。又石器類は出掘場所不明のため記せません。）」

この記録から、1951年調査では、A、B、2ヶ所のトレンチが発掘され、うちBトレンチが1948年の八幡らの調査地点にごく近接していたことがわかる。Bトレンチから発見された男女2体の人骨は、八幡氏らのトレンチと同一の住居址内に埋葬されたものである可能性も高い。

調査地点については、後に江坂氏が「B貝塚」にあたると記したことから（江坂1969）、以後の報告文等でもそう説明されることが多くなっている。しかし、佐々木氏の記録の具体的な内容から判断して、少なくともBトレンチが、八幡らの調査地点にごく近接していることは間違いない。もちろん、Aトレンチが、1964年調査の「B貝塚」の近い位置にあった可能性は残るが、二つのトレンチが100m近く離れていたことを示すような記述は見あたらず、AトレンチとBトレンチが並行するように図化されていることからも、両トレンチともに「A貝塚」にあったと考えるのが妥当であろう。となると、1964年の調査以前、最花貝塚遺跡は、本報告でいうA地点のみが調査されていたことになり、それまでに使用されるようになっていた「最花式」も、当然、A地点出土土器によって、検討されていたことになる。

なお、酒詰氏は、1959年、2500箇所以上の貝塚について集成した『日本貝塚地名表』の中に最花貝塚遺跡を挙げている（酒詰1959）。また1961年、全国の貝塚からの「食品資料」について集成した『日本縄文石器時代食料総説』の中にも、最花貝塚という名称が記されている（酒詰1961）。

◎ 1964年の発掘調査とその記録

この第3回目の発掘調査の後、10年以上が経過した1964年（昭和39）年10月に、ここで出土土器を報告した第4回目の発掘調査が行われた。この調査は、九学会連合の考古班によるもので、江坂輝彌氏を中心に、金子浩昌氏、村越潔氏、橘善光氏らが参加している。第1～3回の調査地点である「A貝塚」のほか、約100m西方の「B貝塚」、さらに20mほど西の「C貝塚」の3つの地点が発掘され、慶應義塾大学専任講師であった江坂氏が出土遺物を慶應義塾大学に保管した。

日誌によると、「A貝塚」のA－1トレンチは、1948年の調査区の東側に、その際に掘り残した貝層を調査するために設定したとされており、このトレンチが、1948年の調査区の東側隣接地にあたることがわかる。

1965 年の文献で、江坂氏はこの調査の日程と参加者について触れている（江坂 1965）。また、1967 年に刊行された『下北―自然・文化・社会』においても、下北半島の「縄文土器文化の時代の遺跡は、1947 年以降に発掘調査されたものがかなりあり、その主要なものを年代順に略記」するとし、計 4 回の最花貝塚遺跡発掘調査について調査期日、調査者、調査遺跡、遺跡の種類を挙げている（江坂 1967）。遺跡の種類については、1947 年、1948 年、1964 年調査区を縄文中期末貝塚、1951 年調査区を貝塚、縄文中期集落跡とし、遺跡分布図のなかにも最花貝塚遺跡を「中期―後期初頭」として掲載した。さらに「縄文土器中期の遺跡」の主要なものとして、「むつ市田名部最花（貝塚） 円筒土器上層 A、B、C、D、各式最花式」と記している。

一方、この調査に参加していた金子浩昌氏は、同じ『下北』に、最花貝塚遺跡出土の動物遺存体を A、B の地点ごとに報告しており（金子 1967）、そこに最花貝塚遺跡の見取図を載せている。この図は、「A 貝塚」「B 貝塚」「C 貝塚」の位置を知るための唯一の手がかりとなるものである。

なお、同じくこの調査に参加していた橘氏も、1994 年刊行の『むつ市史　原始・古代・中世編』などに、江坂氏の記録をまとめるかたちで調査年や調査者についてまとめている（橘 1970、1979、1994）。ただし、これらについては、調査地点や調査年等の記載に誤りが多く、注意が必要である。

なお、最花貝塚遺跡では、1977 年以降、1 ～ 4 回の調査とは異なる地点において、橘善光氏を担当者とする発掘調査が 4 回ほど実施されている（橘ほか 1978、1980、1983、1986）。1977 年、1978 年、1982 年の調査地点は、「D 貝塚」、本報告で言う D 地点で、1985 年の調査地点は、照徳神社の裏手（1985 年地点）にあたる。

これらについては、教育委員会によって報告書が刊行されており、そのなかで「最花式」についての説明も行われている。しかし、これらの調査区では、最花貝塚遺跡 A 地点よりも幅広い時期の土器が出土していることに加え、発掘が住居址等の遺構の存在を認識せずに行われていたことが災いし、土器の分類や時期区分に大きな問題を内包するものになってしまった点が惜しまれる。

（3）1964 年調査の最花貝塚遺跡 A 地点出土土器の意義

以上の最花貝塚遺跡における発掘調査の歴史と、「最花式」設定に至る経緯から、「最花式」土器が、1948 年調査の「A 貝塚」（A 地点）で出土した土器を基準に設定されたことが明らかになった。また、1964 年の江坂氏による「最花式」の説明の時において、調査が行われていたのが A 地点のみである可能性が高まったことから、少なくとも、この時点までの「最花式」は、A 地点出土土器によってその内容が検討されていたことが推測できた。

ただ、肝心の 1948 年調査をはじめ、1947 年調査の出土土器も現在所在が不明であり、1951 年調査も報告がない。そのため、残念ながら、この時点までに江坂氏が検討した可能性のある資料の詳細を知ることはできない。

そうしたなかで重要な意味を持つと思われるのが、今回報告した 1964 年調査の A 地点出土土器である。先述のとおり、1964 年 A － 1 トレンチは、1948 年の調査区の掘り残しの貝層を調査するために設定されたものであり、そこからは、資料報告で提示したような、比較的まとまった様相をもつ土器が多量に出土している。その特徴は、江坂の記した「器面全体の単方向の縄文、折り返し突帯」という「最花式」の特徴と一致しており、また、1951 年調査の A 地点出土土器が「堀之内式」と記述されていることも、A 地点出土土器が共通した様相をもっていたことを示唆するものと言えよう。

このような点を考慮すると、今回報告した 1964 年調査の A 地点出土土器が、1948 年調査の標式資料に近い内容をもっていたことが想定できることになる。少なくとも、この資料が、江坂氏らが標式とした資料の内容を知るための、最も大きな手がかりになることだけは動かないはずである。

Ⅱ．「最花式」土器研究史

さて、1964 年調査の最花貝塚遺跡 A 地点出土土器が、上記のように、「最花式」の標式資料に近い内容をもっているとした場合、現在多くの研究者が用いている「最花式」の内容は、A 地点出土土器の内容を大きく超えて、その範囲が拡大しているようにみえてくる。そこで次に、「最花式」土器をめぐる研究史を時期を追って整理し、現在の理解がどのように形成されていったのかを明らかにしてみたいと思う。

（1）石神遺跡報告による「最花式」の問題点

繰り返しになるが、土器の編年研究における「最花」（式）の初出は、1950 年のことであった（江坂 1950）。設定者の江坂輝彌氏は、1964 年に、「器面全体に単方向斜縄文を施文し、口頸部に折返し突帯のある」土器と、「最花式」土器の特徴を説明したうえで、東北北部中期末に「榎林（最花）」として位置づけた（江坂 1964）。これらの「最花式」が、1948 年調査を中心とした、A 地点出土土器によって検討・設定されたものであることは、先述のとおりである。

そうしたなかで行われた 1964 年の調査では、1948 年調査のものに近い土器が多量に出土したと推定されるわけであるが、残念ながらこれらについても公表されることがなかった。つまり、「最花式」については、その名称が使

われ始めてから今日まで、どのような土器を標式・基準とすべきか不明な状態が続いていたのであり、これが、後の「最花式」拡大のひとつの原因になったことは間違いない。

その後、江坂氏は、1970 年に刊行された津軽地方の石神遺跡の発掘調査報告書において、石神遺跡出土土器を用いて、氏の考える「最花式」土器の解説を行っている。これは、「最花式」の設定者である江坂氏によって、その具体的な内容が示された唯一のものでもある。

江坂氏は、その中で「最花式」には、深鉢形土器の第 1 類、浅鉢形や台付土器の第 2 類、「広口壺形土器」の第 3 類があるとし、うち、時間的位置づけに苦慮したという 2 類を除く、第 1 類と第 3 類によって、標式的な「最花式」が明示できたと述べている。

ただ、第 1 類は、現在、円筒上層 e 式土器または泉山式土器とされる土器である。江坂氏の説明による限り、この時点での江坂氏の「最花式」の認識に、これらの円筒上層系統の土器が含まれていたことは明らかであるが、不思議なことに、こうした土器は、少なくとも最花貝塚遺跡 1964 年調査では全く出土していないのである。江坂氏が、３類に関してのみ「同じ文様手法のものはむつ市最花からも数例出土している」としている点を考慮すると、江坂氏が第 1 類を「最花式」に加えた背景には、中期末以降まで円筒上層式系統の土器が続くという、氏の編年観が深く関わっていた可能性が高くなる。

一方、第 3 類土器については、口縁部に幅広い無文帯をもち、胴部に縄文と沈線文の施された小さな深鉢形土器が 1 個体提示されたのみであった。この土器は、本報告における深鉢形Ⅱ類に当たるが、Ⅱ類は、1964 年調査出土土器では客体的な存在である。

いずれにしても、設定者の江坂氏自身が、別遺跡の土器を用いて「最花式」を説明したこと、さらに、それが氏の編年観によって、最花貝塚遺跡 A 地点出土土器の内容から大きく遊離した内容になってしまっていたことが、その後、「最花式」と最花貝塚遺跡 A 地点出土土器との関係に関心を払う研究者が少なくなっていくことにつながったのは間違いない。そして、この点も「最花式」の拡大を招く原因のひとつになってしまったのである。

（2）村越潔氏による「最花式」の軌道修正

このような標式・基準とすべき資料から遊離した「最花式」の説明に対し、1964 年調査に参加していた村越潔氏が、1974 年に、最花貝塚遺跡 A 地点出土土器の実態に近い内容を提示することで、「最花式」の軌道修正を行っている（村越 1974）。

村越氏は、まず「最花式第 1 類土器」を円筒上層 e 式として「最花式」から除外し、「最花式第 3 類土器」を「最花式」の標準的な土器とした。そのうえで、最花貝塚遺跡 1964 年調査時に自身が採集したという土器を中心に、1968 年に弘前市三ッ森遺跡で採集した土器、石神遺跡出土土器などを用いて、「最花式」の内容を解説した。

村越氏は、「最花式」の例として挙げた、最花貝塚採集土器について、以下のような説明を加える。少々長くなるが、「最花式」の解説として重要なものであるため、全文を引用しておこう。

「最花より採集の土器は破片のもつカーブより推定して、肩部の張った深鉢形土器と思われる。口縁は他の部分より厚く、折り返し状の口縁をなすものと、口頸部が内弯の形状をとるものとの二種類があり、すべて平縁である。地文には単方向斜縄文が見られ、それは右下がりのものが圧倒的に多い。装飾文は沈線を主としたもので一ないし二条を、縦長の円形または垂下状に施している。前者の長円形沈線の土器は、これら沈線文に画された文様面の間に円形の刺突文が一定間隔をもって施される。胴部下半は二ないし三条の縦位に施文の沈線が底部まで見られる。また、後者の土器は、垂下する沈線間へ、さらに一条の沈線を施し、胴部中央から底部にかけて上半部の文様を逆にしたような沈線文がある。なおこの文様の土器には円形刺突文はない。そのほか最花では、口縁直下にボタン状装飾突起を有する土器も出土している。底はすべて平底である。」

この説明でまず注目されるのは、村越氏が挙げたこれらの特徴が、本報告における最花貝塚遺跡 A 地点出土土器の特徴に非常によく一致するということである。つまり、学史的に言うと、ここにおいて、標式とすべき資料に近い「最花式」の具体的内容が提示されていたことになる。また、村越氏が、この後の記述で、「最花式」の文様が、大木 9 式土器の文様と関係するとの指摘を行っている点も重要である。

とはいえ、村越氏は、この解説に関わる土器を 1 点も図示しておらず、そのために、この解説に述べられた「最花式」の特徴が定着することはなかった。また、村越氏は、榎林式と大木８ｂ式、「最花式」と大木９式の関係に気が付きながらも、榎林式を中期末とする旧来の編年観に引っ張られ、両者を並行関係で捉えてしまっている。この点も村越氏の「最花式」の解説が重視されてこなかった原因になっていることは間違いない。

いずれにせよ、村越氏の解説がもう少し理解されていれば、以後の「最花式」の拡大現象は避けられたはずであり、ここにも「最花式」をめぐる研究の重要な曲がり角があったと考えておく必要がある。

（3）中の平Ⅲ式、中の平３式土器の設定

以上のように「最花式」の内容が定着しない状況が続くのなかで、以後の「最花式」の理解に大きく影響する、中の平遺跡の発掘調査が行われることになる。1975 年のその報告書において、鈴木克彦氏が、榎林式に後続する土器型式として中の平Ⅱ式、中の平Ⅲ式を設定し、中の平Ⅲ式を「最花式」に並行するものとして位置づけたのである（鈴木 1975a）。

鈴木氏は、口縁上部や口唇下端部に太い溝線文による文様帯をもつ榎林式に対し、中の平Ⅱ式土器ではそれが衰退し、中の平Ⅲ式にはみられなくなるという変遷観を示し、中の平Ⅲ式は、波状縁と口縁直下より垂下する２、３条の懸垂文に特徴付けられると説明した。

中の平Ⅲ式の設定当初、鈴木氏は、中の平Ⅲ式と「最花式」を、異なる特徴をもつ土器型式としている。鈴木氏は、中の平遺跡から「数量的には非常に少なく所謂最花式のメルクマールと目されてきたぜんまい状を呈する一種の渦巻文を施文する土器」が出土していることを指摘したうえで、中の平Ⅲ式を「所謂最花式と併行関係にあって、その地方色を表す１つの地域的な土器型式」との理解を示した。ここで挙げられたぜんまい状の渦巻文とは、石神遺跡の「最花式第３類」に認められる文様をさしているのだろう。

ところが、同年 10 月、鈴木氏は、日本考古学協会において、「かつて、所謂最花式と称されていたものが、中の平Ⅲ式である」と、両型式の関係についての考えを大きく変えることになる（鈴木 1975 b）。続く 1976 年には、その具体的な内容を解説し（鈴木 1976）、設定当初の中の平Ⅲ式に、村越氏の「最花式」に近い野家遺跡出土土器を加えた広範な土器型式として、中の平Ⅲ式を再設定した。

そのなかで鈴木氏は、「最花式」を、内容があきらかにされていないとして否定し、野家遺跡出土土器と設定当初の中の平Ⅲ式との違いについては、あくまでひとつの型式内の地域的差異との考えを示した。様相の異なる二つの土器群をひとつの型式にまとめた理由は、両者がともに口縁部の文様帯をもたないことと、中の平遺跡出土土器にみられる懸垂文と野家遺跡出土土器の区画文を、ともに大木９ｂ式並行としたこと、さらに野家遺跡からも設定当初の中の平Ⅲ式が出土していることにあるらしい。なお、このなかで鈴木氏は、野家遺跡出土土器が村越氏の「最花式」に近い内容をもつことに触れていないが、この点をとってみても、村越氏の「最花式」がいかに理解しにくいものであったかがわかる。

その後、鈴木氏は、1989 年の「最花式（中の平Ⅲ式）土器」と題する解説文において（鈴木 1989）、秋田県天戸森遺跡出土の、波状を呈し幅広の無文帯となる口縁、肩部に横位の沈線文や刺突列をもつ土器を加えている。しかし、こうした特徴をもつ土器は、鈴木氏が 1976 年に中の平Ⅲ式として挙げたもののなかには存在しておらず、注意をしておく必要がある。

さらに鈴木氏は、1996 年に、型式名を中の平３式に変更し（鈴木 1996）、1998 年には、大木９式に類似した文様がまとまる、八戸市西長根遺跡（註：現在は松ヶ崎遺跡に含められている）出土土器をも中の平３式に加えている（鈴木 1998）。この点について、鈴木氏は、西長根遺跡出土土器は施文手法、文様モチーフ、器形に違いがあるものの、それは時期差ではなく青森県内の地域性であると理解し、「地域を一律に捉える」ことを重視したが故に、中の平３式に含めたと説明している。

ここで確認をしておきたいのは、鈴木氏の中の平Ⅲ式、３式の拡大が、異なる様相をもつ土器群の系統的基盤の同一性の確認と、周囲の他型式との異同の説明を経てなされているわけではないということである。設定当初の中の平Ⅲ式は、その標式となった資料を見る限り、江坂氏や村越氏の「最花式」とは明瞭に異なる特徴をもつ土器型式であった。しかし、その範囲を拡げていった中の平Ⅲ式、３式は、その標式資料からかけ離れたものになっているだけでなく、そこに内包された土器群の型式学的同一性を説明していない、もはや年代学的単位としての土器型式とは言えないものになっている。ここで鈴木氏の型式の理解、及び編年研究の方法については問わないが、中の平Ⅲ式、３式は、異なる系統の土器を含みこんだ「ある地域の時期区分・段階」と理解すべきものなのである。

ところで、1989 年の解説において、鈴木氏は、一度否定したはずの「最花式」を、中の平Ⅲ式と並列して説明している。鈴木氏が、「最花式」を完全に切り捨てることができなかったのは、この時点において、まだ多くの研究者が、歴史ある「最花式」の名称を用い続けていたことと関係するのだろう。ただ、このような「最花式」と中の平Ⅲ式、３式を重ね合わせる説明が、以後の「最花式」のイメージに大きく影響し、「最花式」の内容が、最花貝塚遺跡出土土器から離れいくことにつながったのである。

（4）中の平Ⅲ式、３式、「最花式」をめぐる現在までの状況

例えば、成田滋彦氏は、1984 年に発表した青森県を中心とした縄文時代中期末～後期初頭についての論考のなかで「最花式」に触れているが（成田 1984）、そこでは鈴木氏の 1976 年の中の平Ⅲ式の範囲を「最花式」として捉えている。さらに成田氏は、2003 年、2004 年と続けて「最花式」について論じているが、ここでの「最花式」は、鈴木氏 1998 年の中の平３式に近いものになっている（成田 2003、2004）。いずれにせよ、成田の「最花式」は、

鈴木氏の中の平Ⅲ式、「中の平３式」と同調して、範囲が拡大していることがわかる。

また、小笠原雅行氏も、2002 年に「最花式」の研究史をまとめるなかで、中の平３式（鈴木 1998）の範囲をもって「最花式」とする立場をとっている（小笠原雅 2002）。こうした「最花式」をめぐる研究のほかにも、論文や報告書の文中にて「最花式」という型式名は頻繁に登場しているが、そこでも、鈴木氏による中の平Ⅲ式、３式とその範囲が重なっていたり、併記されることが多くなっている。

さて、鈴木氏の中の平Ⅲ式、３式は、異なる様相をもつ土器を次々と含めて拡大していったものであったために、その拡大が始まった当初から、鈴木氏も含めて、そこに地域差、時期差を読み取ろうとする研究が盛んに行われることになった。1978 年の古市豊司氏のものを嚆矢とし（古市 1978）、1982 年の小笠原善範氏の考察（小笠原善 1982）、1988 年の高橋潤氏の論文（高橋潤 1988）、先述の成田氏の 2003 年、2004 年の論文（成田 2004）などである。

これらの研究は、細分結果を別にすれば、概ねその当時の鈴木氏の中の平Ⅲ式、３式を一つの時期区分の単位とし、それを細分しようとしている点で共通している。現在では、設定当初の中の平Ⅲ式をその古い部分、村越氏の「最花式」を新しい部分（大木 10 式期並行の磨消縄文をもつ土器群までを含める場合は、中位の部分）とする理解に固まりつつあるように見えるが、その一方で、何故こうした区分を中の平Ⅲ式と「最花式」ではなく、中の平Ⅲ式、３式の時期区分として理解するのかが、これらの論考において説明されていない点には注意が必要である。これらの研究では、諸属性の細かな分類を行いながらも、それらを時空間軸における系統的連鎖として理解しているわけではない。中の平Ⅲ式、３式の細別を試みる研究が、鈴木氏の「ある地域の時期区分・段階」の時期区分に止まり続けている理由は、こうしたところにもあるのだろう。

とは言え、少数派ではあるが、「最花式」を、鈴木氏の中の平Ⅲ式、３式とは異なるものとして論じた研究も存在する。柳沢清一氏は、氏独自の広域編年の枠組みと、「紋様帯」の系統的把握によって、土器型式としての「最花式」を捉えようと試みている（柳沢 1988・1991）。柳沢氏は、榎林式と「最花式」の学史を整理しつつ、橘善光氏の報告した「最花式」の土器群（橘 1987）のなかで、一定パターンの刺突文をもつ一群に注目し、それらを「（狭義の）最花式」の「標本資料」とすべきだとした。

柳沢氏の挙げた「（狭義の）」最花式」の内容は、結果として本報告でのＡ地点出土土器の一部に近くなっている点で注目される。もちろん、多くの批判があるように、柳沢氏の議論には、石神遺跡報告の「最花式第３類」を榎林式に位置づけるなどの大きな誤謬があることは確かである。しかし、結論や方法に多くの問題があるにせよ、型式の設定にあたり、学史を踏まえ、分類の標準としての土器から離れず、系統の連鎖を重視する姿勢が、結果として「最花式」を最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器に近づけたことも確かであろう。

柳沢氏のような研究が、鈴木氏らの研究と相容れないのは当然のことであるが、その結論や方法の問題点に批判が集中したこともあり、編年体系が、分類の標準に基づく土器型式の縦横の連鎖によって構築されるものであることを認識させる力にはならなかった。そのため、現在に至るまで、「最花式」は、「ある地域の時期区分・段階」である、中の平Ⅲ式、３式と並列的に論じられることになり、その標式、基準となる資料に対する関心も高まらない状態が続くことになったのである。

Ⅲ. 最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器からみた「最花式」

以上のような研究史を踏まえ、我々は、ここで報告した最花貝塚遺跡Ａ地点 1964 年調査出土土器の分析を通じて「最花式」を捉えなおす必要があると考えるに至ったわけであるが、そのためには、これからまだまだ多くの分析を積み重ねていかなければならない。そこでここでは、最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器から、「ある地域の時期区分・段階」である現状の「最花式」（中の平Ⅲ式、３式）を見ることで、その問題点を指摘し、今後の分析の方向性を考えてみたいと思う。

最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器の詳細については、資料報告を参照していただきたいが、その特徴を短くまとめると、以下のようになると考えている。

器形は、全て深鉢形を呈し、口径が 30㎝を超えるものから５㎝程度のものまである。胴部に屈曲のないⅠ類と、胴部中位に屈曲をもつⅡ類に分かれ、Ⅰ類には口縁部が外反するものと内湾するものがあり、Ⅱ類も外反するものと内傾するものに区分できる。Ⅰ類が主体であり、Ⅱ類は少ない。全て平縁であり、波状を呈するものは存在しない。

Ⅰ類には、口縁部に輪積による段をもつものともたないものがあり、前者は大型の土器に多い。段をもつものは、段より下全体（一部器面全体）にＲＬ横回転の縄文を施し、その半数程度に、縦位に展開する沈線文が加えられる。一方、段をもたないものの装飾は縄文のみになっており、沈線文をもつものはない。

沈線文には、Ｕ字、逆Ｕ字状のモチーフを上下に組み合わせたものを器面に一周させた例が多く、Ｕ字、逆Ｕ字文の両側に沈線を加えることで、細長いＨ字状にしたものも

目立つ。ほかに、Ｙ字状、円形、楕円形、孤状のモチーフを縦位に組み合わせるもの、隣り合うモチーフに変化がみられるものなどもある。胴部上半のモチーフの内部を中心に、円形の刺突文が施される例も少なくない。

Ⅱ類は、屈曲部より上は無文であり、屈曲部より下に縄文が施され、その多くが屈曲部を横位に沈線や刺突で区画し、その下に縦位を基本とする沈線文を付加している。沈線文は全体がわかる例が少ないが、Ⅰ類のモチーフを縦に縮めたようなものがみられる。

なお、数は少ないものの、Ⅰ類、Ⅱ類ともに口縁部にボタン状突起をもつものが存在する点も、無視してはいけない特徴として考えている。

さて、こうした特徴を、鈴木氏が「ある地域の時期区分・段階」としての中の平Ⅲ式、３式（あるいは「最花式」）に含めた土器群と比較してみると、当然のことながら多くの相違点を挙げることができる。とりあえず、ここでは、破片資料は不問とし、文様をもつものを中心とした個体資料レベルの比較に止めるが、例えば、中の平Ⅲ式の標式を含む中の平遺跡出土土器のなかには、最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器と共通するものは存在せず、逆も同様である。また、松ヶ崎遺跡（西長根遺跡）出土土器にも、共通する特徴をもった確実な例はない。一方、松ヶ崎遺跡出土土器に目立つ口縁、胴部の境に刺突列のある屈曲を形成し、波状・平縁の内傾気味の口縁部に幅広の無文帯をもつような土器は、中の平遺跡、最花貝塚遺跡には存在しない。

こうした差異を、これまでは中の平Ⅲ式、３式の地域差、時期差として理解してきたわけであるが、最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器からみると、これらの遺跡の出土土器の様相差は、それほど単純に理解できるようなものではないことがわかってくる。例えば、最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器の沈線文のモチーフには、榎林式にみられる孤状文、円文、Ｙ字状文等の組み合わせが比較的多く存在するが（３、６、12、14、19、25 等）、中の平遺跡と松ヶ崎遺跡出土土器には、こうした文様は少なく、口縁部直下からの直線的な懸垂文が主体となる。仮に近年の時期区分案に従って、中の平遺跡と松ヶ崎遺跡出土土器を最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器の前に位置付けた場合、こうした現象の説明が困難になってしまうだろう。

もちろん、だからと言って、我々は、最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器が、中の平遺跡出土土器に先行あるいは並行すると言っているわけではない。また、ここで報告した最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器が、今後二つ以上の土器型式に細分される可能性に目を瞑っているつもりもない。ただ、従来の理解のように、最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器が、中の平遺跡出土土器より時間的に下るものとした場合、中の平遺跡出土土器と並行し、かつ最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器にみられる、榎林式から続く文様の橋渡しをした土器群が存在しなければならないのであって、そうしたものの抽出ができていない時期区分には、どこかに誤りがあるのではないかと考えているだけである。

最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器を細かく観察すると、器体の輪積とともに横位の縄文施文をしていく点など、円筒上層式から続く技法が根強く残っていることがわかる。一方、最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器に目立つＨ字状のモチーフは大木９式の文様モチーフと関係するものであるが、大木９式が主体となる松ヶ崎遺跡出土土器に、同様のモチーフがない点などにも注意が必要であろう。

つまり、中の平Ⅲ式、３式とされる土器群は、円筒上層式から続く要素と大木８ｂ式、９式より付加された要素の交錯によって形成された、幾つか系統に区分可能な土器からなっているのであって、そこに年代学的単位を設定するためには、その系統的な整理を進めることが不可欠になる。個々の資料に時間的位置を与えていくためには、分類の標準に基づいた、型式の縦横連鎖の構造を確立していかなければならないのである。

もちろん、こうした方法によっても、型式同士の関係性を分析することによって、より広範に及ぶ上位の型式を設定することは可能である。しかし、先述のとおり、中の平Ⅲ式、３式が、そうした手続きを経て設定されたものでないことは明らかである。

以上のように、東北北部の東北地方北部の縄文時代中期後葉～末葉の土器編年は、型式による再構築が不可欠であり、我々は、それを最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器による「最花式」の再設定とともに進めていきたいと考えている。

おわりに

以上、最花貝塚遺跡の発掘調査の歴史と「最花式」設定の経緯、そして中の平Ⅲ式、３式設定以後の「最花式」土器研究の問題点をまとめてみた。最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器の具体的な分析結果を提示することはできなかったが、我々が、ここで報告した資料の分析によって「最花式」の再設定が必要、と考えるようになった理由については、ある程度理解していただけるのではないかと思う。

本稿は、安達香織の草稿をもとに、安達と安藤が議論を交わしながら、加筆・修正をしていったものである。ここでは、安達、安藤の現時点での共通理解をまとめることを志したが、時間の都合で、充分な意見の調整ができず、論点の整理も不充分なものとなってしまった。ここで充分に論じられなかった点は、今後、具体的な分析のなかで補っていくことにしたい。

引用・参考文献

江坂輝彌　1950「縄文式文化について (その一)　日本各地に於ける縄文式文化の変遷（編年比較表)」『歴史評論』第 4 巻第 5 号　民主主義科学者協会　別表 2
江坂輝彌　1951「縄文式文化について (その十一)　日本各地に於ける縄文式土器の変遷（編年比較表)」『歴史評論』第 5 巻第 7 号　民主主義科学者協会　95-96 頁
江坂輝彌　1956「東北」『日本考古学講座 3』河出書房　91-124 頁
江坂輝彌　1958「余白録　古いノートから－青森県下北半島最花貝塚の調査日誌より－」『石器時代』5　石器時代文化研究会　68 頁
江坂輝弥　1964「中期の土器」『日本原始美術 1』講談社　164-167 頁
江坂輝弥　1965「青竜刀形石器考」『史学』第 38 巻第 1 号　三田史学会　75-102 頁
江坂輝弥　1965「下北地方の考古学的調査回顧」『人類科学』17　九学会連合　32-48 頁
江坂輝弥　1967「下北半島の先史・原始時代遺跡」『下北―自然・文化・社会―』平凡社　112-116 頁
江坂輝弥　1969「青森県むつ市最花貝塚」『日本考古学年報』17　誠文堂新光社　76 頁
江坂輝彌　1970『石神遺跡』ニューサイエンス社
大塚弥之助　1936「青森県下北郡最花の貝塚」『地質学雑誌』43-511　日本地質学会　252-253 頁
小笠原雅行　2002「『最花式土器』雑感」『研究紀要』7　青森県埋蔵文化財センター　55-60 頁
小笠原善範　1982「第Ⅳ群土器」『山崎遺跡』青森県文化財調査報告書第 68 集　青森県教育委員会　400-403 頁
小保内裕之　2008「陸奥大木系土器（榎林式・最花式・大木 10 式併行土器)」『総覧　縄文土器』アム・プロモーション　368-375 頁
金子浩昌　1967「下北半島における縄文時代の漁業活動」『下北―自然・文化・社会―』平凡社　117-128 頁
金子正雄　2000「東北地方北半部を中心とした縄文時代後期初頭及びその周辺の土器型式について－卒論をおよそ 30 年後に読む－」『村越潔先生古稀記念論文集』弘前大学教育学部考古学研究室 OB 会　83-112 頁
酒詰仲男　1959「東北地方　最花」『日本貝塚地名表』土曜会　17 頁
酒詰仲男　1961「第 2 章　貝塚遺跡別に観た食品資料　1 東北地方　1 最花」『日本縄文石器時代食料総説』土曜会　3-4 頁
佐々木　守　1951「下北半島先史文化綜合出掘調査」『みちのく』3　県立大湊高等学校考古学部
柴田常恵　1917「陸奥　下北郡」『日本石器時代人民遺物発見地名表』東京帝国大学　288 頁
鈴木克彦　1975a「縄文時代中期前半の土器」「縄文時代中期後半の土器」「中の平遺跡における円筒土器以後の編年的考察」『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第 25 集　青森県教育委員会　56-95 頁、96-120 頁、178-189 頁
鈴木克彦　1975b「東北北部に於ける中期後半から後期前半に至る土器文化の推移」『日本考古学協会昭和 50 年度大会研究発表要旨』日本考古学協会　10 頁
鈴木克彦　1976「東北北部に於ける大木系土器文化の編年的考察」『北奥古代文化』8　北奥古代文化研究会　1-24 頁
鈴木克彦　1982「円筒土器に後続する土器の編年」『考古風土記』7　49-76 頁
鈴木克彦　1989「最花式 (中の平Ⅲ式) 土器」『縄文土器大観 1』小学館　246 頁
鈴木克彦　1996「円筒上層式土器　青森県」「榎林式土器」「泉山式土器」「中の平 3 式土器」「大曲 1 式土器」『日本土器辞典』雄山閣　332-339 頁
鈴木克彦　1998「東北地方北部の縄文中期後半の土器」『研究紀要』3　青森県埋蔵文化財センター　1-56 頁
鈴木克彦　2000「北海道後志・胆振地域の中期末葉から後期前葉の編年―北海道西南部の縄文後期の編年学的研究 4―」『北海道考古学』36　北海道考古学会　65-81 頁
高井冬二　1936「青森県下北郡田名部町最花貝塚出土獣骨」『地質学雑誌』43-517　日本地質学会　805-806 頁
高橋　潤　1988「北部東北地方の縄文中期終末に於ける土器編年試案 (1)」『撚糸文』青森県山田高等学校考古学研究部　22-27 頁
高橋　潤　2005「東北地方北部における縄文中期終末から後期初頭への編年的試論」『北奥の考古学』葛西　勵先生還暦記念論文集刊行会　121-136 頁
田中正太郎・林　若吉　1897「（東山道）陸奥国　下北郡」『日本石器時代人民遺物発見地名表』東京帝国大学　75 頁
橘　善光　1970「青森県最花貝塚発見の土偶」『考古学ジャーナル』No.49　ニュー・サイエンス社　25 頁
橘　善光　1979「田名部平野の三つの貝塚」『考古学ジャーナル』No.170　ニュー・サイエンス社　54-56 頁
橘　善光　1987「土器」『むつ市文化財調査報告』4　むつ市教育委員会　9-22 頁
橘　善光　1994「原始　最後の氷河時代」「古大湊湾の貝類」「縄文時代中期　最花貝塚の時代」『むつ市史　原始・古代・中世編』むつ市　3- 9 頁、44-54 頁、156-281 頁
東京国立博物館　1953『日本考古図録』朝日新聞社　32、48 頁
東京国立博物館　1999「テーマ展示　装身具・まつりの道具」『日本の考古　ガイドブック』東京国立博物館　46-47 頁
直良信夫　1998「青森県最花貝塚の脊椎動物遺体」『動物考古学』11　動物考古学研究会　99-108 頁
中島全二　1934「田名部町附近の先住民族遺跡遺物の分布」『国史研究』青森県師範学校附属小学校初等教育研究会　207-223 頁（1994『むつ市史　原始・古代・中世編』むつ市　709-727 頁に再録）
中島全二　1950「下北半島新石器文化の編年的研究」『考古学雑誌』第 36 巻第 4 号　日本考古学会　30-38 頁
成田滋彦　1984「東北北部の大木 10 式土器の周辺―青森県の事例を中心に―」『奥南』3　奥南考古学会　19-32 頁

成田滋彦　2003「最花式土器―在地式土器群の様相―」『研究紀要』8　青森県埋蔵文化財センター　1-20 頁
成田滋彦　2004「富ノ沢（2）遺跡の再検討」『第２回　東北・北海道の縄文中期後葉の諸問題』海峡土器編年研究会　32-62 頁
古市豊司　1978「縄文時代中期後葉の土器」『三内沢部遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 41 集　青森県教育委員会　406-416 頁
松島義章・奈良正義　1988「下北半島田名部平野沖積層から産出した貝殻のＣ 14 年代とそれに関連する問題」『神奈川県立博物館研究報告』17　神奈川県立博物館　57-72 頁
宮　宏明　1981「ノダップⅡ式土器の検討」『考古学研究』第 28 巻第３号　考古学研究会　56-70 頁
柳澤清一　1988「東北縄文中・後期篇年の諸問題　その１　中期末葉の編年 (中)」『古代』第 85 号　早稲田大学考古学会　78-117 頁
柳澤清一　1991「『榎林式』から『最花式』(中の平Ⅲ式へ)―陸奥中期後半編年の再検討―」『古代』第 91 号　早稲田大学考古学会　1-46 頁

２．下北地域における初期弥生土器編年

大坂　拓

はじめに

本科学研究費報告において掲載する八幡堂遺跡出土土器群は、広域編年上では縄文時代晩期末葉から弥生時代前期に並行し、下北地域におけるこの年代的括りは、おおよそ「大洞Ａ式よりも新しく、二枚橋式に先行する土器群」に相当する。

本州島東北部における当該期の土器型式編年は 1980 年代にはじまる「遠賀川系土器」の認識（中村 1982、佐原 1987）と平行して、本州島東北部南半における「大洞 A2 式土器」の再設定（鈴木 1985・1987）など、主に文様の型式学的変化という視点から研究が進展し（工藤 1987, 高瀬 2000）、近年では、これまでに設定された文様系列のより詳細な検討が試みられている（佐藤 2005・2008 ほか）。一方、下北地域での本格的研究は橘善光氏らによる江豚沢遺跡発掘調査と「江桙沢式土器」の設定（橘・山本 1967）にはじまり [1]、少量ずつながら資料が蓄積されてきた。近年では葉色遺跡（青森県教育庁文化財保護課編 2007）、江豚沢遺跡の再発掘（高瀬編 2006･2007）などで資料が増加し、戸沢川代遺跡（葛西・高橋編 1991）などまとまった例も散見されるようになったことで、再び型式変遷過程の把握も試みられている。

筆者もこうした現状を踏まえて、江豚沢遺跡および八幡堂遺跡出土土器群について型式変遷案を提起したことがある（大坂 2008）。以下では、その後の検討の成果を加えて下北地域の代表的な資料と八幡堂遺跡出土土器群の比較から、大洞Ａ式と二枚橋式の間に大別５段階の変遷を新たに提示する [2]。当該期の土器編年では非常に詳細な段階設定を行う意見もあり、年代的枠組みの細かさという観点ではここで示す細分案そのものは新しいものではない。ただし実際には、近年では型式細分の基準に異なった見解が並立しており、ここで下北地域の資料を中心として結論を導き出すことにも一定の意味があるものと考えている。

（1）下北地域の編年

ａ．型式変遷の概略

各細分型式について詳述する前に、型式変遷の概略について確認しておく [3]。まず器形は、浅鉢および台付浅鉢では丸みを帯びたものから直線的なものへと変化し、「戸沢川代段階」以降に再び曲線的なものが多くなる。口縁部の突起は徐々に大型化し、４単位から３単位へと変化する。台付浅鉢の台部は、細く台形を呈するものから直線的な円筒形をなすものに変化していく。壺では全体の形が判別できる資料が多くはないため不明な部分もあるものの、口縁部突起の単位数では浅鉢・台付浅鉢と同様の変化が考えられる。深鉢では、大形で口縁部に狭い無文帯がある資料が全期間を通じて存在する一方で、「梨ノ木平段階」から「戸沢川代段階」にかけて、頸部無文帯があるものも含めて屈曲が強い資料が増加する傾向がある。これは台付鉢でも同様で、二枚橋式土器をへて恵山式土器へ連続的な変化をたどる。

文様要素では、浅鉢類と壺では文様を描出する沈線が徐々に幅広かつ深いものに変化していくが、「戸沢川代段階」では幅は広いものの浅くややシャープさを欠くものが目立つようになる。また、これらの器種では、口縁部内面沈線の形態に明瞭な変化が認められる。具体的には、波状口縁の浅鉢・台付浅鉢・壺では、「八幡堂２群段階」までは深い沈線で内面沈線が描かれるが、「八幡堂３群段階」では沈線上端が不明瞭か、突起と全く一連のものになる。これは突起の大型化と、その内面にミガキが施されるようになるという点に関連した変化だろう。その後、「戸沢川代段階」には内面沈線は再び単なる沈線になる。これは全体に調整が粗雑化することと、口縁部そのものが外側に屈曲する平坦面を構成するようになる点と関係した変化と考えられる。「梨ノ木平段階」には内面沈線の特徴では「八幡堂３群段階」と共通するものと「戸沢川代段階」と共通するものが共存する。そのほかの属性では、粘土粒は徐々に大型化し、「戸沢川代段階」には平坦なボタン状をなすものが多くなるなど微妙な差異がある。

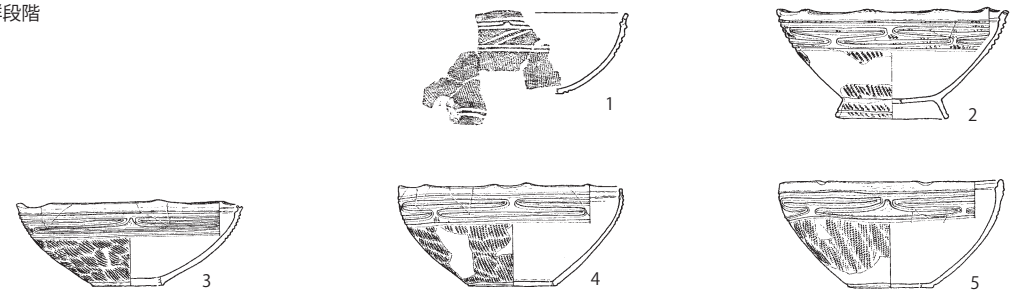
ｂ．細分の確認

以上の観点をもとに、土器型式変遷の詳細について述べる（第 61 図）。ただし、浅鉢や台付浅鉢、壺は比較的検討しやすい一方で、大型の深鉢などはどの時期に伴うものか判然としない部分があり、ここでは触れないこととした。

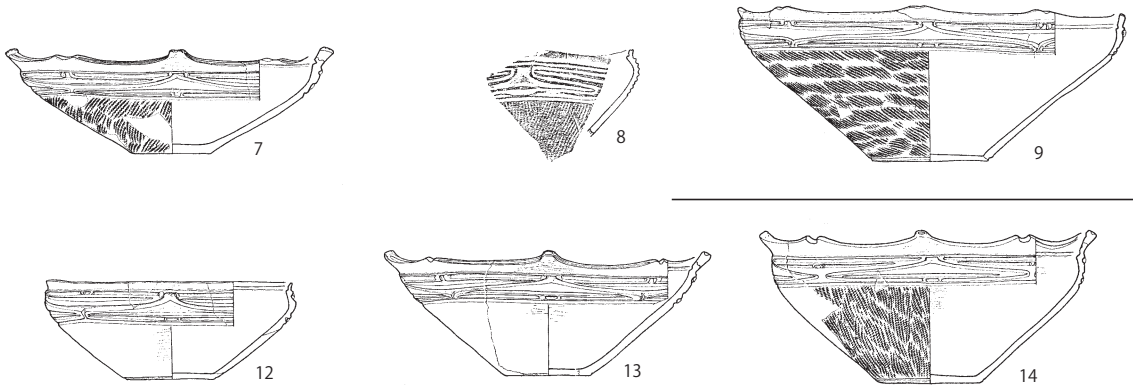
・八幡堂１群段階

個体番号 1・36・40・42・43・47・48・54 などが相当する。浅鉢では強く丸みをおびた器形、薄い器壁にやや砂礫の目立つ胎土が見られる。口縁部突起が文様の単位と対応しない位置にあるものも多く見られる。口縁部内面に粘土紐接合痕をのこすものが多い。

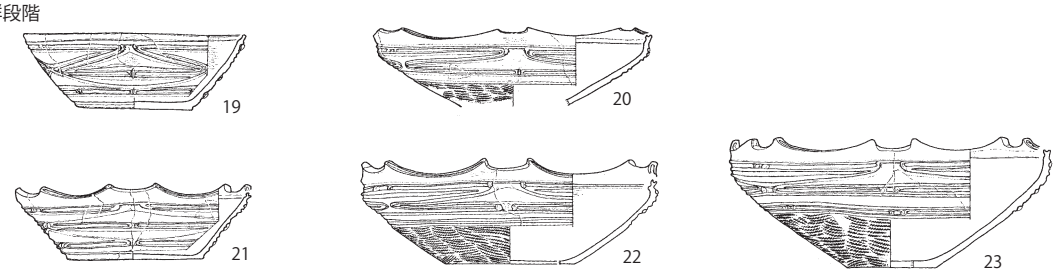
八幡堂１群段階



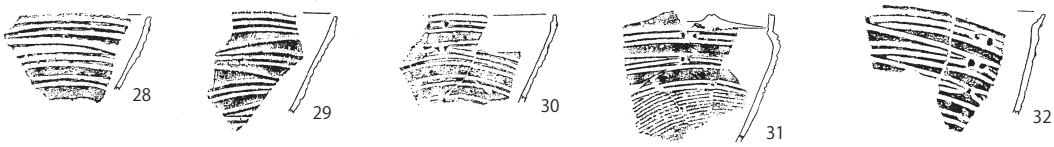
八幡堂２群段階



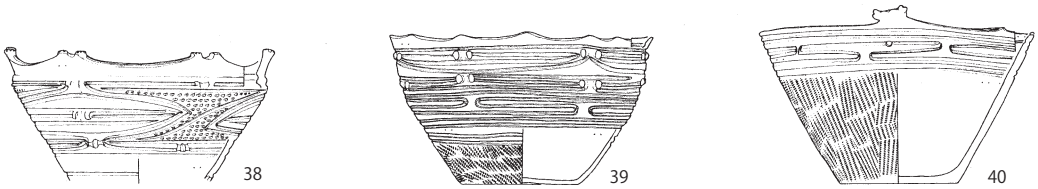
八幡堂３群段階



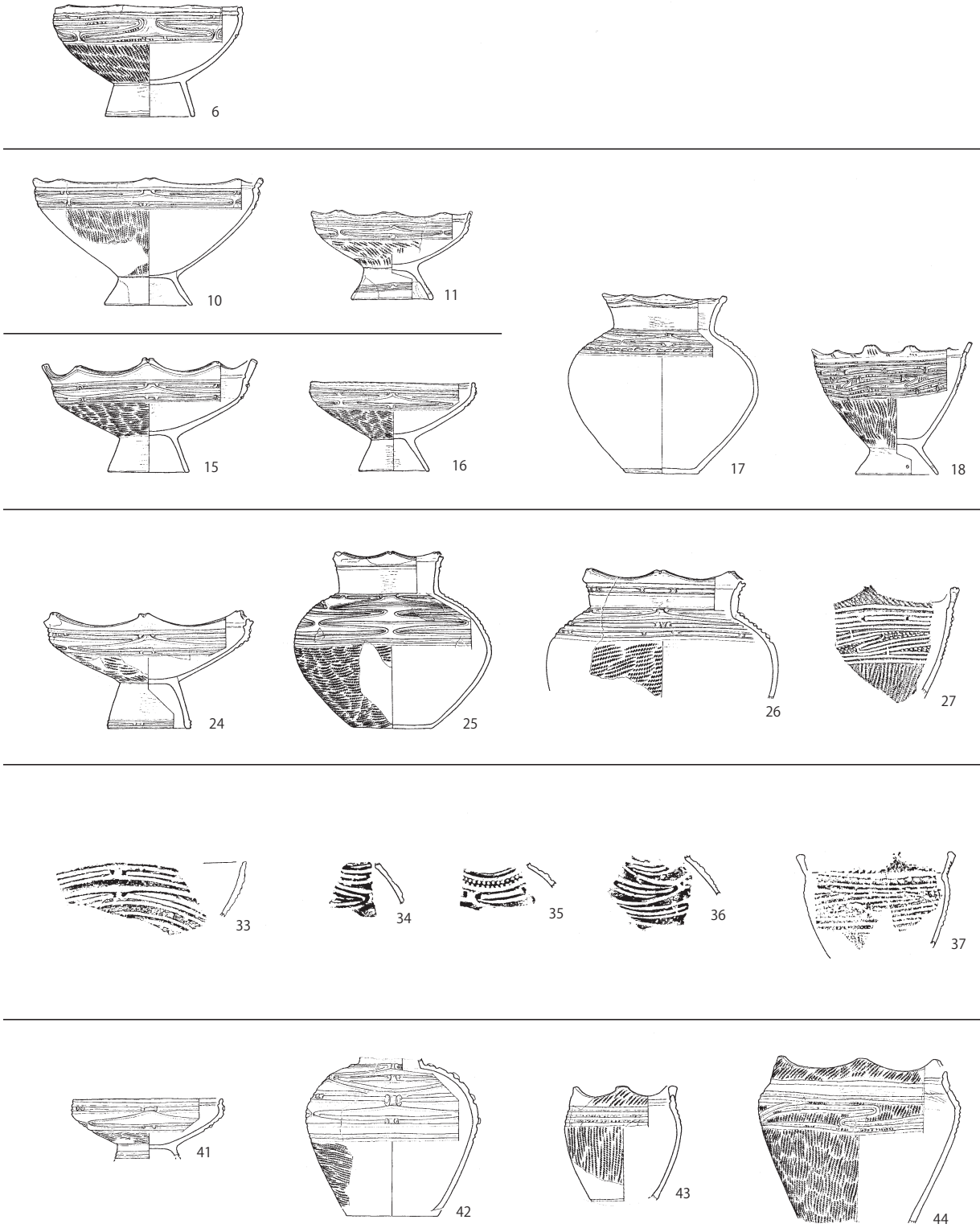
梨ノ木平段階



戸沢川代段階



第 61 図　下北地域における縄文晩期末～弥生前期土器型式変遷図



S＝1／6

（1～27：八幡堂遺跡　28～37：梨ノ木平遺跡　38～40：戸沢川代遺跡　41～44：江豚沢遺跡第２号竪穴住居址）

・八幡堂２群段階

個体番号３・４・６～12・15・16・18・20～22・41・44～46・59・61～69・93・94・97～99・103・107～111・117・118～120・128・130などが相当する。浅鉢、台付浅鉢、壺のいずれも４単位の口縁部突起と文様の交点・中点が対応する。浅鉢・台付浅鉢を見た場合、やや砂礫の目立つ胎土に相対的に細い沈線のａ類（第61図９・10・11）と、精良な胎土に相対的に太い沈線のｂ類（第61図７・８・12～17）に細別可能である。ａ類はｂ類と比較すると器高が大きく文様が幅狭で、沈線はやや曲線的なのにたいし、ｂ類は低平な器形をなし、沈線は直線的である。突起や粘土粒もｂ類のものが相対的に大きい傾向がある。こうした属性は２群ａ類と後述する３群の中間的な特徴を備えるものであり、型式学的に「2群ａ類→２群ｂ類→３群」の変遷も想定できる。

・八幡堂３群段階

個体番号17・19・24・25・71～85・100・101・104～106・116などが相当する。浅鉢、台付浅鉢、壺の全てで文様単位数が３、波状口縁の場合には内面沈線上端が曖昧に処理される特徴を示す群。浅鉢は平縁のものと、６単位の突起で口径・底径差の大きいものがある。口縁部突起、変形工字文の交点・中点の貼付粘土粒はいずれも２群よりも大きく、器面から明瞭に突出する。また、文様が器面全面に描かれるもの（第61図19・21）が含まれる点も２群と大きく異なっているが、文様の主線上下を彫去したものが含まれる点や変形工字文の交点に施される鋭い縦長の刺突など、両者に共通する属性も少なくない。無文部分を凹部にするものも多い。

・梨ノ木平段階

浅鉢、台付浅鉢、壺の全てで文様単位数が３。波状口縁の場合には内面沈線上端が曖昧に処理される特徴を示すものと、一般的な沈線が共存する群。浅鉢は平縁のものでは、口縁部が外側に屈曲して狭い平坦面をなすものも含まれる（第61図32）。壺では、胴部最大径付近まで幅広く変形工字文を描くものが多いようだが、資料数が少ないため詳細は判断が難しい部分もある。八幡堂３群と同じく、文様の主線上下を彫去したもの（第61図28・29）が含まれるほか、無文部分を凹部にするものもある。

・戸沢川代段階

浅鉢・台付浅鉢、壺の文様単位が３という点では八幡堂３群および梨ノ木平段階と同様だが、主線の上下を彫去した個体および「カルデラ突起」（矢島2000）が戸沢川代段階にないという型式学的差異がある。「カルデラ突起」の有無は口径・底径差の大きな波状口縁の浅鉢が後者にないことと関係している。変形工字文の特徴を比較すると、主線が梨ノ木平段階以前では交点に密接する例が多いのに対し、戸沢川代段階ではそのような個体の占める割合は少なくなるようだ。また、戸沢川代段階の土器群は変形工字文の中点、交点の粘土粒が相対的に大きく、複線変形工字文が多いことによって交点の処理がより縦長のものが多く含まれる。この二枚橋式に類似する特徴は、戸沢川代段階が二枚橋式に近接した年代的位置にあることを示唆しているものと考えている。

ここまで提示した分類は、実際には個体番号23・70のように口縁部内面沈線の形態では八幡堂２群と共通しながらも文様単位では八幡堂３群と共通するものなど、中間的な個体が存在する。ただし筆者はこうした点は分類の破綻を意味するものではなく、土器群そのものの強い連続性を反映したものと考えたい。

ｃ．層位事例

ここでは、前節で示した土器型式変遷案を出土状況の面から検討してみたい。ただし、下北地域では遺跡数が少ないうえに対象とする土器群が層位的に出土した事例が得られていないため、必要に応じて近接する津軽半島や津軽平野に位置する遺跡の事例を参考とする。

まず、八幡堂１群に関しては、下北地域では類似した土器群のまとまった出土は現在まで知られていないが、津軽半島の宇鉄遺跡Ⅱｂ層（葛西編1996）から出土した土器群が器形などで類似した特徴を示しており、Ⅱｇ～Ⅱｅ層に含まれる大洞Ａ式の上層に位置している。また、Ⅱab層（児玉・相馬2004）からは八幡堂２群に類似した土器群が出土しており、こうした事例が層位的に「大洞Ａ式→八幡堂１群→八幡堂２群」の型式変遷を傍証するものと考える。

八幡堂２群に相当する土器群は、下北半島では江豚沢遺跡（橘・山本1967）でややまとまって出土しているが、より新しいと考えられる例も混在している。現状では資料数が少ないものの、宇鉄遺跡Ⅱab層出土土器群をこの段階の層位的なまとまりと考えておく。

八幡堂３群に類似する土器群は、下北地域では現在まで単純な資料群が確認されていない。ただし、やや離れた津軽平野に位置する大曲遺跡出土土器群（木村1988）に類似する部分が多いようだ。梨ノ木平段階は、梨ノ木平遺跡（橘編1988・1990）の第２次調査、第３次調査でまとまって出土している。戸沢川代段階は、江豚沢遺跡２号竪穴床面や戸沢川代遺跡、大平(4)遺跡（東通村史編集委員会編1999）などで八幡堂１群・2群・３群、梨ノ木平段階および二枚橋式をまじえずに出土している。

ｄ．八幡堂遺跡の「土器集中」の評価

ここで、前節で示した編年観を基礎として、八幡堂遺跡の調査時に記録された「土器集中」に関して検討しておきたい。調査時の平面図・写真資料によれば、この土器集中からは 12・61・65・97・98・99・118・119・120・128・131・176・189 の 13 点が出土し、他に、一部が検出された状況の 109 が写真から確認できるほか、やや離れた部分から 11・146 が出土したことが判断できる。この土器群に含まれる土器の型式学的特徴は、いずれも八幡堂２群ｂ類とした土器群の型式内容に収まっており、壺の口縁部装飾なども強い斉一性を示している。こうした点から、この土器集中を八幡堂２群ｂ類の一括資料とみなすことも可能と思われるかもしれない。しかしながら、実際には同一の発掘区から出土した土器群の多くは出土位置が明らかではないうえ、出土位置が記録されていて「土器集中」に近接していたことが判明している個体には八幡堂３群と判断した個体（25）も含まれている。

以上のような状況を考慮すれば、調査時に検出された「土器集中」に対してここで一括資料としての積極的な評価を加えることは控えておきたい。

（2）文様変遷の理解

ａ．複線変形工字文の成立からみた文様変遷

ここで、前節でまとめた土器型式変遷を文様の変化という観点からまとめて筆者の見解を述べておきたい。

各段階の文様を比較してみると、文様の一部を彫りこんだもの（以下ではこの属性を「主線内彫去」と呼称する）が相対的に多い段階から少ない段階へと推移しており、大筋では先行研究で言われてきたような「浮線手法」から「沈線手法」への変化を追認しているように見える。しかし、胎土の特徴や口縁部内面沈線の形態から明らかに八幡堂２群～３群に対比される資料の中にも主線内彫去がある個体が少数ながら含まれている。これらを文様をもとに混在とみなす向きがあるかもしれないが、筆者は以下に述べるように、これらが完全な時期差にあるものではなく、主線内彫去が長期間にわたって存在したことを示すものと考えている。以下で、一例を挙げて説明を加えておきたい（写真 16 ～ 23）。

図示した土器のうち 40 および 41 を比較してみると、双方に主線内彫去が認められ基本的な文様構成では共通性が高いものの、40 はやや曲線的で鋭く細い沈線、口縁部内面の粘土紐接合面の露呈、薄い器壁から八幡堂１群に分類される。41 は、直線的で整った沈線や口縁部の強い屈曲、直線的な鉢部から八幡堂２群に属するものと考えられる。次に、71 は３単位と推定される口縁部突起の形態と口縁部内面沈線の特徴、変形工字文の交点に加えられる細く鋭い縦長の刺突から八幡堂３群に分類される。81 も３単位の変形工字文が全面に施文される点と、変形工字文の交点に加えられる細く鋭い縦長の刺突から八幡堂３群に分類される。

これらの文様を比較してみると、全ての個体で文様を描く沈線に流水状に展開する構成が認められ、40・41・71 ではその中に主線内彫去が加えられる点で共通性が高い。ただし、八幡堂３群の 71 では主線内彫去が端部に近づくに従って徐々に浅くなり沈線になっており、結果として変形工字文の端部は４条の沈線から構成されることになっている。同じく八幡堂３群に属する 81 は全体が沈線によって描出され、下段に施文される変形工字文と融合し、沈線は更に多く、71 とは一見すると別の系統にある文様類型のようにも見えるが、全体の構成には高い共通性がある。71 を介在させることで、81 のような文様が 40・41 のような主線内彫去のある文様から派生したものと推定することができるだろう。

81 の類例として、戸沢川代遺跡から出土した複線変形工字文の土器が挙げられる（第 61 図 38）。この個体は、先に示した文様変遷の解釈とはいわゆる補助単位文の有無が異なるものの、そのほかの部分はほぼ同様の変遷過程を経て成立したものと考えられる。類例は剣吉荒町遺跡出土土器群にもあり（第 57 図 96）、主線内彫去の部分が下段で半ば沈線化している例として解釈できる。これらの例の特徴は、複線変形工字文の個体に半単位ずれた多段構成が多く見られるという事実とも整合的である。

ただしここで重要なのは、先に示した型式学的変遷の推定は直ちに時期差として考えることはできないという点にある[4)]。仮に 71・81 の関係を時期差と考えれば、文様以外にみられる強い型式学的斉一性を説明するのが困難になるばかりでなく、前後の関係にある土器群との連続性という点で非常に複雑な説明を介在させる必要が生じることになってしまうだろう。

ｂ．「大洞 A2 式」土器の理解

文様の変遷を上記のように考えた場合、現状で広く認められている土器型式編年案である「大洞 A2 式→大洞 A′式」にかけての文様変遷の理解とは部分的に抵触してしまう。つまり、「大洞 A2 式」の標識とされている「変形匹字文」に相当する文様を特徴付ける属性の組み合せが八幡堂３群以降にも存在する点が問題になる。煩雑になるがやや詳しく述べる。

鈴木正博氏は「手法 A」（筆者の「主線内彫去」）、「手法 B」、および補助単位文から構成される「変形匹字文」と

変形工字文の関係を、補助単位文の欠落と「隆線手法」から「沈線手法」への年代的変化の過程として説明した（鈴木 1985・1987）。高瀬克範氏は、鈴木氏が「大洞 A′式古古段階」とした秋田県梨ノ木塚遺跡出土土器と共通する文様をもつ大洞貝塚出土土器を「大洞 A_2 式」に位置づけているなど部分的に違いがあるものの[5]、「浮線手法から沈線手法への変遷は層位的に動かしがたい」（高瀬 2004；29 頁）として、「大洞 A_2 式」と「大洞 A′式」の区分を文様の「沈線化」という仮説に依拠しておこなっている（高瀬 2000；67 頁）。

高瀬氏が指摘したような層位的な変遷は、主に剣吉荒町遺跡出土土器群などの分析を基礎として考えられてきた経緯がある。剣吉荒町遺跡の調査報告では、出土土器群は約 35cm の厚さをもちⅡ層・Ⅲ層に分層された包含層から出土したものの、層をまたいで接合する個体が多いことや畑作による撹乱の存在を考慮し、層位ごとの時期差の認定には慎重な姿勢がとられた（工藤 1984；4 頁）。その後、工藤竹久氏は層位ごとに文様類型の出土数を計数し、主線内削去のある文様（工藤氏による「変形工字文 A および変形工字文 B」）と沈線のみの文様（工藤氏による「変形工字文 D」）の量比が逆転することを見出し、それぞれの文様類型をもとに剣吉荒町Ⅰ群・Ⅱ群を設定して「砂沢式」の前に位置づけた。この編年は、現在に繋がる変遷観を形成した研究として評価される。

このような状況に対して筆者は、量比の比較の内容が「（筆者註・・・「変形工字文 A/B」が）下層では約 55% も占めるが、上層では 30%」で「（筆者注・・・「変形工字文 D」の）出土比率（下層約 35%、上層約 60%）と反比例している」（工藤 1987；44 頁）というものであることから、先学によって指摘されてきたような「浮線手法」から「沈線手法」への変化を量的比率の変化としては認めうるものと考えるが、前節で筆者が示した文様の変遷観を否定するものではないと考える[6]。文様の型式学的特徴からは、他にも、これらが中間形態をとるものが少ない点も「急速な沈線化」を考える根拠とする意見もあるが、この場合の「浮線」と「沈線」の区分は実際には主線内彫去の有無によっているため、中間的な形態は 71 のような限られた例しか存在しないものと考えたい。

このように文様に複数類型の並存を認める立場をとることに対して、これまでの型式編年に比べて個体ごとの位置づけがあいまいになってしまうと考える向きがあるかもしれない。また当然ながら、大局的な視点から見れば基本的な変遷観では先行研究の成果を大きく覆すような性格のものではないということもできる。しかし私見では、実際には下北半島を含む本州島東北部全域にわたってこの時期の土器型式編年を「文様の類型をもとに個体ごとに細別時期を言い当てるような形」で確立するのは難しいと予測しており、内面沈線や突起の形態といったより細かな属性との組み合わせという観点から一層の検討を進める必要があるものと考えている。

（3）周辺地域との編年対比

a．北海道島南部との編年対比

北海道島南部の渡島半島では、八幡堂 1 群～ 3 群、梨ノ木平段階と並行関係にあると考えられる土器は非常に希薄で、現在までまとまった資料が得られていない。戸沢川代段階に並行する土器群は、大野平野を望む七飯町国立療養所裏遺跡（石本ほか編 2000）からまとまった資料が得られている。この土器群を見てみると、鉢の頚部にみられる屈曲や眼鏡状隆帯から変化した貼付粘土粒、幅に対して浅い沈線などが下北地域から出土した土器群とよく類似している。この段階には大野平野周辺に下北地域とほぼ共通した土器群が分布していたものとみなして良いだろう。ただし、やや離れて噴火湾に面した森町では様相が異なり、鷲ノ木 7 遺跡から出土した深鉢（藤田登ほか編 2006；図Ⅲ－ 24．112）は、眼鏡状隆帯から変化したと考えられる貼付粘土粒や頚部無文帯など下北地域の土器群と類似した特徴が認められるものの、口唇部のキザミがやや上面に偏っている点や粗雑な成形は道央部以東の土器群に共通するように見える。この地域では未だまとまった資料が乏しくやや不確実ながらも、ひとまずこのように考えておきたい。

b．津軽平野地域との編年対比

津軽平野地域では、八幡堂 2 群は砂沢遺跡Ⅳ′下層出土土器群および牧野Ⅱ遺跡出土土器群（弘前大学考古学研究室 1981）に対比できる。また、矢島敬之氏により砂沢式に新古二段階細別の可能性が指摘されており（矢島 2000）、これが下北半島地域における「八幡堂 3 群」から「戸沢川代段階」の変遷案と共通する部分が多いものと考えている。ただし、矢島氏による複線変形工字文の編年的位置づけは下北地域で筆者が考えた変遷案と部分的に食い違う点があり、こうした点が地域差と認めうるか否かという点に、今後の検討が必要になってくるだろう。

c．本州島東北部中部との編年対比に関する問題点

本州島東北部中部では、山王囲遺跡の成果をもとにした「山王Ⅴ a-k 層出土土器群→山王Ⅳ下層式→山王Ⅳ上層式→青木畑式」の変遷案（須藤 1997 ほか）があるほか、九年橋遺跡で豊富な土器群が出土しており注目されてきた。

また最近では、金子昭彦氏によって金附遺跡から出土した土器群をもとにした土器型式変遷案も提示されている（金子 2007）。

ここで金子氏と須藤氏の編年案を比較してみると、主線内彫去のある個体の位置づけで意見が異なっている部分がある。筆者はこの点に関して、金附遺跡出土土器のうち金子氏によってⅠ群 c 類とされた土器群は沈線の形態や胎土、器形などでⅡ群とされた土器群と共通する要素が多い一方、九年橋遺跡から出土している同様の文様がある土器群とは型式学的な差異が大きいことを重視している。金子氏のⅠ群 c は主線内彫去と補助単位文を組み合わせた文様を指標とする、いわゆる「大洞 A2 式」とされてきた土器群であり、上記のようなⅡ群との型式学的共通性と九年橋遺跡出土土器との間に存在する差異は、北上川流域においても主線内彫去といわゆる補助単位文が金子氏らが考えるよりも長期間にわたって用いられ続けたことを示すものと考えている。金附遺跡ではⅠ群 c に分類された土器群は層位的にはⅡ群と分離できなかったことが記されていることは（金子 2007；145 頁）、この筆者の考えを傍証するものだろう。

下北地域との対比に関しては、山王Ⅴ a-k 層出土土器群が八幡堂 1 群に併行するものと考えられる。この段階の資料は九年橋遺跡 10 次・11 次調査出土土器群に多く含まれており、口縁部突起が文様と対応しない例が多く含まれるといった点にも高い共通性を示している。八幡堂 2 群に併行するのは山王Ⅳ下層式で、金附遺跡のⅠ群 c 類・Ⅱ群がこれに併行する一時期のまとまりをなすものと考える。続く八幡堂 3 群には山王Ⅳ上層式および金附遺跡のⅢ群 1 類が併行するものと考えている。

ここでこの変遷案に大洞貝塚 A′ 地点から出土した土器を対比してみると、大型鉢（中村 1988；図版 3-4）は山王Ⅳ上層式に位置付けられる（佐藤 2008）。主線内彫去のある台付浅鉢（中村 1988 図版 2-3）は大きく開く平坦な鉢部の器形とやや太くしっかりした沈線の調整から考えて、山王Ⅳ下層式に相当する時期に位置付けられるだろう。当該地域の編年にあたっては、「大洞 A′ 式」の範囲が関係して問題は複雑になるが、上記のように考えた場合、八幡堂 2 群および八幡堂 3 群、梨ノ木平段階が大洞貝塚 A′ 地点出土土器群と併行関係にある可能性がある。

（4）まとめ

ここまで、口縁部の形態や文様単位数、胎土の特徴などを基軸として下北地域における縄文時代晩期末から弥生時代前期へかけての土器編年の見通しを示すとともに、そこでの成果と先行研究との対比をおこなった。また、周辺地域との編年対比についても簡単に見通しを述べた。これまでの研究では文様の変遷を型式学的操作によって考え編年の基軸とする傾向が強かった。たしかにそのような検討によって土器型式変遷の大枠が明らかにされてきたことは間違いない。しかし、あらためて細かな属性を比較してみることで、これまで型式編年の指標とされてきた文様要素の組み合わせの中には、時期差ではなく他のものと共時的関係にあるものも含まれることをある程度明らかにしえたものと考える。

ただし、この時期の土器群は比較的出土量が多いにも関わらず明確な遺構に伴う例が少ないため、本稿でも遺跡を単位とした比較を行わざるを得なかった部分があり、ここで示した編年案が妥当なものか否かは出土状況の面からもなお一層の検証が必要になるものと考えている。

本研究は平成20年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費 20・3699）を受けて行なった成果の一部を含む。

註

1）いわゆる「江梁沢式（江豚沢式）土器」をめぐっては、その指し示す内容に混乱した部分が生じているため、やや長くなるがここで筆者の認識を整理しておきたい。「江梁沢式」は設定当初、「大洞 A′ 式に相当」し、「東北北部においては砂沢式と呼ばれる型式に該当するもの」とされた（橘 1977）。1967 年の時点では（橘・山本 1967）、1977 年には「大洞 A′ 式」と表記される部分が一貫して「大洞 A 1 式」とされている点は、誤植の可能性もある。本州島東北部では砂沢式の設定当初から、大洞 A′ 式との関係をめぐって地域差とみるか年代差と見るかに議論があったが（芹沢 1960、江坂輝弥 1968b）、先に引用した「江梁沢式」設定当初の記述からは、橘氏はこれらを地域差にあるものと考えていたと判断できる。その後、砂沢式土器が大洞 A′ 式の新段階に並行、ないし後続するという意見（工藤 1987 ほか）が強まった段階では、「江梁沢式」が砂沢式と併行するという意見は既にとられなくなっており、型式名そのものも使用されなかった（橘 1994）。その後、福田正宏氏は砂沢式併行期の下北半島の地域性を指摘するため、「江梁沢式」を再設定した（福田 2000）。品川欣也氏は福田氏に従う形で「江豚沢式」の型式名を使用し（品川 2002）、後には「大洞 A′ 式に平行する土器群を江豚沢式」とした（品川 2005）。その際、「江梁沢遺跡出土土器群は大洞 A′ 式併行の土器群であるが、橘氏は砂沢式併行期の土器群を江豚沢式と呼んでいた」ために「前稿では砂沢式併行期の土器群を江豚沢式と呼んだ」が、「不覚にも橘氏が江豚沢式を大洞 A′ 式併行期へ改めていたことをその後知った」（品川 2005；34 頁）ことを型式名変更の根拠とした。ただし、冒頭に引用した橘氏の記述とその後の経緯を振り返れば、この部分に関して品川氏には学史面の誤解がある。福田正宏氏はその後、下北半島も巨視的には砂沢式の分布圏とみることができるとして「江豚沢式」の名称を撤回した（福田 2007；71 頁）。筆者もかつて江

豚沢遺跡の調査概要報告の中でこの型式名称に従ったことがあるが（高瀬編 2004）、その後、撤回した（大坂 2006）。本稿の編年観から見れば、橘氏が調査した江豚沢遺跡出土土器群には八幡堂 2 群段階が多いものの、八幡堂 3 群から戸沢川代段階も含まれている。また、最近の再調査では二枚橋式も出土しており（高瀬編 2007）、江豚沢遺跡そのものの年代は広域編年上の弥生時代中期まで及ぶことが明らかになっている。

2）本稿に先立って、2008 年 7 月 5・6 日に青森県で行われた第 6 回海峡土器編年研究会において、八幡堂遺跡出土土器群の編年について発表している（大坂 2008）。ただし、その後の検討によって個体の位置づけなどに認識を変更した部分があるため、土器型式編年についても本稿をもって筆者の現在の認識としたい。また、用語も若干あらためた部分がある。

3）以下の型式細分においては、八幡堂遺跡出土土器群のうち、胎土に金雲母を含んだり沈線の特徴的な形態から、下北地域以外からの搬入品と考えられる資料を除外して検討を進める。こうした判断に関しては事実記載篇の観察表を参照していただきたい。

4）こうした複線変形工字文の成立過程そのものは、既に田部井氏らによって言及されてきた（田部井 1993;103 頁）。しかし筆者は、こうした文様が時期差ではなく、長期間にわたって併存していた可能性が多くの先行研究では十分に考慮されてこなかった点に問題があると考えている。

5）鈴木氏が「大洞 A′式古古段階」の指標とした秋田県梨ノ木塚出土土器の文様は（鈴木 1985・1987）、大洞 A 式期に成立し壺や浅鉢に多用された後に大きな変化を経ずに用いられ続けた文様で、そのままの構成で変化して最終的に 16 のような隆線変形工字文に連続するものもあると考えている。この文様が鈴木氏のいう「変形匹字文」からの変化によって成立したとは考えにくい。

6）剣吉荒町遺跡の出土状況については、中村五郎氏が既に筆者と同様の見解を示している（中村 1988；145-148 頁）。

引用・参考文献

青森県教育委員会　1974『今別町浜名遺跡・中宇田遺跡・西田遺跡・五郎兵衛山遺跡・五所川原市原子溜池遺跡群発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査調査報告書第 13 集

青森県教育委員会　1982『下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 71 集

青森県史編さん考古部会　2005『青森県史 資料編 考古 3』青森県史友の会

石本省三ほか　2000『国立療養所裏遺跡』七飯町教育委員会

伊東信雄・須藤隆　1982『瀬野遺跡』東北考古学会

江坂輝弥　1951「青森県下北郡田名部奥内江豚沢遺跡」『貝塚』47　218-219 頁

江坂輝弥　1968a「本州最北端の弥生遺跡　八幡堂遺跡」『月刊考古学ジャーナル』No.24　ニューサイエンス社　巻頭

江坂輝弥　1968b「7. 下北半島における縄文文化の終末とその直後の文化」『日本考古学協会昭和 43 年度大会』 6 頁

大坂　拓　2006「第 3 節 出土遺物 1. 土器」高瀬克範編 2006『青森県むつ市江豚沢遺跡発掘調査概報（2005 年度）』江豚沢遺跡調査グループ　30-52 頁

大坂　拓　2008「下北地域の集成と諸問題」『弥生時代における砂沢式土器の諸問題－資料集－』海峡土器編年研究会　51-78 頁

大坂　拓・福田正宏　2005「尾白内貝塚の続縄文土器について」『北海道考古学』41　91-100 頁

葛西　勵編　1991『戸沢川代遺跡発掘調査報告書』川内町教育委員会

葛西　勵編　1996『宇鉄遺跡』宇鉄遺跡発掘調査会

葛西　勵・高橋　潤編　1990『撚糸文』21　青森県山田高等学校考古学研究部

金子昭彦　2007「大洞 A′式から青木畑式へ」『縄文時代』第 18 号　縄文時代文化研究会　145-178 頁

木村鉄次郎　1988「西津軽郡鰺ヶ沢町大曲遺跡発掘調査報告」『青森県立郷土館年報』13

工藤竹久　1978「東北地方における弥生時代の諸問題」『北奥古代文化』10　北奥古文化研究会　43-52 頁

工藤竹久　1987「東北北部における亀ヶ岡式土器の終末」『考古学雑誌』第 72 巻第 4 号　日本考古学会　39-68 頁

工藤竹久　2005「第 2 章第 2 節　青森県の弥生土器」『青森県史 資料編 考古 3』青森県史友の会　14-21 頁

工藤竹久編　1999『東通村史―遺跡発掘調査報告書編―』東通村

齋藤瑞穂・福田正宏　2003「縄文／弥生移行期の下北半島に関する一考察」『北方探求』第 5 号　北方談話会　26-49 頁

佐藤祐輔　2005「砂子田遺跡が投げかける問題」『山形考古』第 8 巻第 1 号　1-32 頁

佐藤祐輔　2008「変形工字文覚書－変形する工字文と変形する変形工字文－」『地域と文化の考古学Ⅱ』六一書房　75-90 頁

品川欣也　2002「砂沢式土器の型式学－北日本先史時代史の再構築に向けて－」『駿台史学会発表要旨』

品川欣也　2005「4. 砂沢式土器の細分と五所式土器の位置づけ」『科学研究費補助金基盤研究 B2 関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年』石川日出志編　31-42 頁

鈴木正博　1985「「荒海式」生成論序説」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学出版会　83-135 頁

鈴木正博　1987「続大洞 A2 式考」『古代』第 84 号　早稲田大学考古学会　110-133 頁

須藤　隆　1970「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』第 56 巻第 2 号　日本考古学会　10-65 頁

須藤　隆　1987「東日本における弥生文化の成立と展開」『弥生文化の研究』第 4 巻　雄山閣　201-216 頁

須藤　隆　1997「東北地方における弥生文化成立過程の研究」『歴史』第 89 号　東北史学会　44-82 頁

須藤　隆　1998『東北日本先史時代文化変化社会変動の研究』纂集堂

高瀬克範　2000「東北地方における弥生土器の形成過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』83　61-95 頁

高瀬克範　2004『本州島東北部の弥生社会誌』六一書房

高瀬克範編　2006『青森県むつ市江豚沢遺跡発掘調査概報（2005 年度）』江豚沢遺跡調査グループ
高瀬克範編　2007『青森県むつ市江豚沢遺跡発掘調査概報（2006 年度）』江豚沢遺跡調査グループ
高瀬克範・福田正宏・品川欣也・齋藤瑞穂・根岸洋・大坂拓　2004『江豚沢遺跡発掘調査概報　2003 年度』
橘　善光　1970「青森県佐井八幡堂の弥生土器について」『北海道考古学』第 6 輯　北海道考古学会　39-45 頁
橘　善光　1977『下北の古代文化』下北の歴史と文化を語る会
橘　善光編　1978「大川目遺跡」『むつ市文化財調査報告』第 5 集
橘　善光編　1988「梨ノ木平遺跡第 2 次発掘調査報告」『むつ市文化財調査報告』第 12 集
橘　善光編　1990「梨ノ木平遺跡第 3 次発掘調査報告」『むつ市文化財調査報告』第 16 集
橘　善光編　1996『むつ市史　原始・古代・中世編』むつ市
橘　善光・山本一雄　1967「青森県むつ市江豚沢遺跡調査概報」『うそり』4　17-23 頁
橘　善光ほか編　2001　『二枚橋 (2) 遺跡発掘調査報告書』大畑町文化財調査報告書第 12 集
田部井功　1993「大洞 A_2 式に関する覚書」『古代』第 95 号　早稲田大学考古学会　89-113 頁
中沢道彦　1991「氷式土器をめぐる研究史（一）」『信濃』第 43 巻第 5 号　信濃史学会　71-89 頁
中村五郎　1982『畿内第Ⅰ様式に並行する東日本の土器』
中村五郎　1988『弥生文化の曙光』未来社
奈良国立文化財研究所　1999『岩手県足沢遺跡資料　山内清男考古資料 10』
東通村史編集委員会　2003『東通村史　歴史編Ⅰ』東通村
弘前大学考古学研究室　1981「牧野Ⅱ遺跡出土遺物について（1）」『弘前大学考古学研究』創刊号　35-45 頁
福田正宏　2000「北部亀ヶ岡式土器としての聖山式土器」『古代』第 108 号　早稲田大学考古学会　129-158 頁
福田正宏　2007『極東ロシアの先史文化と北海道』北海道出版企画センター
藤田登・佐藤稔・本山志郎・山田あや子編　2006『鷲ノ木 7 遺跡』森町教育委員会
矢島敬之　2000「津軽・砂沢式直後土器雑考」『村越潔先生古希記念論文集』　弘前大学教育学部考古学研究室 OB 会　113-137 頁
山内清男　1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第 1 巻第 3 号　139-157 頁

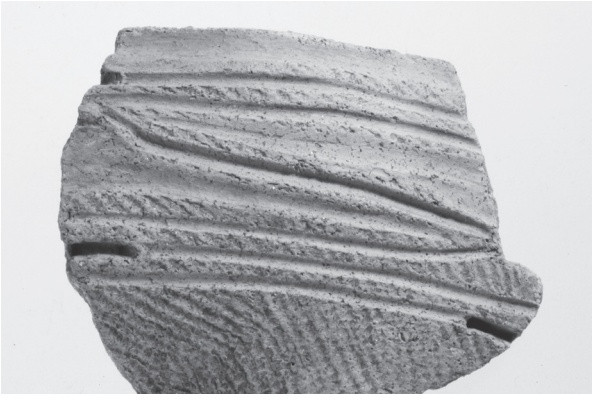


写真 16　No.40（口縁部外面）

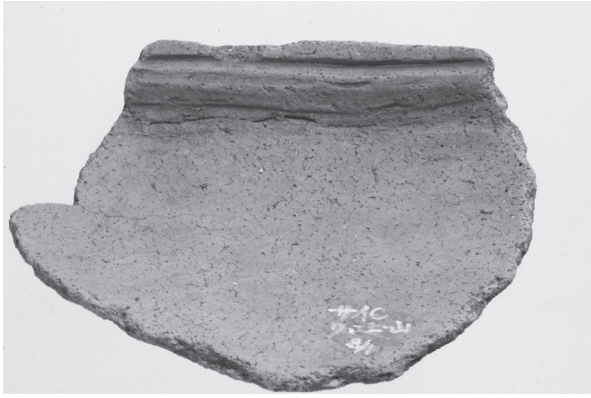


写真 17　No.40（口縁部内面）

写真 18　No.41（口縁部外面）

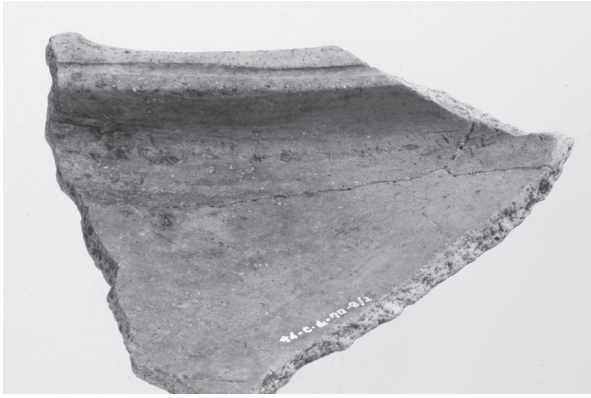


写真 19　No.41（口縁部内面）

写真 20　No.71（口縁部外面）

写真 21　No.71（口縁部内面）

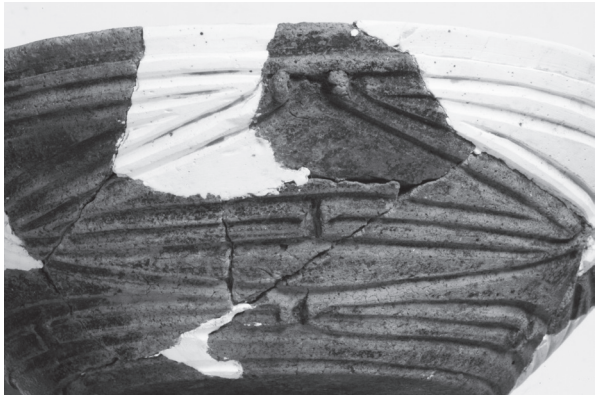


写真 22　No.81（口縁部外面）

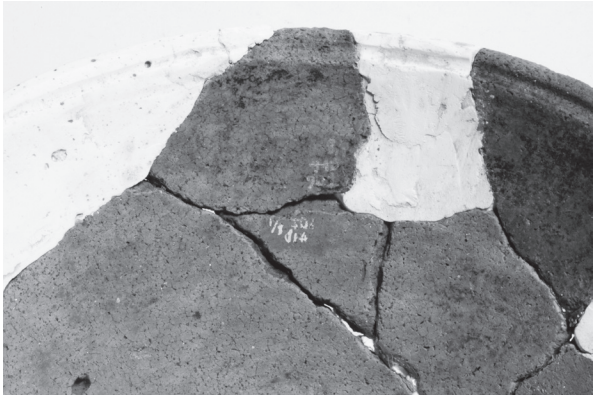


写真 23　No.81（口縁部内面）

写真 24　No. 1（口縁部外面）

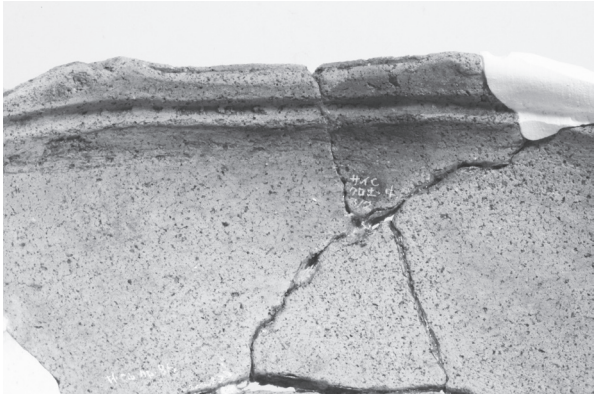


写真 25　No. 1（口縁部内面）

写真 26　No.11（口縁部外面）

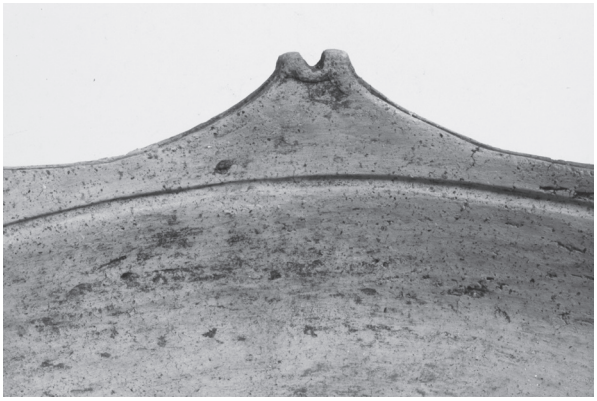


写真 27　No.11（口縁部内面）

写真 28　No.12（口縁部外面）

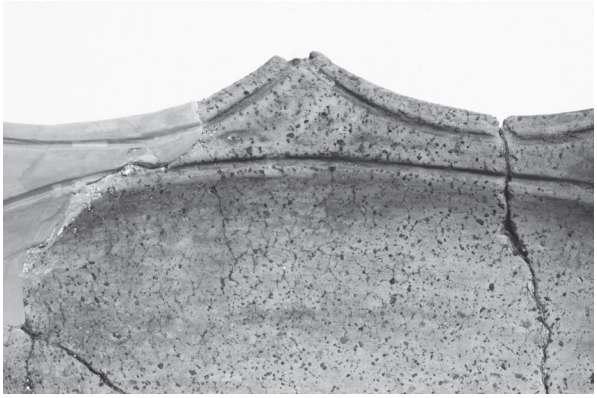


写真 29　No.12（口縁部内面）

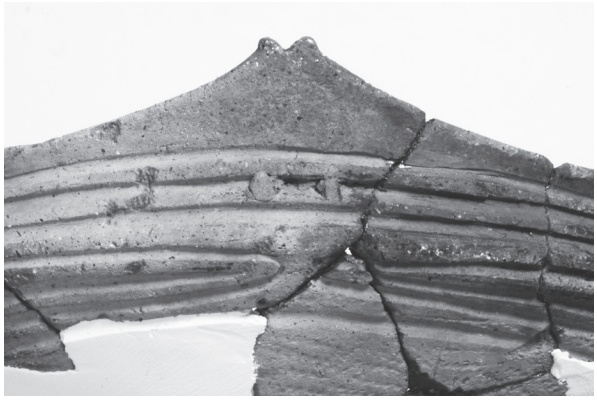


写真 30　No.24（口縁部外面）

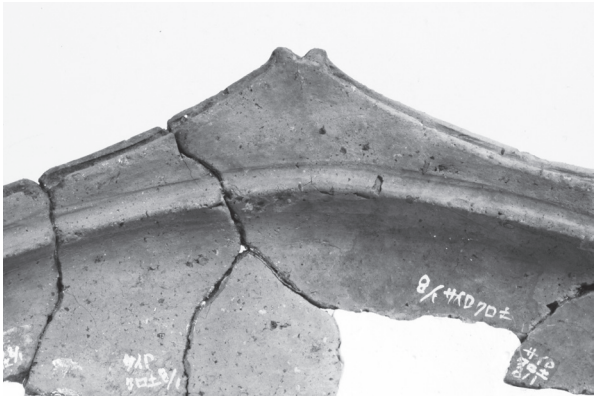


写真 31　No.24（口縁部内面）

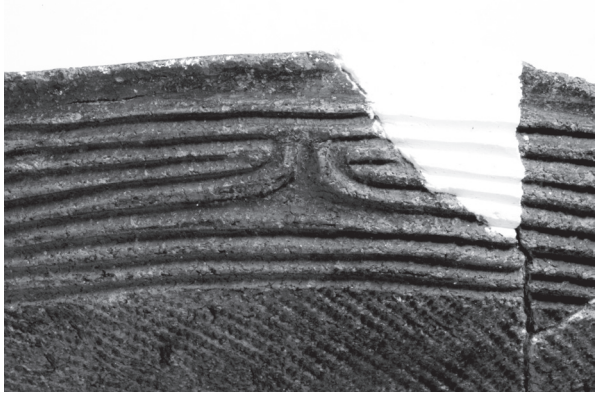


写真 32　No.36（口縁部外面）

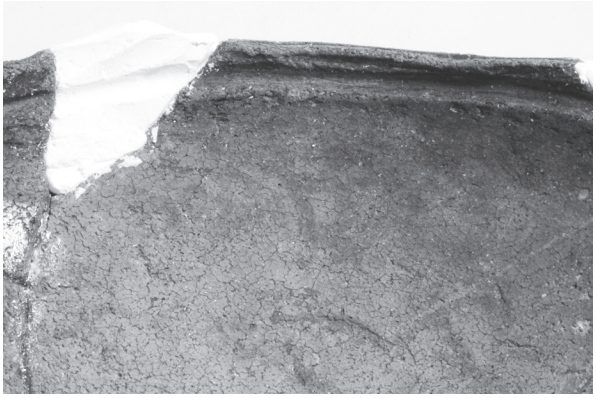


写真 33　No.36（口縁部内面）

写真 34　No.47（口縁部外面）

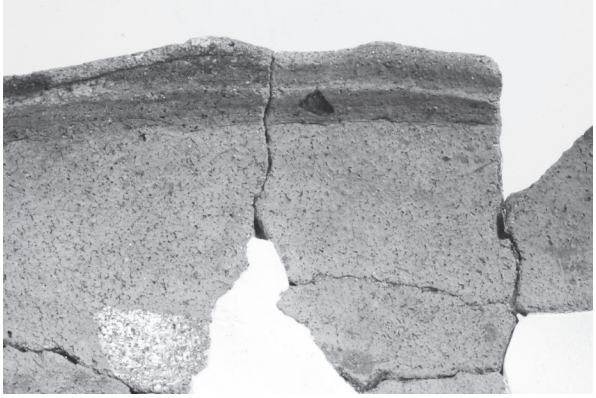


写真 35　No.47（口縁部内面）

写真 36　No.66（口縁部外面）

写真 37　No.66（口縁部内面）

写真 38　No.68（口縁部外面）

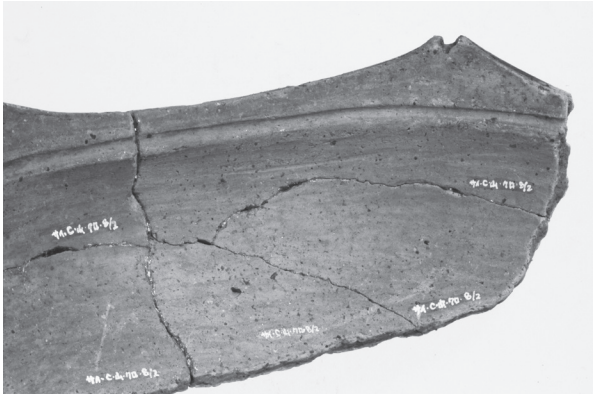


写真 39　No.68（口縁部内面）

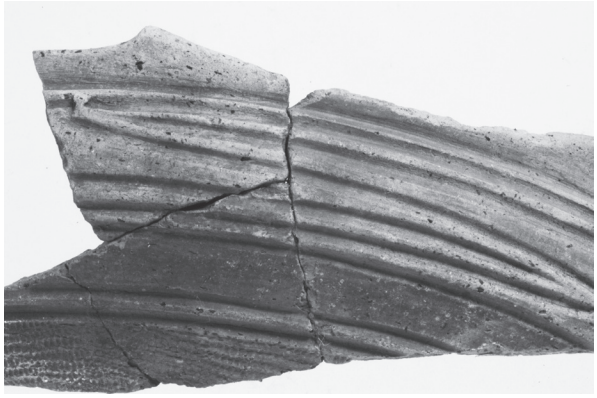


写真 40　No.70（口縁部外面）

写真 41　No.70（口縁部内面）

写真 42　No.72（口縁部外面）

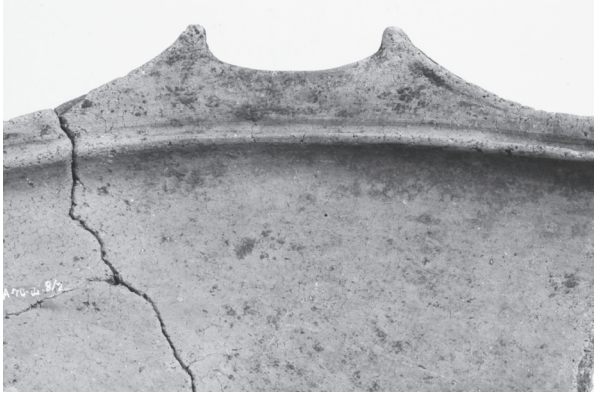


写真 43　No.72（口縁部内面）

写真 44　No.74（口縁部外面）

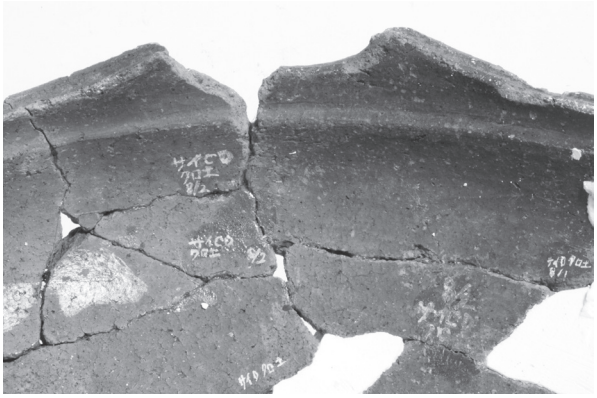


写真 45　No.74（口縁部内面）

写真 46　No.83（口縁部外面）

写真 47　No.83（口縁部内面）

３．剣吉荒町遺跡出土の類遠賀川系土器について

櫻井はるえ

（1）剣吉荒町遺跡出土の類遠賀川系土器

a．用語の定義と対象資料の抽出方法

ここでは、剣吉荒町遺跡出土土器の中でも遠賀川系要素をもつ土器群を抽出し、その特徴と位置づけについて確認していきたいと思う。

本論に入る前に、用語の定義と資料の抽出方法について確認する。

これまで、東北地方の遠賀川系要素をもつ土器については様々な名称が用いられてきた。東海地方以西と同じく「遠賀川系土器」と呼ぶ場合に加え、「折衷型」や「模倣型」（須藤 1992）、「擬似」（青森県立郷土館 1988）などの言葉を頭につける場合が多い。各研究者とも、在地系土器との融合が顕著である点が東北地方の遠賀川系要素をもつ土器群の大きな特色であると考えているようだ。しかしながら、「折衷」といった用語は内容が非常に曖昧で研究者によってその使用の仕方が大きく変わってしまう可能性がある。高瀬克範氏はそうした問題を踏まえ、東北地方においては「遠賀川系土器の特徴が要素に分解されて取り入れられており、在地系土器を駆逐することもない」点を重視し、搬入品としての「遠賀川系（遠賀川式を含む）」と「遠賀川系要素が取り入れられているが在地で製作された「類遠賀川系土器」」を区別している（高瀬 2000b）。

用語の定義、使用方法については再検討の余地があるが、本論では高瀬氏の定義に従い、遠賀川系要素を取り入れつつも在地で製作されたと考えられる土器については「類遠賀川系土器」と呼称することとする。また、それ以外の遠賀川系要素が取り入れられていないと考えられる土器については、便宜的に「在地系土器」として一括する。

対象となる資料については、壺、甕それぞれ以下に述べる基準をもって抽出した。

壺は、胴部中央からやや上方に屈曲をもち、頸部から口縁部にかけて外反する器形のもののうち、

①胎土に砂粒を多く混和しているもの。

②頸部や胴部に段、削出突帯、沈線、列点等の区分文様をもつもの。

③凹凸の明瞭な板ナデ痕 (＝ハケメ) を有するもの。

の３つの条件の内いずれか１つ、もしくは複数が認められたものについて、遠賀川系要素が取り入れられている壺として抽出した。

甕については、頸部に屈曲をもち、口縁が外反する深鉢形土器のうち、

①胎土に砂粒を多く混和しているもの。

②凹凸の明瞭な板ナデ痕 (＝ハケメ) を有するもの。

③口唇部に刻み、もしくは縄目を有するもの。

④頸部に沈線数条、もしくは列点を有するもの。

の４つの条件の内いずれか１つ、もしくは複数が認められたものについて、遠賀川系要素が取り入れられている甕として抽出した。

b．壺の特徴　（第 49 図～第 50 図）

・胎　土

筆者が類遠賀川系土器と認めた壺 16 点（１～９、13～18、20、23）のうち、砂粒の混和が多い、もしくはやや多いと認められたのは８点であった。ほとんどの胎土中には在地系土器と同じく海綿骨針が認められる一方、金雲母が含まれているものはなかった。

・器形・法量

完形のものは１個体のみであり、器形全体の様子がわかるものは少ない。口頸部はあまり外反しないものが多く、直口に近いものもみられる（９）。最大径の位置は胴部の中ごろか、やや上方にあり、「く」の字形に張り出す形となる。

径が出せるものが限られているが、法量としては胴部最大径 17 ～ 21cm 程、底径６～ 10cm 程、器高 20cm 前後のものが多いと言える。比較的小型のものが多いが、水平方向の湾曲が非常に弱い 13・17 のような破片もあることから、大型のものもある程度は存在したと考えられる。

・成・整形手法

成形手法を知り得る情報は少ないものの、輪積み痕の観察ではいずれも在地系土器と同じく内傾接合によって成形されていることが確認された。

外面はいずれもミガキ調整である。ミガキの単位が観察できるもののほとんどは幅 1mm から 1.5mm 程の細い横ミガキであった。また、文様の特徴とも関わってくるが、７の頸部破片のように、ミガキ前にハケによって段を作り出す成・整形の痕跡があるものが存在することには注意したい。

内面の調整もほとんどが横ミガキである。ミガキ前にハケやケズリによる調整を行った痕跡が残るもの (８・９) や、ハケ調整のみで仕上げられているもの (18・23) も認

められる。

・文　様

文様が加えられるのは、口唇部、頸部、胴部の３ヵ所である。

まず口唇部についてだが、口縁部が残存している５点のうち、口唇部に沈線が加えられるものは１点のみである(3)。頸部が残存していたのは５点で、沈線を２条めぐらすものが多い。前述したように、ハケによって弱い段を作り出したものもみられる（6）。

胴部が残存しているのは６点で、無文のもの、沈線が１～３条めぐるものがある。その中で注目するべきは、13及び14・15の胴部破片である。非常に小さな破片ではあるが、ハケを用いて段もしくは削出突帯を作り出し、その上には１～２条の沈線が施されている。これらは破片が小さく傾きや器形に不明な点が多いものの、６の頸部破片とともに西日本の遠賀川系土器の手法をよく残した貴重な資料だと言える。

c．甕の特徴　（第51図～第54図）

・胎　土

甕32点（26～51、53、55～59）の内、砂粒の混和が多い、もしくはやや多いと判断されたものは22点である。ほとんどが海綿骨針を含むなど在地系土器の胎土と共通し、壺と同様、金雲母を含むものはみられない。

・器形・法量

底部から胴部にかけて、直線的に開くものと、やや丸みをおびるものがみられる。頸部に括れをもち、口縁が外反する点は共通しているが、その度合いは様々で、ほとんど外反しないものもある（35・37・43）。

また、口径と胴部最大径に大きな差はないものの、口径の方が胴部最大径より若干大きいものが多い。これらは口径を胴部最大径が上回るものよりも、比較的遠賀川系要素の変容が小さいことも注目される[1)]。

法量としては、口径20～26cm程のものが多いが、14～16ｃｍの小型のもの、30cmを超える大型のものも少数ある。底部から口縁部まで残存しているものが無いため確実なことは言えないが、比較的残りの良いものの残存高から推測すると、器高は25～35cm程のものが多かったと考えられる。

・成・整形手法

輪積みの痕跡が確認できたものはいずれも内傾接合であった。

頸部の調整はヨコナデが最も多く24点中19点で、内4点には口縁を外反させるため、ヨコナデ前にハケを用いて整形している痕跡が認められた（27・30・40）。その他少数ではあるが、ハケメのみのもの、横方向にミガキを施しているものなどがある（37・51）。

内面の調整については、ハケメのみが１点（28）、ミガキが21点であった。その内７点はミガキの前にハケ調整を施していることが確認された。ミガキの単位は幅２ｍｍ前後で、口頸部から胴部上半にかけては横方向、それより下は縦方向に磨いているものが多い。こうしたミガキの特徴は在地系の大型深鉢とも共通する。

・文　様

胴部の地文の他に、口唇部と頸部に文様が施される。

口唇部については、口縁が残存している23点の内、刻みを施すものが最も多く14点確認されている。その他、縄文を転がすものが５点、無文のものが４点ある（26・31）。

頸部の文様は残存している22点の内、沈線を１～３条めぐらすものが最も多く13点ある。次いで沈線間に列点を施すものが７点認められる。無文のものは少なく２点のみである。

胴部の地文は縄文（LR）が最も多く、21点。内９点は縄文施文前にハケ調整をした痕跡が認められる。また、ハケメのみで仕上げているものも５点ある（26～29・32）。

施文のパターンとしては、

(頸部縦ハケ⇒胴部ハケ⇒)口頸部ヨコナデ⇒沈線、列点⇒縄文

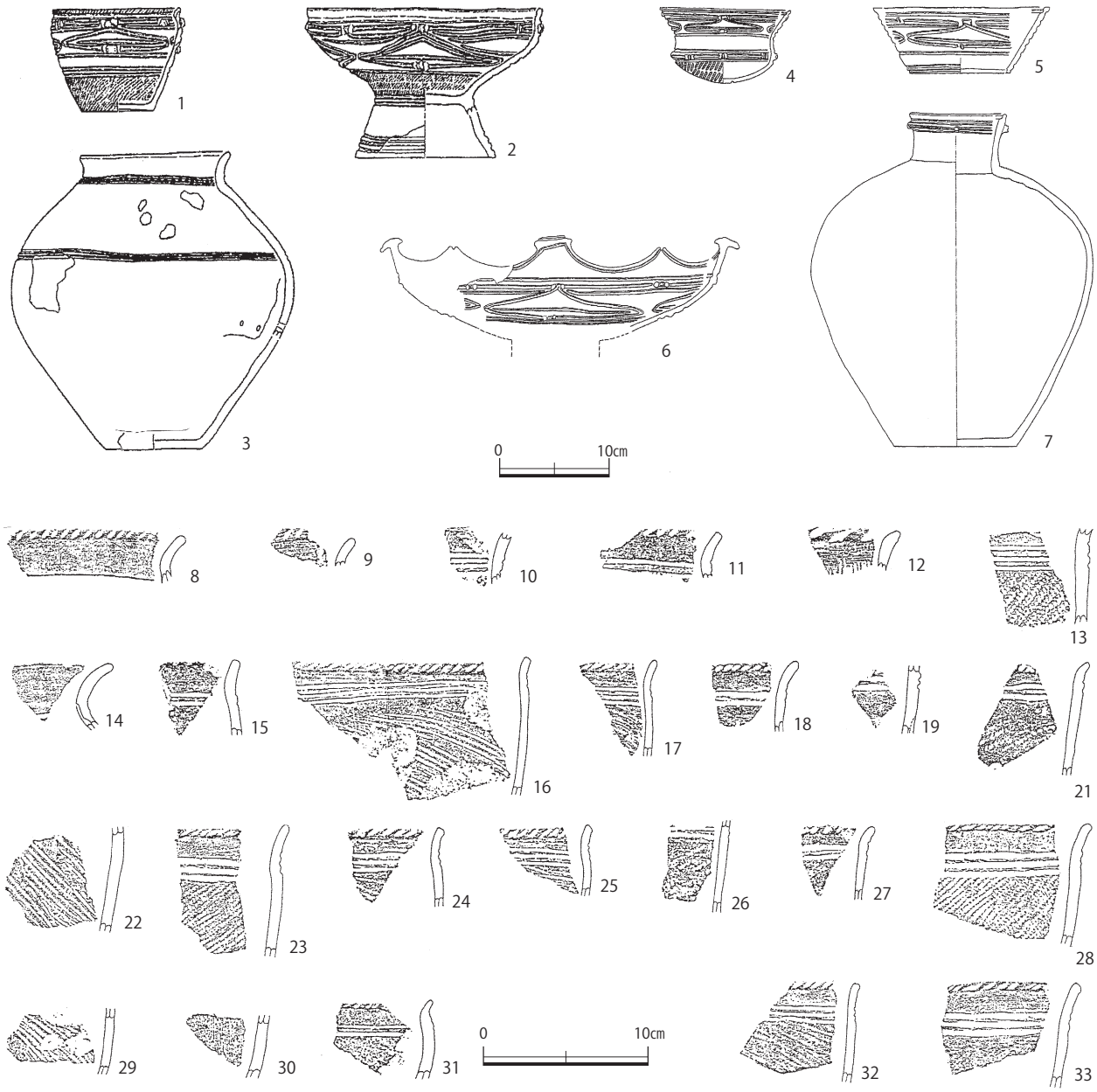
のものが一般的だと言える。

d．剣吉荒町遺跡出土類遠賀川系土器の特徴

剣吉荒町遺跡出土の類遠賀川系土器の特徴をみると、遠賀川系要素があまり大きく変容しない状態で存在しているということが指摘できる。特に、少数ながら壺に段もしくは削出突帯に類似した手法がみられる点、壺・甕ともにハケが多用され、甕の胴部地文がハケメのみのものがある点、甕の口唇部などに在地系要素である縄文を施文している例が少ない点などには注意しておきたい。

また、壺は比較的小型のものが多く、土坑一括の資料１点を除いて沈線間列点がみられないことも特徴である(第62図３)[2)]。同様のことは甕についても言え、名川町教育委員会・青森県郷土館調査地点出土資料の甕頸部に列点がみられない他（第62図８～33）、慶應義塾大学調査地点においてもその数は比較的少ない。

甕には器形や胎土が在地系土器に近いもの、頸部にミガキが施されるなど、遠賀川系要素が変容したものもみられる。また、在地系深鉢の中にも頸部にヨコナデを用いるものが数点みられるなど、在地系要素と遠賀川系要素の融合も若干生じていると考えられる。しかし、胎土・器形・文



第 62 図　剣吉荒町遺跡出土土器
（1～3：個人蔵、　4～7：青森県立名久井高校所蔵資料、　8～33：青森県立郷土館調査分）

様など、総体的にみて在地系と類遠賀川系はかなり厳密に区別されていると言える。

次に、剣吉荒町遺跡出土の類遠賀川系土器がどのような在地系土器と共伴しているかを確認したい。

資料報告にもあるように、慶應義塾大学調査地点ではごく少量の大洞 A_1・A_2・A' 式期のものがみられるが、主体を占めるのは砂沢式である。

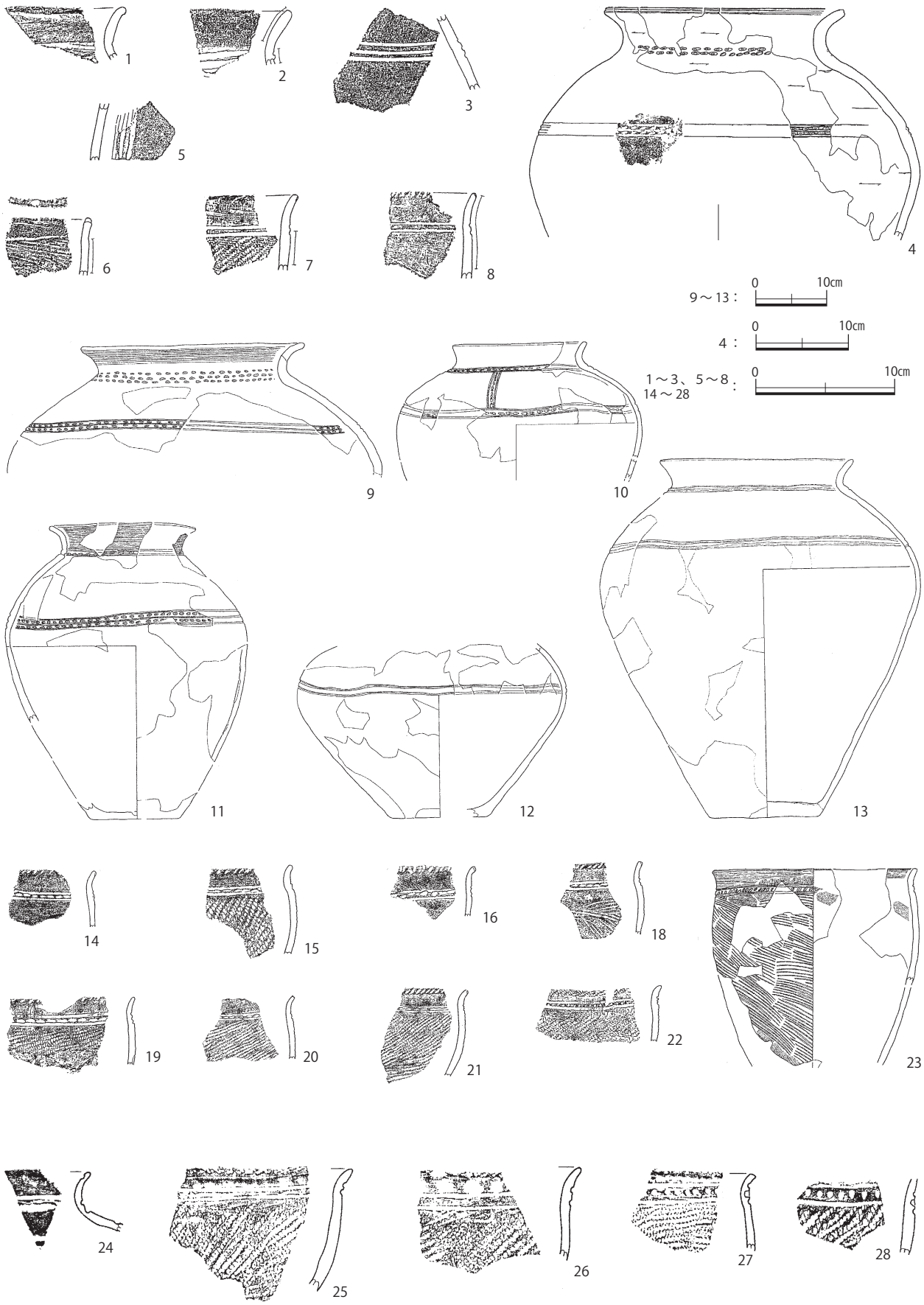
青森県立郷土館の調査では B・F0・F1・G・I・J 区から類遠賀川系土器が出土したと報告されている[3)]。これらの地区からは砂沢式土器が一定量出土している。逆に、大洞 A2・A' 式のみが出土している A ～ E 区及び名川町教育委員会調査地点出土分には類遠賀川系土器が含まれていない。こうしたことから、剣吉荒町遺跡出土の類遠賀川系土器は砂沢式に共伴する可能性が極めて高い[4)]。

ただし、名川町教育委員会調査地点出土の大洞 A_2・A' 式土器を観察すると、木目の凹凸がはっきりしない板ナデ痕や砂粒の混和など、砂沢式期の類遠賀川系土器に継承されうる要素も認められることには注意したい。

（2）東北地方における類遠賀川系土器のあり方と馬淵川・新井田川流域の位置づけ

a．馬淵川・新井田川流域における類遠賀川系土器の特徴

剣吉荒町遺跡以外にも、是川遺跡、松石橋遺跡、荒谷遺跡、畑内遺跡など、馬淵川・新井田川流域では、類遠賀川



第 63 図　是川遺跡出土土器
（1 ～ 23：是川中居遺跡、 24 ～ 28：是川堀田遺跡）

系土器の出土が確認されている遺跡が多くある。ここではそれらの遺跡から出土した類遠賀川系土器の型式学的特徴と在地系土器との関係性について確認していきたい。

・是川遺跡（第 63 図）

是川中居遺跡出土土器には縄文時代晩期終末の土器群が含まれているが、主体をなしているのは 1980 年調査分、G 区出土土器ともに砂沢式である。是川堀田遺跡出土土器は数量が少なく器種構成の全ては揃っていないものの、有文の浅鉢・壺類などの特徴からみていずれも砂沢式に比定できるものだと言える。

是川中居遺跡 1980 年調査分の類遠賀川系壺は、器形がわかるものは 1 点のみ（４）で、他はすべて破片資料である。４をみると口縁部がやや強く外反し、口唇部には沈線がめぐらされている。頸部には列点 2 列が、胴部最大径より若干上には沈線間列点が施される。その他の破片には、列点を施すものもあるものの、沈線を 1 ～ 3 状施文するものが多い。1 の口頸部破片には剣吉荒町遺跡出土土器（第 49 図 6）と同じく段が作り出されている。

甕は非常に多く出土しており、胴部最大径より口径のほうが大きいものが少なからず認められる。ほとんどのものが口唇部にキザミが施されたものである。頸部には沈線 1 ～ 4 条をめぐらすものが多く、沈線間列点は比較的少ない。胴部の地文は縄文・条痕の他に、ハケメが残されるものがある（８）。

一方、G 区出土の壺は非常に大型のものばかりで、器高は 40cm ～ 50cm に達する。その器形は口縁部が強く外反し、器高が胴部最大径の 1.1 ～ 1.2 倍程の長胴型となる。最大径の位置も高く、肩の張る形が多い。口唇部は無文のものが多く、頸部や胴部最大径の位置には列点・沈線間列点が施される。胴部に地文縄文がある破片もみられる。

甕は口縁部が外反しないものが顕著で、口径より胴部最大径のほうが若干大きいものが多い。口唇部はキザミが多いが、縄文のものもみられる。頸部には沈線 1 ～ 3 条の他に沈線間列点も比較的多く描かれる。胴部の地文はハケメのみのもの（14）が 1 点ある他は縄文と条痕が多用されている。

是川堀田遺跡からの類遠賀川系土器の出土は少ないが、壺 1 点、甕 5 点が確認できる（24 ～ 28）。壺の破片は小さく詳細は不明だが、口縁部内面に沈線があり、肩部が張る器形だと言える。甕の口径部が短いものが多く、口唇部には 5 点中 3 点が縄文を施している。胴部地文にハケ・条痕はみられなく、縄文のみである。頸部に沈線間列点を描くものがあり、列点の形状は横長ではなく丸い。

・松石橋遺跡（第 64 図）

出土量が少なく、器種構成の全体像はわからない。鉢、浅鉢、台付浅鉢、深鉢、壺があり、いずれも砂沢式に比定できるものである。

13 についてはこれまでにも多くの研究者が詳細な報告をしているため、ここではごく簡単に特徴を説明する（市川・木村 1984、木村 2000）。口径 15.7cm、胴部最大径は 29.6cm、底径 8.2cm、器高は 28.8cm で、最大径はちょうど胴部の中ごろにくる。短く外反する口縁をもち、胴部には籠目がみられる他、外面に大きく丸い黒斑が残っている[5)]。文様は頸部に沈線 2 条、胴部に沈線 3 条をめぐらす。胴部最大径より上に区分文様が施される。

また、破片 1 点のみであるが甕も出土している（７）。口径が胴部最大径を上回る器形で、口唇部にキザミがあり、頸部には沈線 2 条がめぐる。胴部には横方向のハケメが施される。

・荒谷遺跡（第 64 図）

鉢、浅鉢、台付浅鉢、深鉢、壺があり、その中には在地系深鉢の器形でありながら、列点が施されるものもみられる（24・25）。

遺跡全体では縄文時代晩期後半以降各時期の遺物がみられるが、A 区配石遺構東側では大洞 A' 式から砂沢式が主体を占めている。また、A 区第 6 号住居跡では砂沢式がまとまって出土している。

類遠賀川系の壺は A 地区配石遺構、配石遺構東側、第 6 号住居跡から出土している。

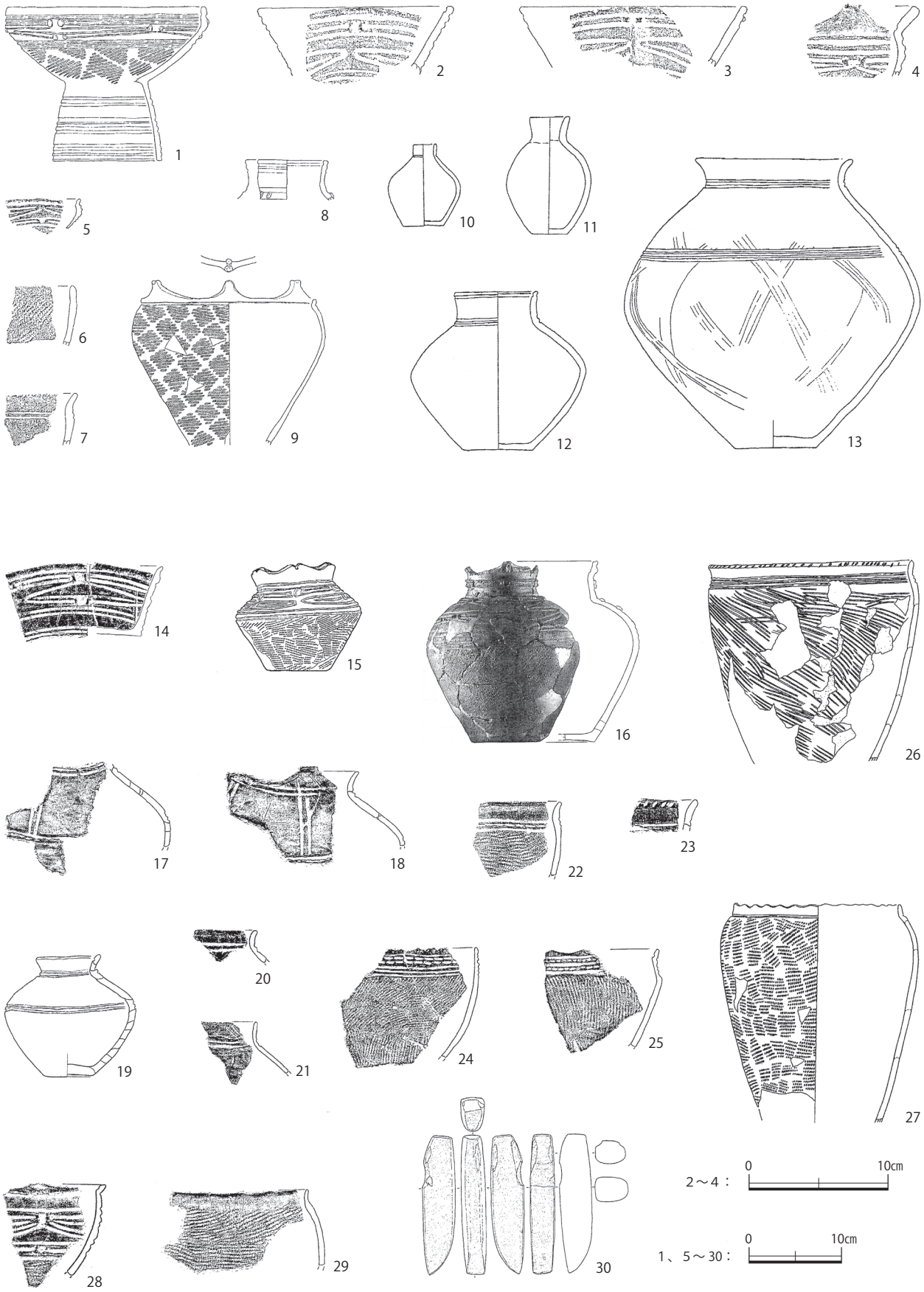
19 の小型壺は、頸部と最大径に沈線 2 条めぐらすなど遠賀川系的特徴を持っている一方、胎土に砂粒を多く含まない点や口縁内面に沈線を施す点、法量・シルエットが砂沢式の小型壺（15）と類似している点など在地的な特色も示している点で注目される。

また、第 6 号住居跡からは胴部上半に沈線 2 条の縦区画をもった類遠賀川系壺が砂沢式に伴って出土している（17・18）。

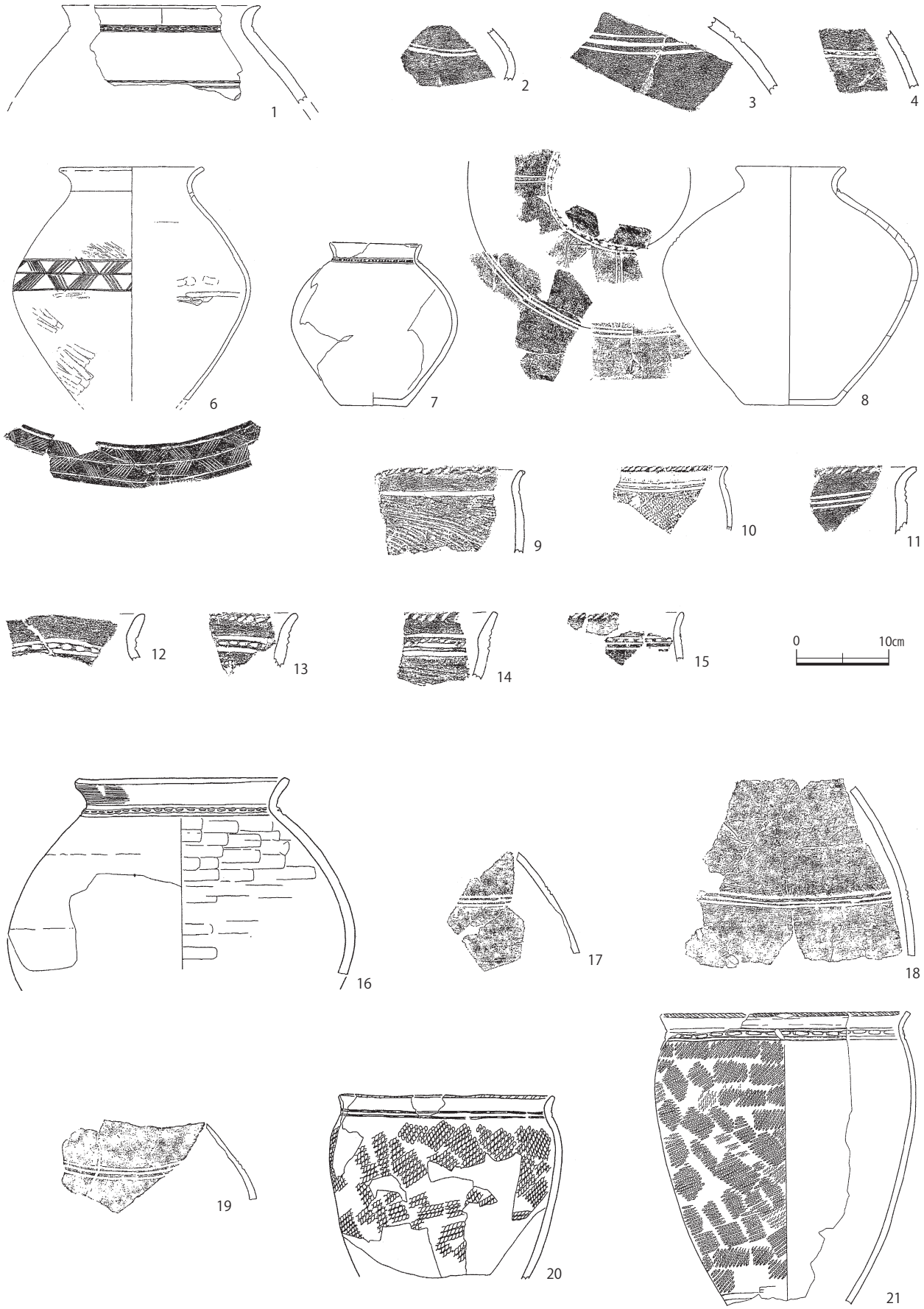
その他共伴する在地系土器は判然としないものの、配石遺構東側からも壺の口縁部から胴部にかけての破片資料が出土している（20・21）。これらはいずれも口縁部の外反が非常に弱く、直口口縁に近い形となっている。頸部には沈線を 1 ～ 2 条めぐらしている。

配石中央～西側においては、器形は外反口縁で遠賀川系的な特徴を示すが胴部上半には砂沢式的な文様が施された壺も出土しており、前述した列点が施される深鉢と同様、在地系と遠賀川系の融合が顕著なものがみられる点は注意したい。

甕は配石遺構東側、第 6 号住居から出土している。残存状況がよくなく、全体像を把握するのは難しいが、胴部最大径が口径を上回る器形で、頸部には沈線 3 条を施す



第 64 図　松石橋遺跡出土土器・荒谷遺跡出土資料
（1～13：松石橋遺跡、 14～30：荒谷遺跡）



第 65 図　畑内遺跡・楢館遺跡出土土器
（1～15：畑内遺跡、 16～21：楢館遺跡）

もの（26）がある他、沈線間列点を施すものもある（22）。胴部には条痕を施すものが多いようである。

・畑内遺跡（第 65 図）

第 53・54 号住居跡の他、遺構外から一部大洞 A' 式を伴いつつも、砂沢式がまとまって出土している。器種構成としては、鉢、浅鉢、台付浅鉢、深鉢、壺がある。

肉眼観察では壺の胎土への砂粒の混和は顕著でなく、比較的在地系土器に近いと言える。口頸部は荒谷遺跡と同様に外反の弱いもの（７）と、やや強いもの（６）がある。サイズは器高 30cm 前後のものと、20cm 以下の小型のものがあり、胴部まで残存しているものはいずれも胴部最大径より上に区分文様が入る。頸部には沈線が１～２条、沈線間列点が施されるものがある他、胴部に有軸羽状文が描かれるもの（６）がある。胴部上半に沈線２条の縦区画を有するものもある（８）。

全体像がわかる甕は出土していないが、口径が胴部最大径を上回るものがやや多い。口唇部に縄文を転がすものはなく、いずれもキザミが施される。頸部は沈線１～３条をめぐらすもの、沈線間に列点（沈線２条＋列点、沈線３条＋列点）を加えるものがある。胴部は条痕のものが目立つ。

ここまで各遺跡の類遠賀川系土器の特徴をみてきた。馬淵川・新井田川流域の類遠賀川系土器の特徴としてまず挙げられるのは、遠賀川系土器本来のハケの使用法によって段や突帯を作り出す壺がみられる点だろう。剣吉荒町遺跡でみられたような、段もしくは削出突帯を有する壺は、楢館遺跡からも出土している（第 65 図 17・18）。

また、甕の文様については遺跡によって若干違いがあるものの、口唇部の装飾は木目キザミがほとんどで縄文を施すものが少数派であるということが指摘できる。頸部は沈線１～３条のものと、沈線間列点のものがあるが、沈線と列点の組み合わせパターンは多様でなく、沈線２～３条の間に列点を一列施すものが一般的だと言える。胴部の地文には縄文、条痕が多用されるが、剣吉荒町遺跡、是川中居遺跡でハケメのみのものが出土している点は注目される。

馬淵川・新井田川流域において、類遠賀川系土器と共伴関係が認められる在地系土器はいずれも砂沢式土器であった。砂沢式が出土する遺跡では大洞 A' 式が伴出することが多く、両型式は型式学的な連続性も高いためその共伴関係を断言することは難しい。しかし、確実に大洞 A' 式と共伴している例は今のところなく、剣吉荒町遺跡や是川遺跡、楢館遺跡、金田一川遺跡での出土状況をみると、馬淵川・新井田川流域の類遠賀川系土器はいずれも砂沢式土器と共伴していると言える。

なお、馬淵川・新井田川流域においては、今回「在地系土器」と一括した中にも異なる特徴をもった２系統の土器群が存在しているということを指摘しておきたいと思う。一つは当該時期の馬淵川・新井田川流域に一般的な胎土と施文手法を用いた狭義の「在地系土器」と言えるものであり、いま一つはより南の北上川流域に一般的な胎土と施文手法を用いた一群である。前者は胎土に海綿骨針と石英・角閃石など少量の砂粒を含み、沈線は太く丸い断面形態をしている（以下、「a 系統」）。一方後者は胎土に金雲母を多量に混和し、沈線は太さの異なる複数の施文具によってなぞり描きしたためになだらかで特徴的な断面形態となる（以下、「b 系統」）[6]。これらは一見して区別がつくものである。

上に述べた２系統の在地系と類遠賀川系は、胎土をはじめとする製作技術、器形、文様などに異なる特徴をもつものであり、その区別は非常に厳密なものだと言える。また、その構成比は北部から南部にかけてグラデーションになっており、馬淵川・新井田川を上流に遡るにつれて b 系統の出現率は高くなり、北上川流域からの影響がより強くなる。一方で、それと相関するように類遠賀川系土器の出現率も下流域に比べ低くなり、新井田川中流域の馬場野Ⅱ遺跡や君成田Ⅳ遺跡ではまとまった出土はみられない。馬淵川・新井田川流域において晩期以来続く北上川流域との密接な関係性は、類遠賀川系土器の拡散を考える上でも非常に重要なポイントになると考えられる。

b. 東北地方における類遠賀川系土器の分布と特徴

続いて、東北地方における前期類遠賀川系土器の分布状況を確認した上で、そのあり方について概観する。

前期の時点で類遠賀川系土器が伴う地域として、大きく７つの地域を挙げることができる。剣吉荒町遺跡が所在する馬淵川・新井田川流域の他、津軽平野、男鹿半島・雄物川流域、庄内平野、仙台平野・阿武隈川流域、いわき周辺がそれに該当する。

各地域の類遠賀川系土器をみていくと、地域を越えて共通する要素と、地域差がみられる要素を指摘することができる。それらを確認した上で、馬淵川・新井田川流域の位置づけを行いたいと思う。

壺にみられる特徴のうち東北地方全体で共通する点としては、砂粒を混和した胎土、内傾接合による成形、頸・胴部に区分文様がみられる点などが指摘できる。また、器形そのものについても東北地方内部での共通性が高い。一般的に、東海以西の遠賀川系土器と異なり、東北地方の類遠賀川系壺には外側に反るような形の頸部を持つ壺は存在しない。どの地域のものをみても、胴部の区分文様より上は

軽く内湾するような形を呈している。これは在地系壺の影響によるものと考えられ、遠賀川系要素の受容の過程で、壺の「頸部」が「胴部上半」に置換されたと言うこともできる。その他、福島県墓料遺跡出土土器の木葉文や青森県畑内遺跡出土土器の有軸羽状文（第65図６）など、非常に限られた例を除いて、文様は平行沈線や列点、沈線と列点の組み合わせのみで構成されているということも共通する点である。

甕については、壺同様胎土に砂粒を混和する点の他、外反口縁をもつという特徴から、いずれの地域においても遠賀川系土器の甕の器形をある程度保持している点が挙げられる。また、頸部のヨコナデや、キザミか縄文のいずれかによって口唇部を装飾する点、頸部に沈線・列点などの文様をもち、胴部に地文を施す点なども共通した特徴である。使用頻度は大きく異なるものの、ハケメが類遠賀川系土器の分布するほとんどの地域でみられることも重要である[7]。

このような共通点があるのに対し、地域によって異なる特徴もみられる。簡潔に言えば、在地系土器との融合の仕方にみられる違いである。例えば、馬淵川・新井田川流域においては在地系土器との区分がはっきりしているのに対し、雄物川流域や阿武隈川流域においては、前期の段階で壺胴部に地文縄文を施すものが少なからずみられる他、津軽平野の宇田野（2）遺跡では壺頸・胴部の区分文様に粘土粒を配するなどの在地的な手法を取り入れている。甕についても、口縁部の外反の度合いや、地文の種類などには地域差が認められる。地文に関しては、馬淵川・新井田川流域ではハケメのみのもの以外に縄文、条痕が多用され、その他の地域では縄文以外はみられないという違いがある。口唇部の装飾についても、馬淵川・新井田川流域以外ではキザミよりも縄文が多用される。また頸部の文様モチーフにも若干の違いがみられる。馬淵川・新井田川流域では列点は沈線間にのみ施される傾向にあったが、津軽平野や雄物川流域では沈線外列点も多くみられるなど、地域によって沈線と列点の組み合わせパターンに違いがみられる。

ここまでみてきたように、類遠賀川系土器は東北地方内部である程度共通性を保持しつつも、在地系土器との融合の度合い等に地域差を生じさせながら存在していた。剣吉荒町遺跡を始めとする馬淵川・新井田川流域の諸遺跡から出土している類遠賀川系土器は、東北地方の他の地域のものに比べ、遠賀川系要素の変容が小さい状態で存在していたということが指摘できる。

（3）類遠賀川系土器の出現時期と西日本との併行関係

a．類遠賀川系土器の出現時期

まず東北地方において、遠賀川系要素をもった最古の土器が在地系のどの型式に伴うと考えられているかという問題について確認する。

東北地方においては類遠賀川系土器の存在が認識されるようになって以来、佐原眞氏の見解に従い類遠賀川系土器は砂沢式に伴うと考える研究者が多かったが、近年ではひとつ前の段階の大洞A'式に伴うという考えが定着しつつある[8]（高瀬2000b、木村2000、斎野2007）。

しかし、今回分析を進めた中で、確実に大洞A'式に伴うと考えられる資料は見出すことができなかった。段や削出突帯をもつ壺、地文にハケメのみを残す甕などが存在する馬淵川・新井田川流域の類遠賀川系土器は、東北地方の中でも最も西日本の遠賀川系土器に近い特徴を示している。そういった特徴をもった資料が出土している剣吉荒町遺跡、畑内遺跡、楢館遺跡では、いずれも砂沢式土器が伴出している。

大洞A'式と砂沢式の区分については研究者によって微妙に意見が異なる部分があり、再検討の余地があるのは確かである。また、今後資料の増加によって大洞A'式に共伴する資料が出てくる可能性も十分にある。しかしながら、現時点では最古の類遠賀川系土器は砂沢式土器に伴うと考えるのが最も実情に即していると言える。

b．西日本との併行関係

類遠賀川系土器の中で、最も西日本の遠賀川系要素に近い特徴をもった土器群が馬淵川・新井田川流域に分布するということはすでに述べた。それらの土器にみられる特徴は、壺・甕ともに１～３条の沈線が施され、一部の壺には段や削出突帯もみられるというものであった。剣吉荒町遺跡や楢館遺跡で出土した壺胴部の段の下端には、やはり１～２条の沈線が施されている。こうした段や少条沈線といった特徴は、佐原眞氏による第Ⅰ様式の区分の中でも中段階に属するものである（佐原1967・1986）。

これまでにも東北地方の類遠賀川系土器は第Ⅰ様式中段階の特徴をもっていると指摘されてきた。しかし、佐原氏も述べているように、これまで東北地方の類遠賀川系の壺には明確な段や削出突帯が確認されてこなかった（佐原1986）。そのため、多くの研究者が類遠賀川系土器の特徴に畿内第Ⅰ様式中段階の影響を認めつつも、その情報が東北地方に伝播し、在地化するまでにいくらかのタイムラグがあったと想定し、砂沢式は一段階下った第Ⅰ様式新段階に併行すると主張してきた（鈴木1987、谷口1989）。

また、当初考えられていた ［砂沢式 ― 畿内第Ⅰ様式中段階］ という編年案を採用すると、東海地方や浮線文土器の編年と矛盾が生じることも指摘されている（縄文文化検討会 1988、谷口 1989）。

近年では第Ⅰ様式中段階の特徴をもつ最古の類遠賀川系土器は大洞 A' 式に伴うものとし、砂沢式については第Ⅰ様式新段階、水神平式併行におく考えが研究者の間に定着しつつある（高瀬 2000a）。これによって上述したような編年上の矛盾は解消されたと考えられている。

現在のところ上に述べたような西日本との併行関係が最も矛盾が少ないと考えられ、多くの研究者によって支持されている。しかし、今回砂沢式に伴って壺の頸・胴部に段・削出突帯をもつものが存在するということが確認されたことで、こうした併行関係を見直す必要が生じてきたと言える。

馬淵川・新井田川流域でのこうした状況をみると、砂沢式と第Ⅰ様式中段階との間にそれほど大きな時間的隔たりがあったとは考えにくい。したがって、暫定的ではあるものの、以下のような編年関係が導き出される。

［畿内第Ⅰ様式（中）― 砂沢式 ― 樫王式後半］

奇しくもこれは多くの研究者から様々な矛盾点が指摘されてきた併行関係である（鈴木 1987、谷口 1989）。ただし、こうした編年案は砂沢式が第Ⅰ様式新段階にまで下らないということを証明するものでもなければ、樫王式と大洞 A' 式が併行しないということを立証するものでもない。当然のことながら、それぞれの土器型式はそれぞれに時間幅を持っているものであり、それを踏まえたうえでさらなる詳細な検討が必要となってくるだろう。特に東海地方の編年との突合せは大きな課題であり、大洞 A' 式・砂沢式の編年案の再検討とともに今後取り組んでいかなければならない。それを考慮に入れた上でも、馬淵川・新井田川流域において第Ⅰ様式中段階と確実に関連する資料が発見されたことは大変重要であり、今後の研究に与える影響は決して小さいものではないだろう。

以上、東北地方の類遠賀川系土器を考える上での馬淵川・新井田川流域に位置づけと、類遠賀川系土器の出現時期及び西日本との併行関係について考察を試みた。剣吉荒町遺跡出土土器の分析から、上記のような成果が得られたわけだが、同時に今後取り組んでいかなければならない課題も浮き彫りになってきた。

今後は、用語の定義やハケメの認定方法など、研究の基盤となる部分はもちろんのこと、広域編年上の矛盾点の解決、類遠賀川系土器の段階区分と各地域における変遷過程の整理等を行う必要がある[9]。その上で、北上川流域など、類遠賀川系土器が分布しない地域までも視野に入れた地域間関係の研究につなげていくことが重要な課題だと言える。

註

1）同様のことは木村早苗氏も指摘している（木村 2000）。

2）第 62 図 3 の類遠賀川系壺については、高瀬克範氏が大洞 A' 式期に位置づけている（高瀬 2000b）。しかし、共伴している鉢と台付浅鉢をみると、器形・文様ともに砂沢式期の特徴を示していると言える。高瀬氏は文様帯幅が拡がりきっていない点を重視して大洞 A' 式と判断しているが、1 のような形態の深鉢は文様が全面に施されることはない。また、台付浅鉢に関しては、北上川流域と密接な関係をもつこの地域においては文様帯幅が拡がりきらないもの、突起をもたない平縁のものも多くみられる。したがって、そういった理由でこれらの土器を大洞 A' 式に位置づけることはできないと筆者は考える。

3）資料を実見していないため確実なことは言えないが、報告を見る限り在地系土器としてよいものが何点か含まれていると考えられる。

4）青森県立郷土館 (1988) や高瀬 (2000b) では、層位を重視し、青森県立郷土館調査地点の類遠賀川系土器が包含層Ⅰ～Ⅲ層のうち、一部Ⅲ層からも出土していることを挙げ、これらが大洞 A' 式に伴うものと判断している。しかし、報告を見る限り、地区によってはⅢ層からも砂沢式が出土している。木村早苗氏も再堆積層である可能性が高いと指摘しており、層位による共伴関係は確実なものとは言えない（木村 2000）。

5）この黒斑は胴部上半と下半に対になるようについている。丸く大きい黒斑は覆い型野焼きで焼成された弥生土器などにみられる特徴である。東北地方における覆い型野焼きの採用は 9 世紀以降というのが定説となっている（北野 2007）。松石橋遺跡出土資料については対応する内面の黒斑がみられないことからその可能性は低いと思われるが、今後、類遠賀川系土器を中心に東北地方の弥生土器にみられる黒斑を注意深く見直す必要があるだろう。

6）b 系統の土器群は、胎土・施文手法以外にも他の在地系土器と異なる特徴を持っている。内面の調整に板ナデを多くもちいる点、外面を橙～褐色に、内面・断面を灰～黒色に焼き上げる点などが指摘できる。

7）縄文時代晩期終末の時点で東北地方においても深鉢等の調整に板ナデを用いていたことが、ハケの受容をスムーズにしたのではないかと考えられる。

8）高瀬 (2000b) の中で、最古の類遠賀川系土器が大洞 A' 式に伴うと説く研究者の中に工藤竹久氏も挙がっているが、工藤氏は「大洞 A' 式新段階」、つまり現在の砂沢式期に遠賀川系土器が登場すると述べている（工藤 1987a）。

9）砂沢式土器の細分を含め、現時点では検討が不十分なため段階区分をすることは難しいが、少なくとも馬淵川・新井田川流域にお

いて遺跡ごとに遠賀川系要素の在り方、出現頻度に差異があるのは確かであり、今後の検討しだいでは２段階程度に区分できる可能性は十分にある。

引用・参考文献

青森県教育委員会　1997a『畑内遺跡Ⅳ―八戸平原開拓建設事業 (世増ダム建設) に伴う遺跡発掘調査報告―』
青森県教育委員会　1999『畑内遺跡Ⅴ―八戸平原開拓建設事業 (世増ダム建設) に伴う遺跡発掘調査報告―』
青森県教育委員会　2003a『楢館遺跡―八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書―』
青森県教育委員会　2003b『松石橋遺跡―新井田川河川災害復旧等関連緊急事業に伴う遺跡発掘調査報告―』
青森県史編さん考古部会　2005『青森県史　資料編　考古３』青森県史友の会
青森県八戸市教育委員会　1981『是川中居・堀田遺跡発掘調査報告書』
青森県立郷土館　1988『名川町剣吉荒町遺跡 (第２地区)　発掘調査報告書』
市川金丸・木村鉄次郎　1984「青森県松石橋遺跡から出土した弥生時代前期の土器」『考古学雑誌』第 69 巻第３号　日本考古学会　98-106 頁
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『九戸郡軽米町馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
江坂輝彌　1967a『青森県剣吉荒町遺跡調査概報』
江坂輝彌　1967b「青森県名川町剣吉荒町遺跡の発掘調査」『月刊考古学ジャーナル』No.6　ニュー・サイエンス社　26 頁
江坂輝彌　1971「青森県名川町剣吉荒町遺跡」『日本考古学年報』19　日本考古学協会　83 頁
北野博司　2007「東北地方における覆い型野焼きの受容」大手前大学史学研究所編『考古学リーダー９　土器研究の新視点』六一書房　229-253 頁
木村早苗　2000「青森県出土の「遠賀川系土器」」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会　699-733 頁
工藤竹久・高島芳弘　1986「是川中居遺跡出土の縄文時代晩期終末期から弥生時代の土器」『八戸市博物館研究紀要』2　1-31 頁
工藤竹久　1987a「東北北部における亀ヶ岡式土器の終末」『考古学雑誌』第 72 巻第４号　日本考古学会　39-68 頁
工藤竹久　1987b「是川・剣吉荒町遺跡の遠賀川系土器」『考古学ジャーナル』No.273　ニューサイエンス社　8-12 頁
斎野裕彦　2007「弥生文化成立期の東北」『月刊　文化財』527 号　第一法規株式会社　10-15 頁
佐原　眞　1967「山城における弥生式文化の成立」『史林』第 50 巻第５号　京都大学文学部史学研究会　103-127 頁
佐原　眞　1986「縄文 / 弥生―東北地方における遠賀川系土器の分布の意味するもの―」『日本考古学協会昭和 61 年度大会研究発表要旨』　4-9 頁
佐原　眞　1987a「みちのくの遠賀川」『東アジアの考古と歴史　中』岡崎敬先生退官記念論集　同朋社出版　266-291 頁
佐原　眞　1987b「東北地方における遠賀川系土器」金関恕・佐原真『弥生文化の研究』4　雄山閣　217-222 頁
設楽博己　1991「関東地方の遠賀川系土器」『児島隆人先生喜寿記念論集　古文化論叢』　18-48 頁
縄文文化検討会　1988『第２回縄文文化検討シンポジウム「東北地方の弥生式土器の編年について」』
鈴木正博　1987「『流れ』流れて北奥「遠賀川系土器」」『利根川』8　利根川同人　12-18 頁
須藤　隆　1992「弥生社会の成立と展開」『新版　古代の日本』9　角川書店　1-42 頁
高瀬克範　2000a「東北地方における弥生土器の形成過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』83　61-95 頁
高瀬克範　2000b「東北地方初期弥生土器における遠賀川系要素の系譜」『考古学研究』第 46 巻第４号　考古学研究会　34-53 頁
谷口　肇　1989「『東北遠賀川論』の再検討及びその意義」『早稲田大学大学院文学研究科紀要哲学・史学編別冊』　199-209 頁
名川町教育委員会　1984『剣吉荒町遺跡発掘調査報告書』
八戸遺跡調査会　2004『是川中居遺跡　中居地区 G・L・M』
水野一夫編　2007『荒谷遺跡』八戸市南郷区役所建設課

図版出典

・第 62 図
　１～３：高瀬（2000b）より作成。４～７：青森県史編さん考古部会（2005）より作成。８～32：青森県立郷土館（1988）より作成。
・第 63 図
　１～８：工藤・高島（1986）より作成。９～22：八戸遺跡調査会（2004）より作成。23～27：八戸市教育委員会（1981）より作成。
・第 64 図
　１～９：青森県教育委員会（2003b）より作成。10～13：市川・木村（1984）より作成。14～30：水野（2007）より作成。
・第 65 図
　１～５、８、10～13：青森県教育委員会（1997a）より作成。6、7、9、14：青森県教育委員会（1999）より作成。15～20：青森県教育委員会（2003a）より作成。

４．剣吉荒町遺跡出土土器における遠賀川系要素のあり方

安藤広道

（1）問題の所在

ここでは、剣吉荒町遺跡 1966 年調査出土土器を対象に、遠賀川系の諸要素と、在地系あるいは亀ヶ岡系とされる諸要素の関係を検討してみたいと思う。

これまでの「東北地方の遠賀川系」（佐原 1987）「類遠賀川系」（高瀬 2000）土器の研究は、まず、分析者各自の基準によって「（東北）遠賀川系」「類遠賀川系」とされる土器を抽出・集成し、そのうえでそれぞれの系譜や時空間的展開について検討を加えるという手順を踏むものが多かった。それでは、ある土器のまとまり全体を対象に、遠賀川系の諸要素一つ一つのあり方を細かく検討するような分析は、これまで充分に行われてきたと言えるだろうか。その研究の蓄積は、意外なほど少ないようである。

しかし、遠賀川系と考えられる要素を持つ土器を、全て「東北地方の遠賀川系」「類遠賀川系」とするのでなければ、その抽出・集成にあたっては、遠賀川系の諸要素のあり方を考慮した、何らかの分類が不可欠になるはずである。これまで指摘されてきたように、東北地方北部においては、遠賀川系土器そのものと言えるものは確認されていないのであって、「東北地方の遠賀川系」「類遠賀川系」とされる土器の多くは、遠賀川系の諸要素が部分的に取り入れられたものと理解されている（佐藤 2003 など）。また、資料報告の章で指摘したように、遠賀川系の要素自体は確実にみられるものの、そうした一部の要素以外何ら亀ヶ岡系と変わらない土器も少なからず存在する。遠賀川系の諸要素と亀ヶ岡系とされる諸要素との交錯の実態を充分に捉えようとせず、「東北地方の遠賀川系」「類遠賀川系」土器を論じてきたところに、これまでの研究の大きな問題点があるといってもいいだろう。

ここでは、以上のような問題点を踏まえ、まずは「東北地方の遠賀川系」や「類遠賀川系」という枠を取り払い、剣吉荒町遺跡出土土器における、遠賀川系の諸要素と亀ヶ岡系の諸要素の関係を検討してみたいと思う。とはいえ、現時点では亀ヶ岡系土器の図化作業が終了していないこともあり、剣吉荒町遺跡出土土器全体の中での詳細な検討を行うことは不可能である。そこに、本研究の計画上のミスがあったことは素直に認めなければならないが、ひとまずは、資料報告の章で抜き出した遠賀川系と考えられる要素を持つ土器を中心に、予察的な分析と考察を行うことにする。

（2）抽出した土器群における遠賀川系の要素と亀ヶ岡系要素の関係について

今回報告した剣吉荒町遺跡出土の「遠賀川系の要素を持つ土器」のなかにも、遠賀川系土器（小林 1934）そのものと言えるものはないようである。そのいずれからも、遠賀川系土器に通有の、器形、法量、成形技法、調整、装飾等の重要な特徴が、少なくとも一つ以上欠落しているからである。逆に言えば、これらの土器は、全て何らかの非遠賀川系的要素、あるいは亀ヶ岡系的な要素を持っていることになる。つまり、ここで抽出した「遠賀川系の要素をもつ土器」は、個々の個体内において、遠賀川系の要素と亀ヶ岡系の要素が多様に組み合わさっているのであり、まずは両者の組み合わさり方を細かく見ていくことが必要になる。

出土土器全てに共通する、非遠賀川系あるいは亀ヶ岡系の要素としては、内傾接合を挙げることができる。今のところ、剣吉荒町遺跡出土土器には、遠賀川系土器に特徴的な外傾接合は一例も認められない。つまり、土器の器体積み上げ時における、土器と製作者の位置関係、あるいは製作者の行為、身体の動作という点において、「遠賀川系の要素を持つ土器」は、亀ヶ岡系土器と大きな違いはなく、逆に遠賀川系土器とは明らかに異なっていたことになる。その意味では、「遠賀川系の要素を持つ土器」の一部がどんなに遠賀川系土器に類似していようとも、それは、土器製作に関わる、基本的な情報を受容せずに製作されていたことになる。

また、「遠賀川系の要素を持つ土器」は、器形や装飾においても、いくつか遠賀川系土器とは異なる特徴がみられる。例えば、ほぼ全ての壺形土器に共通する、口頸部径が大きく短い器形は、遠賀川系土器にはほとんど見ることができない。この器形の存在を理解するためには、亀ヶ岡系の広口壺形土器との関係を考慮する必要がありそうである。また、剣吉荒町遺跡出土の深鉢（甕）形土器にみられる、頸部のくびれ部かその直下に接して装飾帯が配されるという特徴にも、くびれより若干下がった位置に装飾帯を持つことが多い遠賀川系土器との微妙な違いを指摘することができる。

そこで以下では、広口壺形土器と深鉢（甕）形土器に分けて、資料報告で用いた分類項目ごとの遠賀川系的様相あるいは亀ヶ岡系的様相の強弱を見極めながら、遠賀川系要

素を持つ土器における、遠賀川系要素と亀ヶ岡系要素の組み合わさり方の実態に近づいてみたいと思う。

・広口短頸壺形土器

まず、器形では、口頸部１類・２類が、遠賀川系的様相の強い形態と評価できる。他方、３類は、遠賀川系の要素をもたない広口短頸壺形土器に類似した直口のものが散見されることから、亀ヶ岡系的様相の強い形態と考えておく。胴部は、ⅰ類が遠賀川系的であり、ⅱ類・ⅲ類は、やはり遠賀川系の要素をもたない壺形土器に同様の形態が多数認められることから、亀ヶ岡系的と評価することが可能である。

装飾の構成では、ａ類が遠賀川系とみなされ、ｂ類は、砂沢式壺形土器の変形工字文の下端が胴部最大径に位置することが多い点からみて、亀ヶ岡系的様相へと傾斜した構成と評価できる。ｃ類も亀ヶ岡系的と言っていいだろう。

文様要素については、α類・β類ともに遠賀川系と評価することもできるが、α類については、大洞Ａ’式、砂沢式壺形土器の変形工字文に、１～３条の沈線で上下を区画する例があり、また頸部に１条の沈線を加える胴部無文の壺形土器が数多く認められることからみても、そうした区画的沈線との関係を考えておく必要がある。その点では、両者とも遠賀川系の要素としてはいるが、β類よりもα類のほうが亀ヶ岡系に馴染みやすかったと考えることもできる。

さて次に、これらの要素の組み合わさり方をみてみると、口縁部と胴部の関係が捉えられる３点（９～11）は、いずれも３類とⅱ類の組み合わせになっている。器形と装飾の関係がわかるものでは、ⅰ類がａ類、α類と組み合わさり（８）、ⅱ類とｂ類、α類（12）もある。９～11は、いずれもｃ類、α類になっている。なお、α類の胴部破片は、12を除きａ類の構成となっており、α類とａ類の強い関係も認められる。

さらに、土器群を抽出するための要素とした、ア（ヨコナデ）とイ（ハケ）との関係をここに加えると、口縁部１類、２類は、ア、イ双方が認められるものが３点（２、４、５）、アのみが認められるものが２点（１、３）となる。３類の９～11には双方ともみられない。また、胴部ⅰ類にはイが認められ（８）、５点のⅱ類では18に内面にハケが認められるだけである（イとするには若干の疑問あり）。文様のα類にはア、イのあるものとないものが混在するが、β類は全てハケ成形（イ）と考えていい。

なお、粗砂・小礫を含む胎土（ウ）との組み合わせについては、壺形土器の場合、全体的にウの要素をもつものは少ない。したがって、口縁部１類・２類の５点中２点（３、４）、３類の３点中１点（９）という差が有意なものであるかの判断は難しい。

以上の関係をまとめると、遠賀川系的様相が強いとした分類項目、亀ヶ岡系的様相が強い分類項目ともに、それら同士で組み合わさる例が多いことがみえてくる。また、遠賀川系の要素としたア、イも、前者と組み合わさっている。つまり、ここで報告した広口短頸壺形土器は、大きくみて、遠賀川系的要素がまとまる一群と、亀ヶ岡系的要素がまとまる一群の、２つのグループに分けることが可能になってくるわけである。エとした要素、あるいは文様要素α類は、双方に認められるものであるが、これは単純に、エを遠賀川系の要素としたことに起因する。つまり、エあるいはα類の一部を、亀ヶ岡系の要素と評価した場合には、10～12などは、純粋に亀ヶ岡系土器ということになる。

さらに、ここに土器の法量という観点を加えると、遠賀川系の要素をもつ壺形土器のあり方が、より明確になってくる。例えば、遠賀川系的要素がまとまる一群は、８を除く全てが口縁部径20cmを超える大型の土器と推測されるものである。「東北地方の遠賀川系」「類遠賀川系」とされる壺形土器に大型のものが多いことは、これまでも繰り返し指摘されてきたが（中村1988など）、大型壺形土器において遠賀川系的要素がまとまる傾向をみせることは、東北地方北部において、これらの土器が何か特別な意味・機能をもつ、ひとつの器種として確立していたことを物語ると考えていい。

これに対し、中型、小型の壺形土器は、やや状況が複雑である。例えば、８は、先述のとおり遠賀川系的様相の強い土器であるが、９は、胎土の特徴を除くと全体的に亀ヶ岡系的様相が強く現れている。さらに、10～12になると、胎土も亀ヶ岡系と区別できなくなる。ここには、８→９→10・11・12の順で、遠賀川系的様相が薄れ、亀ヶ岡系的様相が強くなるというバリエーションが認められるわけである。つまり、中型・小型壺形土器においては、遠賀川系的要素のまとまる大型壺形土器とは異なり、遠賀川系的様相が強いものから亀ヶ岡系的様相が強いものまで、明確には区分できない連続した差異を含む土器群が存在することになるのである。10～12については、先述のように亀ヶ岡系の土器との評価も不可能ではなく、亀ヶ岡系的様相が強くなるにつれ、亀ヶ岡系との区分も困難になってくることがわかる。

以上のことから、剣吉荒町遺跡出土土器の遠賀川系の要素をもつ壺形土器には、遠賀川系的要素がまとまってひとつの器種として確立していく大型壺形土器と、遠賀川系的様相と亀ヶ岡系的様相の強弱が連続的なバリエーションを生みだす中型・小型の壺形土器が存在しており、一遺跡出土土器の壺形土器のなかでも遠賀川系の要素の定着の仕方

が、一様でないことが明らかになった。そこで、ここでは、ひとつの器種として確立していく前者のあり方を「あり方A」とし、連続的なバリエーションを生みだす後者のあり方を「あり方B」と呼んで区別しておくことにする。

・深鉢（甕）形土器

深鉢形土器の器形では、１類が遠賀川系土器に通有のものと考えられ、２類も遠賀川系土器に散見されるものと言える。しかし、２類の場合は、胴部最大径が口縁部径を凌駕する傾向があり注意が必要である。３類は、口縁部の屈曲や胴部の丸みが、もはや遠賀川系とは言い難いものであり、４類の直立した口縁部も遠賀川系土器にはみられない。３類の口縁部、胴部の形態は、119をはじめとする亀ヶ岡系土器に近く、４類も116、117などとの関係が考えられる。ともに、亀ヶ岡系的様相がより強くなった器形と言っていいだろう。５類と６類は、さらに亀ヶ岡系的様相が強く、亀ヶ岡系そのもの（108、105等）とも評価できるものである。

口唇部装飾では、ａ類は間違いなく遠賀川系の要素である。しかし、ｂ類は、同様の刻みが亀ヶ岡系土器にも存在するため（106、107）、評価が難しくなってくる。ｃ類は、亀ヶ岡系土器には口唇部に縄文を施すものが少ないことから、ａ類、ｂ類の刻みを縄文に置き換えたものと理解していいだろう。遠賀川系の要素が、縄文という亀ヶ岡系的要素に引きつけられたものと評価しておく。無文のｄ類については、その強弱の判定は難しい。

これに対し、頸部装飾はやや複雑である。α類は、遠賀川系の要素を持った土器に数多く認められるものであるが、先述の通り、装飾帯の配置は、すでに遠賀川系土器とは言いにくいものが多くなっている。一方、亀ヶ岡系とした土器には、同様の頸部くびれ部あるいはその直下の沈線文帯をもつものが珍しくない（105～109）。そうした点では、α類は、亀ヶ岡系との親和性の高い要素だったと評価することが可能である。

β１類は、遠賀川系土器に散見されるものである。一方、β２類は、一応遠賀川系土器の要素カとして挙げたものであるが、先述のとおりその評価は一筋縄にはいかない。そのため、他の要素との組み合わせを分析したうえで、再度言及することにしたい。無文のγ類は、亀ヶ岡系土器に口縁部無文帯をもつものが多数見られることから、亀ヶ岡系の要素と捉えることができる。

最後に胴部装飾であるが、ア類は、遠賀川系の要素として問題ない。イ類は、そこに縄文が加わったものであり、亀ヶ岡系に引き付けられた様相、ウ類は亀ヶ岡系の要素と言っていいだろう。

さて、ここでも、壺形土器と同様、上記の要素・様相同士の組み合わさり方をみてみよう。まず、器形１類は、２点とも口縁部装飾、装飾ａ類、α類、ア類と組み合わさる（27、29）。これらは、剣吉荒町遺跡出土土器のなかで、最も遠賀川系的様相の強い土器である。器形２類にも、同様に装飾ａ類、α類、ア類と組み合わさるものがあり（28）、β１類、ア類との組み合わせがみられる（26）。これらも遠賀川系的様相の強い土器と言っていいだろう。

一方で、器形２類には、ａ類、α類をもち、胴部がイ類となる土器が存在する（34）。口縁部の形態が亀ヶ岡系的となる器形４類にも、同様の要素の組み合わせがある（35）。

これらの土器は、その製作・装飾の工程も興味深い。34、35の２点を含め、α類とイ類の組み合わせをもつ口縁部破片は11点存在するが（33～43）、そのうち、頸部の沈線と縄文の前後関係が判明する９点（34～42）は、いずれも沈線施文後に縄文を施文している（写真68、70、72～76、78）。つまり、これらは、縄文施文前までの工程が26や28と同じであり、縄文施文によって亀ヶ岡系的様相をもつようになったと理解できる。37は口頸部にミガキが加えられているが、これも亀ヶ岡系の要素が加わったものと考えられる。

なお、26を除くア類がａ類と組み合わさり、イ類にはａ類とｃ類しかみられないことからすると、器形１類、２類（４類）の土器のバラエティが、共通するハケ調整→口頸部ヨコナデの工程の後、①ハケ具を用いて沈線、口唇部刻みを施す（ア類、ａ類）、②その上で胴部に縄文を施す（イ類、ａ類）、③沈線施文後、縄文を加え、そのまま口唇部にも縄文を付加する（イ類、ｃ類）、という３種類の工程によって生み出されていたと考えられることになる。

さて、器形３類には、33でα類とイ類の組み合わせがみられ、44でｂ類、β２類、ウ類が組み合わさる。50は、ａ？類（あるいはｂ類）、γ類、イ類の組み合わせである。33のα類とイ類、50のａ類とイ類は、比較的遠賀川系的様相の強い組み合わせとも言えるが、33のα類は頸部くびれに沈線を１条のみ巡らすもので、亀ヶ岡系的様相への傾斜が認められる。50は、頸部装飾がγ類となっている点で、やはり亀ヶ岡系的様相に傾いたものと評価できる。44は、器形３類とウの組み合わせが、亀ヶ岡系的であるほか、縄文施文後にβ２類の沈線・列点を加えている点も、縄文を地文として用いる亀ヶ岡系的な要素と考えていい。

44以外にも、β２類をもつ個体は４点みられるが（45～49）、これらはいずれも胴部装飾がウである。また、47～49は口唇部に刻みをもつが、いずれもｂ類である（写真80～82、84、85）。つまり、剣吉荒町遺跡出土土

器においては、β２類は亀ヶ岡系的な要素との関係性が強く表れていることになる。β２類は、山陰地方を中心とする遠賀川系土器に確実に存在しており、その点で遠賀川系の要素と評価することも可能であるが、一方で、類似した文様が亀ヶ岡系土器にも存在することから（例えば八幡堂遺跡の第31図98など）、亀ヶ岡系の装飾との親和性が強まることになったと考えておきたい。

亀ヶ岡系の器形そのものと言える６類、７類には、51でｃ類が認められるほかは、γ類、ウ類の組み合わせである。いずれも、口頸部の無文部分にミガキを加えており、その点も亀ヶ岡系の要素である。51のｃ類は、遠賀川的要素と言えるが、器形６類、７類の53、54を遠賀川系の要素を持った土器として抽出したのは、抽出要素アのヨコナデの存在による。つまり、ヨコナデを除けば、53、54は亀ヶ岡系土器そのものということになる。

最後に要素ウ（胎土）との関係をみてみると、胴部ア類の26～30では、全点にウがみられる。α類とイ類の33～43では、11個体とやや減少する。β２類とウ類の44～49では、５個体のうち46と48・49の２個体のみとなり、γ類の50～54には、要素ウは存在しなくなる。つまり、遠賀川的様相の強い土器にはウの胎土が多くみられ、亀ヶ岡系的様相が強くなると減少する傾向にある。

以上をまとめると、深鉢（甕）形土器の場合、壺形土器の「あり方Ｂ」と同様、と言うより一層明瞭に、遠賀川系的様相の強い一群から亀ヶ岡系的様相の強い一群までの連続的なバリエーションが認められ、亀ヶ岡系土器へと続いていく様子が見て取れる。もちろん、諸要素の組み合わさり方は単純ではないが、逆にそれ故に全体の連続性が際立つことになっているようでもある。深鉢（甕）形土器の場合には、壺形土器の「あり方Ａ」のような、遠賀川系的要素がまとまってひとつの器種として確立するような状況は認められず、全体的に「あり方Ｂ」の状況を示しつつ、遠賀川系、亀ヶ岡系の要素が融合していると理解できよう。

なお、深鉢（甕）形土器においては、遠賀川系の諸要素の中にも、亀ヶ岡系との親和性に強弱があることが指摘できる。具体的に言うと、器形は、亀ヶ岡系的様相の中に最も溶け込みにくい要素であり、逆に最も亀ヶ岡系的様相と親和性が強いのはヨコナデである。ヨコナデの親和性の強さは、土器を回転させる道具がヨコナデの定着前に亀ヶ岡系土器に存在していたことを想像させるものであり、横断面が正円に近くなることが多い亀ヶ岡系精製土器の製作技法を考えるうえで興味深い現象である。

これに対して、胎土の特徴や、ハケによる成形、調整、刻み等は、その中間的な位置にあり、頸部の沈線、沈線＋列点は、亀ヶ岡系に類似した手法が存在することもあってか、これらよりやや親和性が強く表れているようである。一方、亀ヶ岡系の要素という側からみても、縄文のように遠賀川系的様相に馴染みやすい要素と、器形のように馴染みにくい要素があるということがわかる。つまり、ここで「遠賀川系土器の要素をもつ土器」として抽出した土器群にみられるバラエティは、こうした遠賀川系土器、亀ヶ岡系土器の個々の要素の相互の浸透圧の違いによって、生み出されたものと理解することもできるのである。

３．考　察

以上の分析結果は、これまでの「東北地方の遠賀川系」「類遠賀川系」の理解、例えば佐藤由紀男氏の「在来の製作技法を基礎に、一部に遠賀川系的要素が付加されたり、一部が変換したりしたものである」（佐藤 2003）という見解を裏付けるとともに、今後は、遠賀川系要素と亀ヶ岡系要素の関係をより細かく検討しつつ土器群の動態を理解していく必要があることを示すものになったと考えている。そこで以下では、上記の分析結果を踏まえ、問題提起を中心とした、若干の考察を行っておきたいと思う。

・東北地方北部における遠賀川系要素の定着過程について

これまでも指摘されてきたように、剣吉荒町遺跡が存在する馬淵川・新井田川流域は、東北地方のなかでも特に遠賀川系的様相の強い土器が集中する地域として知られている（中村 1988、木村 2000、高瀬 2000、佐藤 2003）。今回の分析においても、剣吉荒町遺跡 1966 年調査出土土器のなかに、壺形、深鉢形双方に遠賀川系的様相の強い一群が多数存在していることが明らかになっただけでなく、深鉢（甕）形におけるハケ調整・器形１類の土器をはじめ、削出突帯・段をもつ壺形土器、蓋形と考えられる破片の存在など、これまで知られていた以上に、遠賀川系土器の要素がまとまる様子が見えてきたようである。

こうした馬淵川・新井田川流域の状況をめぐっては、これを東北地方における遠賀川系の要素の定着初期の様相を含むものとし、遠賀川系土器の情報（あるいはその一部）が、まずこの地域にもたらされ、その後、東北地方北部各地に拡がったことの根拠とする意見がある（高瀬 2000 など）。確かに、これまでの指摘通り、ハケ調整のみの深鉢（甕）形土器のように遠賀川系的様相の強い土器は、この地域にのみみられるものであり、今回の報告で明らかにした、削出突帯・段をもつ壺形土器や蓋形土器の存在からみても、遠賀川系土器の情報が、馬淵川・新井田川流域にダイレクトにもたらされた可能性は高そうである。さらに、他地域に上記のような要素が認められないのだとすれば、遠賀川系の要素が他地域に先んじてこの地域に定着し、拡散していったとするのが、依然最も妥当な解釈であることに変わ

りはないだろう。

とはいえ、今回の分析結果を踏まえると、これとは別の解釈も可能になってくるようである。馬淵川・新井田川流域には、確かに遠賀川系的様相の強い土器が集中しているものの、遠賀川系土器そのものと言える土器は存在しない。つまり、遠賀川系土器の情報の受容は、この地域でも限定的・選択的であることに変わりはないのである。であれば、遠賀川系土器の情報が、ほぼ同時に複数の地域にもたらされていたとしても、遠賀川系土器の情報の受容の仕方によって、それぞれの遠賀川系要素の定着の様相に差異が生じることがあっても、決して不思議ではなくなるはずである（佐藤 2003）。

そうした情報の選択にあたり、大型壺形土器にみられた「あり方 A」の場合では、遠賀川系的要素が特定の意味・機能と結びついていた可能性が高いこともあって、要素に対する選択性が強く働くと同時に、地域を超えた共通性が現れてくることが予想される。その一方、中型・小型の壺形土器や深鉢（甕）形土器にみられた「あり方 B」においては、「あり方 A」のような特定の器種との結びつきがなく、当初から亀ヶ岡系土器と融合するようなあり方を示すことから、より細かな地域ごとに遠賀川系要素の選択に差異が生じる可能性が高くなるはずである。また、「あり方 B」の差異には、当然、もたらされた情報量の差や受容側の人口なども深く関わることになる。つまり、馬淵川・新井田川流域に遠賀川系的様相の強い土器が集中し、特に深鉢（甕）形土器において、そうした傾向が強く表れた背景には、従来のような、この地域が遠賀川系土器の情報の受容地であり、拡散の起点であったとの解釈のほかに、上記のような地域ごとの選択的受容のあり方の違いが関わっていたことも考慮する必要があるのである。

さて、これまでの解釈では、東北地方に定着した遠賀川系の要素が、近畿地方の所謂第Ⅰ様式中段階に特徴的なものであることから、馬淵川・新井田川流域における遠賀川系の要素の受容時期を、第Ⅰ様式中段階に併行する大洞 A' 式期と想定してきた。それは、必ずしも大洞 A' 式土器と遠賀川系要素をもつ土器の共伴関係によって裏付けられていたわけではなかったが、土器の編年研究において、もはや砂沢式と第Ⅰ様式新段階の併行関係が動かなくなっていることもあり、現在では多くの研究者の支持を得ているように見受けられる。

ただし、今回報告した剣吉荒町遺跡 1966 年調査出土土器において、砂沢式土器が主体を占める土器群とともに、多数の遠賀川系の要素を持つ土器が出土していることは、遠賀川系的様相の強い土器も含め、これらが砂沢式土器に伴う可能性を強く示唆するものとなった。仮に、剣吉荒町遺跡出土の遠賀川系の要素を持った土器が、砂沢式期のものであるとすると、ハケ調整、器形 1 類の深鉢（甕）形土器、壺形土器の削出突帯・段、蓋形土器の存在など、遠賀川系の要素がダイレクトにもたらされているような状況を重視する限り、その前段階、つまり大洞 A' 式期に遡って遠賀川系土器の要素が受容された可能性は低いと考えざるを得ない。前節の櫻井氏の考察における、「現時点では最古の類遠賀川系土器は砂沢式土器に伴うと考えるのが最も実情に即していると言える」という結論からも、馬淵川・新井田川流域における遠賀川系の要素の受容時期が、砂沢式期に下る可能性が高まったと言っていいだろう。

もちろん、遠賀川系の要素の受容時期を大洞 A' 式期とする見解のなかには、本報告で砂沢式土器に含めた大坂報文の「八幡堂３群」並行期（≒品川欣也氏の砂沢式古段階、品川 2005）を、大洞 A' 式としているものが少なくない点には注意が必要である。ただ、その場合でも、遠賀川系の要素を持つ土器と共伴するのは、今のところ「八幡堂３群」並行期以降であり、それをもって典型的な大洞 A' 式期の資料とすることはできない。

いずれにせよ、東北地方北部における、遠賀川系の要素を持った土器の展開は、「八幡堂３群」並行期を含む砂沢式期のなかで生じていた可能性が高く、各地でのその具体的な定着の過程については、砂沢式の的確な細分と、各地における遠賀川系の要素と亀ヶ岡系の要素の関係に関する詳細な分析を通じて明らかにしていかなければならない。

また、その際には、各地における遠賀川系の要素の選択的受容のあり方をしっかりと把握しておくことが求められよう。遠賀川系の要素の定着時期を砂沢式期とすることに対する広域編年上の問題点については、櫻井報告に譲るが、津軽平野から庄内平野にかけての日本海側、そして下北半島でも、遅くとも大坂報文の「梨ノ木平段階」並行期（≒品川氏の砂沢式中段階）には、遠賀川系の要素を持つ土器が定着しているようであり、馬淵川・新井田川流域がこれらの地域に先行して遠賀川系の要素を受容したと、単純には言えなくなってきたことに注意を促しておきたいと思う。

・「遠賀川系」「類遠賀川系」というカテゴリーの問題

ここで触れたい、二つ目の論点は、「東北地方の遠賀川系」「類遠賀川系」というカテゴリーの問題点についてである。資料報告を含めて、ここまで筆者は、「東北地方の遠賀川系」「類遠賀川系」という言葉を用いてこなかったが、それは、これまでの研究で用いられてきた、これらのカテゴリーが、東北地方の弥生時代研究において、有効性を持たないばかりか、問題を含むと考えているからである。ここでは、剣吉荒町遺跡出土土器の分析結果を通じて、その理由を述べ

ておきたいと思う。

これまで繰り返し述べてきたように、剣吉荒町遺跡出土土器における遠賀川系要素の定着のあり方には、「あり方A」「あり方B」という二つの種類がみられた。「あり方A」は、遠賀川系的要素がまとまる大型広口短頸壺形土器が、砂沢式土器を構成するひとつの器種として確立していくあり方であり、そこでは遠賀川系の要素の一部が選択され、大型広口短頸壺形土器という遠賀川系土器には存在しない器種に定着するというものである。大型広口短頸壺形土器は、基本的に縄文を用いず、頸部と胴部上半に沈線文を配するという点で、遠賀川系的様相が強く保持されているように見えるが、あくまでも東北地方北部で成立した砂沢式土器のひとつの器種なのであり、外来系の器種という評価ができるものではない。

一方の、「あり方B」は、深鉢（甕）形土器に典型的にみられるもので、遠賀川系の諸要素が、当初から亀ヶ岡系の要素と混じり合うあり方である。剣吉荒町遺跡出土土器には、外傾接合の欠落という点を除くと、遠賀川系土器そのものと言っていいほど遠賀川系土器に類似した深鉢(甕)形土器も存在するが、そこから亀ヶ岡系の深鉢（甕）形土器まで、諸要素が交錯しつつ連続的なバリエーションが存在する。つまり、遠賀川系の要素は、「あり方A」のような特定の器種との結びつきを形成せずに、砂沢式の深鉢（甕）形土器のなかに溶け込んでいるわけである。こうした受容のされ方をした場合には、当然、時間の経過とともに遠賀川系、亀ヶ岡系の要素の混淆が進行し、ある形態的特徴をもつ深鉢（甕）形土器へとまとまっていくことが予想されるが、そうした過程を経て、五所式、横長根A式、原式等の東北各地の中期弥生式土器の深鉢（甕）形土器が形成されていくわけである。

確かに、「あり方B」を示す土器の場合、遠賀川系的様相の強い土器が、深鉢（甕）形土器のバリエーションとして組成している馬淵川・新井田川流域では、そのうちの遠賀川系土器にごく近い特徴をもつ土器（例えば26～29など）を抜き出し、「類遠賀川系」と呼ぶことも不可能ではないだろう。しかし、これら以外のものは、亀ヶ岡系と融合している様子が顕著に認められ、亀ヶ岡系の要素との強弱の判断、あるいはどこまでを「類遠賀川系」とすべきか迷うものが多くなってくる。いずれにしても、26～29のような土器を含め、選択された遠賀川系の要素が亀ヶ岡系のなかに溶け込みつつある状況を示すのが、馬淵川・新井田川流域の砂沢式の深鉢（甕）形土器なのであって、他地域では、その受容の仕方の違いによって、これとはまた異なる砂沢式深鉢（甕）形土器が展開していたわけである。

「あり方A」の大型広口短頸壺形土器にしても、「あり方B」の土器群にしても、砂沢式とそれ以後の遠賀川系の要素の展開をみる限り、遠賀川系土器そのものとは完全に切り離され、それぞれの土器型式のなかで変化を遂げていることは明らかである。東北地方の「遠賀川系」の概念に対し、正しい方向から疑問を投げかけた鈴木正博氏の言葉を借りると（鈴木1987）、これらはすでに外来系土器としての「流れ」が流れているのである。もちろん、そうであっても、遠賀川系の要素、あるいは遡れば遠賀川系に繋がる要素をもつ土器の一部を抜き出し、「東北地方の遠賀川系」「類遠賀川系」として分類すること自体は可能である。しかし、そうした分類が、東北地方の弥生時代研究にとって意味のある分類として機能するかは別問題である。

砂沢式及び砂沢式以降の東北地方北部の土器型式の展開をみる限り、砂沢式の成立及びその時期の地域的差異の発現に関し、遠賀川系の要素の受容という現象が重要な意味を持つことは疑いないところであろう。また、東北地方北部における水田稲作技術の定着が、砂沢式の成立と一体のものであるとすれば、その歴史学的意義はさらに大きくなるはずである。ただしその一方で、遠賀川系をはじめ西部弥生式土器の要素の受容が一過性のものにとどまり、その際に受容された要素が、在地の土器型式のなかで中期まで継続するという点も、東北地方の弥生文化の特質、およびその時空間的展開を理解するうえで、常に念頭に置いておかなければならないことなのである。

であれば、すでに遠賀川系の「流れ」が流れ、在地の土器型式の構成要素となった土器群の一部を、西部弥生式土器との強い関連性を想起させる「遠賀川系」「類遠賀川系」という言葉をもって抜き出すことは、東北地方の弥生文化の展開を理解するうえで、障害になりこそすれ、有効性をもつことは少ないのではなかろうか。近年、弥生文化の多様性を強調する傾向、または、東日本あるいは東北地方の弥生文化の特質とその歴史的意義に積極的に目を向けようとする視点が明確になってきているが（高瀬2004、設楽2005など）、そうした研究が意味のある方向に進むためには、そろそろ「遠賀川系」「類遠賀川系」の呪縛から解き放たれなければならない、と考えるのは、筆者ひとりではないはずである。

以上が、本報告で筆者が「遠賀川系」「類遠賀川系」という言葉を使用しなかった理由である。

引用・参考文献

木村早苗　2000「青森県出土の「遠賀川系土器」」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会　699-734 頁
小林行雄　1934「一の伝播変移現象」『考古学』第５巻第１号　9-16 頁
佐藤由紀男　2003「本州北部の『遠賀川系的要素を持つ土器群』について」『みずほ』第 38 号　大和弥生文化の会　62-82 頁
設楽博己　2005「東日本農耕文化の形成と北方文化」『稲作伝来』先史日本を復元する４　岩波書店　113-163 頁
品川欣也　2005「砂沢式土器の細分と五所式土器の位置づけ」石川日出志編 2005『科学研究費補助金基盤研究　B2　関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年』31-42 頁
佐原　眞　1987「みちのく遠賀川」『東アジアの考古と歴史 中 岡崎敬先生退官記念論集』同朋社出版　265-291 頁
鈴木正博　1987「『流れ』流れて北奥「遠賀川系土器」」『利根川』８　利根川同人　12-18 頁
高瀬克範　2000「東北地方初期弥生土器における遠賀川系要素の系譜」『考古学研究』第 46 巻第４号　34-54 頁
高瀬克範　2004『本州島東北部の弥生社会誌』六一書房
中村五郎　1988『弥生文化の曙光』未来社

写真 48　No. 3（外面）

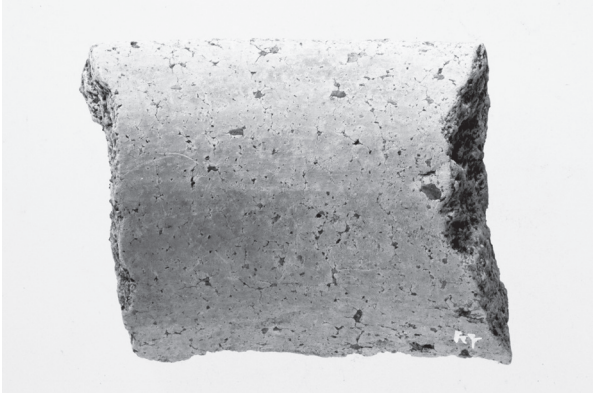


写真 49　No. 3（内面）

写真 50　No. 4（外面）

写真 51　No. 4（内面）

写真 52　No. 6

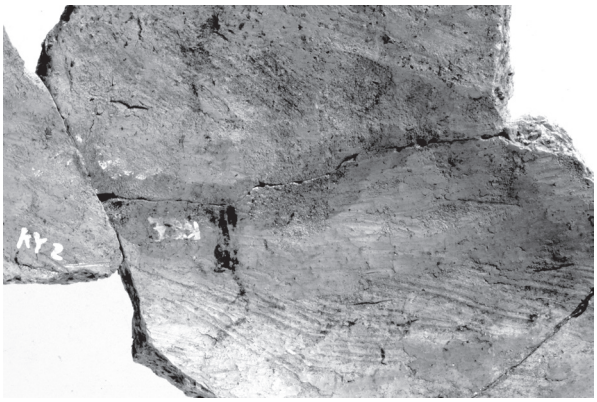


写真 53　No. 8（内面）

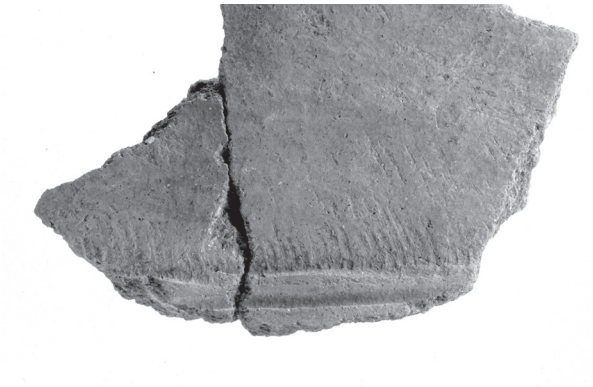


写真 54　No.13

写真 55　No.14

写真 56　No.15

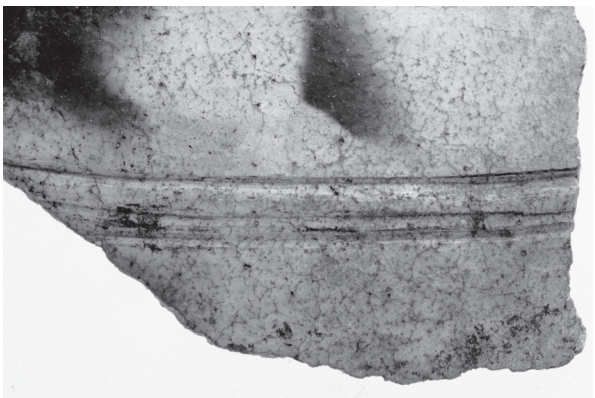


写真 57　No.17

写真 58　No.25（外面）

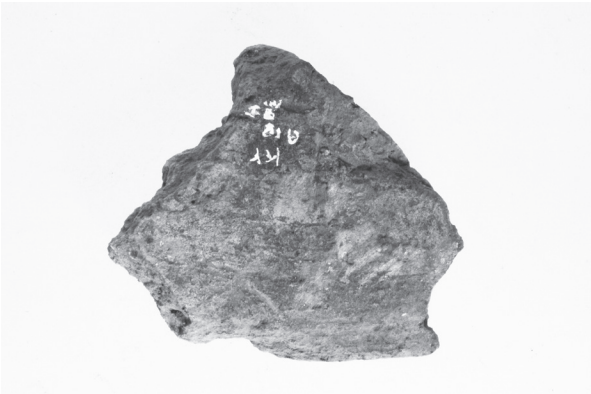


写真 59　No.25（内面）

写真 60　No.27（口縁部外面）

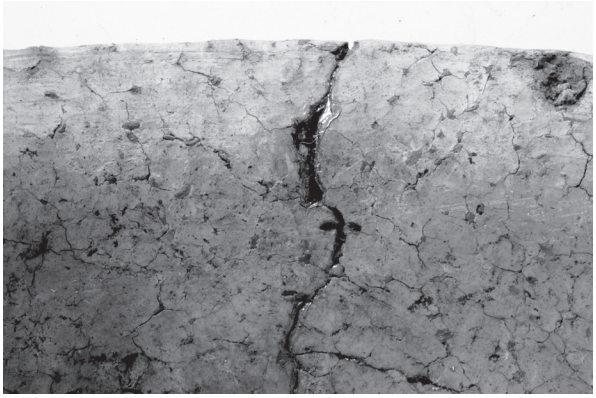


写真 61　No.27（口縁部内面）

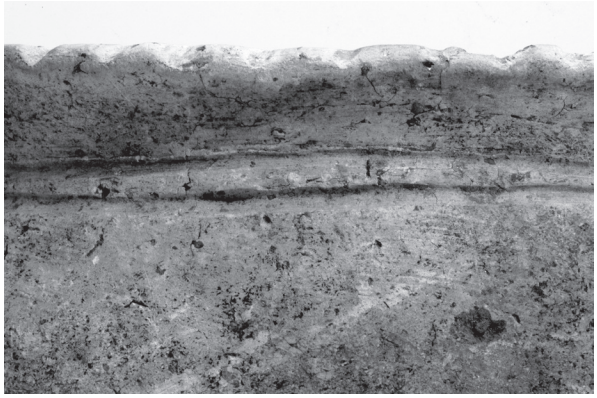


写真 62　No.28（口縁部外面）

写真 63　No.28（口縁部内面）

写真 64　No.29（口縁部外面）

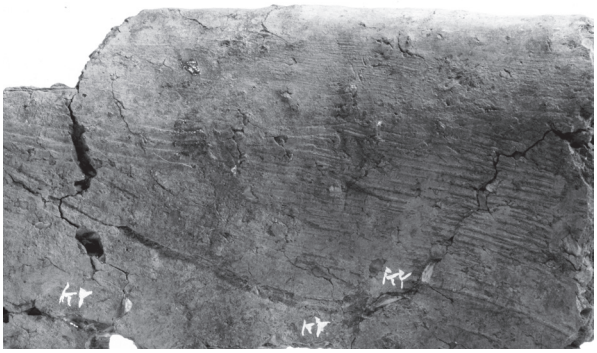


写真 65　No.29（口縁部内面）

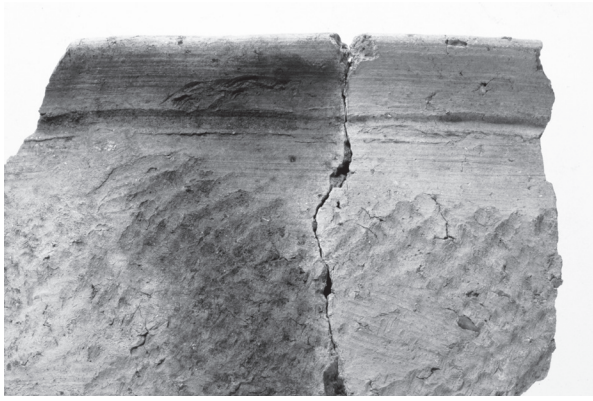


写真 66　No.33（口縁部外面）

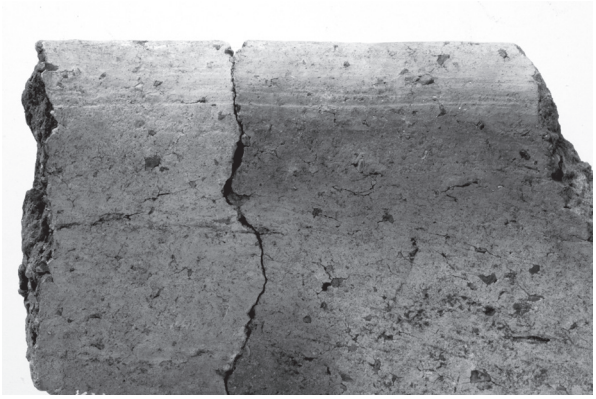


写真 67　No.33（口縁部内面）

写真 68　No.34（口縁部外面）

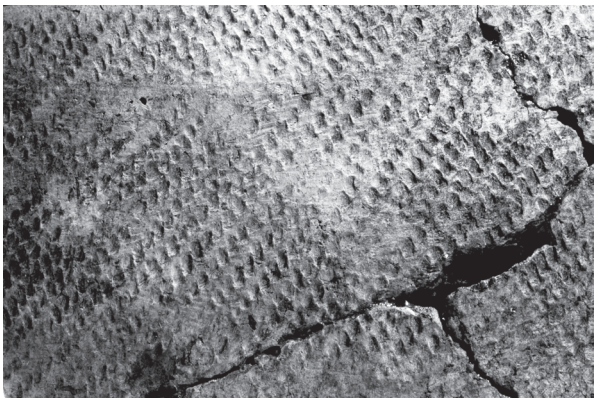


写真 69　No.34（胴部外面）

写真 70　No.34（口縁部外面）

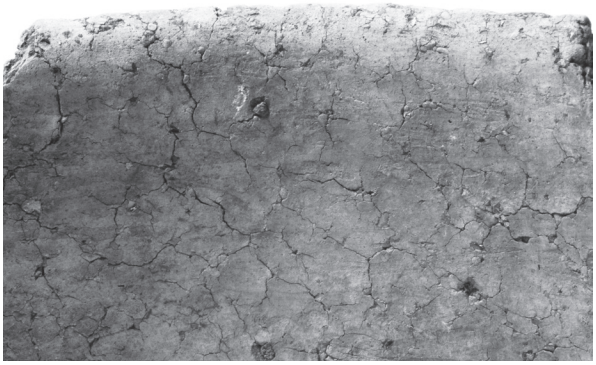


写真 71　No.34（口縁部内面）

写真 72　No.36（口縁部外面）

写真 73　No.37（口縁部外面）

写真 74　No.38（口縁部外面）

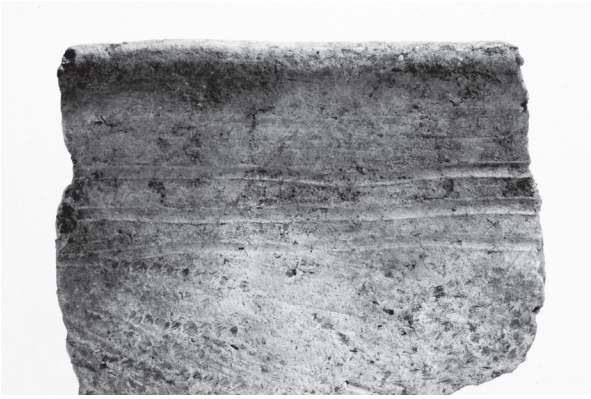


写真 75　No.39（口縁部外面）

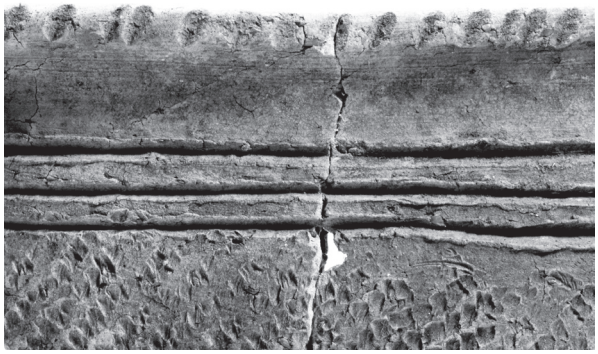


写真 76　No.41（口縁部外面）

写真 77　No.41（口縁部内面）

写真 78　No.42（口縁部外面）

写真 79　No.43（口縁部外面）

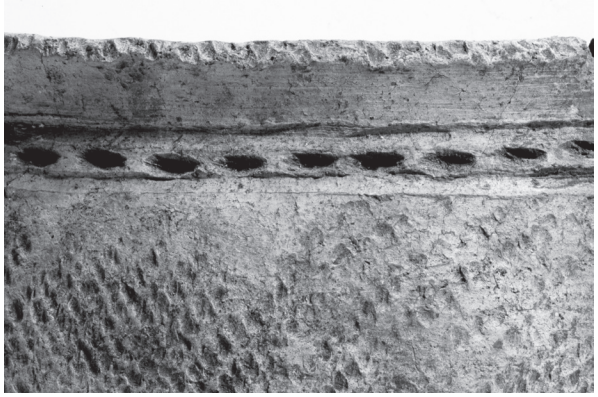


写真 80　No.44（口縁部外面）

写真 81　No.45（外面）

写真 82　No.47（口縁部外面）

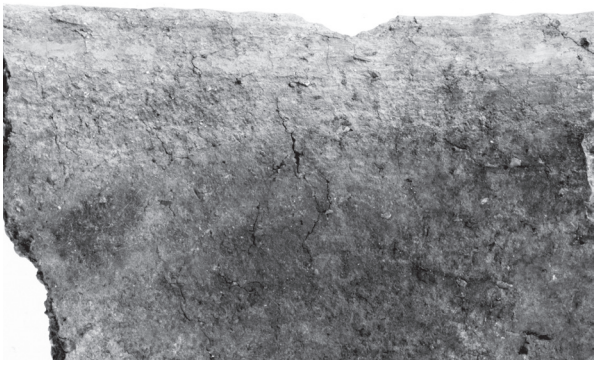


写真 83　No.47（口縁部内面）

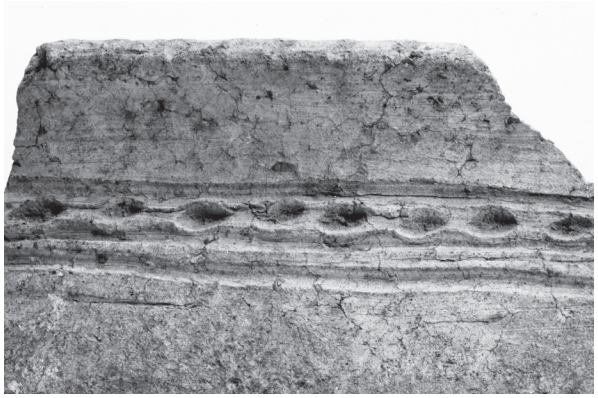


写真 84　No.48（口縁部外面）

写真 85　No.49（口縁部外面）

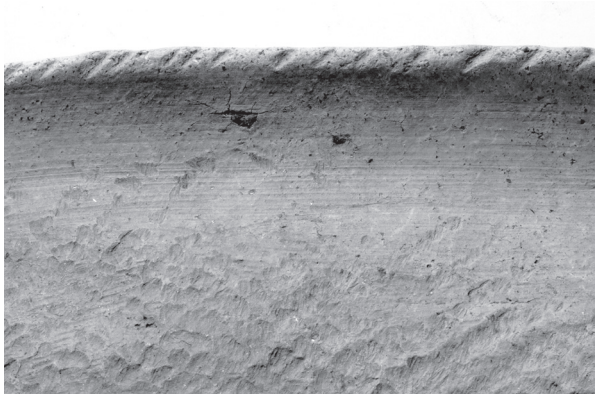


写真 86　No.50（口縁部外面）

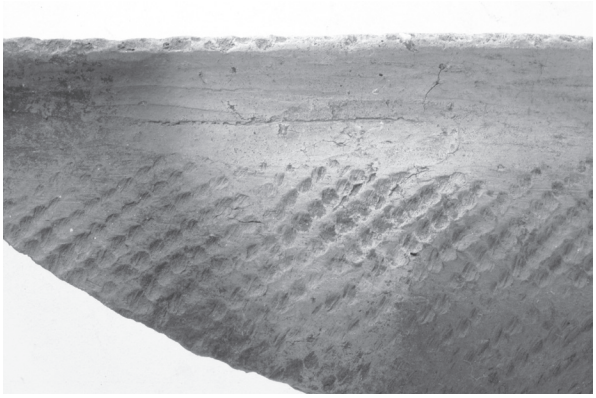


写真 87　No.51（口縁部外面）

写真 88　No.52（口縁部外面）

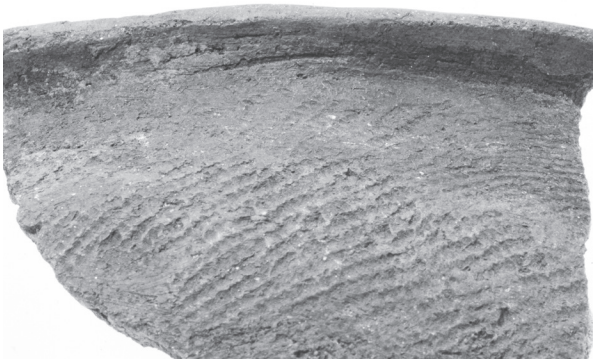


写真 89　No.54（口縁部外面）

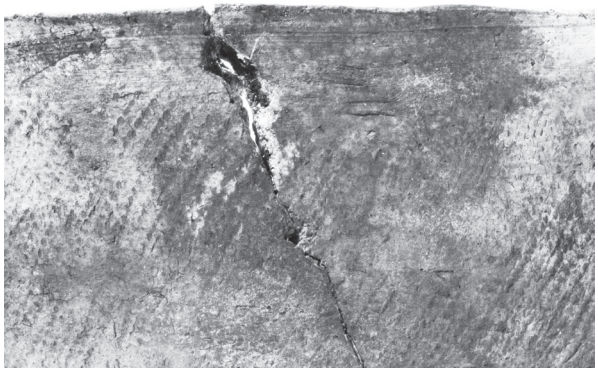


写真 90　No.53（口縁部外面）

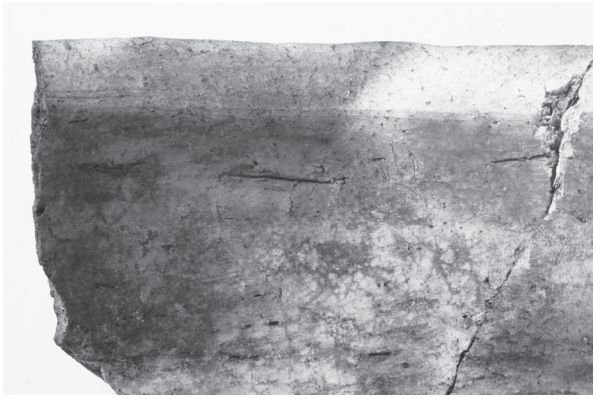


写真 91　No.53（口縁部内面）

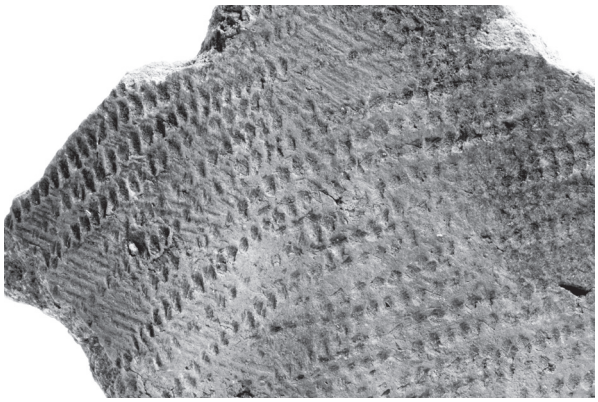


写真 92　No.56（外面）

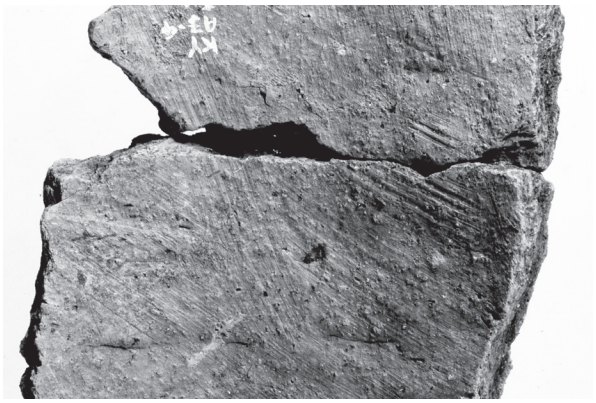


写真 93　No.59（内面）

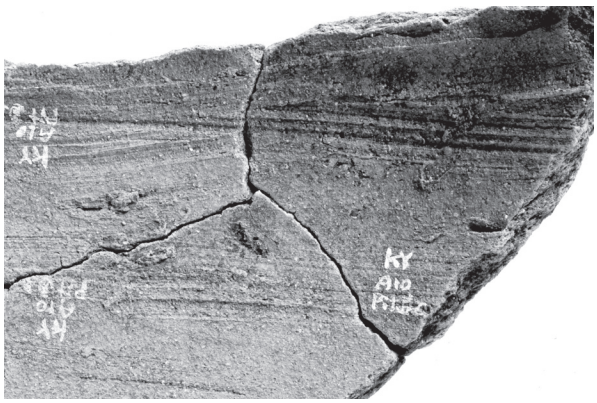


写真 94　No.95（内面）

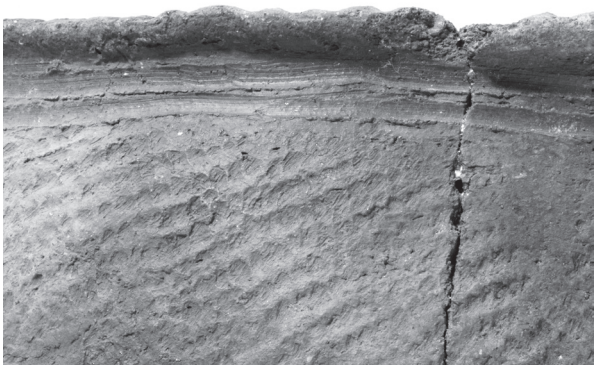


写真 95　No.108（口縁部外面）

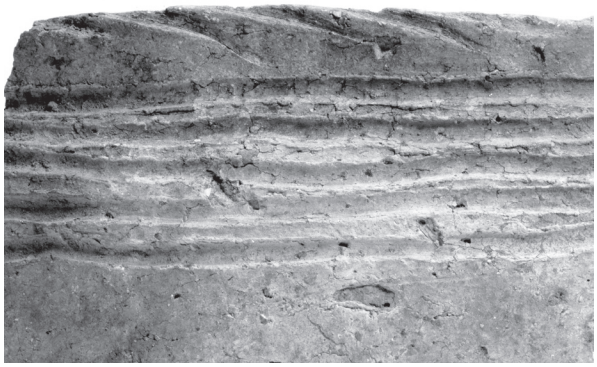


写真 96　No.105（口縁部外面）

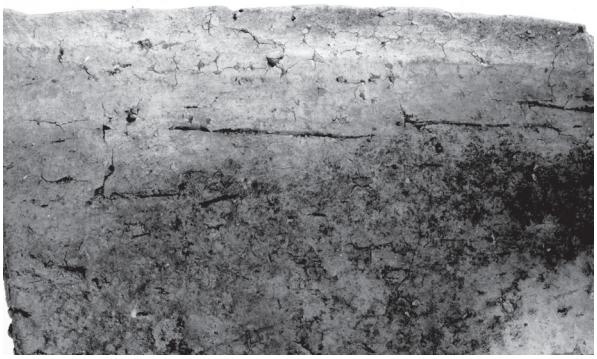


写真 97　No.105（口縁部内面）

写真 98　No.77（外面）

写真 99　No.77（内面）

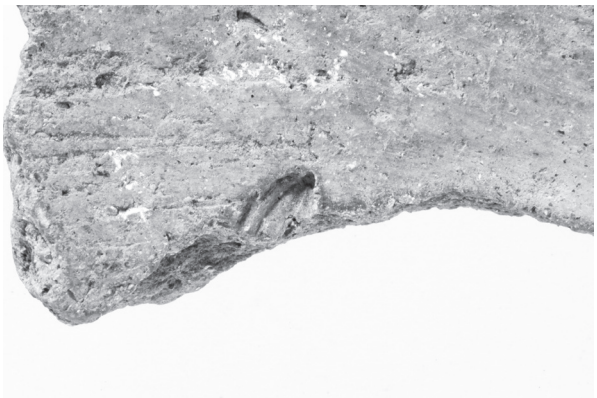


写真 100　No.77（籾痕）

付編　剣吉荒町遺跡・八幡堂遺跡出土土器付着物の ^{14}C 年代測定

小林謙一[1)]・遠部 慎[2)]・坂本 稔[3)]

1) 中央大学文学部

2) 北海道大学埋蔵文化財調査室

3) 国立歴史民俗博物館研究部

神奈川県慶應義塾大学民族学考古学研究室所蔵の青森県名川町剣吉遺跡・青森県下北郡佐井村八幡堂遺跡土器付着物の加速器を用いた ^{14}C 年代測定を行ったので、その結果を報告する。試料は、安藤広道氏が提供した土器から小林が採取したもので、６点の土器から採取したが、炭素残存量が少ない試料が多く、３点が測定できた。測定は東京大学大学院工学系研究科原子力国際専攻タンデム加速器研究施設によるものである。測定結果は計測値 (補正) とともに実年代の確率を示す較正年代値を示した。また、その根拠となった較正曲線を示した。

１．試料と炭化物の処理

試料は、AOKO-11 は剣吉遺跡 A9 区黒土層 PIT 出土の弥生前期砂沢式鉢形土器（第 58 図 97）の胴上部内面付着物、AOKO-C13 は剣吉遺跡 A9 区黒土層出土の弥生前期砂沢式粗製深鉢形土器（第 59 図 125）の胴上部外面付着物、AOKO-C14 は八幡堂遺跡 C 区黒土層出土の縄文晩期大洞 A' 式深鉢形土器（第 40 図 162）の胴上部内面付着物である。

試料については、前処理として AAA 処理（塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 0.1N からはじめ最終的に 1N, 塩酸 1.2N）を行った[1)]。前処理後、年代測定室において坂本稔が二酸化炭素化燃焼を行った。

２．測定結果と暦年較正

AMS による ^{14}C 測定は、東京大学大学院タンデム加速器研究施設の AMS で、同時に作成した標準試料とともに測定した。測定結果は、下記の通りである。

測定結果は、同位体効果を補正し、IntCal04 を用い、RHC3.31 によって較正年代を算出した (第 66 図)[2)]。横に示す％が、それぞれの２σの範囲での較正年代値と確率（合計すると 95.4%）である。

３．測定結果の解釈と暦年較正年代の解釈

剣吉遺跡の AOKO-11 は、2780 ± 60 ^{14}C BP の測定値で、佐井遺跡の AOKO-14 とともに明らかに古い測定値である。これまでの小林らの測定値（小林 2007 ほか）に比べ、200 ～ 400 ^{14}C 年古い傾向がある。これらの試料はともに内面付着物で調理物のお焦げと考えられる。試料の安定同位体比である δ ^{13}C 値は、試料が少なく質量分析計では測定できなかったが、AMS による測定結果を見ると、AOKO-11 は -24‰前後、AOKO-14 は -22‰前後と、通常の陸上の動植物がとる値である -25 ～ -26‰に比べ重たい（マイナスの値が小さい）。これは、海産物のお焦げである可能性があり、海洋リザーバー効果の影響を受けているものと考えられる（小林ほか 2005）。これまでの測定でも、秋田県・青森県・岩手県沿岸部や北海道の遺跡の土器付着物（三内丸山遺跡の前中期、秋田・青森・岩手県内の後晩期遺跡）では、内外面付着物で内面付着物について δ ^{13}C 値が重く（-20 ～ -24‰）、炭素 14 年代も外面付着物に比べ数百年古くなる試料が多く認められている。東北地方の縄文文化において、海産物の煮炊きが数多く行われていた結果を反映しているものと考える。

剣吉遺跡の砂沢式土器付着物 AOKO-13 は、外面付着物（煤）であり海洋リザーバー効果の影響を考える必要はな

試料番号	測定機関番号	δ ^{13}C 値（AMS 測定）	炭素 14 年代	較正年代 cal BC
AOKO-11	MLT-11293	(-24.3 ± 0.8)	2780 ± 60	BC1110-1100　0.9%, BC1085-1060　1.9%, BC1055-810　92.7%
AOKO-13	MLT-11294	(-27.0 ± 1.0)	2445 ± 35	BC750-685　22.8%, BC665-630　9.8%, BC625-610　2.5%, BC595-405　59.9%,
AOKO-14	MLT-11295	(-21.8 ± 1.5)	2920 ± 60	BC1310-970　92.9%, BC960-930　2.5%,

い。実際にAMSによるδ^{13}C値は-27‰と、陸上の植物（枝・枯草・薪などの燃料材が考えられる）に由来する炭素で、土器使用年代に近いと考えてよいであろう。この年代値は2445±35^{14}CBPで、「2400年問題」と称している炭素濃度の異常な時期であり、較正曲線が寝ているような濃度変化であり、較正曲線では年代が絞りにくい時期である。これは、過去の大気濃度の変動によるもので、避けられない。前7～5世紀頃の試料は、ほとんどが2450^{14}CBPころの値をとってしまうのである。AOKO-14も、IntCal04を用いた較正年代では、紀元前750～405cal BCの中の１時点の年代であることしか示せない。ただし、これまでの小林による砂沢式期の試料の測定結果（岩手県北上市の例他（小林ほか2007）でも、おおよそ同一の測定結果から2350^{14}CBPころまでの結果を得ており、剣吉遺跡の結果も東北地方弥生前期が前8～5世紀ないしはその直後の前4世紀前半までに含まれる可能性を支持している。

以上、土器型式の実年代推定には厳しい結果となったが、内外面付着物において顕著な差が出たこと、安定同位体比にも差が出ていることから、縄文晩期末葉から弥生前期における食性復元に興味深いデータとなった。また、すぐさま年代を絞り込めるのではないが、弥生前期砂沢式期の年代推定データに1例を加えることができた。

平成19年度学術振興財団科学研究費補助金基盤研究C「炭素14年代測定を利用した縄紋時代の居住期間の研究」（2007～2009年度）（19520662　研究代表者小林謙一）、平成19年度科学研究費補助金（学術創成研究）「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築―」（研究代表　西本豊弘　課題番号16GS0118）の成果である。暦年較正については今村峯雄の方法に従う。日本産樹木による較正値の推定については尾嵜大真に教示を得ている。本稿は、小林謙一が記した。

註

１）下記の方法で処理した。

(1) 前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄

AAA処理に先立ち、土器付着物については、アセトンに浸け振とうし、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（2回）。AAA処理として、80℃、各1時間で、希塩酸溶液（1N-HCl）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（2回）し、さらにアルカリ溶液（NaOH、1回目0.1N、3回目以降1N）でフミン酸等を除去した。アルカリ溶液による処理は、5回行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理2回（1N-HCl 1時間）を行いアルカリ分を除いた後、純水により洗浄した（4回）。

(2) 二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を燃焼（二酸化炭素化）、真空ラインを用いて不純物を除去。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともに石英ガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で、850℃で3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス製真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

(3) グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

1.5mgの炭素量を目標に二酸化炭素を分取し、水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを電気炉で、およそ600℃で12時間加熱してグラファイトを得た。ガラス管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合させた後、穴径1mmのアルミニウム製カソードに600Nの圧力で充填した。

２）測定値について、以下の方法で較正年代を算出した。

年代データの^{14}CBPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した^{14}C年代（モデル年代）であることを示す。^{14}C年代を算出する際の半減期は、5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（1標準偏差、68％信頼限界）である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の^{14}C/^{12}C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した^{13}C/^{12}C比により、^{14}C/^{12}C比に対する同位体効果を調べ補正する。^{13}C/^{12}C比は、標準体（古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの^{13}C/^{12}C比）に対する千分率偏差δ^{13}C(パーミル，‰)で示され、この値を-25‰に規格化して得られる^{14}C/^{12}C比によって補正する。補正した^{14}C/^{12}C比から、^{14}C年代値（モデル年代）が得られる。加速器による測定は同位体補正効果のためであり、必ずしも^{14}C/^{13}C/^{12}C比を正確に反映しないこともあるため、加速器による測定を（）で参考として付す。

測定値を較正曲線IntCal04（^{14}C年代を暦年代に修正するためのデータベース、2004年版）（Reimer et al. 2004）と比較することによって暦年代（実年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、国立歴史民俗博物館で作成したプログラムRHCal（OxCal Programに準じた方法）を用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95％信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦　cal BCで示す。（）内は推定確率である。

引用・参考文献

小林謙一　2004「東日本」『弥生時代の実年代』（春成秀爾・今村峯雄編）学生社

小林謙一　2007「関東における弥生時代の開始年代」『縄文時代から弥生時代へ』新弥生時代のはじまり第２巻　西本豊弘編　雄山閣　52-65頁

小林謙一・遠部慎　2007「岩手県北上市内遺跡出土試料の ^{14}C 年代測定成果」『北上市埋蔵文化財年報 (2005 年度)』北上市立埋蔵文化財センター
小林謙一・坂本　稔・松崎浩之　2005「稲荷山貝塚出土試料の ^{14}C 年代測定―層位的出土状況の分析と海洋リザーバー効果の検討のために―」『縄文時代』16　縄文時代文化研究会　209-226 頁
坂本　稔　2007「安定同位体比に基づく土器付着物の分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』137　305-315 頁
設楽博己・小林謙一　2004「縄文晩期からの視点」『季刊考古学』88　60-66 頁　雄山閣
Reimer, Paula J, et al.　2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0–26 cal kyr BP　Radiocarbon 46(3), 1029-1058.

写真 101　AOKO11 測定資料

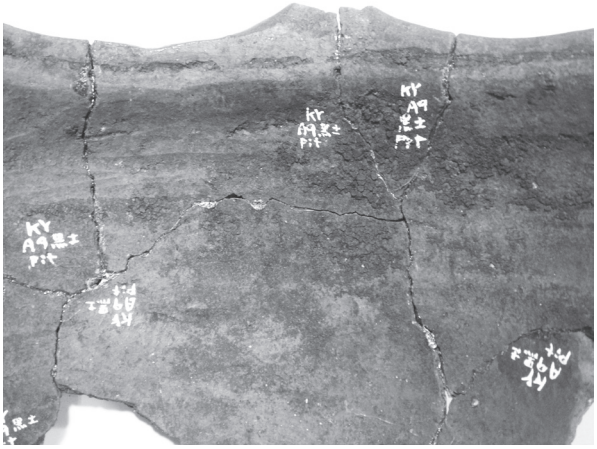


写真 102　AOKO11 炭化物付着状況（内面）

写真 103　AOKO13 測定資料

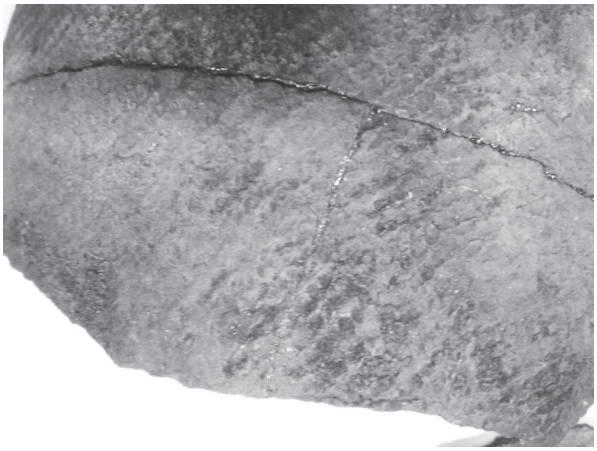


写真 104　AOKO13 炭化物付着状況（外面）

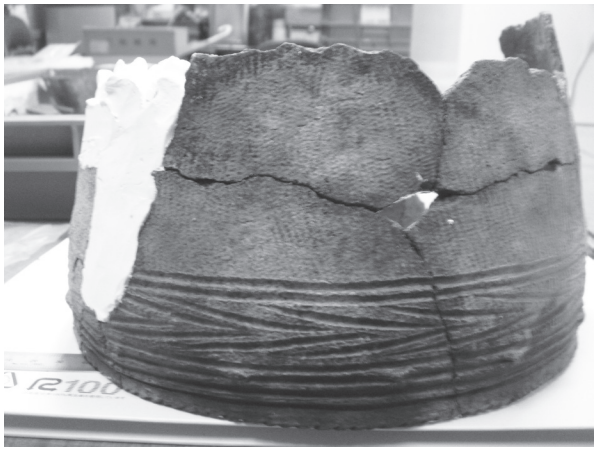


写真 105　AOKO14 測定資料（上下逆）

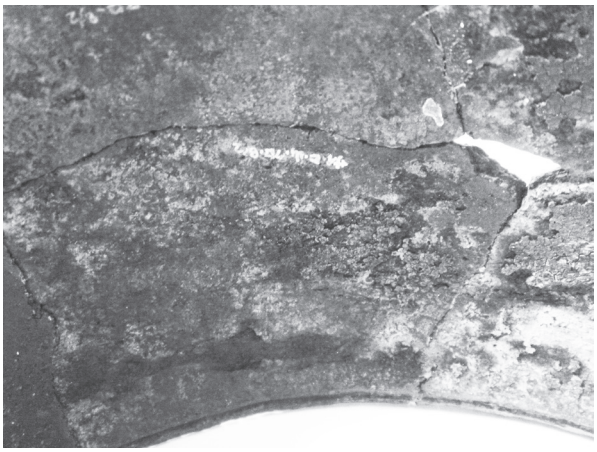
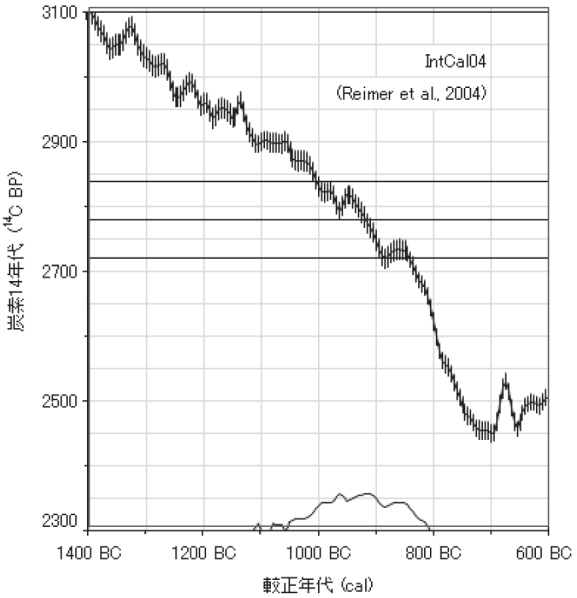
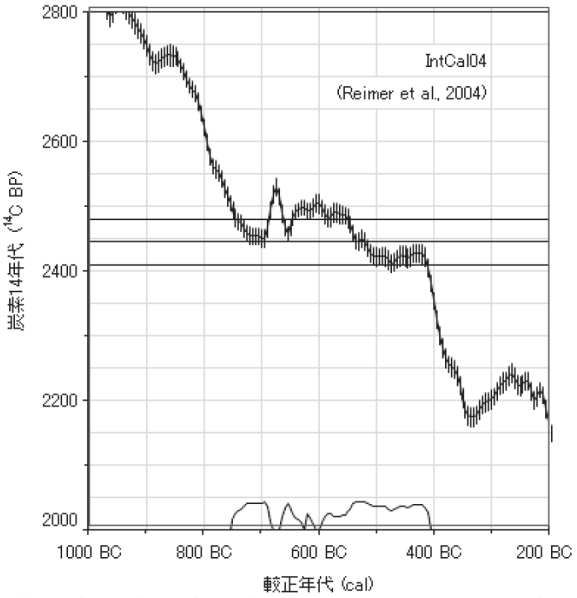


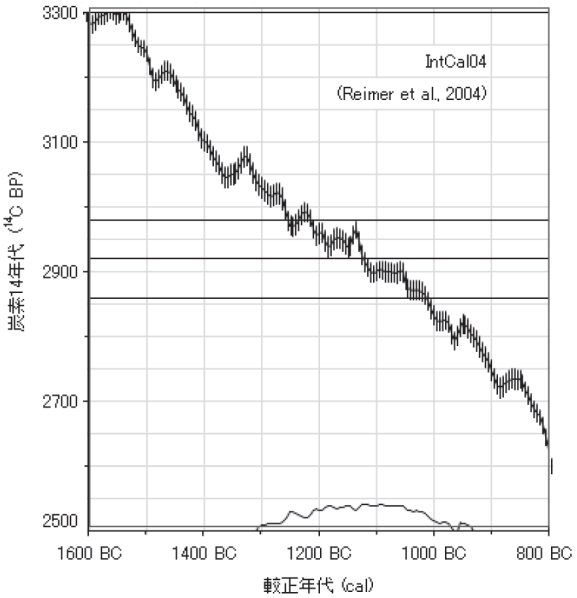
写真 106　AOKO14 炭化物付着状況（内面・上下逆）



試料番号	AOKO-11				
機関番号	MTC-11293				
炭素14年代	2780	±	60	^{14}C BP	
較正年代	1110 cal BC	–	1100 cal BC		0.9%
	1085 cal BC	–	1060 cal BC		1.9%
	1055 cal BC	–	810 cal BC		92.7%
	–		–		–
	–		–		–
	–		–		–
	–		–		–
	–		–		–
	–		–		–
	–		–		–
					95.40%
	中央値		935 cal BC		
	最頻値		915 cal BC		



試料番号	AOKO-13				
機関番号	MTC-11294				
炭素14年代	2445	±	35	^{14}C BP	
較正年代	750 cal BC	–	685 cal BC		22.8%
	665 cal BC	–	630 cal BC		9.8%
	625 cal BC	–	610 cal BC		2.5%
	595 cal BC	–	405 cal BC		59.9%
	–		–		–
	–		–		–
	–		–		–
	–		–		–
	–		–		–
	–		–		–
					95.09%
	中央値		545 cal BC		
	最頻値		535 cal BC		



試料番号	AOKO-14				
機関番号	MTC-11295				
炭素14年代	2920	±	60	^{14}C BP	
較正年代	1310 cal BC	–	970 cal BC		92.9%
	960 cal BC	–	930 cal BC		2.5%
	–		–		–
	–		–		–
	–		–		–
	–		–		–
	–		–		–
	–		–		–
	–		–		–
	–		–		–
					95.44%
	中央値		1130 cal BC		
	最頻値		1120 cal BC		

第 66 図　確率度数分布

本研究の成果と課題

安藤広道

（1）研究全体に関して

冒頭に述べたとおり、本研究の目的は、東日本先史時代土器の編年研究を進める上で重要な意味をもつ、既発掘の標式資料・基準資料の整理・分析を行い、編年研究の基盤整備を進めることにあった。本研究では、そうした資料として慶應義塾大学民族学考古学研究室が保管している、最花貝塚遺跡 1964 年調査、八幡堂遺跡 1968 年調査、剣吉荒町遺跡 1966 年調査の出土土器を取り上げ、これまでほとんど報告・公開されることのなかったこれらの資料を、研究資源として活用可能なものにすることを目指し、整理・分析を行ってきたわけである。

研究代表者の計画の甘さと準備不足のために、研究協力者の３氏には、相当な無理をお願いすることになってしまったが、幸い３氏が、それぞれの資料を自身の研究対象として選んでくれたことで、資料報告、研究報告ともに、かなり充実した内容となった。ここで報告した各遺跡出土土器が、東日本の先史時代土器編年研究のなかで、今後重要な意味をもつようになることは疑いないものと考えている。

とはいえ、いずれの資料も、報告すべき土器を全て図化・掲載できたわけではないことは事実である。各資料の報告にも記してあるが、例えば、最花貝塚遺跡 A 地点出土土器では、口縁部と底部をもつ破片の資料化を優先したため、胴部破片の多くについては報告を断念せざるを得なかった。また、八幡堂遺跡出土土器に関しては、弥生時代中期の土器の資料化にまで手を回すことができなかった。剣吉荒町遺跡出土土器も、亀ヶ岡系土器の資料化を充分に行うことができなかったのは残念でならない。研究をスタートさせてから資料数が大幅に増加したこともあるが、報告すべき資料を残してしまったことは、研究計画上の大きな反省点と考えている。

ここで報告した資料の価値をより高めていくためにも、本研究で報告できなかった資料については、今後、時期をみて、補遺を行っていくつもりである。

また、今回は、各遺跡の調査記録、図面、写真等の探索に関しても、充分とは言えないものになってしまった。江坂氏の調査した遺跡の記録類は、全てが民族学考古学研究室に保管されているわけではなく、他機関、あるいは個人によって保管されているものが少なくないこもがわかってきた。今後は、こうした、慶應義塾外の記録類についても調査を進めていかなければならないと考えている。

（2）各遺跡の資料報告、研究報告について

・最花貝塚遺跡 A 地点出土土器の分析

本研究で行った最花貝塚遺跡 A 地点出土土器の分析の最大の成果は、何といっても、これまで実態が不明と言われ続けてきた「最花式」の標式あるいは基準となる資料を提示できたことである。もちろん、ここで報告した資料は、江坂氏による「最花式」設定当初の標式資料そのものではない。しかし、最花貝塚遺跡の発掘調査の歴史、そして「最花式」をめぐる研究史を紐解くことで、この資料を標式・基準として、「最花式」を再設定すべきであることが明らかになったと考えている。

本研究では、「最花式」の再設定には至らなかったが、それは、最花貝塚遺跡 A 地点出土土器の整理・分析を進めるなかで、東北地方北部の縄文時代中期後葉～末葉の土器編年が大きな問題を内包しており、今後、全体に及ぶ再構成が必至であると認識するようになったからでもある。「最花式」の再設定は、より広い研究の枠組みのなかで議論をしていかなければならない。

研究史のところでも述べたとおり、「最花式」を含む東北地方北部の中期後葉の土器型式は、中の平Ⅲ式の膨張と、中の平３式への名称の変更を経て、多様な様相を含む「ある地域の時期区分・段階」として理解されるようになっている。また、そうしたなかで、設定当初の中の平Ⅲ式をその前半に、今回報告した最花貝塚遺跡 A 地点出土土器に近いものを後半に位置付ける意見も定着しつつあるようである。しかし、仮に、最花貝塚遺跡 A 地点出土土器を「最花式」の標式とし、設定当初の中の平Ⅲ式の標式資料と対比すると、両者には、器形、文様ともに非常に大きな相違が認められるだけでなく、時間的に新しい前者に、円筒上層式や榎林式から続く諸要素が色濃く残っているなど、両者を単純に一つの系統の時間的変化とするだけでは説明の困難な問題が浮かび上がってくることになる。

東北地方北部の該期の土器群は、円筒上層式土器から続く要素と、大木８ｂ式、９式によって付加された要素が絡み合うことで、さまざまな地域的・時期的様相を示しているようであり、その年代学的整理には、従来の型式の再検討と、新たな型式の設定が不可欠と考えている。少なくとも、中の平３式をはじめとする現在用いられている型式の

細分というかたちでは、理解は困難だろう。今後は、最花貝塚遺跡A地点出土土器を標準にした「最花式」の再設定を基点にして、縦横に連鎖した型式による年代学的組織の再構築へと進んでいかなければならない。

・八幡堂遺跡出土土器の分析

八幡堂遺跡出土土器の分析についても、まずは大洞A2式から砂沢式の資料が少ない下北半島における、該期の良好な資料を提示できたことが大きな成果となった。個体数が多いこともあって、この資料が、下北半島のみならず、東北地方全体においても、今後重要な位置を占めるようになっていくことは疑いない。

もちろん、八幡堂遺跡は、大洞A2式～砂沢式の分布範囲からすれば縁辺に近い位置にあり、ここでの編年が、直ちに大洞A2式～砂沢式全体の編年に結びつくわけではない。また、包含層が薄く層位的な情報に恵まれていないことにも注意が必要である。

とはいえ、そこに、大洞A2式とA'式の区分、A'式の細分、A'式と砂沢式の区分、砂沢式の細分等、該期の編年研究上のさまざまな問題を検討し得る、非常に多くの情報が含まれていることは間違いない。大洞A2式に関しては、現在、型式名は定着しつつあるとはいえ、地域差を含めたその内容となると、必ずしも共通した見解があるわけではない。八幡堂遺跡出土土器には、大洞A2式の指標とされる「変形匹字文」を持つ個体が少ないという特徴があり、大洞A2式の地域差や、「変形匹字文」の消長を検討するうえで、興味深い内容を持つと評価することができる。

また、大洞A'式と砂沢式の区分や、砂沢式の細分も、現在、研究者ごとの意見に少なからぬ違いが認められるところである。八幡堂遺跡出土土器には、砂沢式の古い段階、あるいは人によっては大洞A'式に含める土器がまとまっており、これらの問題を検討し得る格好の資料になるものと考える。大洞A'式と砂沢式の区分は、当然のことながら、東北地方北部の縄文・弥生の時代区分に直結する問題であり、その意味でも、八幡堂遺跡出土土器は、重要な鍵を握る資料ということができる。

本研究では、大坂氏が、八幡堂遺跡出土土器の微視的な分析を踏まえた、下北地域の編年試案を提示している。大坂氏の方法は、従来の文様の分類とその系統的変化を中心に据えた視点とは異なり、そうした文様の変遷を踏まえつつも、器形や内面沈線の描出手法、胎土の特徴等の、よりミクロな属性の変化に注目している点に特徴がある。もとより、土器には、文様以外にも多様な時間的属性が含まれていることは間違いなく、そうした属性の分析は、編年研究の精緻化に欠かせないものである。

とはいえ、多様な時間的属性に対する比重の置き方によって、その結論が変化することになるのも当然である。大坂氏の立場からすれば、私も文様や文様帯の変遷を偏重する研究者ということになるのだろうが、そうしたこともあって、八幡堂遺跡の個々の土器の位置づけに対しては、大坂氏との間に、少なからぬ意見の相違が生じることになった。しかし、私は、こうした意見の相違こそが、研究を前進させる力になると確信するものである。本研究の編年試案が、今後の編年研究のなかで、叩き台になっていくことを期待したいと思っている。

・剣吉荒町遺跡出土土器の分析

剣吉荒町遺跡出土土器については、遠賀川系の要素をもつ土器の抽出という点に主眼を置いたため、これまでの2遺跡の報告とは異なり、資料報告としては変則的なものになった。こうした方法をとった背景には、研究のスタート時点で、私が、遠賀川系の要素をもった土器（当時は「遠賀川系」「類遠賀川系」という言葉を用いていた）と亀ヶ岡系土器の類別、及び前者の抽出を容易と考えていたことがある。しかし、研究報告にも記したとおり、その見通しは完全に間違っていた。

今から振り返れば当たり前のことであるが、実際に分析を進めていくと、両者は分かちがたく結びついており、その具体的な分析において、亀ヶ岡系土器を含む全体の把握が不可欠であることが明らかになった。今回、充分な報告ができなかった、亀ヶ岡系土器については、いずれ時期をみて報告をしなければならないと考えている。研究報告で簡単に触れた、「東北地方の遠賀川系」「類遠賀川系」土器研究の問題点についても、そのうえで再論しなければならない。

とはいえ、上記のような問題、課題を含みつつも、今回の報告において、遠賀川系的様相の強い土器群を提示することができ、馬淵川・新井田川流域の遠賀川系の要素をもつ土器の特徴の一端を、改めて確認できたことの意義は小さくないと考えている。とりわけ、これまであまり知られていなかった、削り出し突帯や段をもつ壺形土器や、遠賀川系土器にきわめて近い特徴をもつ甕形土器、蓋形土器などは、東北地方における遠賀川系要素の定着・展開の具体相を考察するうえで、今後、重要な資料になっていくはずである。

こうした点でも、櫻井氏によって示された、東北地方北部への遠賀川系要素の定着時期が、これまで想定されてきた大洞A'式期ではなく、砂沢式期に下る、との指摘は重要であろう。もちろん、剣吉荒町遺跡の亀ヶ岡系土器の分析が未了の段階では、櫻井氏の指摘を疑問視する向きもあろうが、少なくとも剣吉荒町遺跡出土土器の主体が砂沢式であることは間違いなく、剣吉荒町遺跡以外の事例からみ

ても、櫻井氏の説明は充分に成り立ち得ると考えられる。

仮に櫻井氏の指摘が正しいとすると、剣吉荒町遺跡にみられるような定着初期の様相を示す遠賀川系の要素が、いずれも近畿第Ⅰ様式中段階に遡ることからみて、砂沢式の一部を近畿第Ⅰ様式中段階に並行させざるを得なくなるはずである。また、遠賀川系要素の定着が砂沢式期であるとすれば、水田稲作技術をはじめとするその他の弥生文化系の要素の定着時期、及びその展開過程との関係も、改めて問い直さなければならなくなる。それは、当然、東北地方北部における縄文・弥生の時代区分の議論とも深く関わってくることになろう。

・年代測定の成果

本研究では、小林謙一氏、遠部慎氏、坂本稔氏の御協力により、八幡堂遺跡出土土器と剣吉荒町遺跡出土土器の、年代測定を実施することができた。

研究計画当初は、最花貝塚遺跡A地点出土土器も含め、より多くの資料の年代を測定したいと考えていた。しかし、すでに洗浄が行われていた資料の炭化物の遺存状態は予想以上に悪く、結果的に最も期待をしていた最花貝塚遺跡出土土器は１点も測定できず、八幡堂遺跡、剣吉荒町遺跡出土の３点の資料の測定にとどまってしまったのは残念であった。また、３点のうち、内面の付着物を測定した２点については、海洋リザーバー効果によると思われる古い測定値が出ており、外面の付着物を測定した１点も、当初より予想されていたことではあるが、年代を絞り込めない「2400年問題」の中の測定値となった。

小林氏らの報告にもあるように、今回の測定は、土器型式の実年代推定には厳しい結果となったことは否めない。ただし、砂沢式期の測定値を一つ加えられたことは重要な成果に違いなく、古い測定値が出た内外面付着物についても、食性復元という観点からみれば、興味深いデータになったと、前向きに評価をすることにしたい。

冒頭の研究の目的でも述べたとおり、こうした分析の積み重ねが、今後の日本先史時代における年代学的研究を、より厚みのあるものにしていくのであり、今回は、そのささやかな一歩と考えておきたい。

（3）未報告資料の研究資源としての活用

私が所属している慶應義塾大学には、100ヶ所を大きく超える遺跡の、数千箱に及ぶ資料が、未報告の状態で保管されている。こうした、未報告資料の整理･分析を行い、その研究資源としての活用の意義を示すことも、本研究の重要な目的の一つであった。

結果として、本研究で取り上げた３つの遺跡の出土資料については、その学術的な価値を充分に示し得たと考えているが、同時に、今後の未報告資料の整理・分析をどのように行うかという問題も、浮かび上がってくることになった。慶應義塾大学保管の未報告資料には、今回の３つの遺跡と同様に研究資源として高い価値をもつものが数多く含まれており、それらの整理・分析を進めていくことが、今後の課題となったわけである。

とはいえ、今回のような未報告資料の整理・分析には、相当の時間と資金的裏付けが必要になることも確かである。ちなみに、本研究と同様のペースで、慶應義塾大学保管の未報告資料の整理・分析を進めていくと、その全ての報告を行うまでには、100年を超える歳月と、本研究補助額の数十倍の資金がかかってしまう計算になる。文化財保護法及び現在の埋蔵文化財行政のあり方からすれば、遺跡の発掘調査の報告は、調査者あるいは調査組織が責任をもって行うことが原則であり、仮に調査者が退職したとしても、調査者の属していた組織が、その責任を引き継ぐと考えるべきである。本研究は、そうした意味も込めて実施したものであるが、とはいえ、上記の数字は、慶應義塾あるいは民族学考古学研究室にとって、非常に厳しいものであることも事実である。

現在、全国に、こうした未報告の考古学資料がどれだけ眠っているか、その実数については見当もつかないが、資料点数で言えば、もはや天文学的数字に達している可能性がある。一方で、ペースが落ちたとは言え、開発による遺跡の破壊が進んでいる現状を鑑みると、こうした未報告資料の、研究資源あるいは国民の財産としての活用が、これまで以上に大きな課題になってくることは必至であろう。その場合、いずれは、国や自治体レベルでの対応も必要になってくるはずである。

未報告資料の問題が、一足飛びに解決へ向かうとは考えられないが、その研究資源としての価値に対する認識を広げていくためには、本研究のような地道な実践の積み重ねが不可欠なのである。

東日本先史時代土器編年における標式資料・基準資料の基礎的研究
（課題番号：18520589）
平成 18 ～ 20 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））
研 究 成 果 報 告 書

2009 年 3 月

研究代表者　安 藤 広 道
108-8345　東京都港区三田 2-15-45
慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室
Phone・Fax：03-5427-1051　E-mail：ando@flet.keio.ac.jp

印刷　西桜印刷株式会社